
ホットミルク

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホットミルク

【Nコード】

N4145Q

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

神様のタマゴ・ナティアはバスケット少年・クリスタに助けられる。

彼女はギネス・コープという悪の組織に狙われているのだ。

ナティアが神様になるために必要な鍵を探すため、クリスタとナティア、そして勇者フォンドール一行は旅を続ける。

神様のタマゴと新米勇者の成長物語、そして愛情物語です。

また、最強の勇者集団も出てきます。

世界と未来を巻き込んだ、シリアスバトル&ラブコメをどうぞお

楽しんでください。

0 《コルディア教の説話から》

手を繋ごう。

手を繋いだら、今度は目を見よう。

目を見たならば、彼が彼女が何を考えているかを考えよう。

表情を見て、繋いだ手の力加減を感じ、瞳の動き、唇の動き、微妙な空気の移り変わりを感じよう。

もし、貴方が相手のことを心から想っていれば、相手も貴方のことを想ってくれる。

全ての生命体は元々単一の物質なのだ。

何も恐れる必要はない。

貴方も、彼も彼女も、同じように感じ、思い、言葉にするのだ。

それでも恐れを抱いたならば、ヴァームの慈悲にすぎると良い。

神はコルディアの向こうから貴方を見ているのだから。

第13話より

コルディア教??? 神の残した言葉・

1 《この子は俺にすがっているんだ》

弾む。

彼の手のひらに吸い付くようにして弾む。

ボールは力強く跳ね、そしてまた手のひらに収まる。

弾むのは彼の吐息も同じだ。もうどのくらい全力で走り続けただろう。クリスタはコート全体に気を張り巡らせながらゴールを目指す。

目の前に一瞬、通り道が見えた。彼の直感がその道を突き進めと命ずる。

二回、三回と跳ねたボールは彼の両手に収まり、そして、クリスタは跳んだ。

天をつかむように手を伸ばし、その延長線上にボールを放る。

放物線を描いたボールは、真っ赤なリングに吸い込まれていった。パスツ、軽い音がやけに大きく響く。

静寂、そして歓声、クリスタはほっと息をついた。

「ふう、これで逆転、だな」

「ご苦労さん」

チームメイトのロケッタが手を高く上げる。クリスタはその手を思い切り叩いた。

「サンキュ。ま、これでウチらの勝利は間違いなし、だな」

「おかげで士気も上がってる。疲れてるなら下がっても良いんだぞ」

「馬鹿言え、ここで俺が下がったら誰が追加点取るってんだよ」

ロケッタの頭を軽くはたいた。彼は苦笑しながら呟く。

「まったく、疲れてもんを知らんのかね、あいつは」

コートの中に敵味方五人ずつ。一つのボールをお互いのゴールリングに入れ、点を競う。彼らはバスケットボールの真っ最中だった。クリスタ率いるチーム・バヤリースは連戦連勝の記録を伸ばしていた。一戦勝利するごとに百シトロンのファイトマネーをもらうこ

とができる。リーグ戦を勝ち抜くと五百シトロン、さらに決勝トーナメントで優勝すると千五百シトロンがふところに入ることになっている。

ちなみに百シトロンはそれなりのバスケットシューズが一足買える金額となっている。

仮に一度も負けることなく優勝すると三千五百シトロンとなり、新米勇者の二ヶ月分の給与に相当する。

チーム・バヤリスはすでに八連勝。決勝リーグへの切符は手にしていた。それでも彼らが手を抜かないのはただひたすらにバスケットが好きだからだ。

「いやー、良い試合だったな。特にラスト五分の攻防は熱くなったぞ」

「いやいや、お前は馬鹿だよ。どこのポイントゲッターが敵陣から自陣のゴールまでディフェンスに戻るんだっての」

「だってよ、アブねって思ったら体が動いちゃってさ」

「ははは、お前らしいよ」

仲間たちの軽口が心地良い。勝利したからこそその心地よさではあるが。

「次の試合は明後日だな。皆、今日はゆっくり休んでくれよ」

おう、と威勢の良い返事が湧き起こったところで解散となった。



自室でクリスタは考えた。出窓の枠に腰を下ろし、冷氣を感じながら星空を眺める。天の瞬きは華やかで美しい。だが、彼は小さくため息をついた。

昨日のことだった。試合を終えて帰宅しようとしたクリスタの前に一人の男が現れた。

「クリスタ君、だね。ちょっと良いかな」

怪しげではあったものの、物腰の低さを信用し、ついていく。

「どこまで行くんだよ」

もう、ずいぶんと歩いている。

「もう少しだ」

少し離れた郊外の喫茶店まで連れて行かれて、ようやく腰を下ろすことになった。男は黒のスーツ姿で、眼鏡をかけていた。清潔感があり、言葉遣いも丁寧だ。一目見ただけでどこかに勤める優秀な社員だというのが分かる。

「私はコーヒーにするが、君は？」

「……俺は………」

「遠慮しなくていい、私のおごりだよ」

少し迷った末、彼もコーヒーを頼んだ。テーブルに置かれたそれに、また迷った末に口をつける。

男は苦笑した。

「そんなに警戒しなくても良いよ。とは言え、まず最初に自己紹介していなかった私が悪いね」

そういつて男は一枚の紙を差し出した。クリスタはそれを手に取り、文字を読んでいく。

「ミニッツメイド、スカウトのエビアン……さん？　って、ミニッツメイド！」

それは、クリスタが所属するアマチュアリーグよりも一段上、プロリーグで中堅所のチームの名前だった。

驚いているクリスタにエビアンが微笑みかける。

「君の町で話したのではすぐに騒ぎになると思ってね。何も言わずにここまで来てもらったんだよ。悪かったね」

「いえ……でも、どうして俺に？」

正直な疑問を話す。

「おや？　君は喜ばないんだね」

「だって、俺より上手いプレイヤーなんていくらでもいるし」
エビアンは首をかしげた。

「君はどうも自分の実力を過小評価しているようだね。確かに技術

だけなら君より上手い人間はたくさんいるだろう。しかし、あのス
ピード、判断力、そしてスタミナは君が随一だよ。そして、それは
プロにとってなくてはならないものだと思わないかい？」

今度はクリスタが首をかしげる番だった。彼自身は、そんなこと
を意識したことがないのだ。

「俺は、ただたくさん試合がしたくて、それだけ走ったってだけで
……」

「何をしよげる必要があるんだい？ それはどうしても良いことだよ。
何よりも君はバスケが大好きだ。物事を続けるために一番大事なこ
とだとは思わないかい？」

それでもまだ、彼は悩んでいるようだった。

普通であれば一も二もなく喜んで飛びつく話だった。

「ふむ……まだ君の明るい顔が見れないのは残念だ。正直に言おう。
我がミニッツメイドは君を迎え入れるために破格の準備をしている。
例えば、入団に際して契約金を十五万シトロンの用意している。契約
は三年で合計百万シトロンの、年間三十三万シトロンの。無名の新人
に対してこの金額はかつてないものだよ」

すぐには理解できなかった。自分にその価値があるとも思えな
かったし、何よりその金額の多さに戸惑ってしまった。百万シトロ
ンと言えば、このジャネフ国の首都であるエデンで高級マンションが
買える値段だった。

「ひゃ、ひゃくまん……俺の小遣いが月に三十シトロンの。このコー
ヒー五杯も飲めば無くなるってのに？」

「実感が無いかい？ すぐに慣れるよ。君はこれから一段上の生活
をしなくてはならない。もちろん、トレーニングにも金がかかるだ
ろう。何しろプロで一線級の体を維持するには時間と金がかかる。
それに住むところも変えなくてはね。プロリーグが首都エデンで行
われることは知っているはずだろう？」

エビアンは畳み掛けるように語る。それは夢のような生活だった。
そしてプロとしてもっと強い者たちと戦うことができる。それはク

リスタにとっても嬉しい出来事だ。

だが、

「ちょ、ちょっと待ってください!」

彼は遮るようにしてエビアンのを止めた。

「俺には、仲間がいるんです」

クリスタの必死な表情を見て、エビアンが眉をしかめた。それは苦慮しているようにも見え、軽蔑しているようにも見えた。

「チャンスを棒に振るのかい?」

「そうは言ってませんが……でも、少し考えさせて欲しいんです」
エビアンは少し思案するような顔をした。腹の中では、この場で決めさせるつもりなどなかったのだが。

ただ、念を押すことだけは忘れなかった。

「じゃあ、一週間待とう。親御さんにも話さなくちゃいけないだろうし。もしそれで考えが決まったらこちらから改めて挨拶に出向かせてもらおうよ」

そう言って男は去っていった。

クリスタは先ほどから窓枠に腰をかけてため息をついてばかりだ。それで試合に影響が出ないのはさすがと言うべきだろう。

部屋にいても眠れそうにない。そう思った彼は、こっそりと部屋を抜け出した。

両親にはまだ何も言っていない。自分の考えが決まっていらないのに話せるわけが無い。

同時に、仲間にも相談することができずにいた。分かっているのだ。彼らならきっと快く送り出してくれるであろうことは。しかし、それではクリスタの気持ちに納得しなかった。

「まったく、何をうじうじ考えてんだろうな、俺は」

見上げると、星は彼を笑っているかのように瞬いていた。

その景色を眺めていると、ふと神話の一節が頭によぎる。

「その人、天を指し、地を指し、ここにあれと言った」

それはコルディア教の創世神話だった。神であるヴァームがこの

世界・コークを創造したときの話だ。

「天はそこにあった。地もそこにあった。そして同時に、人もそこにあった」

南にあるウェルチ国の国教だが、このジャネフでも信仰する者は大勢いる。百年も前にはヴィタモント国でも信仰されていたのだという。それが今ではウェルチ国とジャネフ国の一部でしか信じられていない。この一世紀で急激にヴィタモント国が機械文明化し、ジャネフも北の未開地アルギニンを開拓するほどに国を繁栄させた。でも、とクリスタは思う。それでも人が最後に頼るのは神の力なのではないかと。星の力を自由に操ったというヴァーム神にその心をゆだね、楽になってしまいたかった。

「天も、地も、そして人も、か」

その一説はヴァームがこの世界の全てが一つの生命であることを証明した言葉だとされている。

「明日、話してみるか」

独りごち、顔を上げる。その表情は少しだけ明るく見えた。もともと長いこと悩むのが苦手な性格だ。

「それにしても、こんなところまで来てたんだな」

気がつけば、町からだいぶ離れた草原にまで来ていた。

町の灯りが星の煌きのように見える。

風だけがクリスタに囁きかける。

彼は今、静寂の中にいた。

「静か、だな」

思わず口癖が出る。その言葉を拾ってくれる人間はいない。

立ち尽くしていると、自分が何か大きなものに包まれているような気分になる。

クリスタは目を瞑り、風に耳を傾けた。

その耳が、何かを拾った。

高い周波数、耳障りでもあり、不安を煽るような、それは女性の悲鳴だった。

「こんな時間に？」

ジャネフ国は比較的犯罪発生率が少ない。しかし未開の地アルギニンからワイバーンが迷い込んできたりもするため、女性で夜歩きをするものはいない。男でも遠出をするような人間は稀だ。

「まさか、ワイバーンか！」

考えるよりも、体が先に動いていた。

持ち前のスピードで、悲鳴の上がった場所まで見る間に近づいていく。丈の長い草が足に絡みつく。転びそうになる。それでも彼は速度を緩めなかった。

「どこにいる！」

叫んでみると、思いのほか近くから声がした。

「ここ！ 助けて！」

短く、途切れ途切れに叫ぶ。だいぶ息が切れているようだ。クリスタは声のする方に走る。暗闇に紛れて見えなかったが、彼女はすでに走れなくなっていて、クリスタから五メートルの位置に座り込んでいた。

「大丈夫か？」

近寄っていく。今まで見えなかった顔がはっきりと分かる。

そこで、クリスタは動きを止めた。

「え……？」

息を切らしてへたり込んでいる彼女の頭には、白く輝く輪が浮いていた。

もし、この世界に天使という存在があったならば、彼はそれを思っただろう。

だが、コークにはそのような概念は無かった。代わりに彼が思い浮かべたのは、それが星の力の産物ではないかということだった。

「それは……？」

問いかけに、彼女は答えない。そして、応える暇も無かった。

「グワオオオオオ！」

耳が痺れるような咆哮が、すぐ背後から聞こえた。振り返ると、

そこにはワイバーンが立ち上がり、巨大な翼を広げていた。

「うわっ……」

思わず後じさる。眼前を覆い尽くす巨体は、優に五メートルを超えた。

不意を突かれたのと恐怖とで動くことができない。少女を見ると、観念したのか目をしっかりと瞑っていた。

「く、くそっ、こんなところでやられてたまるかよ」

氣力を振り絞ってはみるものの、自分がどうすれば良いかは思いつかなかった。

「グウウウウウウウ」

ワイバーンが唸り、長い首を持ち上げる。

食われる、とクリスタは思った。

「おい、その少年」

が、聞こえてきたのは、しゃがれた老人の声だった。

良く見ると、ワイバーンの背に誰かが乗っていて、クリスタを覗き込んでいる。

クリスタはまず、ワイバーンが人に慣れることがあるのだということに驚いた。そしてそれを老人が成し遂げていることも信じられなかった。

「バカな……ワイバーンは凶暴で勇者しか手に負えないって……」

その言葉を見殺しして、老人は話しかけてくる。

「おい、その少年よ。すまんがその女の子をこちらに渡してくれんかね」

「な、なんでだよ」

クリスタは負けじと声を張り上げた。その袖を、少女が引っ張り、首を横に振っている。

「嫌がってんじゃないか」

強がってみるが、その答えにワイバーンが睨みを利かせた。

「どうどう。まあ落ち着くのだ、オーシャンスプレー。殺してしまつては意味が無い。なあ少年よ。その子はウチから逃げ出したのだ

よ。身寄りが無いので保護していたのだがね」

少女を振り向くと、やはり首を振っている。それを見て、老人は一枚の紙を放り投げてきた。

「高いところから失礼するよ。名刺だよ、ほら、別に怪しいものではない」

紙には「ギネス・コープ専属獣科学者 カルヴァドス」と書いてある。もう一度、老人を見る。白髪ではあるが、体格も良く、見た目も若そうに見える。声も落ち着いていて、怪しげなところと言えば、ワイバーンを従えている部分だけだ。

「私はそこでワイバーンを家畜化する研究をしている。ジャネフ国にとって有益な仕事だ。その子は私が預かっている子なのだよ。ワイバーンを怖がって逃げ出してしまったのだ。さあ、返しておくれ」彼が言っていることはもっともらしかった。確かにワイバーンを従えている。だが、背中の彼女は怯え、声すら出せずにいるではないか。

クリスタは腹を決めた。

「断る。少なくともこの子からきちんと事情を聞くまでは渡すわけには行かない。この子は俺にすがっているんだ」

両手を広げ、彼女を守る意思を見せる。そして、次の瞬間、女の子を抱き上げ、走り出していた。

「こ、こら！ 待ちなさい！」

ワイバーンが手を伸ばすが、クリスタの行動の方が早かった。見る間に視界から消えて行く二人を見て、カルヴァドスが舌打ちをする。

「仕方ない、穏便にはすまんか。オーシヤンスプレーよ」

ワイバーンの頭を軽く叩くと、獣は雑草を巻き上げながら飛び上がった。暴風が起こり、それはクリスタの下まで届く。風に煽られながらも、彼は足を動かし続けた。しかし、圧倒的にワイバーンの方が速かった。それに、ここは隠れるところもない草原で、彼らに逃げ切る術はないように思えた。

「くっそお！ 何とかしないと」

後ろを振り返りながら策を練る。しかし、元来直情的なクリスタには妙案を思いつくことはできなかった。そんな彼に、少女が話しかける。

「ね、ねえ」

「なんだ？　しゃべると舌を噛むぞ」

「ちよっただけでも時間が作れたら逃げられる？」

息が弾む。

「ん？　ああ、そうだな。せめて一分、三十秒でもあれば」

敵はすぐ後ろに迫っていた。選択の余地は無い。

「お願い、私を下ろして」

「何言ってるんだ、逃げたいんだろ？」

話していると速度が緩む。気合を入れなおして、クリスタは速度を上げた。

「何をこそこそしておるのだ。さっさと捕まってしまえ」

カルヴァドスが叫ぶ。ワイバーンが吼える。その声だけで足が止まってしまうそうだ。

「いいから！　早くしなさいよ、このままじゃ二人とも殺されちゃうわよ！」

急に口調が強くなる。クリスタは両側から責められて、仕方なく少女を下ろす。

「お前、どうするんだよ」

むすっとしたクリスタに、少女は言った。

「お前、じゃない。ナティアよ。見てなさい、私だって、このくらいはできるんだから」

目の前に迫ったワイバーンを睨み付け、両手を前にして指で輪を作る。すると、彼女の頭の上にある輪が光った。

「輪が……」

彼の眩きを無視して、ナティアが言葉を紡ぐ。

「星よ、空よ、月よ……」

光は増していった。まるで頭上の星が目の前に降りたかのように。
「うお、まさか……星を導くことができるのか」

カルヴァドスが眩しそうに額に手をかざす。

「当たり前でしょ、私に星が導けないで、誰に導けるってのよ」

輝きは増し、その光は彼女の腕を伝って指で作った輪に達する。

「この輝ける魂をあなたに捧げます……ザバスッ」

光の輪が手から離れ、カルヴァドスとオーシャンスプレーを包む。

「うおおおお、逃がさん、逃がさんぞお！」

悲鳴が響く。カルヴァドスが目を覆い、ワイバーンから落ちての
たち回る。ワイバーンも地団駄を踏んで暴れ回った。

「これは……」

「バカッ、何やってんのよ。急いで逃げるわよ」

ナティアがクリスタの手を引く。

「お、おお……」

引かれるままに逃げていくクリスタだったが、後ろを振り返って
気が付いた。すでに光は消えようとしていた。

「光が消える……」

「私の力じゃ、これが精一杯。そうじゃなきゃとっくに一人で逃げ
てるわ。お願い、急いで」

気を取り直したクリスタはナティアを抱きかかえる。

もう後ろを振り返ることはなく、ただ全力で自宅へ向けて駆けて
いった。

2 《産まらない言葉は自分を蝕むだけなんだよ?》

クリスタは床の上で目を覚ました。

「いてて……」

体中が痛いのは、硬い板の上で寝ただけではなく、人間を一人抱えて全力で走りすぎたからだろう。

体を起こし、ベッドの上を見る。そこには夢などではなく、頭に輪のある少女・ナティアが気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「ったく、のんきなもんだ」

昨夜、全力で家に帰ってきたクリスタとナティアは、両親に見つからないように、とりあえず彼の部屋に忍び込んだ。



「ちょっと待ってろ」

そう言って彼が持ってきたのは温めたミルクだった。

「……ありがとう」

戸惑いながらそれを受け取って、彼女は一口飲んでみた。

「あったかい」

「だろ。疲れた時はこれが一番だ」

微笑んだクリスタにつられて、ナティアも笑う。朗らかで邪気のない笑みだった。それを見てクリスタは安心する。厄介者を拾ったかもしれないが、とりあえず良かった、と思ったのだ。

「さて……落ち着いたんだったら少しは話してくれるよな」

彼の言葉でナティアの表情に影が落ちる。

「……………うん」

それでも、彼女が話し出すまではだいぶかかった。クリスタはそれを我慢強く待った。ナティアは話しを整理しているようにも見え、うかつに急かすわけにはいかないと考えたのだ。

「どこから話したら良いのか、よく分からないけど……私、追われてるの」

「それは分かるよ。あれだけのことがあったんだからな」

「うん……でも、なんで追われてるのが分からない。少なくともあの爺ちゃんに見覚えはないし……ううん、それどころか、この国に入ったのも初めてなんだから」

この国が初めて、と聞いてクリスタは一部納得した。

「やっぱりお前はウエルチ国の出身なんだな」

「え？　なんで？」

「いや、俺も初めて見たけど、お前が使ったあの不思議な力……あれって星の力、だろ？」

遠慮がちに聞くと、ナティアは肯定した。

「うん、そう……星の力……創造主ヴァームが使った、星を導く力」
「俺、よく知らないんだが。確か、コルディア教のシスターの一部が使えるんだって聞いたことがある。そういう人たちのことを……えーと……」

「星を導く者、って言うんだけど」

「そうそう。あれって何でもありなのか？　主神ヴァームはその力を使って天と地を作り、人間も作ったって……神話で」

ナティアはホットミルクを一口飲んでから、立ち上がった。窓際に歩み寄り、空を眺める。クリスタの方は見ずに言った。

「違う。ヴァームはこの世界に存在する全ての生命を作ったんだよ。コルディア教の人間は、信仰の力でヴァームの力を一部だけ借り受けることができる。でも、何でもできるわけじゃない。触媒が必要なの」

「触媒？」

聞き慣れない言葉を耳にし、クリスタはオウム返しに問いかける。
「例えばさっきのザバス……光を増幅する力なんだけど……そのためには光が必要になる」

クリスタはナティアが紡いだ言葉を思い出した。

「じゃあ星と月から光を受けとった？」

「そう、星と月の光を私に繋いで、それを増幅したの」

「そんなことが……」

「できるのよ。ヴァームは仰ったでしょう？ 天はそこにあった。

地もそこにあった。そして同時に、人もそこにあった。つまり、全ての生命は一つなの。だから、私たちは星とだって繋がることのできるのよ」

ナティアが話したことは宗教的で現実的に受け入れがたく、クリスタの心にすんなりとは入ってこなかった。しかし、彼女が不思議めいた力を使ったことだけは間違いない。その点に関しては頷かざるを得なかった。

「まあ良いか。で、お前のその頭も星の力なのか？」

ナティアは頭の上を触って、困った顔をした。

「違うのか？」

クリスタも戸惑った。少なくとも普通の人間には頭に輪など無い。

「うーん、そうだとも言えるし……そうじゃないとも言えるし……」

すっきりしない答えだ。彼も二の句が継がないでいる。クリスタは腕組みをして、少し思案する素振りを見せた。ナティアはそれを感じと見つけている。

やがて、クリスタは自ら理解したようにポン、と手を打って、

「分かったよ。それについては聞かない。たぶん聞いても俺には良く分からないだろうしな」

ナティアが胸を撫で下ろす。

「つまり、お前はジャネフに入ってきてから知らない爺ちゃんに追いかけてられていて、その理由も分からない、と」

「そういうこと。困ってるの。友達ともはぐれちゃうし」

「どの辺りではぐれたんだ？」

「そんなに遠くじゃないよ。あの草原を抜けた、崖の辺り」

町の郊外には草原が広がり、その先には小高い丘が存在する。さらにその先に行くと、唐突に崖に行き当たる。そこから折れて北に

抜けると数十キロでアルギニンに到達する。逆に南にひたすら進むと、やがて首都エデンに向かうことができるのだ。

「ってことは、お前、十キロ近くも逃げてきたのか？」

「そんなにあっただ。道理で辛いはずだわ」

という割りにはあっけらかんとしている。

そんなナティアを見て、クリスタは微笑んだ。彼女のことをいいじらしく思えたのだ。カップに口を当てている彼女の頭に、クリスタは手を置いた。輪は、彼をすり抜けてしまった。どうやら実体のあるものではないらしい。

「大変だったんだな」

気持ちよさそうにナティアが目を閉じる。その端から一滴の涙が零れた。

「う……ん、ありがとう」

照れ隠しのように笑う。そんな彼女を喜ばせようとして、クリスタは言ってしまった。

「じゃあさ、明日探しに行こうぜ、お前の友達」

「え？ でも、危ないよ」

「良いんだよ、もたもたしてると、その友達も襲われるかもしれないだろ？ それに、明日は試合もないし、暇なんだ」

取り繕うように言い訳をする。

「試合？」

「ああ、バスケの試合だよ」

「バスケ？」

「ああ、知ってるだろ？ ボールを突きながら進んで、敵陣にあるゴールリングにボールを入れるゲームだよ」

「ふーん、そうなの？」

クリスタは首をかしげた。ウェルチではバスケは流行っていないのだろうか？ 深く追求する前に、眠気が襲ってきた。

「ふわーあ、まあいいや。今日は寝ようぜ。明日またたっぷり話す時間はあるんだし」

そうして、クリスタは床、ナティアはベッドで寝ることになったのだった。



立ち上がったクリスタは、眠っているナティアの頬を突く。

「ったく、のんきなもんだぜ」

イビキまでかいている彼女を見ると、昨日のことが嘘のように思えてくる。しかし、彼女がここにいるということ自体がそれを証明していた。

「しかし、それにしても気持ちよさそうに寝てるな」

顔を近づける。無防備だ。ふと、いたずら心が去来する。

「……べ、別に」

誰にともなく言い訳しかけて、しかし彼女の魅力に吸い込まれそうになる。正直、ナティアは彼の好みの顔をしていた。髪は青く長い。色白で、陽に当たったことのないような透き通った肌をしている。目は大きく、口は小さい。憎まれ口は叩くが。寝ていれば、それも気にならなかった。

「……ちよつとだけなら……」

少しだけ顔を近づける。心の中で、あと少し、あと少し、と邪な声が聞こえる。

その瞬間、

「クリスタ、いつまで寝てるの」
母親がドアを開けた。

「っ！ クリスタッ！ あんた何やってんの！」

「あ、んと、あの、これはっ！」

言い訳すらできずにオタオタと手足をばたつかせる。目は彷徨ってあらぬ方向を向いていた。

「ん、んー、なにー？ うるさいんだけど……」

その騒ぎでナティアが目覚めます。

「な、なんなのよその子は！」
母親が詰め寄ってくる。

「あー、クリスタ。おはよー」
妙に明るくナティアが挨拶をする。

「あー……俺あ、どうすれば良いんだよ……?」
クリスタは頭を抱えて座り込んでしまった。



父親と母親の前で事情を説明させられたクリスタは、正座をして
いた。

「……というわけで、仕方なかったんだ」

父親は腕組みをしてクリスタを睨み付けている。母はそんな父親
と息子を見比べて、眉をしかめていた。

「事情は分かった。確かに仕方のないことだったかもしれん。だが
な、だったらなぜ真っ先に父さんたちに相談しないんだ。こそこそ
して……それでは疚しいことをやっているのと変わらんぞ」

父の言うことはもっともだった。まだ両親が起きている時間にも
関わらず、クリスタは説明が面倒でこそこそと家の中にナティアを
入れたのだ。

「それは……謝るよ。悪かったと思ってる」
うなだれた彼を見て、ナティアが声を上げた。

「あの！ クリスタは私を助けてくれて、泊まる所まで用意してく
れて……悪いのは私なんだから、そんなに責めないでください」

健気に助け舟を出すナティアに、父親は微笑んだ。

「いや、別にナティアちゃんは悪くないんだよ。それに、クリスタ
がやったことも立派なことだと思っている。私が許せないのは、そ
れを隠そうとしたことだ」

ナティアが不思議そうな顔をする。

「自分がやったことが正しいと思うなら、堂々としていれば良いん

だ。批判されようが、怒られようが、そんなことは関係ない。隠したということは、クリスタの心に、どこか自信の持てない部分があったということなんだよ」

父親の言葉に、ナティアは感心した。彼は子供の進むべき道をきちんと示している。それこそ、揺ぎ無い、自信の表れだった。

クリスタはもう一度謝罪し、誓った。

「分かったよ、父さん。俺、もうこそそと逃げたりしないよ」

その表情には決意が表れていた。何事かを決心した力強さに溢れていた。

「うむ、それでいい。まあだがしかしだ。それは別にしてBAにも連絡しておかんな。母さん、手配を頼む」

「分かりました」

母親が部屋を出る。ナティアが疑問を挟んだ。

「クリスタ、BAってなんのこと？」

「ああ、ナティアはジャネフに来るの初めてだったんだよな。BA、勇者協会(Braves Association)の略だよ」

「勇者？」

「そう、特殊な武器や星の力を使って、アルギニンの開拓や暴走ワイバーンの退治、果ては事件の捜査や警備までやってくれる人たちのこと。要請があれば他国にも出かけるって聞いたけど、見たことないの？」

「あ、ああ。私は??」

何か言いかけたナティアを遮るようにして、母親が入ってくる。

「クリスタ、BAには連絡しておいたわ。警備してもらうために登録が必要だから、近くのBAに行っちゃうだい。町の中で襲われる心配もないでしょうし、せっかくだからナティアちゃんと遊んできなさいよ」

もともとそのつもりだった。クリスタはナティアを促し、自分の部屋に戻る。クリスタはすでに着替えを済ませていたが、ナティアはまだクリスタのパジャマを着ていた。自分の服は昨夜に汚れてし

まったくもって着れたものじゃない。

どうしようかとナティアが考えていると、クリスタの母親が顔を覗かせる。

「ナティアちゃん。ちょっと」

手招きする。その手には一着のワンピースを持っていた。

「これ、近所の子のお古だけど」

「良いの？」

「着てみてもらえるかしら。クリスタは出て行きなさい」

言われて、母親と入れ替わりに部屋を出る。戸を背にして会話を聞いていると、ずいぶんと楽しそうだ。

「あらー、似合うじゃない、清潔感があっていいわよ」

「そうかな？ ……私、青って好きなんだ」

「髪の色ともマッチしているものね。これで帽子なんかかぶったらもっと素敵になるかもね」

「そういえば、この辺は暑いね」

「あら、ウェルチに比べればまだ涼しい方よ。そうだ、クリスタと一緒に買いに行くといいわ。お小遣いならあげるから」

クリスタは聞こえないように呟いた。

「なんだよ、実の息子には臨時の小遣いなんてくれないくせにさ」
むくれていると、急にドアが開き、思わずバランスを崩してしま
う。

「なーに言ってるのよ。文句ばかり言っていないで、きちんとエス
コートしなさいよ」

母親に背中を叩かれて、クリスタは咳き込んだ。

「まったく、分かったよ。ナティア、行くぞ」

「ちょ、ちょっと待ってよ」

ナティアは慌てて彼の後を付いていく。それだけを見たら、兄妹
のように見えた。母親に見送られて、クリスタは路地を縫って歩い
ていった。右に左に通りを抜けていく彼を見て、ナティアが疑問を
口にする。

「クリスタ、なんでこんなに行ったり来たりするの？」

クリスタは答えない。ポケットに手をつ突っ込んだまま、じつと前を向いている。表情は見えないが、不機嫌そうに思えた。

「私、何かした？」

声が聞こえないのかと思い、何度か同じ言葉を口にする。だが、クリスタは何も答えなかった。

次第に、ナティアは不安になってくる。

足音は段々と遠ざかっていく。それなのに、足が動かない。

こんなに明るいのに、闇が自分を覆い尽くしたかのように思える。そんなつもりはないのに、涙が出てくる。

「っ、ひっく」

家を出てからのことが思い出される。仲間と二人の旅だった。しかし、あらぬ手配をかけられて、追われる身となってしまった。

そして、友との離別。知らない土地で独りぼちになってしまったこと。

やっと安心できる場所が見つかったと思ったのに、そうではなかったようだった。

ナティアは不安だった。自分がこれからどうしていいかすら分からない。右も左も、未来も、いずれは過去さえ分からなくなりそうだった。

そんなことを考えていると、涙が止まらなくなった。

しゃくりあげ、足に力が入らなくなる。顎が震える。地べたに座り込んで、ナティアは大きな声で泣いた。

「う、うわあああああ」

こんなに泣いたことはなかった。元来明るい性格のナティアだが、この時は悲しくて仕方がなかった。

どれくらい泣いただろう。

気が付いたら、自分の頭に手が置かれているのが分かった。肩にも手が置かれている。

少しだけ泣きやんで見上げると、クリスタの頭が見えた。だが、

表情は見えない。上を向いたまま、こちらに顔を向けようとしな

「クリ……スタ………?」

「悪かったよ。ちょっと考え事してたんだ」

ナティアは涙を拭いた。クリスタの肩を両手でつかんで真正面から見つめた。

「考え事って?」

「う、いや、話せない」

クリスタの返答にナティアが頬を膨らませる。が、次の瞬間にはにこやかに微笑んで、反対にクリスタの頭を撫でた。

「クリスタ。言葉は自分の中にある限りは、産まれることはない、だよ」

「また、コルディア教、か?」

「そう、話さないと相手には伝わらないし、誰にも理解してもらえないよ。それに、産まれない言葉は自分を蝕むだけなんだよ?」

白い歯を見せて笑いかけるナティアが眩しくて、クリスタは目を背けた。

「……あのな」

そのまま、話し始める。

プロのバスケットチームに誘われていること、行きたいが仲間を捨てては行けないこと。

途中、バスケのことを知らないナティアに説明を交えながら、クリスタは自分の思いを語った。

「でも、やっぱり黙ってなんかいられないんだ。だから、皆に相談しようと思う」

「良いんじゃない? でも、だったら何で塞ぎ込んでるの?」

路地を通ってみたり、黙ってみたり、彼は不機嫌さを隠さなかった。まるで誰にも会いたくないかのよう

に。「クリスタの心と行動はバラバラだよ」

「分かってるよ、それくらい。でも、仕方ないだろ、怖いんだからっ」

仲間の反応が怖かった。拒絶されても、賛同されても怖いのだ。拒絶されれば、彼は自分の夢に自身を失ってしまう。賛同されれば、彼は仲間を失った気になるだろう。どちらも欲しい、どちらも失いたくない。だからこそ怖いのだ。

「クリスタ……人は人の心を理解することはできない。だが、人の心を受け入れることはできる、だよ」

「どういう意味なんだよ」

「問題は、相手がどう思うかじゃなくて、クリスタがどういう風に相手のことを考えているか、だよ。あたなが本当に相手のことを思っているのなら、相手が嫌っていようがどうしようが、関係ないんじゃないかな」

彼女の言葉は正論だった。

あまりにも正論過ぎて、受けるには心が自然と反発する。それは反抗と言うよりも畏れと言っても良かった。

「そんなこと言っても、俺には分からないよ。そう思っている、そうできないのが人間じゃないのか？」

そう言われて、ナティアは黙り込んでしまった。クリスタの応えもまた、真実の一つだからだ。

「人間は、弱いよ。だから、神の言葉通りにはできないと思う。でも、立ち向かわないと、自分の望むものは手に入らないよ？」

「それも、ヴァームの言葉か？」

ふくれ面のクリスタに、ナティアが笑いかける。

「ううん、これは私の言葉」

同時に、ナティアはクリスタの頭を両手で包み、胸に抱きかかえる。

ふつと良い香りがした。

恥ずかしいと思うよりも前に、心地良いと感じてしまった。

3 《笑ってる方が素敵だよ》

我に返ったクリスタは、思わず乱暴にナティアを引き剥がした。

「どうしたの？」

当のナティアにはそのような感情は芽生えていないようだ。

「……一応聞いているかい？」

「何でもどうぞ」

「お前、いくつだよ」

きょとんとして、ナティアが答える。

「今年で十六歳だけど？」

クリスタと同じ年だった。

「……なんだよ、それ。こんなちっちゃいくせに俺と同じ年かよ！」

「ちっちゃいって何よ、背丈は年と関係ないでしょ！」

ナティアの迫力に、クリスタの気が削がれる。

「う、ま、まあそうなんだけどさ……」

照れ隠しだったのだ。それを悟られまいとしたのだが、裏目に出ってしまった。

クリスタは反論するのも恥ずかしくなってきた、勢いでナティアの手を引く。

「と、とにかく行くぞ！ まだまだ行くところがあるんだからな」

それからは言葉少なく、というよりもクリスタだけが押し黙って、二人はBAの出張所に向かった。

広場の片隅に真四角の建物がポツンと建っている。白く、事務的な外観はそれだけで人を拒絶しているように見えた。ドアの上には金のプレートが貼っており、そこに「Braves Association」の文字が輝いている。それだけが、やけに誇らしげだ。「すいません」

ドアをノックして声を掛けると、ほどなく女性の声がある。

「はい、ちょっと待ってくださいね」

ガチャガチャと鍵を開ける音がするが、なかなか開こうとはしなかった。

「えーと、あれ？」

「……なにやってんだ？」

クリスタが訝しげに眉根を寄せると、ナティアはくすくす笑っていた。

「なにやってんだろうね」

二人に笑みが漏れたところでようやくドアが開く。

「お待たせしました。どういったご用でしょうか？」

凜と言い放った割には、彼女は息を切らしていた。額には汗まで見える。そうとうにドジな人間ようだ。

「ああ、さっき通報した被害者の登録に来ました」

笑いをこらえながら、クリスタは用件を言う。BAの職員である彼女はにこやかに二人を招き入れた。

「どうぞ、すぐにお茶を用意しますから」

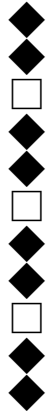
と、ほどなく彼女は盆にカップを三つ乗せてくる。クリスタとナティアは顔を見合わせた。そして、頷きあう。何かを予感し、そしてその予感が当たってしまう。

「きゃあ！」

職員は何もないところで躓いて、紅茶を床にぶちまけてしまった。

『あーあ……』

二人が同時に溜息をつく。予想はしていたのですぐに飛び退くことができた。そのお陰で濡れることはなかったのだが、そのまま片付けを手伝う羽目になってしまった。



「……すいませんでした」

項垂れる彼女をナティアがなだめる。職員はアニユと名乗った。「まあまあ、別に悪気があってやったわけじゃないし。許すことは

融和の始まり、とも言いますから」

「あら……あなたシスターさん？」

ナティアの説話に聞き覚えがあったのか、アニューは驚いた表情を見せる。

「いえ、そうじゃないんですけど……」

ナティアもなぜだか話したがらない。それを気にする風もなく、アニューはナティアの登録に移った。

「分かりました。とりあえず登録に入りましょう。別に個人情報を出す必要はありませんね。では、この鏡を見てもらえますか？」

見た感じ普通の手鏡だったが、それがナティアの顔を映し出した途端に、鏡面が輝きだした。

眩しくてナティアが顔を背ける。

「あ、少しだけ我慢してくださいね」

言われて、また戻す。時間にして数秒、光は収まり、何も映さなくなった。まだナティアの顔が正面にあるというのに。

「はい、登録終了です。追って担当の勇者が選別されますので、安心してくださいね」

「これ……何ですか？」

始めて見るものばかりで、彼女は疑問に埋め尽くされそうだった。

「これは、ジャネフ全土に散っている勇者に情報を伝達するための星具・夢見の鏡です」

「星具？ 夢見の鏡？」

「そう、星の力を道具に封じた物を星具、と呼ぶんです。ジャネフ独自の技術ですね。そして、その中でも夢見の鏡は人と人の深層意識を増幅させて、情報を共有する力を持っているんですよ」

「そんなことが……できるなんて……」

「ウェルチではまだ一般的じゃないから、知らなくても無理はないですよ。ジャネフでも一握りの職人しか作ることができないんですから」

なぜかアニューは誇らしげだった。別に自分の力ではないのだが、

驚いてもらって嬉しいのだろう。

クリスタはそんな二人のやり取りを見ていた。

少し疑問に思う。

なぜかナティアは世間に疎いような気がする。いくらウェルチの人間だと言っても、隔離されて育ったわけではないはずだ。この程度のことはいくらかでも耳に入ってきたきそうなのに。

クリスタだって、ウェルチに行ったことはないが、ある程度の情報を知っている。

宗教国家であり、この世界の始まりの地であるとも言われている。コルディア教の教祖・モモが国を治めており、全ての生活は教義に……つまり全ての生命の和を大切にするよう整えられている。そのためか、ウェルチでは争いごとが少なく、穏和な人間が多いらしい。また、人と分け合うことを美德としているので、餓える人間もない。

星の力を使える人間が多く、それを有効に活用し、機械も星具も無いが快適な生活を送っている。そして、心が豊かであれば文化が花開く。詩人や文人、音楽家などが活躍し、世界を放浪している。ウェルチの文化人は優れた人物が多いため、どの国でも丁重に扱われる。

世界の文化の中心を担っていると言っても過言ではないのだ。

教科書で習わなくても、これぐらいのことは知っていて当たり前。なのに文化の中心であるウェルチの人間が何も知らないというのが、クリスタには不思議でならない。

「へえ、こんながあるんだな。便利になったもんだ」

そんなクリスタの視線に気付かず、ナティアは夢見の鏡を撫で回す。

アニューはそれを微笑みつつ眺め、そしてふと真顔に戻った。

「あれ？　そういえば、ナティアさんの頭の輪、何なんですか？」

ようやく気付いたのか、クリスタが溜息をつく。突然立ち上がるとナティアの手を引いた。

「さ、ナティア、行くぞ。帽子を買うんだったよな」

返答も聞かずにドアに向かう。ナティアは呆然とし、アニューは急な展開についてこれていない。

「あ、あの……？」

アニューがようやく声を出した頃には、二人は二つ先の路地を通り抜けていた。



「面倒なことに巻き込まれるところだったな」

ナティアは首を傾けた。

「そうかしら？ あのお姉さん、別に変な風には見てなかったみたいけど」

「いやいや、物語とかだと、大体ああいうところから変な騒動に巻き込まれるもんなんだよ」

「ふーん」

「それにしても、その輪っか、消せないのか？」

クリスタが問うと、彼女は困った表情を隠さず、頬まで膨らませた。

「これは私が生まれたときからついてるものなの。自分でもどうしようもないんだから。あんまり変な風に見ないで！ クリスタこそおかしいよ」

言われて、彼はうつむく。確かに、偏見を持っていたのはクリスタの方かもしれない。

「悪かったよ、謝る」

「他人の欠点は特徴と思うこと、ってヴァームも言ってるよ」

「むう……悪かったよ。本当に。でもさ、生まれたときからってんだったら、それって何かの役割があるんだよな。いったい何なんだろう？」

今度はナティアが黙り込む番だった。

「う……ん……………」

歯切れの悪い反応に、クリスタはそれ以上問うのを止めた。

「まあいいさ。とにかく帽子を買いに行こうぜ。小遣いももらってるんだし」

率先して手を引く。

「あ……」

ナティアが小さく声を上げる。

と、そこで自分の行為に今更ながらに気付いた。

パツと手を離すと、クリスタは顔を背ける。

「ご、ごめん……」

急に恥ずかしく感じてきたが、良く考えればもう何度もナティアの手を握っていた。

なぜ自分はこんなに臆しているのだろう、と考える。昨日会ったばかりの少女に、こんなに惹かれるなんて。

まあ、ヴァームも「恋は奇跡だ。神にもそれが何であるのか理解できない」って言ってるしな、と思う。

「さ、行こう。俺、どこがいいのか良く分かんないからさ。片っ端から店に入るから好きなの選べよ」

一軒目、普通の服飾店に入る。おばちゃんが着るような服ばかりが置いてある。

「……いや、これはちょっと……」

いくら世間知らずと言っても、美的感覚は別であるらしい。

二軒目、若者向きと思われる店に入る。しかし、あまりに若すぎて、奇抜なファッションが目立つ。

「あはは、ねえこれ見てよ」

ナティアが手にしたのは、顔がすっかりと隠れる帽子だった。目のところと耳のところの穴が開いている。

「なんかワイバーンになったみたい。こんなのがいたよね」

クリスタはその種類のワイバーンを知らなかった。ナティアはあちこちの帽子を手にとって笑っている。

「あの……お客様……」

その内、店主が怪訝な表情で近づいてきた。

「あ、すいません、すぐ帰ります！」

クリスタはまたもナティアの手を引いて店を出て行くこととなつてしまった。

表に出て、しばらく走って。

二人は弾む息を整えながら笑いあう。

「なんだか、逃げてばかりだね、私たち」

「ったく、お前のせいだろ、こんなことになってんのは」

「あはは、ごめんごめん」

頭をかくナティアを、クリスタは可愛らしいと思った。それは恋とかそういうものじゃなく、単純に愛らしいものを愛でる気持ちだった。

「ふふ、じゃあ次に行くか」

とクリスタが言った時だった。

「あれ？」

ナティアが声を上げる。

「どうした？」

「だって、何だか今日、クリスタが笑うところ初めて見た気がする」
思い返してみる。朝から不機嫌だったし、悩み事も抱えていた。

ナティアに振り回され、自分の心も定まらない。確かに、クリスタはこんな風に今日、笑ったことはなかった。

「そう言われると、そうだな」

「でしょ？ 良かった」

朗らかな声で、ナティアは安堵を示す。

「何がだよ」

「クリスタは笑ってる方が素敵だよ」

目を細め、口角を目一杯に上げて、楽しそうに笑うナティア。彼女の上気した頬はほんのりと赤く色づいていた。

言葉と表情で、クリスタは殺された。

鼓動が激しくて、ナティアの声が聞こえない。彼女だけではない。風の音も、雑踏の喧騒も、何もかもが暗黒に飲み込まれたかのように真空になっている。彼女の周囲が視界から消えていく。そこだけがくつきりと浮き上がったようになる。

「あ、あの……」

何かを言おうとして、何も言えなかった。クリスタは魔法にかけられたように硬直してしまった。ただ、身体は活動を続けていて、それが過剰になっていく。血液が巡る。全身が熱くなる。

どれくらいが経っただろう。ナティアが怪訝な表情をしていた。

「大丈夫？ クリスタ」

言われて、彼は現実に戻った。

大きく息をつき、肺に空気を入れる。その瞬間、目眩がして目の前が真っ暗になる。

「う……駄目かも。ちょっと立ちくらみした」

家の壁にもたれかかる。するとナティアが近づいてきて、クリスタの顔を覗きこんだ。

「どうしたの？」

上目遣いに見られて、彼は再び頬が熱くなるのを感じた。

「い、いや！ 大丈夫だよ。ほら、ほら！」

急に歩き出し、手を振る。そんな彼の様子を、ナティアは不思議そうに眺めている。

「変なクリスタ」

つぶやいて、それでも後ろからついていった。

そして三軒目。

清潔感のありそうなシンプルなものばかりを取り揃えていた。オーガニック、コットン、それらの天然素材を素材のままに使っている。

「わあ、私、これが良いな」

ナティアが手にしたのは麦藁帽子だった。

青リボンの付いた、本当に簡単な作りの。

だが、ナティアはそれを嬉しそうに上から下から眺め、その麦わら帽子越しにクリスタを見る。

「ねえ、これじゃ……ダメかな？」

口をすぼめて問いかけるナティアに、クリスタは何も言わず親指を立てた。オーケーのサインだ。

「やったあ！」

全力で喜ぶ彼女を、クリスタは嬉しそうに眺めている。

店を出て、二人は話しながら郊外へと足を伸ばす。ナティアの友達を捜すためだ。

「大丈夫だよ、きっと無事でいるって」

言葉を慎重に選んで話す。クリスタはなるべくナティアに不安を与えないようにしていたが、今の彼女は何も心配していないようだった。

「あつたりまえよ、クーがどうにかなるなんて、信じられないもの」

この明るさが、彼女の強さなのだとクリスタは思った。何事にも前向きで、自分を信じている。自分もそうでありたいと強く願う。

昨日、ナティアと出会った平原を抜け、小高い丘を越えて、切り立った崖の辺りまでやってくる。幸い見通しが良く、カルヴァドスの姿は見えない。

「どの辺りではぐれたんだ？」

クリスタが聞いても、ナティアは上手く応えられなかった。時間が経っている上に、平原であることが裏目に出て、場所の判別が付きにくいのだ。

「うーん、じゃあ、どんな状況ではぐれたのかは教えてくれるか？」

クリスタの誘導に従って、ナティアは記憶を辿る。ぐるっと周囲を見回して、一点に当たりのつけると、彼女は指を差して話し始めた。

「あっち。あっちから私は来たの。クーと一緒に、歩いて」

思いを寄せるように、ナティアは目を閉じる。

「不安だったけど、楽しい旅だったわ。私には必要な旅でもあった。」

二人だったから、何も怖い事なんて無かった。でも、この辺りまで来た時、全てがひっくり返ったの」

顔を両手で覆う。泣いているようにも見えたが、そうではなかった。思い出したいくないのと、必死に思い出そうとしている二つの気持ちだが、彼女の中で同居しているのだ。

「あの、カルヴァドスって人が、私に声をかけてきたわ。まるで私を知っているみたいだった。『お嬢ちゃん、休むところはあるのかい？ 無ければ私たちの会社においで。君のような人を泊める場所があるんだよ』って。いくら何でも、怪し過ぎよ。もちろん断ったわ。クーだって警戒していた。そうしたら、あの人、急に指笛を吹いて……」

情景が思い浮かぶようだった。高く響く指笛、そして飛来するワイバーン。彼女は為す術もなく、ただ逃げまどうのみだったのだろう……そうクリスタが考えていると、ナティアはそれとは違うことを話し出した。

「クーが守ってくれた。牙を剥き出しにして、あのオーシャンスプレーと戦ってくれた」

何かが引かなかった。

「でも、まだ小さなクーじゃ、あいつには勝てなかった。ノイズブレスも通用しなくて……」

「ちょ、ちょっと待て！ なんだよ、ノイズブレスって！」

「ノイズブレスってのは、超音波を発して敵をやつつける??」

「じゃなくて、もしかしてクーって……人間じゃないのか？」

ナティアが首を傾げる。

「何言ってるの？ クーはマルクトドラゴンよ？」

マルクトドラゴン……白い翼の悪魔と恐れられている最強のワイバーンだ。あらゆるブレス……ファイアブレス、コールドブレスなどなどを操り、翼を広げると全長が十メートルにも達するという。

「その、マルクトドラゴンがなんで友達なんだよ！」

信じられない、それでも言うようにクリスタは叫ぶ。ナティアの方

はそれこそが信じられないと言葉を返した。

「何を言ってるの？　ワイバーンは主には絶対に逆らわないわ。それこそ彼が子供の頃からずっと一緒なんだから。友達も同然よ」

クリスタには、彼女が何を言っているのか分からなかった。ワイバーンはアルギニンからジャネフ国に頻繁に進入してきて、人を襲い、作物を荒らした。それを退治するために勇者がいるのだ。それなのに、友達になど、なれるはずがない。

そのことを言うと、ナティアは一つの事例を出した。

「何を言っているのよ、クリスタだって目の前で見たでしょ？　カルヴァドスがワイバーンを手懐けているのを」

言われて、クリスタはようやく気が付いた。そう、カルヴァドスはワイバーンを従え、なおかつ命令さえしていた。それは、どう説明するのだ。

「しかし……それは………」

「私とクーは友達、それ以上の何ものでも？？」

と彼女が念を押そうとした時だった。

「くうん」

か細い鳴き声が聞こえてくる。

「クー！」

ナティアが周囲を見回す。しかし、何ものも見当たらなかった。耳を澄ますと、地面の下から聞こえて来る気がする。

「くうん」

もう一度鳴き声がする。ナティアが崖に向かって走り出した。身を乗り出そうとする彼女を、クリスタは必死に止めた。

「危ない！　何やってんだよ」

彼女の勢いは、それでも止まらなかった。なおも崖の下を見ようとする彼女を押し留め、クリスタが代わりに身を乗り出す。

「クリスタ……クー、いる？」

真下が内側に窪んでいるようで、良く見えない。だが、声はそこからしていることだけは分かった。

「見えないが、確かにいるよ」

ナティアが安堵の表情を見せる。だが、問題はこれからだった。果たして、どうやって下に降りるのか。また、幼体とはいえマルクトドラゴンをどうやって引き上げるか。クリスタとナティアがそのことについて話し合おうとした、その時だった。

「ここに来ると思っていたよ」

聞き覚えのある、しかし聞きたくもない声が聞こえた。

それは上空から、威圧感を持って降りてくる。

「カルヴァドス！」

二人が上を見上げると、オーシャンスプレーに乗ったカルヴァドスが笑っていた。

「もう油断はない。次は連れて帰るぞ、鎖よ」

ナティアが叫ぶ。

「誰が！ ぜつつつつつたいに捕まらないんだからっ！」

今度はナティアがクリスタの手を引く。そして、全力で駆け始めた。しかし、その行き先をワイバーンが遮った。

「あまい、あまいぞ星の鎖。もはや逃げ場はないのだよ。大人しく捕まってしまうなさい」

クリスタは何も考える暇がない。とにかくナティアを助けなければ、その思いだけが空回りする。

「ナティア！ 俺につかれ！」

そうしてクリスタはナティアを抱きかかえた。彼にできることは、ただその俊敏さで逃げ回ることだけだった。

「いいか、喋るなよ。舌を噛むぞ」

言うが早いか、クリスタは物凄い速度で駆けだした。町へは後十キロほどある。とてもじゃないが、ワイバーンと争って勝てる距離じゃなかった。

しばらく逃げまどう。オーシャンスプレーは油断無くクリスタたちの前に先回りしてくる。それを回避し、その上で町への道を辿るのは至難の業だった。

「ちきしょう！ ナティア、星の力、使えるか？」

問いかけるが、彼女は首を振った。

「ダメだよ、ザバスも使えないし……昼間だから……他の力だって、ワイバーンに敵うほどじゃないから……ごめんなさい、役に立たなくて」

唇を噛んで、策を練る。これがバスケットなら、一発逆転のチャンスを狙うのだが。

「くそっ、何か無いかっ。せめて隙ができれば」

一瞬でも目を離してくれれば、ナティアの星の力で何とかなるかもしれないのに。

二十分ほど走り回っただろうか。しかし、最初の地点から町へ近付くことはできないでいる。カルヴァドスはナティアを無傷で捕らえることを前提としているようだ。積極的な攻撃はしてこない。だが、周到に逃げ道を塞いでくる。

やがて、クリスタの息も切れてきた。何しろ隠れるところすらない平原だ。気を抜けば捕まってしまう。

「くそっ、どうすれば……」

考えていると、草の下に隠れたぬかるみに足を取られた。そのままナティアもろとも滑ってしまう。

「うわっ」

「きゃあっ」

泥まみれになって、二人は地面に突っ伏す。

「ふふふ……」

そのチャンス逃さず、ワイバーンが翼を畳んだ。

ズン、地響きを立てて降りてくるオーシヤンスプレーを見上げ、クリスタは歯噛みした。

「……ここまでか……」

もはや逃げる策など無い。

クリスタはナティアを見た。彼女はすでに諦め、言葉すら発しない。俯いた表情はうかがい知ることでもできなかった。

「諦めたか？　しぶといヤツだったが、しょせんワイバーンと人間。最初から勝負は見えていたのだ」

カルヴァドスの合図で、オーシャンスプレーがその短い手を伸ばした。もちろん狙いはナティアだけで、クリスタなど相手にもされていなかった。

鋭い爪がじわじわとナティアに伸び、その服をつかもうとした。

クリスタはその目に、ナティアのかぶった麦わら帽子を映していた。ナティアはその帽子のつばを、しっかりと握っていた。

「?????!」

ふいに蘇る、ほんの少し前の記憶。

『笑ってる方が素敵だよ』

そう言って笑ったナティア。

俺は、ナティアの笑顔に見合うだけの何かをしただろうか。

急激に焦りが湧き起こってくる。

何かしなければ。ただその思いだけが彼の頭の中を支配する。

気が付くと、クリスタは全力でワイバーンの腕に体当たりをしていた。

「う、うおおおっつ!!!!」

目を開けることすらできず、ただただ力を込めて突き飛ばす。

不意を突かれたからか、オーシャンスプレーの体が少しだけ、傾いだ。

「なにっ！　まだ抵抗する気力がっ」

カルヴァドスが驚きを隠さずにクリスタを睨み付ける。勢い余って倒れ込んだクリスタを、ナティアが目を見開いて見ていた。

「クリスタ……クリスタッ！」

すぐさま駆けよってくる。そして、彼の傷を見る。あちこち擦りむいていた。痛々しいその傷に、触れることができず、ただおろおろとしていた。

「くっ、ガキの癖にっ」

「へへ、ガキだってやれることはあるんだよっ」

啖呵を切る。迫力では、カルヴァドスに勝っていた。

「……減らず口を聞けるのも今の内だ。もう無傷とは言わん。多少傷つけても治せばよいのだ」

そう言っ、指笛を吹く。それに反応して、ワイバーンが低く体勢を取った。唸りを上げ、大きく息を吸う。

口腔内が赤く輝いていた。

「ふぁ、ファイアブレス……」

一歩も動くことができない。まるで魅入られたようにクリスタとナティアはその明るい穴を見つめていた。

灼熱の炎が、口の中にマグマとなって溜まっていた。熱気がここまで伝わってくる。

「降参するなら今の内だぞ」

カルヴァドスが最後通告とばかりに不敵な笑みを浮かべる。

「ナティア……俺の後ろにいろ」

「でも……」

「良いから！」

強引にナティアを背に追いやる。彼女はどうして良いか分からず、ただ、静かに泣いていた。

「クリスタ……クリスタ、クリスタ……クリスタあ」

掠れていく声が悲しかった。

足が震えて、逃げるなんてできなかった。だが、ナティアだけは無傷で守ろうとした。

「オーシャンスプレー、やれっ！」

合図の声を聞き、クリスタはギュッと目を閉じる。ナティアが背中中に爪を立てるのが分かった。

オオオオオオオオ。空気が唸る音が聞こえる。

が、いつまで経っても熱気は体を包むことがなかった。

不思議には思うが、目を開けることができずにいると、声が聞こえてきた。

「少年、立派だ。ヴァームも言っている。『生命には性別という役

割がある。それは個体に差を生むものではなく、個体同士を補完するものだ』と」

ようやく目を開けると、そこには金色の髪をした、大柄な男が立っていた。

その彼が、巨大な剣を握る手を下ろし、もう片方の手でクリスタの頭を撫でた。

「後は任せろ」

「あんたは……」

問いかけると、男は微笑み、カルヴァドスの方を向く。

「勇者フォンドール、参る」

長大な剣・スターエクスカリバーが火花を散らした。

4 《それでもあんたがあたしを超えるってんだね?》

オーシャンスプレーのファイアブレスを、フォンドールは剣で受け止めていた。

「なんなんだ、あの剣は!」

カルヴァドスが悲鳴を上げる。普通の剣ならば、とっくに溶けてなくなっているはずだ。

「教えよう。こいつはスターエクスカリバー。星の力によって守られた剣だ」

星の力で守られた……それを聞いて、クリスタの脳裏に「星具」の文字が浮かんた。ナティアは涙を止め、フォンドールの長身を見上げるようにして凝視している。

「少女少女よ。今の内に少し離れた方がいい。俺だって、時には氣遣いを忘れることもある」

つまり、それだけ激しい戦闘になる、ということだろう。クリスタはナティアの手を引き、近くの岩陰に隠れた。少し遠目にはなるが、十分にカルヴァドスとフォンドールが見える。

フォンドールが剣を振り払うと、ファイアブレスは霧散した。オーシャンスプレーが低く唸りを上げている。

「くそっ、オーシャンスプレー! ブレスが効かんのなら力で潰すのだ」

ワイバーンは主の声で飛び上がり、遥かな高みまで昇って行った。カルヴァドスはその前に地に降り立っていた。

フォンドールが急降下を予測して剣を構える。

「……………裁きは光の下で、ヴィターゴ」

剣から火花が散った。一回だけではない、二回、三回と弾けるにしたがって、火花は大きくなっていく。

「この鉄槌はヴァームの怒り」

フォンドールが叫ぶと、火花がドンと音を立てて彼を包む。そし

てそれはゆつくりと剣に移っていった。

「あれは……星の力……神の雷ヴィターゴ」
ナティアがつぶやく。

「知ってるのか？」

「うん……ものすごく危ない力。使うことができて、決して使ってはいけないと教えられているくらい……相手にも、自分にも危険な力よ」

唇がわなないていた。クリスタの袖をギュツとつかむ。彼はそんなナティアを支えるようにして肩を抱いた。

「オーシャンスプレーが！」

クリスタが叫ぶ。ワイバーンは口腔から炎を吐き出し、それが全身を包んでいた。まるで火の玉のようになったオーシャンスプレーを、フォンドールは動じずに睨み付ける。

「うおおおおおおおおお！」

フォンドールが吠えた。

巨大な剣はそれに呼応するかのように火花を散らし、一本の稲妻の柱となった。

火の玉と稲妻がぶつかる。もうそれは生命ではなく、何かの自然現象としか思えなかった。

「うわあああ！」

「きゃあああ！」

衝撃波がここまで届いてくる。クリスタもナティアも岩にしっかりとしがみついた。

戦いはその一瞬では終わらなかった。

地響きを立てながら何度もぶつかる。縦に横にまるで鉄の玉がぶつかったような音がする。

「どりやあああ！」

フォンドールが剣を大上段から振りかざした。その軌跡の延長線上に雷が走る。

ドンッ、空が割れる。

オーシャンスプレーも負けていない。熱球の風圧で雷をねじ曲げた。

次の瞬間に、両者はぶつかりあった。今度は力と力の勝負だ。

「な、何なんだよ、こいつら……」

クリスタは呆然とするしかなかった。あまりにも凄まじすぎて、理解の範疇を超えていた。

「ここじゃ危ないよ、クリスタ。もっと離れないと」

ナティアが必死になってクリスタの袖を引っ張った。しかし、クリスタは食い入るように戦いを見つめ、逃げようとはしなかった。フォンドールが言った通りだった。こんな物凄い戦いに気遣いなどできるはずがない。頭では分かっているが、動くことができなかった。

クリスタは、二者の戦いに魅せられていたのだ。

「俺も……こんな風になれるのかな……」

彼がそう呟いた、その時だ。

フォンドールの剣に弾かれた火球が二人の方に跳んできた。

「うわっ」

家一軒ほどもありそうな極大火球だった。一瞬のことで、避けようと思えることすらできなかった。

二人とも目を強く閉じる。

もうダメだ、そう思った。

ドン、そして衝撃が訪れる。

しかし、痛みはなかった。

一瞬で焼かれてしまい、痛みがないのだろう、クリスタはそう考えた。

「フォンドールさん、少しは周りのことも考えて欲しいのですわ」
頭上から聞こえる声。

優しく、凜とした声だった。クリスタとナティアは恐る恐る上を見た。

そこには、体の半身を覆うほどの巨大な盾を手にした女性がいた。

「そんなことではヴァームの下僕とは言えませんが」

彼女の言葉は、だがフォンドールには聞こえていなかったようだ。彼はなおも勝負に集中し、振り返ることすらしない。

「げ、げぼくって……」

ナティアが苦笑する。たった今まで生命の危機だったことさえ忘れた風でもある。

「あら、大丈夫かしら？ 怪我はない？」

「は、はい」

クリスタが応え、彼女は手を合わせて祈った。

「これもヴァームのお陰です。主の導きに感謝いたします」

戦場であるのに、ゆったりと目を閉じている。

また、火球が弾き飛ばされてきた。

彼女はそれを、目を閉じたまままで弾き飛ばした。

「だいぶ、戦闘が激しくなってきたみたいですわね」

そう言うと、彼女は何事か口にした。

「ヴァームの導きのままに、この二人をお守りください。アクエリ
アス」

手には小さな水の入った瓶を持っていた。それを彼女はナティアとクリスタの周りに振りかける。

すると、水は増幅し、二人を包み込んでしまった。

「これでファイアブレスは問題ありませんわ」

そう言ってニコリと笑う。

「お姉さん……何者？」

ナティアが問う。

「わたくしはウトコ。ウェルチのシスターですわ。フォンドールさんと一緒に勇者をやっていますの」

おっとりとした話し方が、なんだか可笑しい。そう思ってクリスタが笑うと、彼女も笑顔を返した。

「ずいぶんと勇気がありますのね。一人の女の子を守るために、ワイバーンに立ち向かうなんて。リビタさんがとってもお気に入り

でしたのよ」

彼女の声に応えるように、後ろから声がかかる。

「余計なこと言うんじゃないやねえよウトコ！ あたしゃこんな弱い奴らに興味なんてねえよ」

声音は綺麗なのに、言葉は汚い。二人が後ろを振り返ると、そこにはフォンドールに迫る長身の女性が赤い髪を振り乱していた。

「うお……」

思わずクリスタは尻込みした。

「馬鹿言ってるじゃねえぞ。たかがガルーダに怯えてる奴らなんか知ったこっちゃねえんだよ」

むっとしたクリスタが彼女を睨むと、リビタが手に持った銃でいきなり殴りかかった。

「ぐあっ！」

頬を押さえてうずくまるクリスタをナティアが庇う。

「ヒドい……」

「あらあら、おいたはダメですわよ、リビタさん」
ウトコがたしなめるのを、苦々しく見つめる。

「つたくよお、女に守られやがって……」

その後は興味なさそうに二人を無視すると、背中に抱えた無数の銃から一丁を取り出した。

「いたた……」

「クリスタ……大丈夫？」

クリスタは身を寄せるナティアを引きはがす。

「ありがとうな、ナティア。でも大丈夫だ。おい、リビタッ」
立ち上がり、リビタの名を呼ぶ。

彼女は振り向かず、顔だけを後ろに向けた。

「なあんだよ？」

ニタリ、と笑う。

「絶対に、お前より強くなってやるっ」

クリスタの中で何かが変わった。怒り、よりも決心と言った方が

近かった。それは彼の中で燃え上がり、抑えきれないものになっていた。

「ふん、いい目になってきたじゃねえかよ。んじゃあ、テメエもこんなくらいはできるようになれよ」

リビタが手にした銃は、リボルバー式だった。真っ白で、彼女が持つにふさわしくないように思える。それほどに清らかな銃だった。

「マルチリボルバー・アイス」

回転式弾倉をクルクルと回し、そこに弾を込める。全部で六発。それをそのままワイバーンに向けた。

「フォンドール！」

叫ぶと、フォンドールが跳躍してその場から離れた。同時にリビタが引き金を引く。

銃口から真っ白な弾が飛び出し、オーシャンズプレーに向かう。途中、弾丸は五つに分解し、それぞれが煙を吐き出し始める。

「煙？」

ナティアの疑問にリビタが答える。

「違うねえ。あんたなら知ってんじゃないのかい？ アクアハートだよ」

彼女が答えている間に、それぞれの弾が肥大し始める。

「アクアハート？ それは氷の力……でも………」

クリスタは話しについていけないでいる。

「ナティア？」

「アクアハートは氷を触媒にした星の力なの……でも、あれは」

「ふん、違うないねえ。正真正銘、あれは星の力さ。弾丸に封じ込められた、ねえ」

一つ一つが巨大な氷の塊と化し、ワイバーンを包み込んだ。ファイアブレスで灼熱となった体も、一瞬で冷えてしまう。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

ワイバーンが吠える。

そこに、フォンドールが斬り込んだ。

「おりゃあああああ！」

天空から雷が落ちる。ワイバーンが真っ二つに割れる。そして、あつと言う間に燃え尽きた。

断末魔の叫びすら上げず、オーシャンスプレーが息絶えた。

「……あ……ああ……」

クリスタは驚きすぎて声を上げられない。

「どうだい？ これでもあんたがあたしを超えるってんだね？」

勝ち誇ったようにリビタが笑う。それを咎めるようにウトコが指を立てる。

「ダメですわよ、リビタさん。怯えてるじゃないですか」

ねえ？ とクリスタを振り向く。その言葉がクリスタにはショツクだった。相手にすらされていない気がした。

「な、なんなんだ、こいつら……」

ナティアは、そんなクリスタを心配そうに見ていた。

やがて、フォンドールが皆の所に寄ってきた。

それをウトコ、リビタが迎える。

「おい、フォンドール。ご苦労さんだったなあ」

バン、と背中を叩く。力一杯に叩かれたのに、フォンドールは微動だにしなかった。

「リビタもご苦労だったな。ウトコも間違いのない判断だった」

「ふん、当然ってことよ」

「ありがとうございます。全ては主の導きのままに」
各者各様の反応をする。

そんな彼らに、近づく影があった。

「皆さん、お疲れさまでした。ですが、肝心の犯人はどうしたのです？」

細身で眼鏡をかけた男だった。眼鏡の奥の瞳は鋭い。

「ああ、それだが……すでに逃げたようだ」

「……そうですか。では、ワイバーンから辿りましょう。死体はどこです？」

彼がそう問うと、フォンドールは言いにくそうにした。

「……まさか？」

「ああ、すまない。そのまさかだ」

「はあ、これで何度目だと思っているんですか。証拠は残すように戦ってくださいとあれほど言っているでしょう？ 調べるこちらの身にもなってください」

額に手を置いて頭を振る。

「悪い、ロスバツハー。しかしな、ガルーダのくせに意外と強かったのだ。あれは鍛えられたガルーダだぞ」

言い訳は聞かない、という風にロスバツハーは手を振った。

「言い訳は許しません、フォンドール。あなたのやったことは被害者をいたずらに危険に晒したことになるのですよ」

あれだけの強さを誇った人間が、しゅんとなって怒られていた。ナティアはその光景を素直に笑っていた。だが、クリスタはそうする気にはならなかった。

彼の目の前には見たこともない光景が広がっていた。知らなかった世界があった。

強く、惹かれ、憧れた。それは衝撃だった。

クリスタは震えた。武者震いだった。

「あの……これ」

クリスタの決意を別にして、ナティアが一枚の名刺を差し出した。「なんです？」

「あの人……カルヴァドスが置いていったの。何かのヒントにならないかしら？」

ロスバツハーが受け取り、名刺を検める。

そしてすぐに苦笑を漏らした。

「バカですか、あのジジイは」

そこには、組織名と役職まで書いてあった。

「ギネス・コープ……ですか。初めて聞く名前ですが……まあその辺は何とかなるでしょう」

追求から逃れられて、フォンドールは安心していた。ウトコは意味もなく楽しそうだった。リビタは何を考えているのか分からないが、とにかくニヤニヤしていた。

「あんたたち……何者なんだ？」

クリスタが何度目か分からない疑問を口にする。

「え？ まだ聞いていないのですか？」

ロスバツハーがキツとフォンドールを睨む。彼はかぶりを振って否定した。

「お、俺はきちんと話したぞ。勇者だとな」

それを聞いて、またロスバツハーが溜息をついた。

「どうせ貴方のことですから、それ以上は話してないでしょうね」

「あのあの！ 戦闘中でしたし、それ以上のことを話す余裕はなかったと思いますのよ。フォンドールさんを許してあげて、ロス」

ウトコが継るようにしてロスバツハーの腕を取った。

「きやははは、いいじゃねえか。今から説明すりゃ済むこったろ」
そういつてリビタが茶化す。

彼はもう一度溜息をついて、ナティアに向き直った。

「仕方がありません。きちんとお話ししましょう。ナティアさん。私たちは貴方を助けに来た勇者です。BAで登録なさったんでしょう？」

「あ、ああはい」

ナティアが頷く。

「ちよつと調べさせていただきました。今回は特殊なケースです。普段なら私たちが護衛になどつかないのですが」

「どういうこと？」

クリスタが問う。

「バーカ、普通の人間が襲われたくらいでジャネフ最強の勇者が護衛に付くわけねえだろうが」

ジャネフ最強。それはつまり、この世界でトップクラスの実力を持っているということだった。

「つまりそういうことです。まずは紹介しましょう。リビタ、ヴィタモント国出身のバーサーカー」

リビタが銃を空に向けて発砲する。軽快な音が空に響き渡った。

「次にウェルチ国のシスター、ウトコ」

ウトコがスカートの端をつまんで挨拶する。

「そして我らがリーダー、ジャネフ国最強の男、フォンドール」

握手を求めてくる。それを、クリスタ、ナティアの順に受け取った。

「そして、私がこのグループの頭脳とでも言うべき人間のロスバツハーです。お見知りおきを、お姫様」

恭しく挨拶する。

「へん、ナティアがお姫様だって、気取ってら」

クリスタがロスバツハーの態度を馬鹿にする。

だが、それをさらにリビタが馬鹿にした。

「バカはテメエだ。こいつは正真正銘のお姫様だよ」

クリスタが首を傾げた。

「一般人に話すべきではないと思うが……」

ロスバツハーがナティアを見る。彼女は何かを察して頷いた。

「仕方がありません。お話ししましょう。彼女は星の鎖。このコークの命運を握る少女です」

「え？」

クリスタの思考が止まった。

5 《生きて未来を見るために》

クリスタは全力で駆けていた。

ボールを突きながら、二人、三人と交わして行く。

そこに迷いはなかった。

前方に一人が立ちふさがる。それをバックステップで避け、急激に方向転換する。

その先にもう一人、気がつけば、後ろにも一人回ってきていた。

「くそっ、三人がかりかよ」

迷いは一瞬の隙を生む。敵チームはそれを見逃さなかった。

一斉に輪を縮める彼らの向こうから、ロケットが声を上げる。

「クリスタ、こっちだ！」

頭が考える前に、体が動いていた。

二人の脇を縫ってボールを飛ばす。それは微かに腕に当たり、バウンドした。

「しまった！」

「任せろ」

味方のモックがカバーに入る。すぐさまロケットにパス、そして敵がそちらに目を移している内にクリスタは包囲網から逃れていた。

「はっ！」

ロケットがシュートを打つ。しかしそれはあっさりと敵に弾かれてしまう。

その時だ、観客席から声がした。

「クリスタッ！」

ナティアの応援だった。

「あいよ！」

軽く応えて、クリスタは飛び上がる。

まるで羽が生えたかと思うくらいに高く、長く。

空中でボールを受け取り、そしてそのまま Dankシュート。

一瞬、会場が静まり返った。

そして、歓声が沸き起こる。

クリスタはガッツポーズで応えた。

「クリスタっ、ナイスカバー」

ロケットタが手を上げる。クリスタはそれを強く叩く。いつもの光景、いつもの風景。

「さんきゅ。んじゃ、一気に決めようぜ」

波に乗った彼らを止めるものはいなかった。点差は開き、時間はなくなっていく。

次第に敵に焦りが出てきた。そこをついてまたクリスタが駆けた。

「ロケットタ」

唐突にパスを出す。相手はそれについてくることができないでいた。

受け取ったパスを、ロケットタが天高く放り上げる。軽やかな音を立てて、ボールはネットに吸い込まれた。

そして同時にホイッスルが鳴る。チーム・バヤリースの勝利だ。

「やったあ！ クリスタ、すごい！」

ナティアが歓声を上げた。そちらに向かって、クリスタがブイサインで応える。それを見て、ナティアは少し複雑な表情をした。

「ナティア？」

クリスタが疑問に思い、そして苦笑する。

勝利に沸く仲間の下へ、彼はゆっくりと歩んでいった。

「おう、クリスタ」

「ご苦労さん、後は決勝トーナメントだな」

チームメイトが声をかけてくる。クリスタはそれを笑顔で受け止め、言った。

「サンキュー、なあ、ちょっと聞いてくれないか」

「なんだ？ あらたまって」

「ああ、実はな……」

そう言いかけて、言葉が止まった。この瞬間、彼は迷った。迷い、

観客席を振り返る。

そこにはナティアがいた。

心配そうにこちらを見る彼女。それを眺めるだけで彼に勇気が生まれる。

「俺、バスケットを辞める」

ロケットが怪訝そうな表情を見せる。何を言っているのか分からない、といった、または聞き間違いだと思っっているようだ。

「クリスタ……もう一度聞かせてくれ。辞める、と言ったのか？」

「ああ、今日限りでバスケットを辞める。突然の話になってすまない」
「誰も信じなかった。口々に「ウソだろ？」」「また俺たちをからかっているのか？」と否定の言葉が返ってくる。

だが、その中でロケットだけは何も言わなかった。ジッとクリスタを見つめ、そして近寄ってくる。

「ど、どうした？」

クリスタが問うと、ロケットが殴りかかってきた。

「ぐっ」

尻餅をつくクリスタ、周りの仲間が慌ててロケットを羽交い絞めにする。

会場がざわついた。

「プロになる話はどうなったんだよ！」

涙を流しながら、ロケットが叫んだ。

切った口元を拭いながら、クリスタは彼を見上げた。

「……知ってたのか？」

うなずく。

「悪いとは思ってたけど、後をつけたんだよ。変な奴に捉ってたみたいだったから」

「いや、俺の方こそ隠してて悪かった」

「……」

誰も口を挟めない。

「決心がつかなかったんだ。お前たちを残して、俺だけプロになっ

て良いのか、って」

それを聞いて、仲間が色めき立った。

「馬鹿やろう、そんなことを考えてたのか？」

「俺たちの中からプロが出るなんて、止めるわけじゃないじゃないか」
手を差し伸べて、ロケッタが言う。

「俺たちは、そんな仲じゃないだろう？」

「ああ……そうだったな」

クリスタがそれをつかみ、引き上げてもらう。

「だが、それが何でバスケを辞める、って話になるんだ？」

とたんに手を離れた。クリスタは支えるものがなくてまた尻餅をついてしまう。

「いてて……」

尻をさする。今度は自分の力で立ち上がった。

その姿を、皆が見ている。

この頃には会場も様子が変だと思ったのか、静まり返り、バヤリースを注視していた。

「そうだな、おかしいよな。俺だって、まだ自分でも信じられないくらいだ」

クリスタはナティアを見た。

そして、笑った。

「みんな、俺は勇者になる」

その声が聞こえたのか、会場のある人物が立ち上がった。

「馬鹿な！ クリスタ君、そんなことっ」

スカウトのエビアンだった。

クリスタはその姿を確認すると、聞こえるように大声で話した。
「確かに俺はバスケが大好きだ。でも、それよりもっと大事なことができたんだ」

「大事なこと？」

「ああ、旅に出るんだ」

「旅に？ どうして？」

「大事な人間を守るため、自分の可能性を確かめるため、世界の秘密を見えるため」

クリスタの言葉はとても大きくてロケットたちの手には余った。それがどうしても飲み込めず、彼らは一様に疑問符を頭の上に乗せている。

「分かってもらおうとは思わない。だけど、俺にとってバスケット以上に大事なことなんだ」

「馬鹿な……勇者になど……命を落とすかもしれないというのに」
エビアンが叫ぶ。

「それでも、俺は行く。このままだと、きっと後悔すると思うんだ」
「それは、破格の契約金や素晴らしいライバルよりも大事なことになるのか？」

クリスタはエビアンに向けてはっきりとうなずいた。

その眼差しを見て、エビアンは席に座った。頭を抱えている。すでに話はある程度進めていたのだろう。今後のことを思い悩んでいるようだった。

クリスタは向き直った。

「そんなわけで、すまない」

深々と頭を下げる。

仲間たちは見つめている。そんな中で、ロケットがボールを手にした。

「クリスタ」

そうやって彼にボールを投げる。両手で受け取ったクリスタは訳が分からなくてロケットを見る。

「勝負しないか？ 最後に」

そう言って大会の運営者を見た。スタッフが何事かを話し始め、やがて肯く。

「問題ないようだな」

ポン、ポン……ボールを軽く突く。それはすんなりとクリスタの手に収まった。何年も触れてきた感触だった。もう二度と、ボール

に触れることはないかもしれない。それでも後悔はなかった。

気持ちを切り替え、目の前の敵に意識を集中する。四対一、明らかに不利だった。

「おう、ちょっと待ってくれよ」

観客席から誰かが声をかけてきた。

フォンドールだった。

観客席で立ち上がると塔のように高く、山のようにがっしりとして見える。

彼はフェンスを跳び越えたとクリスタに近寄っていく。

「あなたは……」

ロケッタが言葉を失った。他のメンバーも同じだ。

「ああ、自己紹介が遅れた。今度、このクリスタと旅をすることになったフォンドールだ」

いつものむっつり顔で手を差し出す。それにロケッタがおずおずと応じた。

「どうしたんだ？ 急に黙って……ああ、フォンドールがでかすぎてびっくりしてんだな。心配ない。熊じゃないんだから喰わねえよ」

そう言い放ったクリスタにロケッタが突っかかってきた。

「バカッ、この人はジャネフ最強の勇者だぞ？ お前、それ分かってるのか？」

目の色を変えて叫ぶ。

「あ、ああ知ってるよ。昨日日本人からそう説明されたから」

「じゃあこれも知ってるのか？ 勇者フォンドールが関わるのは国家規模の戦争や未開地の開拓だぞ。そこら辺の警備員勇者とは訳が違うんだぞ？」

クリスタはそれにも頷いた。

「知ってるよ。俺が今からやろうってのは、この星を救うことなんだから」

あっけらかんとした答えにロケッタが苦笑する。

それにつられてクリスタも笑う。

なぜだかフォンドールも笑った。

「何やってんだよ teme 兄！ さっさとやっちまいな！」

リビタが銃を上空に向けて撃ち放った。

周囲がざわめく。

「おい、あれはバーサーカー・リビタだぞ」

「それに隣は水のシスター・ウトコだし、勇者の黒幕・ロスバツハ
ーもいる」

不穏な二つ名にロスバツハーが引きつる。それを見てウトコが笑った。

「あらあら、ロスったら……性格が顔に出るのね」

「ウトコ……ここでデススリンガーを喰らいたいですか？」

まあまあ、と口を隠しながらウトコがリビタの後ろに隠れる。

「ふん、だから付いてくるなと言ったのだ。あいつらが居ると目立
ってしょうがない」

フォンドールが不満げに言い放つ。

「いやいや、一番目立ってるのはおっさんだよ。わかってる？」

クリスタのツツコミを意に介せず、彼はロケッタの方を向き直った。

「ロケッタとやら。準備はよいか？」

「オーケーですよ。勝負は五分間、ボールはそちらから良いよ。

三本勝負で二本取った方が勝ち、いいな？」

「りょーかい。んじゃ、お前ら覚悟しとけよ。今から俺が行く世界
を見せてやるからな」

審判のホイッスルが鳴る。途端にクリスタがロケッタに真正面か
ら突っ込む。

「バカだな、いくら何でも……」

そう言った瞬間、クリスタが視界から消えた。

「なっ」

急激な方向転換、しかもその手にはボールがない。気が付いた時
にはフォンドールがしっかりとボールを抱えている。

「おっさん！　しっかりな」

「おうよ」

フォンドールが跳んだ。

「うわっ」

モックが上空を見上げる。身長百八十センチもあるモックの、まさに真上を飛び越して、ゴールにボールをぶち込む。

リングが割れてしまいそうに揺れている。

その揺れが収まるまでの間、誰も動くことができなかった。

地面に落ちたボールをフォンドールが拾う。

「クリスタ」

目一杯に投げたそれは、暴風を巻き起こしながらクリスタに向かう。彼はそれを手のひらで受け、柔軟に受け流して勢いを殺した。

「おーいて。おっさん、強すぎんだよ。少しは手加減してもんを……」

「何を言うか、お前が言ったのだぞ。これからお前が行く世界を見せる、とな」

「まあ、そうなんだけどさ」

ぶつぶつ言いながらも手を高く掲げる。その手をフォンドールが叩く。

「すげー！　すげー！　すげー！」

会場から一気に歓声が上がった。割れんばかりの声は今までこの会場で行われたどの試合よりも大きなものだった。

「おお、すげーな」

クリスタも驚いている。

ロケットたちはそれでも言った。

「あと二本だ、さっさとやるぞ」

「おう！」

クリスタが応じる。

笛が鳴った。今度はフォンドールがボールを持っている。

が、彼はそのまま動こうとしなかった。

「……あー、おっさん、バスケットしたことある？」

「ないな、すまん」

クリスタの額から汗が流れる。ドリブルなどやり方が分からないのだ。

「つたく。まあいいや。とりあえずパスだ」

手を差し出すと、今度はあっさりとモックに取られてしまった。そのまま為す術もなく決められてしまう。

「あらら……しょうがねえな」

残り是一本だ。

「クリスタ、これがお前の見せたかった世界か？」

ロケッタが嫌みを言う。

「へっ、お楽しみは最後にとっとくもんだろ」

そう言って、ロケッタにボールを渡した。

「最後くらいはそっちからで良いよ」

「へえ、優しいんだな。余裕出してる場合か？」

「まあな。おっさん！」

「ドリブルもできないヤツはゴール前でしっかり待ってろよ」

「了解だ。ここじゃお前の方が先輩だからな」

笛が鳴る。

ロケッタたちはボールを回しながらゴールに近付いていく。なるべくクリスタからもフォンドールからも遠い位置を選んでパス回しをする。

「お前たちは、そういうことやってると、いつか足下掬われるぞ」

クリスタが言うなり、飛び出した。モックがすぐにロケッタへとボールを戻す。しかし、それにクリスタが食らいついた。ロケッタはさらに後ろへとボールを戻す。それにもクリスタは追いつく。

「なんだ？」

ボールを回せば回すほど、自分たちが窮屈になっていく。クリスタとの距離は縮まり、パスのコースも限定されていく。

「どうだ？ チャンスは一瞬しかない。それをものにする目を養わ

ないと、追い込まれることになる」

そして、クリスタの速度が更に上がった。

あつと言う間にボールに追いつく。インターセプトしたボールを振り向きざま投げた。

「おっさん！」

誰にも手が出せないくらい重く、速いボールは、まっすぐにフォンドールの胸元に収まった。

「叩きつけろ！」

「おうっ」

「させるかっ」

飛び出したのはロケットタだった。身長では二十センチも負ける彼が、踏み切りのタイミングだけでフォンドールのボールを叩き落とした。

「よしっ」

「そこで安心するなよ」

下にはすでにクリスタが待っていた。

「なにっ？」

二人が落ちていくのと正反対に、クリスタが高く飛び上がっていく。

「これでお終いだっ」

ドン、と響く重い音を、ロケットタは地面に寝ころんだままで聞いた。

「っ！ はあ、何てヤツだ……」

「お疲れさん、ロケットタ」

クリスタが彼に手を差し伸べる。

苦笑いをしながら、ロケットタはその手をしっかりと握った。

「負けたよ。良い試合だった」

「俺たちの圧勝だろ？」

「何言ってる、次やれば分からないぞ」

クリスタの眼前に指を突きつける。

「え？」

「クリスタ、最後じゃない。絶対に帰ってきて、また一緒にやろうな」

そう言って握手を求める。

その手と自分の手を見比べ、クリスタは少し迷った。
躊躇する彼の肩を、フォンドールが叩く。

「何を迷う必要がある。お前はこれから死に行くのか？」

ふ、とクリスタが笑った。

「いいや、生きて未来を見るために」

ロケッタの手をがっしりと握る。

「またやろうな、ロケッタ」

「ああ」

こうして、フォンドールはバスケに別れを告げた。

さて、いよいよ出発かと思っていたが、ここからが大変だった。

関係各所への挨拶、BAへの勇者登録、両親はすでに説得してあったが、それでも何度も別れを惜しんだ。

何より、あれからエビアンがフォンドールの勧誘にしつこかった。
勇者を辞めたらぜひ我がチームへ、と名刺に贈り物に滞在中毎日会いに来た。

そんな喧騒の中、クリスタとナティアは久しぶりに二人きりになる時間を持つことができた。

「あー、なんか大変なんだな、勇者になるのって」

町外れの草原で、二人は寝ころんだまま話していた。

「そりゃそうよ。ご両親にとってはたった一人の息子ですもの」

「ああ、そうかもな。でも、嬉しかったんだぜ。最後にオヤジが言ってくれた言葉」

「自分に正直な道を進むのならば、それを誰にも恥じることなく、後悔することなく進みなさい。だっけ？」

「そうだな。良かったと思うよ、オヤジの息子で」

「それ、本人に言ってあげたら？ 喜ぶわよ？」

「照れくさくて言えねえよ」

「あはは、変なの」

「ふふ、そうかもな……」

それきり、言葉が途切れた。

自然に心は数日前の、あの話しへと向かっていく。

未だに半分は信じられない。

だが、彼は信じることにしたのだ。

6 《汝の道を信じ、それを広げ、皆のためにも与えるものは真に強きものだ》

?????あのとき?????

「仕方ありません。お話ししましょう。彼女は星の鎖。このコークの命運を握る少女です」

「え？」

その時、クリスタの中にはいくつかの思いが芽生えていた。

一つは、ナティアをこのまま守ってあげたいというもの。

もう一つは勇者に対する憧れ。

そして、未知のものに対する好奇心だった。

「どうということなんだ？」

問いかけるクリスタの表情は、戸惑いよりも期待の方が溢れていた。

「何だか嬉しそうですね。まあ良いですよ。順にお話ししましょう」

ロスバツハーは地面に何やら絵を描き始めた。それは凸を反時計回りに九十度回転させたような形をしていた。

「これがコークの概略図です」

「へえ、俺たちの世界ってこんな風になっていたのか」

「世界、というよりもこの大陸について、ですがね」

そして、地形の南側にウェルチ、真ん中にジャネフ、西側にヴィタモント、北側にアルギニンと書き込む。

「これで、三カ国とアルギニンの位置関係がお分かりになりますかね」

実際には領土の大きさなどで多少の齟齬はあるが、概ね問題ない地図となった。

「さて、この世界で宗教といえばコルディア教となります」

地図の横にコルディア教、と書く。

「コルディア教とは、この世界を作ったヴァームを信仰し、彼の説

く教義を守ることを言います。つまり、全ての生命は遍く融和し生きていくことで幸福を得る、というヤツです」

もっと分かりやすく言うと「全ての生命体は元々一つのものであり、隣の者と心を通じ合えば全ての者は幸せになれる」というものになる。

「コルディア教のコルディアとは、『生命が一つになること』を意味します。つまり教義を端的に言い表している訳ですね」

そこまでロスバツハーが説明したところで、クリスタが口を挟む。

「なあ」

「なんです？」

「今更その説明が何の役に立つんだ？」

退屈そうにアクビまでしている。

「なるほど。では少し飛ばしましょう。クリスタはヴァームを実在の人物だと思えますか？」

問いかけられて、キョトンとする。

「え？　しないの？」

「いいえ、しますよ」

ロスバツハーがニコリと笑う。そして続けた。

「では、ヴァームとは何ですか？」

そう言われて、クリスタは即答した。

「神様、だろ？　全知全能、星だろうと大陸だろうと海だろうと、それこそ人間でも何でも作ってしまう」

この間、ナティアは一言も口を挟まず、ロスバツハーとクリスタの受け答えを固唾を吞んで見守っていた。

クリスタの答えに、ロスバツハーは頷く。

「ふむ、それが一般的な教徒の考え方です。ですが、それは間違いです」

「え？」

「なぬ？」

「なんですって？」

「おろろ？　なんだなんだ？」

クリスタは驚く場面を失ってしまった。何しろ、フォンドールもリビタも、シスターであるウトコまでもが疑問を発したからだ。

「あらら、皆さんご存じなかったようですね。全知全能の神なんてものがいたら、この世界から紛争など無くなるでしょうし、何より教主として末永く留まっておられるでしょう」

「そ、それは私たち人間を信じて、お任せになったので別の星に行かれたのだと……教義では……」

「ウトコさんらしくないですね。ヴァームは全ての生命の融和を説いていらっしゃるんですよ。一番自然だと思われるのは、この答えです」

ウトコが項垂れる中、ロスバツハーが説く。

「ヴァームは尋常ではない力を持った人間だった。彼は寿命で死んだ」

ガクリとフォンドールが膝をついた。クリスタも動揺せずにはいられなかった。

神が死んだ？　それは、あっても良いことなのか？

「では、この世にもう神は存在しないのか？」

フォンドールが苦しそうに問いかける。クリスタは内心で、彼の信仰心の篤さに驚いた。

「まあ実際にいてもいなくてもすでに教義は固まっているので、宗教的には問題ないと思いますが……ああ、そんな問題ではないですよね」

苦笑する。頭を掻きながら、彼は周囲を見回した。ウトコもリビタもフォンドールもクリスタでさえもすっきりとした解決を求めている。ただ一人、ナティアだけが平然としていられるのは、彼女が今まで話されたことを承知しているからだろう。

「安心してください。神ならちゃんと現代にもいますよ」

そうして、ナティアを指差す。全員が彼女を見る。ナティアは自分を指差し、照れたように顔を赤らめた。

「へ？ ナティアが？」

今度は驚いたのはクリスタのみだった。

「え？ どうして？ みんなは何で受け入れてんだよ」

「ばーか、からかわれてんだよ、テメエは」

リビタがニターと笑う。フォンドールもコホンと咳払いしてから立ち上がる。

ウトコに到っては「ごめんなさいね」と謝りながらも楽しそうにしていた。

「まあその……なんです……ただの説明にも動きがあった方が何かと都合が良い訳なんですよ」

「何だよ、その理屈はっ」

ロスバツハーにクリスタが突っかかる。

彼はそれを膝蹴りの一発でいなした。

クリスタの腹に深く入る膝、くの字に体を折って苦しがる彼をナティアが慌てて駆けより、解放した。

「ゲホゲホッ、い、いてえ！」

「言っときますけど、私もジャンプ最強の勇者の一員なんですからね。そこのワイバーンよりは強いですよ」

その頭をウトコが叩いた。

「もうっ、ロスはやり過ぎです」

そう言ってクリスタの解放を手伝う。

「私と彼との間の、全ての綻びが消えますように、プラセンタ」
祈るように手を組み合わせると、その両手が光り始めた。

ウトコはそれをクリスタの腹部に当てる。

「プラセンタ……触媒を必要としない星の力……回復の力」
ナティアが呟く。

「もう大丈夫。回復系はわたくし、得意ですよ」

ウトコが微笑んだ。その笑みにこそ、癒されるような気がした。

「クリスタ、すいませんでしたね。別に意味がなくてやったわけじゃないんですよ。あなたに臨場感を持って神の降臨を体験してもら

おうと思ひましてね。どうでした？」

まだ腹を押さえながらクリスタが呻く。

「どうでしたもこうでしたもさっぱり分からねえよ。何でナティアが神様なんだよ」

「違ふの、クリスタ。私は神様じゃない」

ナティアがクリスタの手を取る。

「私は星の鎖。簡単に言っちゃうと、神様の卵なの」

「神様の……タマゴ？」

「そこからは私が話しましょう」

「いいや、ナティアから聞きたいね」

無理矢理にロスバツハーを押しのと、後ろから首を羽交い締めにされた。

「ぐう」

ロスバツハーの腕をタップする。と、彼はようやく力を緩め、何事もなかったかのように語り始めた。

「星の鎖とはコルディア教の秘事中の秘事です。ウェルチ国女王だけが代々受け継ぐ隠された存在です」

ナティアが何か言いたそうにするが、ロスバツハーが口に手を当ててそれを止める。

「ヴァームの魂は受け継がれます。神の魂を宿した人間は、頭に輪を持ち、産まれてくる」

そこで全員がナティアの頭の輪を見た。確かに、分かりやすい印だ。

「分かりやすい。だからこそ、それが神の印であることを隠さねばならないのです。でなければあらゆる人間から狙われてしまう。神様が畏怖の対象だけ、というわけではないですからね」

それはクリスタにも分かった。神を祭り上げようという人間、政略に使おうとする人間、果ては狂信者や金儲けに使おうという悪人がいるかもしれない。

「でも、そんな秘密を何でロスたちが知ってんだ？」

「いま、何て言いました？」

ロスバツハーがクリスタの頬を引っ張る。

「ほんはひみふほ？？」

「そうじゃなくて、私をロスと言っているのはウトコだけです」

「ひてててっ、わはっは、わはっは」

放してもらうと、クリスタが頬を押さえる。

「いてーなー、ったく。じゃあロスバツハー……」

そこでロスバツハーが睨みをきかす。

「……さん、何でそんな秘密を知ってるんですか？」

冷や汗をかいてしまった。

「それは俺から話そう」

退屈していたフォンドールが口を挟む。

「聞けば単純なことだ。ウエルチ国の女王モモは我が王・カシスと仲が良くてな。もしもの時のために話しを聞いていたのだ。我が王はお前も存じているように賢明な王だ。国内における事件は一通り目を通していている。そこでナティアのことが目に入り、我々を招集された、というわけだ」

「なるほど、国王様が直々にご命令くださったんだ。それでようやく事情が分かったよ」

クリスタがホッとした顔を見せる。

「ん？ もう分かったのか。大したもんだな」

ロスバツハーがバカにする。

「ああ、分かった。もうそれだけ分かれば十分だよ。で、おっさんたちはこれからどうするの？」

クリスタはフォンドールに向かって問う。コルディア教徒である彼はクリスタの不遜な物言いを許容した。

「我々はこれからエデンに向かう。恐らくそれから彼女を護衛しながらウエルチ国に行くだろうな」

それを聞いて、クリスタがフォンドールの前まで近寄る。

そして、地面に膝を突き、こう言った。

笑い出したのはフォンドールだった。

お腹を抱えて、地面に転げながら笑っている。

「なんだよ、そんなに笑わなくても……」

それをきっかけに皆が笑い出した。

「あはは……うふふ」

「きゃっははははあ」

「ふっ、ふふふふ」

あからさまに笑われて、クリスタは顔を真っ赤にしてしまう。そんな彼の手を、ナティアが取った。

「クリスタッ、ありがとう。私、嬉しいよ」

「……あ、ああ」

照れすぎて声が上手く出せない。

「それに、クリスタなら絶対に強くなれるよ。ヴァームも言ったよ。汝の道を信じ、それを広げ、皆のためにも与えるものは真に強きものだ、って。クリスタも自分を信じて頑張れば、きっと叶うって」

ポン、と背中を叩く。

クリスタはその心に勇気付けられた気がした。

「そうだな、ありがとうナティア。……それにしてもさすが神様のタマゴだな。ヴァームから直接聞いたみたいに説話が出てくるんだな」

「え？ あー、それは？？」

ナティアの言葉を遮るようにして、フォンドールがクリスタに声を掛ける。

「まあ良いだろう。ナティアの言う通りだ。強き心は何ものにも勝る。俺たちについてこい。その代わり、命の保証はしないぞ」

いつの間にか全員がクリスタを囲んで、頷いていた。

「はいっ！ よろしく願います」

クリスタは喜びで胸を一杯にしていた。



クリスタは、町を見下ろす小高い丘のてっぺんに立っていた。
隣にはナティアがいた。

そしてさらにその隣には、マルクトドラゴンの幼体・クーがぽよぽよと転がっている。

「おいで、クー」

ナティアが呼ぶと、クーは飛び跳ねて彼女の腕に収まった。そうしているとは赤ん坊のようだ。

クーはあれから、勇者一行によってあっさりと助けられた。ワイバーンが人に懐いていることに、彼らは何の疑問も口にしなかった。白くてふわふわと丸い形をしていて、その中にぽつんと切れ長の目に乗っている。口は見えず、尻尾は申し訳程度にちょこんと毛玉のようにしてついていた。

「あー！ ホントに可愛いじゃねえか」

リビタが悶えていた。どうやら可愛いものには目がないようだ。

「ナティア、抱かせてくれよう」

普段のハスキーボイスからは想像もつかないような甘い猫なで声が出てくる。

「ふふ、良いよ」

そう言ってリビタに預けようとする、クーの目がキッと大きく開き、いつもは見えない口が大きくがばつと広がる。

「あー！ ダメだよっ」

ナティアが制止しても時遅く、リビタの頭は喰われてしまった。

「きゃあああ！ リビタさんがっ」

「ぬおっ、スターエクスカリバーッ」

バリバリバリバリっ、フォンドールがヴィターゴを発動する。

「ま。」

『ま？』

皆がクーの口元を見た。

「まで。あたしは大丈夫だ。こんなに可愛いもんを、いじめんじやねえよ」

ヨダレまみれのリビタが顔を出す。クーはナティアに叱られて、ようやく口を元に戻した。

「は、ははは……ったく、人が感傷に浸ってるってのに」

クリスタがむくれていると、ロスバツハーが頭に手を乗せる。

「何を言ってるんです。あなたに感傷に浸っている暇などありませんよ。これから毎日地獄のブートキャンプが待ってるんですからね」

「え？ あ、そうなの？」

クリスタが振り向くと、ロスバツハーがニヤリと笑う。

「もちろん、あなたの師匠はこの私です。良いですか、これからは私のことは師匠とお呼びなさい。もちろん、手加減など期待しないで結構ですよ」

ありがたい言葉に涙が出てくる。

「うう……し、師匠……」

「なんです？」

「せめて体罰だけは勘弁を」

「何言ってるんです。私の体罰が平気になり、さらに反撃すらできるようにならなければ一人前とは言えませんよ。初っぱなから飛ばしていきますから覚悟しなさい」

非常に嬉しそうなロスバツハーを見て、ウトコが苦笑する。

フォンドールとリビタはどちらがクーを抱き上げるかで揉めていた。

見れば、地平線から朝日が昇ってくるところだった。

ここから南へ五十キロ行けば、エデンへと到着する。

だが、そこまでには深い森、渓谷などを通っていかなければならなかった。

ナティアはこれからのことを思うと、不安で仕方がなかった。半分は成り行きであるが、勇者一行が、そしてクリスタが護衛についでくれたのは嬉しかった。

特に、クリスタのような同年代の人間と一緒に旅ができるのは、彼女にとっては初めての喜びであった。

悩みもあり、目的までの果てしなさを考えると気が遠くなる。

だが、少なくとも退屈な旅にはならないで済みそうだ、とナティアは思う。

「クリスタッ」

ぴょんとロスバツハーとクリスタの間に割り込む。

「行きましよ」

そう言って手を差し伸べた。

そこには、あの時と同じ笑顔があった。

「ああ、ナティアは俺が守るんだからな」

「うんっ、頼りにしてるよ」

ナティアとクリスタの旅が、今、始まった。

6 《汝の道を信じ、それを広げ、皆のためにも与えるものは真に強きものだ》

ここまででホットミルク第一章が終わりとなります。

いよいよ旅に出た勇者一行とナティア、クリスタがどのような土地で、どのような冒険をするのか。

長い物語になるかと思いますが、お付き合いください。

1 《ウトコ1・ご機嫌うるわしゅう、我が君》

クリスタの故郷・セレスタンを出た勇者一行は、そこから南に五十キロ行った首都・エデンを目指していた。すでにセレスタンを出て丸一日が経っている。二十キロほど歩いたことになる。

ここは川にほど近い森の中で、しかし比較的整備の行き届いた道が伸びている。

小鳥のさえずり、川のせせらぎ、葉擦れの音??平和そのものだ。ここから先、川が段々と大きくなり、溪谷を通り抜ければエデンへと到着する。

エデンにはジャネフ国王が居り、そこでウエルチ国への入国許可と、女王への謁見許可をもらうのだ。

「ということは、これからの流れとしてはエデン↓ウエルチ国↓女王に謁見↓ナティアを渡す、って流れで良いのか?」

クリスタの問いかけに、フォンドルが答える。

「概ねそうなるが、それだけでは済まんだろうな。ナティアを狙う組織がいることも分かったのだし、少なくとも彼女の安全が確保されるまでは付き添わなければなるまい」

その言葉に、ウトコが口を出す。

「それに、ナティアさんは神様のタマゴであるわけですね。わざわざジャネフに来たからにはタマゴから本当の神様になるための修行?のようなものをしたかったのではありませんこと?」

視線はナティアに向けられていた。

「あー、うん。その通りなんだけど」

「それってどんなこと?」

クリスタが催促すると、ナティアはロスバツハーを見る。まるで彼に許可を求めているかのようにだった。

「良いですよ?」

どうやら許可を得たようだった。

「えっと、鍵を探しに来たの」

「鍵？」

「そこからは私が話しましょう。ナティアは星の鎖です。鎖を解放するには鍵が必要となります。この世界のどこかにあるという鍵を、彼女は探しているのです。そして、それこそが彼女の目的……ですよね？」

ロスバツハーが今更のようにナティアに確認する。

ナティアが頷くと、彼は満足そうに笑顔を見せた。

クリスタはなぜだか納得が行かなかった。ナティアとロスバツハーは何かを隠している。それが何なのか聞こうとしても、強制的に排除されてしまう。

フォンドールやウトコ、そしてリビタはそれが気にならない、もしくは知っていて黙っているようだ。つまり、このことが気になっているのはクリスタだけ、ということになる。

あまりにも多勢に無勢だった。

「まあ良いよ。どうせいづれ分かるんだろうし」

「どうしたの？ クリスタ」

「んにゃ、こっちの話し。それにしてもさ、大変だよな。この広い世界から鍵を探すのって」

「そうね、だからこそ神様になる修行なんでしょうけど」

「ということは、もしかしたらウェルチに帰ったあともまた旅に出るのか？」

「え？ あー、えーっと、そうなるわね」

「ジャンプだけじゃなく、ウェルチもヴィタモントも？」

「ええ。鍵が見つかるまでは」

「俺もついて行って良いのか？」

「えーと、それは……」

そこでナティアがロスバツハーを見る。

「ん？ もちろんですよ。もしかしたら一生かかるかもしれないけど、それでも良ければ」

いきなり怖いことを言う。

「一生かかっても見つからないってこともあるのかな？」

クリスタの問いに、ナティアが眉をしかめる。

「うー、想像したこと無かったよ。そうだねえ、いつ見つかるか、なんて保証無いもんね……………それでも、クリスタと一緒に探してくれるの？」

上目遣いに問われて、クリスタは頬を赤らめた。

「あ、当たり前だろ！　それが俺の選んだ道なんだからっ」

ガッツポーズをしていると、一番前を歩いていたフォンドールが手を広げた。

「ん？　どうした、おっさん」

「静かに。お喋りは終わりだ」

背中の剣に手を掛ける。リビタがりボルバーを抜いた。ウトコはクリスタとナティアを背にして、星の力で守る準備をしている。ロスバッハーが周囲を観察し、状況を把握した。

森の木々が微かに音を立てている。気が付けば先程から鳥たちの鳴き声が聞こえない。

そして、ナティアの胸に抱かれたクーが、威嚇を始める。

「うううううう」

「クー、静かにして」

その口を押さえるが、今度は小さな尻尾がピコピコとひっきりなしに動いた。

「クリスタ。最初の試験です」

「はいっ」

「自分を犠牲にしても、ナティアを守りなさい」

「う、わ、わかった」

「返事は？」

「はいっ」

言われて、クリスタはナティアの手を握る。彼女は少し身じろぎしたが、彼の手が汗ばんでいることに気付くと、むしろ身を寄せた。

「クー、私たちを守ってね」

「くうん」

ウトコがアクエリアスで二人を水に包んだ。これで少しは武器と星の力に耐性が出る。その三人を、フォンドールとリビタが挟んで守る。

「さて、動きがありませんね」

ロスバツハーが一人、囿として歩いた。

「危ない、師匠！」

クリスタが飛び出そうとするのを、リビタが止める。

「ばーか、あいつが危ないわけねえだろ？ 微笑みの死神、って呼ばれてんだぞ」

見ると、彼は手に何かを持っていた。小さな、弓のようなものだった。

「弓？ スリング？」

クリスタが首を傾げた時、樹上から何かが飛び出した。

「やああああああ！」

それは人間で、棒のようなものを持っていた。ロスバツハーに殴りかかろうとすると、彼は慌てる様子もなく、その手に持った何かに玉をつがえた。

「デススリンガーを味わいなさい」

笑顔のまま、その玉を撃ち放つ。

玉はさしたる勢いもなく、しかし空中から襲いかかる敵に簡単に当たる。

ポフッ。

それが弾けると、中から粉のようなものが飛び出す。粉は敵の顔を包み込んでいった。

「フォンドール」

ロスバツハーが呼ぶと、フォンドールが彼の隣に駆けってくる。敵は地面に着地したが、そのまま動かないでいる。

剣を構えるフォンドールを、ロスバツハーが制した。

「どうです？ 胡椒弾の味は」

言った瞬間、大きくくしゃみが聞こえた。

「はーっくしゅん！」

敵は鼻を押さえ、何度も何度もくしゃみをする。ロスバツハーが合図をすると、フォンドールがあっさりとその敵を捕らえてしまった。

「なっ？ あいつは下手したらフォンドールより危険だ」

リビタが警戒を解いて、敵に近付いていく。ウトコはアクエリアスを解除したが、ナティアとクリスタからは離れずにいた。

「クリスタ、まだこのお方の回復まで時間がかかりそうですから、その間に教えておきましょう」

言われて、クリスタがロスバツハーを見る。

「これはデススリンガーと言います。スリング、って知ってますか？」

「はい、一番簡単なものはY字になった木の棒にゴムを張って、その弾力で木の実や石を飛ばすものです」

そう言いながら指でVサインを作り、ゴムを引っ張る真似をする。「そうです。そういったものと異なるのは、これが機械式に弾を撃ち出すようにできている点と、撃ち出す弾が星具の一種である、という点です」

そう言われて見せられると、デススリンガーは腕に連結して使用するものようだ。ゴムで打ち出すというより、機械式に引き込んだ弾倉を勢いよく打ち出すように作られている。その弾倉がカートリッジ式になっていて、様々な弾に対応できる、ということのようだ。

「なるほど。これなら力が無くても良いし、正確に打ち出せる」

「その通り。私たち勇者はこのように自分たちに合った武器を保持します。あなたもいずれ、このような武器を持つことになります。だからまずは自分の性質を把握することですよ」

と、ロスバツハーが講義を続けていると、フォンドールが呼んだ。

「おい、お前はどこの誰だ。なぜ俺たちを狙った」

どうやらくしゃみから立ち直った男を尋問しているようだ。

「行きましょう」

「はい」

男は、項垂れたまま声を出さない。

口を真一文字に結んで、決して話すまいとの決意を表しているようだった。

「ふん、フォンドール、あたしに任せな」

リビタが前に出る。クリスタはナティアを背にして、それを見ていた。

「おい、これが見えるか」

男の前に突きつけたのはマルチリボルバーだった。男は明らかに銃を見たあと、目を背けた。

「こいつは、特殊な銃だな。ほれ」

木の枝に向かって撃ち放つと、パン、と弾けた。その跡に静電気が起きたようなパチパチとした音が弾ける。

「星の力を込めて撃つことができる。で、ここにもう一つ同じ弾丸がある」

そう言いながら、リボルバーの六つの弾倉から全ての弾を抜いた。そして、先程のヴィターゴの一弾だけを詰める。クルクルと無造作に弾倉を回転させると、それを男に突きつけた。

「さて、もう分かっただろ？」

楽しそうに笑う。

「リビタ……？」

クリスタが声を掛けると、リビタが振り向いた。

「いいか、よく見とけ。大抵のヤツはこれで堕ちる」

言ってから向き直る。男は目を閉じ、何か覚悟を決めたように口を噤んだ。

「ほお、良い度胸だ」

そう言って、リビタがあっさりと引き金を引く。

カチリ。弾は出てこない。

「良かったな、不発だ」

男がホッと息をつく。そして、気が付いたようにまた口を結んだ。
「まだか？ もう一発いつとくか」

カチリ。まだ弾は出てこなかった。

「ぷはっ……はあはあ」

男が大きく息をつく。汗が滝のように流れ、目の焦点が合っていない。

「どうだ？ もう一度聞こうか。お前は誰だ？」

男がかぶりを振った。

「じゃあもう一発だ」

もはやリビタに躊躇など無かった。さらりと一発引き金を引くと、またカチリ、と音がする。

「もう三発目だぞ。次は出るかもな」

にたりと笑うリビタに、男の口元が震える。もう心が折れそうなのが分かる。

カチリ。

「ぎゃあああああ」

リビタは予告も無しに引き金を引いた。男が絶叫を上げる。一瞬、弾が出たのかとクリスタは思ったが、そうではなかった。男が堕ちた瞬間だった。

「わかった、言います。言わせてください」

「よし、言え」

「私は近くの村に住んでいるただの農夫です。お金が無くて強盗の真似事をしました。申し訳ありません！」

それを聞くと、ふん、と一瞥してリビタが立ち上がった。

「ロスバツハー、そいつ、まだ何か隠してんぞ」

「ほお、それでは今度は私の拷問術でも試してみますか？」

二人揃って薄気味悪く笑うと、男は震え上がって暴れた。

「いやだっ、まだ死にたくないっ、た、助けてくれえ」

「じゃあ話すか？」

「は、話します。話すので、もう止めてください！」

男はフォンドールに手首を縛られ、彼が縄を手にする事になった。

「なありビタ」

クリスタは一つだけ疑問があつてリビタを呼び止めた。

「なんだ？」

「本当に弾が出たらどうするつもりだったんだ？」

リビタが苦笑する。

「ばーか、テメエは本当にモノをしらねえな。リボルバーのどの弾倉からどの弾が出るくらい、すぐに分かるに決まってるだろ」

「てことは、最初から？」

「ああ、一番最後に弾が出るようにしてあつたんだよ。そこまで我慢できるヤツあいねえ」

クスクスクスと笑いながらウトコの横に歩いていく。ウトコはこんな光景は慣れているのか談笑し合っていた。

「……なんか、勇者って言葉の響きと、行動が違うね」

いつの間にか隣に来ていたナティアが呟いた。

「……ああ、でも、傷つけてはいない……」

少し葛藤があつたが、結果的に誰も傷つかずに解決できそうだった。

これも、やり方の一つなのか。クリスタは考え込んでしまった。



男はカントンと名乗った。

近くの村の農夫であることは間違いないようだった。

彼は勇者一行を村に連れて行き、ある家へと案内した。

「……なんか変だな」

クリスタはすぐに異変に気付く。戸締まりは嚴重に行われ、部屋

も暗い。今更だが、ここに入る時も周囲を見回して誰にも見つからないようにしていた。

「まさか……はめられた？」

クリスタの眩きは、ロスバツハーに届いたようだった。

「そうですね。しかし、何も心配することはありませんよ」

すでにフォンドールもリビタも戦闘態勢に入っていた。言い方は悪いが、人質もいるのだ。

「あら……夢見の鏡が……」

ウトコが懷から鏡を取り出した。それはBAでクリスタたちが見たものと同じ種類の星具だった。

「確か……深層意識を増幅して人と人を繋ぐ、星具……」

「あら、カシス王ですわ」

ウトコが声を上げると、鏡から声がした。

「おお、ウトコか。元気にしておるか？」

「はい、ご機嫌うるわしゅう、我が君」

「何よりだ。さて、お前たちについてを頼まねばならなくなった」

「なんででしょう？」

「ある村と連絡がつかなくなった。エデンから北に三十キロほど行ったところにあるヴィシー村だ。おまけにその辺りで盗賊が現れたという話しも聞く。真偽のほどは分からんが、近くを通るようであるから、ついでに探ってきてもらえまいか」

「了解しましたわ。程なく詳細を報告できると思います」

そう言うのと、ウトコは鏡を仕舞った。そして、カントンを見つめる。

「我らが王も心配されてますわよ？」

ウトコが愁いを帯びた目で見つめると、カントンが声を出さずに涙を流していた。

フォンドールがカントンの肩に手を置く。

「我は勇者フォンドールだ。きっとお主の力になれると思うぞ」

力強い言葉に、カントンが何度も頷く。安心したのか、彼は程な

くへたり込んでしまった。

「さて、話してもらおうか」

「それは私から話そう」

奥から声が響く。やがて出てきたのは初老の男だった。

「村長！」

カントンが男をそう呼ぶ。村長と呼ばれた男はフォンドールたちに座るように促した。

「事の発端は二ヶ月ほど前に遡る。ギネス・コープのカルヴァドスと名乗る男がワイバーンに乗って現れた」

ガタツとナティアが音を立てて立ち上がる。ウトコがその肩をつかんで座らせた。

「黙って聞きましょう？」

「……はい」

ナティアは仕方なしに頷いた。

「良いかな？ カルヴァドスは龍を脅しに使い、我らにその食料の全てを差し出すように言ってきた。もちろん、この村にはBAも無い、自警団ではワイバーンに敵うわけがない。私たちには選択肢は残されていないかった。さらにカルヴァドスは定期的にここに訪れ、BAに通報されないように手下を置いていった。あなた方は見つからないように案内したが、通常であればすぐにその手下に報告が行くようになっていく。私たちは盗賊でも何でもやって稼いでくるように強制された。おそらく、彼らは私たちが盗賊になりきれないことくらい分かっていたのだろう。そうやって楽しんでいるのだ。支配すること」

村長は悔しそうに唇を噛んだ。そこにカントンも寄り添う。

フォンドールは顎を撫で、何事か思索しているようだった。

ロスバツハーは特に興味なさそうに無表情を貫いている。

リビタは舌なめずりをしていた。おそらく、今から暴れられることに期待しているのだろう。

ナティアは早くカルヴァドスのことを確かめたいようだった。だ

が、その手をウトコが握っている。焦らないで、そう語っているかのようにだった。

クリスタは勇者たちがどのような判断を下すのか、一挙手一投足を見逃すまいと身を乗り出していた。

「話は分かった。ちよいと我らの仕事にも関わる内容のようだな、本腰を入れて対応させてもらう」

フォンドールが決意したかのように話すと、村長とカントンの表情がパツと明るくなった。

「しかしだ。無闇に手下を倒しても解決にはなるまい。こうなった以上はB Aが関わらざるを得ない。それに、ちよつとした手順も必要だ。数日、待ってもらえないか。悪いようにはしない。それまで今まで通りに暮らしてもらいたいのだが……」

村長は頷いた。それだけでなくその間の食事や身の安全も保証してくれた。

勇者一行六人は、村長宅の近くにある廃屋を与えられ、そこでしばらくを過ごすこととなったのである。

2 《ウトコ2・あなたが隣人と手を結ぶならば、その隣人の隣に神はいます》

カントンはドアをノックした。

「入れ……何用だ？」

スルジーヴァが低く声を立てる。

「はい……実は、村の近くで怪しい女を見つけました」

「ふむ……連れてこい」

カントンは恐る恐るスルジーヴァに近付き、その背後から一人の女を差し出す。

「……シスターか」

「はい」

シスターは怯えた様子で上目遣いにスルジーヴァを見た。

「あの……乱暴はしないでください……わたくしは布教のためにこの地を訪れております。決して怪しいものではありませんの」

スルジーヴァの眼光が鋭くなる。値踏みをするようにシスターを見た。

「どこに行くつもりだったのだ？」

「セレストアンまで」

「ウェルチからはだいぶ離れておるぞ」

彼女は一瞬、俯いた。何か訳がありそうな表情で、スルジーヴァを見、それからためらいがちに首を振る。

「なんだ？ 訳ありか？」

それに気付いたスルジーヴァがニヤリと笑みを浮かべながら問い質した。

シスターはさらに表情を硬くして、体を震わせる。

「言わなければここから先を通すわけにはいかんな」

意地悪く笑うスルジーヴァを、今度は強く睨み付けた。

「ヒドいっ……ですわ」

ポロリ、と涙をひとしずく零す。カントンはそれを見て慌てたよ

うに「で、では失礼します」と部屋を出た。

「あ、待って……」

シスターはさすがのようにドアを見て、しかし置いて行かれたことを知ると床に座り込んだ。

「わたくしが……何を……したというのです？」

「タイミングが悪かったな、今は非常事態というわけだ。すんなりと通すわけにはいかないのだよ」

椅子から立ち上がったスルジーヴァは彼女の側に屈み込んだ。

彼の椅子の左右には女が二人付いており、彼女らはシスターを心配そうに見ていた。

「ふむ……なかなか良い容姿をしておる。シスターにしておくのは勿体ないな。どうだ？ どうせなら私の情婦とならんか。不自由はさせんぞ」

顎を引き上げられ、目と目が合う。シスターは涙をさらに流した。

「って、この男もクソやろうだけど、ウトコもウトコだよな。何だよ、あの演技」

クリスタは不満をぶちまけた。

敵の屋敷内での様子は、ウトコの胸にぶら下がっている小さな夢見の鏡で丸見え丸聞こえだった。

あの後、フォンドールの提案で、まずは敵の動向をしろということになっていた。できれば敵の組織がある程度分かればなお良い。では、誰がその潜入捜査をするか、というところで手を挙げたのがウトコだった。

「まあでも仕方ないですよ。このメンバーを見れば分かるでしょう？ 私やフォンドールでは明らかに怪しまれるでしょうし、リビタはこういう性格です。下手したら我慢できないであっさりと撃って

しまうかもしれない。だからといってまだ未熟なクリスタや、ましてやナティアに任せるわけにも行かない。本人が志願するにせよしないにせよ、私たちに選択の余地はなかったんですよ」

ロスバツハーの説明は実に的確だった。そう、彼らに選ぶ余地など何もなかったのだ。

「それに、ウトコはああ見えてもウェルチ国では一位二位を争うシスターです。下手したら改心させてしまうかもしれませんよ」

最後の言葉は冗談にしても、ウトコならそうしてしまうかもしれないという期待感があった。その証拠に、鏡の先ではさっそく交渉が始まっていたのである。

「あなた様は一体？ この村の方では無いようですが……それに、領主でも、長でも無い……」

スルジーヴァはウトコを抱き寄せる。

「別にどうということはない。この村は私の支配下にある。それだけが分かれば良いであろう？」

ウトコは身をよじった。

「いいえ、どこの誰とも分からない方のものに、わたくしはなるわけにはいかないのですわ」

「おいおい、良いのかよ。このままだと危ないんじゃないの？」

クリスタが一人でヤキモキしている。ナティアはそんなクリスタの手をジッと握っていた。

「まあまあ、見てろよ。そんじょそこの女とは、ウトコは違うぜ」
リビタが舌なめずりをした。

「ふん、まあ良い。教えてやろう。私はギネス・コープの幹部・カルヴァドスに仕えるスルジーヴァ。世界征服の足がかりとしてこの村の統治を任されている」

「世界……征服？」

「そうだ。我らがギネス・コープは神を手中に収め、神の意向をもつて世界を治めんとしておるのだ」

「そんなことが……」

「できるのだよ。神はこの世界に現存する。それを手中にし、神の手によって再び世界を創造するのだ」

ウトコの表情が曇る。男は自分の考えに酔っていた。その目には狂気が宿り、とても話を聞くような意志は見いだせなかった。

それでも、ウトコは声を発する。

「神はいつでも隣にいます。あなたが隣人と手を結ぶならば、その隣人の隣に神はいます」

「ふん、説教か？ それは意味をなさない。なぜなら、我らが意志こそが神の意志なのだから。極論すれば、我らこそが神の代理なのだ」

「……何なんだよ、こいつ。狂ってやがる」

吐き捨てるクリスタの手を、ナティアがさらに強く握った。そして、涙を流す。

「ヒドい……神は誰かのために働くんじゃない、働くものと共にいるのに……」

「つまり、神は一人のモノではない、ってことですね。ナティア」
ロスバツハーの解釈に、ナティアが頷く。現存する神のタマゴとして、ナティアは一人の人間の傲慢を悲しんでいた。

「……人は誰しも神の姿を見れるわけではない、か」
フォンドールが目を伏せた。だが、誰も立とうとはしなかった。
ただジッと、夢見の鏡を見つめ続ける。

ウトコはスルジーヴァの頬を平手で打った。
小気味の良い音が部屋の中に響く。

突然のことに、彼は驚いたようだった。

「ヒドい人ですわね。わたくし、あなたのように神を冒瀆する人間
に初めてお会いしましたわ」

すると、スルジーヴァはすぐにウトコの手首を強く握った。

「冒瀆で結構。神を手中にしさえすれば、我らが神になれるのだからな」

そう言って、ウトコの頬を打つ。

体勢を崩し、ウトコは地面に倒れ伏した。

同時に、胸元の夢見の鏡が割れた。欠片が散らばり、彼女は慌てて拾い集めた。

その上で頬を押さえ、スルジーヴァを睨み付ける。

「ふん、誰か居らんか！」

呼ばれて、カントンが姿を現す。

「お呼びで」

「こいつを閉じこめておけ」

カントンがウトコを見る。彼女は微かに頷いた。

「はっ、分かりました」

彼はウトコを後ろ手に縛ると、綱を持って引き去っていった。

スルジーヴァが一人残る。椅子に座り直した彼は、頬杖について溜息を漏らした。

「あの……スルジーヴァ様……」

横に侍る女の一人が声を掛けると、スルジーヴァはそちらを見る

こともなしに手を振りかざした。手の平は女の頬に当たり、彼女は「うっ」と叫んで地面に突っ伏した。

ウトコはスルジューヴァのいる屋敷の裏にある小屋に放り込まれ、鍵をつけられた。

「すいませんが、少し我慢を。食事はきちんと運びますので」

「良いんですのよ、お氣になさらずに。それよりも、手筈通りに」カントンが首を縦に振る。

その場を離れたカントンは、フォンドールたちの待機する家につそりと入っていった。

一同は彼の帰りを待っていた。

「お帰りなさい、カントンさん。どうぞ」

ナティアがタオルを持って迎える。

彼はそれを受け取り、顔を拭いた後に一同を見渡した。

「では、状況を改めてお話しします」

フォンドール、ロスバツハー、クリスタ、ナティアが席に着く。リビタだけは窓から外を眺めながら、銃の手入れをしていた。

「スルジューヴァは一人ではありません。彼の背後には常にワイバーンが一体と二十人からなる部隊がいます。ここ……」

そういつてカントンは村の配置図を模してテーブル上にコインを置く。中央にスルジューヴァの屋敷、その後方にウトコが捕らえられた小屋があった。そこを囲むようにして五つの小屋があり、そこに四人ずつが待機しているという。

四人はチームになって巡回をしている。この村に入る時にフォンドールたちが見つからなかったのは、カントンの案内した方角が彼らの死角になっている上、巡回の交代時期を突いたからだだった。

「敵はヴィタモント国の出身であるのか、銃を大量に持っています。私たちが抵抗できないのはそのためです。食料のほとんどはスルジ

ーヴアの屋敷に集められ、私たちはそこから配給という形でわずかな食料を得るか、盗賊に成り果て、誰かから食料を奪うしかありません」

ただし、この村から外に出るには家族を人質として差し出さなければならぬのだ。

そのため、BAに通報もできず、逃げることもできない。所定の時間内に戻って来なければ、家族が殺されてしまう。

「一番やっかいなのは人質だな。村から出るまでもなく、常に数人が屋敷に置かれているのだろう？」

フォンドールが唸る。先程のウトコからの映像にも、二人の女性が出てきていた。もし無闇に攻め込めば、彼らは真っ先に彼女らを入質に取り、そして危険に晒すだろう。

「今の所、できることは限られているな」

クリスタはいくつか思い浮かべてみた。一つはBAと密かに連絡を取り、この村を制圧するための人員を配置すること。一つは闇に乗じて小屋を一つずつ襲うこと。しかしどれも危険を冒すことには違いない。

働かない自分の頭に、クリスタは苛立ちを隠しきれなかった。

その様子をロスバツハーが見て笑った。

「クリスタ、馬鹿は余計なことを考えるもんじゃありませんよ」

「うっ、何で分かったんだ？」

「クリスタッ」

「あ……と。分かったんですか？」

「よろしい。あなたの表情を見てれば分かりますよ。良いですか。人には得意不得意が必ずあります。不得意なことを克服することはよいことです。しかし、そうしたからといって人間完璧になることなどできません。それよりもあなたの長所を伸ばすことに気を遣いなさい」

両手を覗き込んでみる。クリスタの得意なものと言えば、バスケットくらいなものだ。しかし、今ここでバスケットが役に立つとはとても思

えなかった。

「ふむ……例えば、リビタを見なさい。彼女は余計なことに気を遣わず、ただひたすら銃を磨くことに専念していますよ」

そして同時に、窓から外を注視している。つまり、リビタの役目は一瞬でも多くの安全を確保し、一瞬でも早い制圧のために全力を尽くすことなのだ。

「クリスタの良いところ、かあ」

ナティアが話しに割って入る。急に顔が近付いて、クリスタは思わず頬を赤らめてしまった。

「な、ななな何だよ」

「どうしたの？ 変だよ、クリスタ」

「ふふふ、まだまだ若いですね。それで、何か思いついたのですか、ナティア」

ナティアは顎に指を当てて思い起こしていた。まだクリスタと接した期間は短い、それでも思い浮かぶことはある。

「そういえば、クリスタって私を抱きかかえて町まで五キロくらい走ってたよね」

それは、カルヴァドスから逃げた、最初の時のことだった。ナティアの光増幅の力・ザバスがあったとはいえ、クリスタはワイバーンから逃げ切ったのだ。

「ああ、そう言われてみれば……ってことは、スピード、スタミナ？」

ロスバツハーが笑顔を見せる。

「ふむ、良いところに気が付きましたね。それとも一つありますよ」

スピード、スタミナ、と気付いた瞬間に、クリスタはチーム・ミニッツメイドのスカウト・エビアンという言葉を出していた。

『確かに技術だけなら君より上手い人間はたくさんいるだろう。しかし、あのスピード、判断力、そしてスタミナは君が随一だよ』

つまり、エビアンは正しくクリスタの資質を見抜いていたのだ。

「判断力、か」

「ふむ、思いの外、早く気付きましたね。その通りです。どんな窮地でも生き残ることのできる判断力、それがあなたの一番の長所なのですよ」

ロスバツハーはそれ以上、何も教えてくれなかった。自分で考える、ということらしい。

ずいぶんと退屈な時間が過ぎた。クリスタは自分の長所と、それをどう活かすかを考えていた。フォンドールはテーブルの上の模倣図を眺め、これからどう攻めるべきかを考えているようだった。ロスバツハーは何やら書き物をしている。手紙のようだった。

ナティアはリビタの隣に座り、窓から外を眺めていた。リビタは話しかけようとしなかったし、ナティアも特に聞きたいことはなかったようだ。

そうしてそれぞれがそれぞれの時間を過ごしていたため、部屋の中はお互いの息づかいさえ聞こえるほどに静かだった。

ウトコは時間のある内に、自分の手首を縛っている綱を緩めていた。カントンは多少軽く縛ってくれていたようだ。それほど苦勞することもなく、綱を緩めることができた。

彼女は二つの使命を帯びていた。一つはスルジーヴァからギネス・コープの情報を仕入れること。もう一つは人質の人数を確認し、できれば解放すること。

どのような方法にしろ、人質を解放してしまえば敵は気付くだろう。そうなれば、その時が戦闘開始の合図だった。

囚われの身でも、できることはある。

周囲に誰もいないことを確認すると、ウトコは夢見の鏡を取り出した。正確には夢見の鏡の欠片だ。

『誰か居るか』

鏡の向こうで、スルジーヴァは声を荒げていた。ウトコが挑発したお陰で、だいたいイラだっているようだった。

『はっ、ここに』

初めて見る顔だった。スルジーヴァの部下であろう。

「部下や弱いモノには威張りちらして……卑怯な方ですこと」

ウトコが呟く。

彼は部下を一通り叱責した後、命令を下した。

『良いか、巡回の範囲を広げるのだ。村人を使っても構わん。何ならカルヴァドス様にワイバーンの増援、ギネス様に人の増援、マルゴー様に武器の支援をお願いしても構わん。神はこの近辺にいるのだとギネス様は言われたのだ。実際にカルヴァドス様も遭遇しておられる。それによるとずいぶんと強力な勇者が護衛に付いているらしい。こちらでも手持ちの軍では足りんのだ。せめて手数だけでも増やさねば』

そう言って矢継ぎ早に言葉を発するスルジーヴァは焦っているように見えた。そして、怯えているようにも見えた。

部下は連絡を取るために屋敷を出たようだ。後にはスルジーヴァと人質の女性が二人、残っていた。

「ナティアちゃんの情報はどうやら伝わっているみたいね。でも、わたくしを見ても何の反応もなかったところを見ると、勇者の護衛に関しての情報は持っていない、と。悪くない情報ですわね」

ウトコはそれらの情報を紙に書き付けた。

「さらに言えば、ギネスというのが親玉かしら？ カルヴァドスはやっぱりワイバーンを多数従えている。それと、マルゴー？ 女性？ 武器の開発者かしら？ 少なくとも三人の幹部がいて、役割分担ができてみたい？」

はつきりとはしない情報も憶測を交えつつ、正確に書き記す。

「それにしても、ギネスってどうやってナティアちゃんの動向を知ったのかしら？」

疑問点は残るが、とりあえず記録だけをしておき、それ以上は考

えないことにした。

ひとまず、第一の目的はある程度達したようだった。できれば敵の所在地が分かれば嬉しかったのだが、とウトコは思うが、あまり事を長引かせても仕方がない。もう一つの目的が判明すれば、すぐにも行動に移すつもりだった。

そこに、人の気配がした。

「ウトコさん、私です。カントンです。食事を持ってきました」
言われてみれば、もうお昼を過ぎていた。ずいぶんと時間が経っていたのだ。

「ありがとうございます」

ウトコはそう言って盆を受け取った。同時に隠すようにして書き付けた紙を渡す。

「お願いしますわね」

「ええ、食器はその辺にまとめておいてください」

カントンは出て行った。ウトコは誰もいないことを確かめると、食器の裏に貼り付けられていた紙を取り出す。

ロスバツハーが先程書いていたものだ。

そこにはこう書かれていた。

『最大一日だけ待つ。できる限り情報を集め、敵を攪乱して欲しい』
ウトコの行動にもう一つ目的ができた。

そしてそれは布教者として最も得意とすることだった。

SS 《クリスタの修行》（前書き）

ショートショート、ということで大目に見てやってください、

SS 《クリスタの修行》

退屈だ。そう思っていたのは、ほんのわずかの間だった。

「クリスタ。ウトコがある程度の結果を出すまで暇なので、食糧を確保してきなさい」

そう言ったのは、クリスタの師匠であるロスバツハーだった。

「え〜〜と？　まずは餞別をもらおうか？」

ガスツ、とロスバツハーの拳が頬に入る。

「なるほど、命は惜しくない」と

「いえ、師匠、すいませんでした。できれば詳しく教えていただければ」

「詳しくも何も。私は単純な言葉を発しただけですよ。食糧を確保してきなさい」

あゝ、これ以上言っても無駄だな、とクリスタは諦めた。まだたかが数日の付き合いだが、ロスバツハーの理不尽さには慣れていた。クリスタはナティアを見た。当然ながら、ロスバツハーは付いてきてくれないし、フォンドールは全体の動きを監視することに全力を費やしていた。リビタにいたっては話すまでもない。

ただし、直接ナティアに付いてきてくれ、と言うのは気が引けた。何というか、負ける気がしたのだ。

残念ながら、ナティアはそのサイレントサインを理解するには経験が足りなさすぎた。

クリスタは一人、森へと入ることになる。

「はふ〜、で、俺はどうすれば良いんだ？」

独り、溜息を吐く彼の背中に誰かの息がかかる。

「んあ？」

クリスタは最初、ナティアが追いかけてきてくれたのだと思った。だがしかし、そこにいたのは毛むくじらのワイバーン、クーだけだった。

「クー、どうしたんだ？」

「くうん」

マルクトドラゴンのワイバーンは、人懐こい声を出す。

正直、この数話、クーの存在が忘れられていた。村にはドラゴンであるという理由で入れず、かと言って何か役目があるかと言えば、何もない状態であった。

彼はただひたすら森の中で息を潜め、仲間が出てくるのを待つしかなかったのだ・

「ひよつとして、寂しかった、のか？」

「くうん、くうん」

想像して欲しい。彼はナティアと旅に出たは良いが、カルヴァドスに追いかけられ、崖の下に落ちていた。やっと引き上げられたは良いが、ろくに活躍の機会も与えられず、ただひたすら待つしかなかったのだ。

「ふーむ、そうかあ、寂しかったな、クー」

クリスタは同情した。

そして、それにクーは答えた。

「くうん」

なるほど、彼は正直に答えたかもしれない。しかし、その解釈はクリスタの考え次第だった。

「よっしゃ、じゃあ、思う存分、狩りをして良いんだぞ」

クリスタの頭の中では、ドラゴンⅡ狩り、となっていた。

そして、クーはそれを遊びの一環だと思ってしまった。

「行け、クー！」

クリスタが叫ぶと、クーは全力で駆けめぐる。幸いそこは小動物の宝庫だった。ウサギ、鹿、野鳥、などなど、食料に困ることはなかった。

アングヤー！ おりゃー！ くおおおおお！ どりゃー！

叫び声は木霊し、多少なりとも獲物が彼らの手に入った。

「よっしゃ！ クー、良くやったな」

褒められたクーは喜んで翼を羽ばたかせる。

「師匠！ 見てくれよ！ この獲物の数！」

そうやって床に置いたのはウサギの惨殺体、羽をむしられた野鳥、喰いちらかされた鹿などの動物だった。

「……………」

ロスバツハーは無言でクリスタを殴った。

そして、ついでにクーもナティアに殴られた。

リビタにより、二人は反省の印として正座十時間を科せられ、そんな骨格をしていないのにマルクトドラゴンのクーは関節が話的に一つ増え、正座が可能な体になってしまった。

「うー、なんでだよお」

クリスタは嘆くが、彼の過ちを彼自身が気付くことはなかった。

なお、クーはクリスタの命令で残酷行為を行ったとして、座学五時間で許してもらえた。

などなど、クリスタの馬鹿行為を挟みつつも、事態は収拾へと向かう。

3 《ウトコ3・あらあらあらあら》

ウトコはまず、窓から声を出してみた。

「すいません、誰か居られませんか？」

細い体からは考えられないくらいに大きな声だった。透き通った響きは、スルジーヴァの屋敷とその周辺にある手下の小屋に届く。

「誰か、お願いです。誰か！」

休むこと無しに、叫び続ける。しばらくしても誰も出てこない。戒厳令でも敷かれているのだろうか、それともこうした出来事に慣れているのか。

それでも声を上げ続けると、懷に忍ばせた夢見の鏡の欠片から声が聞こえてきた。

『何なんだ、あのシスターは』

スルジーヴァがカントンを呼んで叱りつけている。

『はあ、申し訳ありません』

意味も分からず、カントンが謝っている。

「あらあら、こらえ性のない大将ですこと」

ウトコはクスクスと笑って叫ぶのを止めた。それでもスルジーヴァは怒りが収まらないらしく、人質を平手で打った。

『ああっ』

頬を押さえ涙ぐむ少女を見て、ニヤリと笑う。そして、彼は一つの伝令を出した。

『外がうるさいのであれば、中も騒がしくすればよい。屋敷内の人質を全て集め、宴を開け』

ドアの外に控えていた部下が敬礼して去っていく。

ウトコは、今現在、スルジーヴァの部屋の様子が全て手に取るように分かっていた。鏡の欠片は素早く死角になる場所に複数配置してあった。また、上手くいなかった分については後からカントンが何かと理由をつけては位置を直していた。

ウトコは監禁されたのではない。最も安全な場所で敵を監視していたのだ。

「神よ……ヴァームよ……わたくしに勇気をお貸してください」

手を組み合わせ、ウトコは祈った。総仕上げの時間は迫っていた。鏡の向こうでは、着々と宴の準備が整いつつあった。人質は一人ずつ床に座らされている。全部で八人いた。

「思ったより多いですわね。小心者の大将さんはこの全てを把握できるともりだったんでしょか？」

首をひねって、少し、笑う。

その後大きく溜息を吐いた。

もう一度祈りに瞳を閉じる。

そして、口を開いた。

「神はおっしゃいました。手を繋ごう、と」

コルディア教の説話の一節だった。

「手を繋いだら、今度は目を見ましょう。目を見たならば、彼が彼女が何を考えているかを考えましょう。表情を見て、繋いだ手の力加減を感じ、瞳の動き、唇の動き、微妙な空気の移り変わりを感じましょう。もし、貴方が相手のことを心から想っていれば、相手も貴方のことを想ってくれます。全ての生命体は元々単一の物質なのです。何も恐れる必要はありません。貴方も、彼も彼女も、同じように感じ、思い、言葉にします。それでも恐れを抱いたならば、ヴァームの慈悲にすぎりましょう。神はコルディアの向こうから貴方を見ているのですから」

声は朗々として先程までの叫び声よりも透き通り、家々に響いていた。

「与え、受け取り、それを感謝する。感謝は感謝を呼び、再び誰かに与えるための糧になる。人は無償で物を与えることはありません。ですが、物質によってのみ人は喜びを感じるものではありません。愛と物質もある意味では等価になることができるのです。もしあなたが物質による豊かさを得ているのなら、それを誰かに与え、愛

による豊かさを得ましょう。そうして物質も、愛も循環するのです」
それが終わると、今度は賛美歌を歌い始める。

不思議と、彼女の声は段々と大きくなっていくようだった。
そして、しばらくすると変化が起きた。

あちこちの小屋から人が飛び出してきて、村の外に向けて駆けていく。

「うわああああ！ もう止めてくれ！」

「俺が、俺が悪かった」

「もう、こんなことは嫌だ！」

スルジーヴァの部下だった。

皆、一様に懺悔をしながら、泣きながら飛び出していく。

それを見たウトコは、夢見の鏡に目を移した。屋敷の中には声が届いていないようだった。それというのも、宴で使われている楽器の数々が彼女の声を遮断しているからだだった。

ウトコは頷いた。しばらく賛美歌と説話を続ける。しかしもう、誰もこの周囲には残っていないようで、一切の動きはなかった。

それを確認したウトコは声を出すのを止めた。

その瞬間、監禁小屋のドアが開く。

「ウトコさん、さあ、出てください」

カントンだった。

「ご苦労様でしたわ。わたくしの声、辛くなかったですか？」

「大丈夫でした……まあ、少し良心が痛みましたが」

「良かったですわ。声と言葉に乗せた星の力が、あなたの心を刺激するのでは、と思っていたものですから」

もはや、この村にスルジーヴァの屋敷以外に敵はいなかった。彼女の声は邪な心を増幅したのだ。

小屋を飛び出した二人の目に、フォンドールたちの姿が見えた。

「ご苦労様だったな、ウトコ」

「フォンドールさんも。さあ、仕上げとまいりましょう」

カントンとナティアは彼らから離れ、村人を一箇所に集めるため

に動いた。

フォンドールたちは隊列を組む。フォンドールとウトコは後方、リビタとクーが中盤、そしてクリスタとロスバツハーが前列となっていた。

宴が開かれている屋敷のドアをロスバツハーが開く。

「デススリンガー！」

腕の武器から飛び出したのは煙幕弾だった。破裂した弾は無害な煙を屋敷中に充満させる。

「クリスタ！」

ロスバツハーの声に弾かれるようにして、クリスタはゴーグルをかけ、飛び出した。

持ち前のスピードを活かして、人質を助け出すのだ。

「なんだ！ この煙は！」

中は大混乱となっていた。スルジーヴァは狼狽えて周りに当たり散らし、人質たちは恐怖で動けずにいる。それはクリスタにとって願ってもない状況だった。

クリスタが駆ける。手下たちはどうして良いか分からず、ただあちこちを駆けずり回っていた。

「おい、助けに来たぞ。この方向に走るんだ」

クリスタは一人一人に声をかけ、出口の場所を教えていた。突然の事ながら、助けるという言葉に人質たちは安堵し、出口に向けて走り出す。

あらかじめ人質が八人と聞かされ、その場所まで把握していたクリスタの行動は早かった。屋敷突入後、わずか一分の間に人質全員に声をかけた。

走り出した彼女らを、ウトコが誘導する。

「こちらですよ、急いでください」

何人かそれに気付いた敵がいれば、リビタとクーが阻止していた。ここではあくまで威嚇だけで、決して実弾は使わなかった。それでも混乱の中では十分に効果的だった。

「くそっ、何が起こってる。おい、一箇所に集まれ。銃を集めろ」
スルジーヴァの指示は的確だった。味方を集め、それ以外を銃撃するつもりだ。

そこでフォンドールが動いた。一直線にスルジーヴァに向かい、剣を振り上げる。

「ウトコ！ 賛美歌を」

その一方で、ウトコに歌うように命令する。

「了解、ですわ」

ウトコが歌い出すと、屋敷中の敵が？？スルジーヴァを除いて？
？跪いた。

リビタは一人ずつに睡眠弾を撃ち、眠らせる。

クリスタはその間に敵を縛っていった。

「お前ら、誰だ……ただのシスターじゃないな」

スルジーヴァが今更のように疑う。フォンドールが名乗りを上げた。

「勇者フォンドール、と言えば分かるか？」

「……くそっ、ワイバーン！」

スルジーヴァが指笛を吹くと、屋根を突き破ってワイバーンが降りてくる。その風圧で煙幕が吹き飛ばされた。

「あらあら、さすがに狂信者にはわたくしの歌も効き目無いのですわね」

ウトコはスルジーヴァに星の力を乗せた賛美歌が通用しないのを見て、残念そうに笑った。

「スルジーヴァ様！」

その時、外から敵が襲いかかってきた。ウトコの歌で逃げ出した者が正気を取り戻し、引き返してきたのだ。

「あらあらあら………」

「あらあらじゃねえよ、ウトコ！ 全然効きやしねえじゃねえか」
リビタが毒づく。ウトコは首を傾げて手をポンと打つ。

「そうでしたわ。洗脳……いいいえ、改宗が済む前に歌が聞こえな

くなくては効果が無くなるのでした」

「……お前なあ」

呆れるリビタに微笑むウトコ。その二人をロスバツハーが叱咤する。

「二人とも、言い争っている場合じゃありませんよ」

デススリンガーから破裂弾を打ち出すと、二人を背中に隠す。

「敵だ！ やっちまえ！」

ようやくギネス・コープ側も体勢を整えつつあった。銃を構え、三人を狙う。

「早撃ちであたしに挑もうってのかい？」

リビタはいち早く反応し、フォンドールのヴィターゴを込めた雷撃弾を撃ち放った。

一方でフォンドールはワイバーンと対峙していた。星の力を乗せた剣は、ワイバーンの鋭い爪と火花を散らす。

その間に、スルジーヴァは逃げ出していた。誰にも見つからないように、裏口から出て行く。

「くうん」

その足下に、クーが甘えるようにしてすり寄っていた。

「ん？ ワイバーンの幼体か？ こんなのも置いていたのか……」
彼が勘違いをしてクーを抱き上げるために屈み込んだ時、クーが

その巨大な口を開けてスルジーヴァを一口にする。

「ぐわっ」

情けなくもスルジーヴァは一口で戦闘不能となってしまった。

「良くやりました、クー。出番がなかった割には大将首を取りましたね」

ロスバツハーが褒めると、クーが目を細める。

「おい、こっちもあらかた片付いたぞ」

リビタが声を掛ける。見る限りでは敵の姿は無かった。

「後はワイバーンだけか」

全員がフォンドールを見た。彼の体は光り輝いていた。

「うおおおおお、スターアタック！」

フォンドールが叫ぶと、滑るようにしてワイバーンに突撃していく。

まるで彼自身が雷になったかのように、地響きを立ててぶつかる。ドン、フォンドールの輝きがワイバーンに乗り移った。火花と焦げ臭い匂いが辺りに立ち籠め、ワイバーンが断末魔の声を上げる。

「グウウウオオオ！」

丸焦げになって倒れたワイバーンに、元に戻ったフォンドールが手を合わせた。

「すまん、できれば殺生せずに済ませたかったが」

そう呟くフォンドールの隣に、ウトコが歩み寄る。

「まだ何とかなるかもしれませんわ」

ワイバーンの側に跪く。そして手を組み合わせ、祈った。

「悲しい命をこれ以上増やさないために……私と彼との間の全ての綻びが消えますように、プラセンタ」

ウトコの組んだ手から光が溢れ、丸い玉となった。

それはぼんやりと輝き、ゆっくりとワイバーンへと移っていく。

そして、ワイバーンの周りを、初めはゆっくりと、それから段々と早く回転していった。

まるで繭のように見える。揺籃の中でドラゴンは気持ちよさそうに眠っていた。

「時間はかかるかもしれませんが……大丈夫でしょう」

「助かった。後はアルギニンへと帰してやるだけだな」

「それは、B Aに頼みましょう。さあ、皆さんが待っていますわ。戻りましょう」

「そうですね。クー、口を開けてご覧なさい」

ロスバツハーに言われて、クーが大きく口を開ける。そこには気絶したスルジーヴァが唾液まみれとなっていた。

「ふむ、しばらくすれば話しくらいは聞けそうですね。頼みましたよ、リビタ」

「おう、任せとけ。こいつは何発目まで我慢できるかなあ、ふふふ」
リビタがニヤリと笑う。

そうして彼らはナティアとクリスタ、そして村の全員が避難していた場所まで戻った。

「皆さん、もう大丈夫です。これからすぐにBAを派遣してもらい、この村を保護の対象としてもらいます。あのならず者たちも連行してもらいます」

ロスバツハーの説明を聞き、村人たちが歓声を上げる。

「ありがとうございます。お陰さまで助かりました。村の全員を代表して、お礼申し上げます」

村長が何度もフォンドールの手を取り、頭を下げる。クリスタはその姿を見て、自分が誇らしく思えた。大して活躍できなかったとはいえ、自分も少しは役に立ったのだ。この戦闘での死者はゼロ、敵側はほとんどが負傷しているが、こちら側の負傷者はごくわずかだった。逃げる際に転んだり、煙で気分が悪くなった者が数名いただけだ。

これだけの規模の戦闘をしておきながら、この成果は十分だろう。

「良かったね、クリスタ」

ナティアが隣に来て話しかけてくる。

「ああ、本当に良かった」

「クリスタも頑張ったね」

ナティアがにこやかに顔を覗き込んでくる。

クリスタは恥ずかしくて顔を背けてしまった。

「あれ？ どうしたの？」

なおも表情を見ようと追いかけるナティアから、ついにはクリスタが逃げ出した時、クーがナティアの足に体を擦りつけてきた。

「あー、クー！ あなたも頑張ったよね、えらいえらい」

頭を撫でてやると目を瞑って喜んだ。

「ひとまず、一件落着、だね」

ナティアの言葉通り、ひとまずは収束したと言えよう。

翌日にはB Aから勇者と調査団が派遣され、事件の調査と犯人の確保、そして村の復興と今後の警備計画が話された。

村の人たちが行っていた盗賊まがいの行為は脅迫された上での出来事として、被害者への賠償を行うことで決着した。不幸中の幸いか、被害者は多くはなく、いずれも怪我が軽かった。

また一日が経ち、村はようやく表面上の落ち着きを取り戻していた。

その間、フオンドールたちは村長の家で歓待を受けていた。まだまだ食料などが少なく、支援物資に頼っている段階であったため、ご馳走がでることはなかった。しかしそれでも心安らげる時間が過ぎせたと言える。

その滞在中に、彼らの旅は、少し進展することになる。

4 《リビタ1・ようしよし、今度はもっと遠くまで投げるぞ》

いつの間にか、眠ってしまったようだ。

ナティアは机から顔を上げて周囲を見回した。

ふと気付くと、肩にブランケットがかけてあった。

「これ……」

目の前にはウトコがいた。一人静かに説話集を読んでいた。

「ウトコさんが？」

ナティアの声に、ウトコが視線を向ける。そして、微笑んだまま首を横に振った。

「リビタですわよ。でも、わたくしが教えたなんて言わないでくださいね」

「リビタさんが？　でも、どうして？」

「あの子はそういうのを嫌うんですの。親切や神を身近に感じるのとや子供を愛でることを」

そう言うウトコの表情は、しかし嫌悪のものではなかった。ナティアは不思議に感じてもう一度問いを投げかける。

「でも、このブランケットは、親切なんでしょう？」

ウトコはクスクスと声を漏らし、その後に唇に指を当てた。

「しーっ、そんなことを言っちゃいけませんわ。あの子ならきっとこう言いますわよ。『風邪なんかひかれると仕事が終わわなくて困るんだよ』ってね」

その光景を想像して、ナティアも笑った。確かに、そんなことを口にしようだ。

薄暗い部屋には、ナティアとウトコしかいなかった。

ナティアの頭の輪が、ぼんやりと光っている。

フォンドールはB Aから来た勇者たちを統率して、今後の防衛計画を指示している。クリスタはロスバツハーと一緒に修行に励んでいた。今日は食料調達も兼ねて森に猪を狩りに行っている。リビタ

はいつもふらふらしていて、どこに行っただのか分からない。しかし、クーがなぜかそんなリビタに懐いていて、この場所が安全だと見るや毎日彼女についてどこかに行ってきたは泥だらけになって帰ってきていた。もちろんクーは喋れないし、リビタも無用なことを語ろうとはしなかった。

ウトコは毎日説話集を読み、村人たちにコルディア教を説いて回っている。同時にウェルチの文化や新しい農法なども伝達するものだから村人たちはこのままだと全員が教化されそうな勢いだ。

彼らがそうやって忙しく立ち回っている間、彼女は毎日をぼんやりと過ごしていた。ここならば確かに襲われる心配はないし、もしそうなくても身の危険を感じる必要はないだろう。何しろ二十人からの勇者がここに集まっているのだ。それに村人たちもナティアを助けるためになら力を貸してくれるだろう。

だが、だからと言ってここでのんびりとしているわけにもいかないのだ。

「はふー、退屈」

ナティアが机に突っ伏して、溜息を吐く。頭の輪が揺れた。

「あらあら。どうしたの？」

「うん、いつになったら旅に出られるんだろう、って」

ウトコは少しだけ困ったような顔をした。

「ごめんなさいね、あと数日かかるみたい。フォンドールが言うには、敵の構成と目的もある程度分かったことだし、無闇に動き回るよりも少しは探った方が良い、って」

「それは分かるんだけど……」

上目遣いにウトコを見る。

「そうねえ、ナティアちゃんには目的があるんだものね」

「ああ、いやー、それは急ぐ訳じゃないんだけど??」

「ううん、分かるわよ。わたくしだって、そう思うもの、きつと」

ナティアは返事をしなかった。

少しだけ沈黙が場を支配したあと、急にドアが開く。

「おー！ ナティア！ 今日も元気だったか？」

クリスタが場の空気を読みもしないで元気良く飛び込んでくる。

「あ、うん、まあまあかな」

クリスタは遠慮がちなナティアの背中をバン、と叩く。

「なんだよ、元気ないな。何なら俺と一緒に明日から修行するかな？」

「いた〜…もう、止めてよね、これでもか弱いんだから」

「何言ってるんだ。そんなこっちゃ、これからの旅でヘタレちまうぞ」

そう言われて、ナティアはクリスタの顔をまじまじと見た。急に見つめられて、クリスタは顔を赤らめる。

「な、なんだよ」

返事はない。

ナティアは目を逸らしはしなかった。ただジッとクリスタを見て、そしてニツコリと顔中に笑みを咲かせる。

「クリスタの言う通りだね！」

ナティアはクリスタの手を取った。ブンブンと振り回す。

「ありがとう、クリスタ。私、ちょっと勘違いしていた。やることなければ作れば良いんだよね。これからの旅のために」

「お、おお」

生返事するクリスタを他所に、ナティアはドアから外に飛び出す。後にはクリスタと、今までの光景をただ眺めていたウトコが残された。

クリスタは場が持たず、ウトコに問う。

「何なんだ、あれは？」

ウトコは堪えきれない笑いを抑えず、体を折って楽しんでた。

「うふふ、あはは、あなたたちって本当におかしいんですのね」

ウトコにはよく分かった。ナティアの考えたことが。

逆に、クリスタには分かった。彼はナティアのことを何も知らなかった。

今はただ、ぽかんと見ているしかできなかったのだ。

「ロスバツハーさん！」

ナティアは息を切らせて彼の名を呼んだ。

「ナティア……どうしたのです？」

はあはあ、両手を膝の上に乗せて息を吐く。彼女が声を出せるまで、しばらく待たねばならなかった。

そして、落ち着いたナティアはロスバツハーに一つの願いを言った。

「ふむ、お姫様も鍛えて欲しい、というわけですか……」

「はいっ、師匠！」

元気いっぱい手を挙げる。しかし対照的にロスバツハーの表情は沈んでいた。

「しかしですね、私は星の力も使えませんし、クリスタの相手で一杯です。とてもあなたを相手することはできません」

「そうですか……」

明滅するように感情を入れ替えるナティアは、今度は急に落ち込んだ。その落差を見て、ロスバツハーは気の毒に思ったのか一つの提案をする。

「どうです？ 私は相手できませんが、もう一人、手の空いた人間がいますよ」

「え？ だれです？」

ロスバツハーは周りを見回し、その人物を見つけた。その人は、広場に転がってクーと戯れあっていた。

普段は見ることでできないその屈託のない表情。歪んだ笑みしか見せなかった顔は、今、子供のような純粹な綻びを見せている。

「あっはっははは、あははは。お前ってヤツは本当に賢いな。よしよし、今度はもっと遠くまで投げるぞ」

そう言って投げたのは木の棒だった。まるで犬のように、クーはそれを追いかけて、拾い、持ってくる。

リビタの元に。

「リ、リビタ……さん？」

その動きがぴったりと止まる。そして、ぎこちなく首を横に動かし、ロスバツハーとナティアを見た。

「い、いつから？」

微かな問いかけにロスバツハーが答える。

「私は三十分ほど前から」

ナティアも続く。

「えーと、私はついさっきから」

言った口元にリビタが猛スピードで近付いた来た。

「うわっ」

「ナティア、いーか、このことは誰にも話すなよ」

勢いに、コクコクと頷く。

その横からロスバツハーが口を出した。

「私には口止めしなくていいんですか？」

「お前に脅しを通じるとは思わねえよ。で、取引だ。条件を言ってみろ」

ロスバツハーは迷うことなく条件を提示する。

「簡単です。お姫様が修行したいと言ってるんですよ」

リビタが勢いよくナティアを見た。

「しゅぎょーだー？ おい、ナティア、本気で言ってるのか？」

「は、はいっ！ 私もクリスタみたいに修行して、少しでも強くなつて、で、皆さんの役に立ちたいな……とは行かないまでも、せめて少しでも迷惑かけないように……ダメですか？」

心なしか頭の輪が明滅したように思えた。

いつの間にか近寄ってきていたクーも、ナティアの隣でしょげている。

その瞳で見つめられ、リビタは口元を歪めた。

しばらく考え、そしてじきに考えるのを止めた。

「えーい、しょうがねえな！ いいか、やると言ったからにはワイバーン一人で倒せるくらいまでは強くなってもらうぞ？」

ナティアの顔がパツと明るくなる。それに伴って、頭の輪もピカ

リと輝いた。

「はいっ！ 教官！」

「よし、それじゃあまずは走り込みからだ。体力をつけねえと何もできねえからな」

「はいっ！」

「くうん」

クーも一緒になって、三人は森の方へ駆けていく。

「あらら、行っちゃった。分かってるんでしょね、ナティアを守らないといけないってこと。まあ、リビタでしたら心配ないですね」

そう呟いて、彼も小屋に戻ろうと道を辿る。

「それにしても、ナティアにとっては良い先生ができました……色んな意味でね」

ロスバツハーは笑っていた。



二人と一匹は、村はずれの森にやって来ていた。

そこで、リビタはナティアに座るように言う。

「いーか、ナティア。お前は神様のタマゴのくせに星の力が弱すぎる。体力もない、力もない、技術もないじゃ何にもできねえよ」

「はい……」

頭の輪がぼやける。なぜかクーもしよげていた。

「そこで、お前にやってもらうことは二つだ」

「ふたつ？」

「そう、星の力の強化と、護身用の武器が使えるようになること、だ」

「星の力の強化？ できるんですか？」

「あたりめえだろ？ 体力なんてのは一朝一夕で付くもんじゃねえ、だがな、星の力ってのはココなんだ」

そう言って胸をドンと叩く。

「ココロ……？」

「そーだよ、神様のタマゴにしちゃ、何にも知らないんだな。星の力ってのは神様が信仰の篤い人間に対して分けてくれるもんなんだ。だからさ、信仰心が強いほど、その威力も強い。ウトコなんかいい例だぜ。あいつはあのままウェルチにいりゃー、大司教か聖人かってくらいに信仰心が強いからな。知ってっか？　ウトコのヤツ、死んだ人間を生き返らせたことがあるんだぜ？」

「死んだ人を？」

「そーだよ。もう奇跡以外の何ものでもねえよな」

「すごい……里でも、聞いたことがない」

「ん？」

「いえ、なんでも……」

ナティアは表情を悟られまいと、俯き加減に話す。だが、すぐに顔を上げて思いついたことを問いかけた。

「じゃあフォンドールさんも、信仰心が強いんですか？」

「あ？　んなわけねえだろ。あいつはたまたまヴィターゴが使えるだけで、大した力はもっちゃいねーよ」

しかし、ナティアの脳裏には彼自身が危険なのではないかと思うほどの雷撃が思い起こされていた。

「あー、そっか、知らねえんだな」

「何がですか？」

そう言うと、リビタは自分のマルチリボルバーを取り出した。弾丸を手に取り、それを摘んでナティアに見せる。

「いいか、あたしの星の力も大したことない。フォンドールと同じくらいのもんだ」

もう片方の手を木に向けた。『アクアハート』、リビタが小さく呟く。

手のひらから飛び出した氷の塊は、木の肌を抉り、霧散した。そこにはこぶし大の穴が開いている。

「な？ これでほぼ全力だ。頑張ればもうちょっとできるかもしれないーけどな」

ナティアがキョトンとした顔をする。先日見せた彼女の星の力？ 正確にはマルチリボルバーの弾丸だが？？はこんなものじゃないか。った。

「まあ待て。んで、今からこの弾丸にアクアハートを詰め込む」
そう言って、弾丸を拳の中に握りこむ。

「全て等しく、透明の中に……アクアハート」
手の中から氷が溢れ、弾丸を覆う。そしてそれは急速に収束し、消えていった。

ポフッ、と音がした。リビタはそれをリボルバーに込め、先程の隣の木を狙う。

「ちよい離れてろよ？？ふんっ」

撃ち放った軌跡は綺麗に直線を描き、ダイヤモンドダストを散りばめながら木に命中する。

「うわっ」

ナティアは思わず後ずさった。メリメリメリツと地響きを立てて、樹木が横に倒れる。

見たところ、隣の木と太さは変わらなかった。近付いてみるが、元々脆かったような痕跡も見えない。

「どうして？」

ナティアがリビタに問う。自慢げに笑う彼女は、もう一つの弾丸をナティアに渡した。

「これが星具の力さ。お前も何か込めてみる」

言われて、ナティアは弾丸を握り、目を閉じる。手にはマッチ。それに火を灯した。

「恵みと滅びを操ることをお許しください……プロヴァメル」

その瞬間、ナティアの拳から炎があふれ出て、急速に収束する。ポフッ、と音がして、ナティアはそれが少し重くなったように感じた。

「よし、できたな。んだけど、プロヴァメルはここじゃー使えねえな。河原に行くぞ」

二人と一匹は近くにある溪谷まで移動した。歩いている間、リビタは常にクーを抱いていた。クーの方でももう慣れたようで、あの時のように噛むようなことはしなかった。

谷底へは、緩やかな坂を長く下らなければならなかった。歩き疲れてくると、リビタは休憩を入れてくれる。

不思議だった。今まではフォンドール一行の中で一番粗野だと感じていたリビタが、今では一番優しいのではないかと思える。ウトコは別格として。

言葉遣いや行動は乱暴だが、その奥に潜む慈愛のようなものがあった。それは彼女の心の芯なのではないかとナティアは思った。つまり、誤解していたのではないかと。

だが、それを問いかけることはできなかった。何となく、憚られる気がしたのだ。

やがて谷底に着くと、リビタはマルチリボルバーをナティアに放ってよこした。

「いーか、しっかり構えろよ。あー、ちょうどいいや。あの岩を狙ってみろ」

彼女が指差した岩は、ナティアの背丈よりも高く、大人が十人集まっても取り囲めないのではないかと思うくらいに大きなものだった。

普段の彼女であれば、あの岩にプロヴァメルで傷をつけることすら難しいだろう。精々、焚き火の役にくらいしか立たない代物なのだ。

「じゃ、行きます！」

覚悟をしてナティアは構えた。グッと腕を前に押し出して、片眼で狙いをつける。

一瞬だけ待って深呼吸し、引き金を引いた。グッと強い抵抗があり、それを抜けるとカチンと撃鉄が落ちる。

「きゃっ」

その後すぐにナティアは後ろに倒れた。銃口からはナティアの頭ほどもある火球が弾き出されていた。

「でかいっ」

リビタが叫び、ナティアを引きずって下がった。火球が岩に命中する。と、炎は爆発に変わった。

地面が割れたかと思うくらいに巨大な音がして、岩の破片が飛び散る。そのほんの少し前に、リビタとナティア、クーは別の岩陰に隠れていた。その岩の表面に飛散した岩が次々と当たっていく。物陰から見ると、それは真っ赤に燃えたぎっていて、岩石ではなく溶岩と化していた。

「……とんでもねえな」

リビタが絶句し、ナティアは尻餅をついた。

「……な、なんなの……これ」

ナティアの手にあるマルチリボルバーは銃口が破裂していた。

「ちっ、これじゃ使いもんにならねえな」

リビタはナティアの手から銃を奪い取り、自分のホルダーに差し込んだ。

「しかし、まさかこれほどとはな……さすが神様だねえ」

怒られると思いきや、リビタは嬉しそうに笑う。

彼女はナティアに肩を貸して立ち上がらせると、小さな岩に腰掛けさせた。

「どうだい？ あれがお前の出しうる星の力だよ」

「あれが……私の？」

「ああ、そうさ。まあ銃口が壊れなきゃ、もっと出てただろうね。怖かったかい？」

コクリとナティアは頷いた。苦笑するリビタは彼女の頭を撫でる。
「ま、力は使いやすいさ。怖がることなんかねえよ。あたしたちが付いてるんだからさ」

「うん……でも、なんで急にあんな力が？」

リビタは言った。

「星具とは、星の力に込められたリミッターを解除する道具なのさ」

5 《リビタ2・信仰するのは自分をいかに神様に近づけるか、ってことさ》

リビタは説明を始めた。

「いーか？ 星の力ってのは二つの要因で力の大きさが決まるんだ」
そう言って、枝を使って地面に二つの輪を描いた。それらは中央で交差し、三つの領域が出来上がっている。

クーもそれを覗き込んだが、さすがにワイバーンには意味が分からなかったのか、前足で消そうとした。それをリビタが遮って、クーを抱きかかえる。

「よしよし。ちょっと待ってろよ。でな、この左の輪がその人間が潜在的に持っている星の力だとしよう」

左の輪に「潜在力」と書き加える。

「んで、右の輪がその人間の信仰の深さだ、と」

右の輪には「信仰力」と書く。

「それでだな。星の力ってのは潜在力以上には大きくならねえ。つまりどれだけ頑張っても、自分の器以上の奇跡は起こせねえって事だ」

それから、リビタは潜在力から信仰力を引いた部分に斜線を何本も書き加える。

「で、だ。ここからが重要だぞ。星の力を発揮するには信仰力が必要なんだが、信仰力はマイナスにしか働かない」

ここでナティアが首を傾げた。

「どういうこと？」

「なんつったら良いかな？ 逆に言うとな、信仰が完全であればその人間の潜在力は全て使うことができる。だけど、信仰が浅く、不完全であればその潜在力が削られていくんだ」

リビタはもう一度絵を描いた。一つは二つの輪が接しているだけで交わらない状態のもの。もう一つは輪と輪がかなりの部分交わっているもの。

「上と下じゃ、同じ潜在力を持っていれば、上の方が強い力が使える」

枝で指したそれは、輪が交わっていないものだった。

「逆に信仰が濁れば、使える力は少ないってことだ」

ナティアが頷く。ようやく理解できたようだ。

その上で彼女は聞いた。

「分かったわ。つまり、信仰を深くすれば、強い力が使えるって事よね」

「そーゆーこと」

「じゃあ、二つ質問させてちょうだい。一つ目は、どうやって信仰を深くするの？ もう一つは、星具を使うと何で強い力が使えるの？」

リビタがニヤニヤしている。クーがその顔を見上げ、一声鳴いた。
「それじゃ教えてやるよ。まずは二つ目からだな。星具ってのは星の力を人を介さずに発揮するものだ。わかんねえかな？ 人を介さないって事は、信仰力の邪魔を受けないってことだ。つまりこういう状態ってわけ」

もう一度絵を描いた。二つの輪は、今度は完全に離れている。

これは先程の接している状態とは少し意味合いが違った。

「特に、マルチリボルバーは弾丸に星の力を込めることができる。ってことは強い潜在力を持つヤツの星の力を、誰でも使えるって事なのさ」

へえー、とナティアが感心した。だがな、とリビタはその感心を制して続ける。

「星具ってのは、特に勇者の使う戦闘用の星具は本人のために調整された一点ものだ。もし他の人間が使えば、こういうことになる」
リビタが腰のホルダーから銃を取り出す。それは銃口が破裂し、使い物にならなくなっていた。

「そっか、誰でもってわけじゃないんだ」

「そういうこと。でも心配すんな。調整すりゃ良いだけのことだ」

「できるの？」

「今は無理だけどな。どうせロスバツハーのヤツ、クリスタにも星具をあつらえてやるつもりなんだろう。お前もその時に作ってもらったらいいさ」

「本当？」

「ああ。だがな、それとは別に、信仰を深めて使える力は大きくしておいた方が良い。咄嗟の時には星具を使うよりも素早いし、何より星具じゃ使えない力もあるしな」

その代表がザバスやプラセンタだった。

光の増幅、回復力の増幅はなぜか人と人の触れ合いの上でないといけないのだという。

「まあ、そういうのがいくつかあるんだよ。解明できないというか、やっぱり神様の力だからな」

そういうリビタは苦そうな表情をしていた。

それはナティアが今までに見たことの無いもので、何だか息苦しく、辛そうにも見えた。

「リビタ？」

ナティアが声をかけると、彼女は今ナティアに気付いたかのように反応する。

「あ？ ああ……悪い、ちょっと考え事してたんだ」

そういうと、彼女は空を仰いだ。そこには谷に切り取られた空が細長く棚引いている。

「ふーん」

そんなリビタを、ナティアはじっと見つめていた。クーはリビタの膝の上で、彼女に頬を摺り寄せている。

「信仰を深める、か。やっぱり、神様を信じる、ってことなんだよね？」

問いかけに、リビタが振り向いた。

「ん？ いやあ、そんなことはねえよ。信仰ってのは自分をいかに神様に近づけるか、ってことさ」

と言ってから、気がつく。

「んん？　ってことは、ナティアは神様のタマゴなわけだから……？」

リビタは自分で言ってる理解ができなかったらしい。何度も左右に首をひねっている。

ナティアはそのヒントで自分の進むべき道が見えてきた気がした。「そっか……私は神様になっていけばいいんだ」

それは大事なことだった。彼女の目的が達成されていけばいくほど、彼女の星の力も強くなっていくということだった。

「じゃあ、私がやることは一つだね」

「一つ？　何なんだ？」

ナティアはリビタに向けて精一杯の笑顔に向けた。

「鍵を見つけるんだよ」

ナティアは晴れ晴れとした顔をしていた。何の迷いも無い顔だった。

「鍵？」

リビタが問う。彼女は何も知らないようだった。

「あれ？　全部知ってるんだと思ってたんだけど……違うの？」

今度はナティアが戸惑う番だった。リビタもナティアもお互いがお互いの顔を見合わせている。

「あたしたちは、というかあたしだけなのかもしれねえけど、お前が神様のタマゴだってことしかわからねえよ」

リビタの性格だ。それ以上は面倒だ、と聞かなかったのだろう。

ナティアはそう推察し、ため息をつく。

知っているとすれば、ウトコ、フォンドールは知っているだろうか？　それともあの知略家のロスバツハーが？　疑い始めたらしきが無いが、何だか気味が悪かった。

そういえば、ナティアが何かを話そうとすると、いつも誰かに遮られていた気がする。

ナティアは、不安と不満を募らせていた。

リビタはその様子を見て、ナティアが何事かを隠していると思った。

「ナティア……てめえ、何を隠してやがる！」

怒号に、ナティアが怯んだ。

「そ、そんな……隠してなんて……」

そのために、歯切れが悪くなる。それをリビタは疚しいことがあるのだと感じた。

「吐きな。隠してると、神様だってゆるさねえぞ」

リビタは立ち上がり、凄んだ。その拍子にクーが膝から転げ落ちる。彼はリビタの怒気を感じ、それが敵足ると思ったようだ。ナティアの足元に寄ってきて、大きな口を開け、威嚇する。

「クー、止めなさい！ リビタさん、私、何も隠してない！」

ナティアが叫ぶ。しかし、その言葉はリビタをますます怒らせる。「嘘だ！ お前も俺をだますんだ！」

急に口調が変わる。もともと乱暴だった言動が、もはや男のものにしか思えなくなる。

「リビタ……さん？」

「お前も俺をだまして俺から全てを奪おうとしてるんだ。なんだ？ 何を奪う？ 命か？ 金か？ 信仰は譲らんど。俺の神だけは譲ってたまるものか！」

何を言っているか分からなかった。ともかく、彼女は混乱していて、ナティアを恨もうとしているのだけは理解できた。

「リビタさん、お願い！ 落ち着いて」

声を張り上げる。クーは威嚇を続けた。それほどまでに、彼女の変化は激しかった。ホルダーの中の銃が壊れていて良かった、とナティアは思う。そうでなければ一瞬で消し炭になっていただろう。リビタは少しずつナティアに近寄ってきていた。目はうつろで、何事かを呟きながら、ゆっくりと歩んでくる。

ナティアは逃げられずにいた。攻撃などできないし、かといって逃げればどこまでも追いかけてくるような気がしていた。

ただ、目を瞑り、そのときを待った。

説得は難しいと思い込んでいた。

「神様が言葉を忘れたら、何も救えませんよ」

ナティアの上に言葉が降り注いでいた。

その声に目を開くと、リビタはロスバツハーによって拘束されていた。デススリンガーで網を放ったようだ。

動きが取れなくなったその上に、クリスタがどっかりと座っている。

「よお、ナティア。どうしたんだ、これ？」

クリスタは事態を理解していないようだった。リビタの腕を後ろに捻り、力が出せないようにしている。女性に対する行動とは思えないが、相手はリビタだ。

「どうしたんです？ リビタがバーサーカーになるなんて、このところ滅多に無かったことなのに」

ロスバツハーは本当に不思議そうな表情でナティアを見ていた。何かを企んでいる顔ではない。

「とにかく皆を呼びましょう。ウトコに彼女を戻してもらわないと」
そう言うと、ロスバツハーは夢見の鏡を取り出した。それでウトコとフォンドールを呼び出す。

彼らが来るまでに、クリスタと話していた。どうやら、本日も修行と称して野山を駆け回っていたらしい。そうしたら叫び声が聞こえたため、急いで駆けつけた、ということだった。

鼓動はまだ治まらないが、ナティアは少し安心していた。クリスタの肩に頭をもたれかける。すると、彼はナティアの頭をゆっくりと撫でてくれた。それが心地よく、ナティアは目を閉じた。

リビタはずっと唸っていた。ロスバツハーがクリスタに代わって腕を押さえていて、動けないでいるが、少しでも気を抜けば襲い掛かってきそうだった。

その様子を見たナティアは、ロスバツハーの前に出る。

「ロスバツハーさん」

「どうしました？」

「リビタさんはどうして、こんな風に？」

問われて、ロスバツハーが唸った。

「うーん、それは私から話すわけにはいかないですね」

しかし、ナティアも食らいつく。

「でも、リビタさんは私に言ったんです。騙したな、って」

「……ふむ」

ロスバツハーはさらに深く考え込んだ。しばらくの間、ナティアも待つ。

「ナティア、やはり私からは言うわけにはいきません。聞くなら、本人から直接聞いてください」

続けて彼は言った。

「それに、あなたもリビタに話すべきことがありますよね。途切れ途切れになっていたことを、今、きちんと皆に話しておくべきです」

それには、ナティアが頷いた。

「待たせた」

「お待たせですわ」

ちようどそこに、フォンドールとウトコが入ってくる。

「リビタさんは？」

ウトコが探すと、ロスバツハーの下にそれが見える。

「あららら、大変ですわね。リビタさん、久しぶりにバーサーカーモードなのですね」

「ええ、とにかくすぐに始めてもらえますか？ 私もこれ以上は疲れてしまいます」

そういうと、フォンドールが押さえつける役を交代する。

ウトコはその前に出てきて、肩に背負ったパーフェクトアローを地面に置く。

そのままリビタの前に屈み込み、彼女の額に手を当てた。

「始まったら少し離れてくださいね」

そう言って、目を閉じた。

「私と彼女との間の全ての綻びが消えますように」

プラセンタだ、とナティアは思った。ウトコの手がぼんやりと光っている。

「私と私の間の全ての綻びが消えますように」

今度は両手を額に当てる。両手が光り始めた。

「彼女と神との綻びが全て消えますように」

両手でリビタの顔を包む。そうするとリビタの輪郭が光り始める。それを見てフォンドールが場を離れた。

ナティアは不思議に思う。これはプラセンタとは違う。でも、似ている。

ウトコの祈りはますます深くなっていく。それに従って、光も強くなっていくようだ。

「……ザバスに似てるんだ」

ナティアの呟きにクリスタが反応する。

「ザバス？ 光の増幅……だったっけ？」

「そう、プラセンタは術者の手が光ることはあっても、回復してもらう人には表面上変化はないの。でも、あれはリビタさん自身が光ってる……まるで彼女の中の光を増幅するみたいに」

ウトコはさらに言葉を紡いでいた。それはヴァームの言葉だった。はつきりとは聞こえないが、いつものウトコの口調とは違う。瞼を閉じた彼女は、まるで女神のように神々しかった。

「そう言えば……ウトコさんは人を生き返らせたことがあるって……」

ナティアの言葉は、クリスタには聞こえなかった。いまや光はリビタの全身を包み、彼はそれに見とれていたのだ。

「……彼女を大地に繋ぎ止められますように……プラセンタ」

その瞬間、リビタから光が溢れ、それは空に向かって伸びていく。眩しくて目が開けられない。ナティアもクリスタも、手のひらの陰からその光景を見つめていた。

徐々に光は小さくなっていく。

ウトコは立ち上がり、長い息をついた。まるでマラソンを走ってきて、やっとゴールに着いたように、長い長い溜息だった。

「終わったか」

フォンドールがリビタの手を取り、肩に回して立ち上がらせる。

「リビタ、おい、リビタ」

頬を軽く叩くと、彼女は夢から覚めたような表情で周囲を見回す。最後に、クリスタとナティアを見て、それで記憶が戻ったようだった。

「あ、あたし……またやっちゃったのか」

「良いんですのよ。ちょっと疲れてただけですわ」

ウトコの言葉に、珍しくリビタがしよげ返る。

「悪かったな、ウトコ。あたし、また自分を見失っちゃった」

本当に後悔しているようだ。うつむき、強く拳を握る。

「後悔する必要はありませんよ。私も悪かったのです。ナティアに

……星の鎖についてきちんと説明しておくべきでした」

そう言ってロスバツハーは前に出た。皆に車座に座るように言い、全員がその通りに動く。

「良いですか。今から言うことは、この世界で誰も知らない秘密です。カシス王も、おそらくモモ女王も。ギネス・コープの連中がどこまでつかんでいるかは知りませんが、少なくともこのことは文献には残っていない、口伝のみで伝えられる事柄です」

緊張が走る。誰もが知らない秘密が、今、語られる。

6 《リビタ3・神様も苦勞してんだな》

ロスバツハーは語った。

「星の鎖、とは前にも言った通りヴァームの力を受け継ぐ者のことを言います」

ナティアの頭の輪を指す。

「でも、ナティアはまだ神様ではありません。リビタ、あなたなら分かるでしょう？」

「ん？ ああ、それにしては星の力が弱すぎる。確かにあたしのマルチリボルバーが壊れちまうくらいには強いけどな」

「そうです。天を地を作り、人を生命を造ったと言われるほどには強くない」

ナティアは自分の両手を見つめた。岩を溶岩へと変えたあの力でも、弱いというのだ。

「だが」

とロスバツハーは言葉を区切る。

「神様じゃないからと言っても、この子はこの星と繋がっているんです」

「どういうことだ？」

「どう言ったら分かってもらえますかね。つまり、魂は神様、体はまだ人間、というわけですよ」

フォンドールの問いに答える。

「ナティアはまだ神様ではありませんが、この星の鎖……つまり核となっています。ナティアと星は繋がっているのです」

クリスタは思い起こした。ナティアが鎖で惑星と繋がっている様子を。それはまるで奴隷のようだった。

「もし、この子に何かあればどうなると思いますか？ クリスタ」
指名されたクリスタは、首をひねるばかりで何も答えられなかった。

ロスバツハーは次にウトコに問いかけた。

彼女は少し考えた上でこう答える。

「仮に、ナティアとこの星が一心同体なのだとしたら……星とナティアは運命を共にしますわね」

パチパチパチパチ、ロスバツハーだけが拍手する。

「ご明察。例えばナティアが死んだ場合、この星も死にます」

サラリと怖いことを言う。

フォンドールが立ち上がった。表情は険しく、怒っているようにも見えた。

「だとすれば、なぜナティアはここにいるのだ？ 庇護し、隠さねばならないのではないか？」

ロスバツハーに詰め寄る。肩をつかまれて、彼は痛みを堪えていた。表情が歪む。それを押して、ロスバツハーは答えた。

「できないですよ。彼女の使命があるから……そうですよ、ね、ナティア」

話をナティアに振る。フォンドールが振り返る。ナティアは彼の怒気に怯えながらも頷いた。

ナティアが立ち上がり、車座になった皆の中央に歩み出た。そして、主にクリスタの方を向きながら話す。

「私は……ウエルチの出身じゃありません」

「え？ だって……」

クリスタが驚くと、ロスバツハーが否定した。

「あなたは早合点していたんだと思いますよ。確かに、彼女はウエルチの人間ではありません。大体、頭に輪が浮かんだ人間などいたら、大騒ぎになるでしょう？」

だが、そのことはフォンドールもリビタも、ウトコでさえも知らなかったようだ。一樣に表情を変えた。

「だって、クリスタったら全然喋らせてくれないんだもの」

思い当たることはいくつかあった。だが、だとしたらどこの出身なのだろう？

その疑問を発したのはリビタだった。

「馬鹿言えっ、じゃなきゃどこの人間だってんだよ。ヴィタモントには神様が住む余地なんてねえし、ジャネフでもねえんだろ？」

ナティアは、はい、と答えてから息を吸った。

「私は、アルギニンの奥からやってきました」

アルギニン。ワイバーンの生息地、星の力も働かず、機械の計器も狂ってしまう。

奥へ行けば行くほど強力な龍がその地を守り、そこを開拓できるのは唯一、勇者と呼ばれる人間たちだけだった。その奥がどうなっているか、最強の勇者と言われるフォンドールたちでさえも知らなかった。

ジャネフ国が勇者を育成しているのは、一つには外からの驚異から守るため、もう一つがアルギニンを開拓し、領土を広げるためだった。

「アルギニン……？ あんなどころに人が住めるもんか！」

クリスタの言葉は、小さい頃からアルギニンについて教えられてきた人間のまともな反応だった。

「確かに。俺たちが見たところでも、アルギニンは危険すぎる。

継続して住居にするにはワイバーンを何とかしなければ」

「それができるんです」

フォンドールの呟きにナティアが答える。

「おいで、クー」

白い毛玉のワイバーンがぴょんと跳ねながら近付いていく。その光景を見て、フォンドールが、あっ、と叫んだ。

「そうか！ ワイバーンを手懐けるのか」

「そうなんです。私たち……というよりもワイバーンは元々私たちヴァームの子孫を守るために生まれたものなんです」

「だから奥に行けば行くほど抵抗が激しいのね」

ウトコが感心したように言う。

「もちろん、全てのワイバーンが私たちの味方、という訳じゃない

みたいなんですけど。とにかく私たちはワイバーンに守られながら、五十人くらいで集落を作り、ひっそりと暮らしているんです。星の鎖に守られながら」

ワイバーンと共に暮らす生活。クリスタは今まで考えもしなかったが、今では微かに想像がついた。これもクーと共に旅をしてきた成果だ。

「でも、星の鎖も人間です。いつかは死んでしまう。その力は新しい星の鎖に受け継がれる。先代の星の鎖も、もうだいぶ歳を取っていて。十六年前、私が生まれてからはますます力を無くして……うん、私が吸い取っているんです」

うつむくナティアの代わりに、ロスバツハーが話す。

「つまり、星の鎖の力は徐々に受け継がれていくんです。ですが、星の鎖はあるものがなければ完全に覚醒することはできない」

その後を顔を上げたナティアが引き継いだ。

「それが、星の鍵です」

「星の鍵？」

クリスタが声を裏返らせる。

「ええ、それが何なのか分からない……おばあちゃんは教えてくれなかったから。でも、星の鍵はアルギンの外にある。そして、それに触れた時、私の頭の輪は消え、完全な星の鎖となることができるそうです」

少し、話が途切れる。誰も口を開こうとはしなかった。皆、分かっていたのだ。そのことの困難さを。

しばらくして、クリスタが口を開いた。

「ナティア……その鍵って、どういうものか分かるのか？」

彼女は首を横に振った。

「分からない。それを考え、探すのも神様になる勉強の内だって」

「でも……」

クリスタの表情は沈んだ。彼はナティアを守り、ウェルチまで届けばそれで全てが終わるのだと信じていたのだ。だが、この分

は道のりに終わりは見えない。長くなるのか、短くなるのか、果たして終わる見込みがあるのかすら、分からないのだ。

「だから私思うの。皆さんにあまり迷惑はかけられないな、って。だから……もう………」

そう言って、彼女は別れを告げようとした。

「ばーか、なに言ってるんだ」

それを遮ったのがリビタだった。

ナティアがそちらを振り向くと、リビタの目に光るものがあつた。

「リビタ……さん、泣いて……？」

「馬鹿やろう！ あたしが泣くななんて事があるかよ。でもな、神様も苦勞してんだな、って思ったらよ、ちょっと感動したよ」

そう言って目元を拭う。

気が付けば、ウトコも涙を流していた。

「良かったですわね、リビタさん」

フォンドールはただ、何度も頷いていた。

ナティアはその意味を問おうとして、思いとどまった。クリスタが手を握ってきたからだ。

「なあナティア。俺、思うんだけどさ。フォンドールたちは仕事だからナティアを守っているのかもしれない。でも、ただナティアが神様だから護衛している訳じゃないと思うんだ。そりゃ確かに、星の命とか、鍵とか、よく分かんないことばかりだけどさ。なんつーか、上手く言えないんだけど、そんなんとは違うと思うんだよ」

クリスタは焦っていた。自分の気持ちを伝えたかったのだ。だが、頭の中で整理できない。言葉は重ねても、意味が積み重なることはなかった。

何度も同じ事を繰り返すクリスタを見かねて、フォンドールが話を代わる。

「ナティア。クリスタの言う通りだ。我らはお前と苦勞を共にすることを疎んじてはいないぞ。我らは世界の秘密を知り、世界を救おうとしているのだ。勇者としてこれ以上に嬉しいことはない」

その後をウトコが繋ぐ。

「それに、ナティアちゃんと一緒にいると退屈しませんしね。楽しいですよ」

ニッコリと笑う。

「よし、そうと決まったら善は急げだな。早いところ星の鍵ってやつを捜して、ナティアを神様にしてやろうぜ」

リビタは今までになく張り切っていた。

「リビタ、どうしたんだ？　なんか雰囲気が違う？」

クリスタが敏感にその変化を感じ取っていた。だが、リビタはそれに答えることなく、フォンドールを急かす。

「おい、そーだ。フォンドール。もう大丈夫なんだろ？　出発できるだろ？」

その言葉に、フォンドールも頷く。

「うむ。明日には首都エデンへ向けて発つでしょう。思ったよりも話しが大きくなりそうなのでな。のんびりしている場合でもないだろう」

フォンドールは夢見の鏡を取り出して何カ所かと連絡を取っていた。今後のことをBAや国王と話していたのだという。

残りのメンバーは、明日の出発に向けて準備を整えていた。

ウトコはリビタと一緒に支度をしている。黙ったままのリビタに、ウトコが話しかけた。

「リビタさん、よろしいんですの？」

リビタは彼女の顔を見ずに返答する。

「ああ」

ウトコは言葉を続けた。

「話すことで救われることもありますわよ。せっかく神様に会えたのに」

「良いんだ。あいつにも重荷があるって分かったしな。いま、荷物をこれ以上増やしたってしょうがねーだろ」

ふむ、とウトコが納得する。そうして、リビタの頭に手を置いた。

「それでも、神の道に戻ってくる気はないのですわね」
リビタはその手をはね除けた。

「ああ、あったりまえだろ。あたしは神を捨てた人間なんだぜ？」
「ナティアちゃんなら許してくれそうですけど？」

「そーゆー問題じゃねえんだよ。核心はあたしの心の中にある。もし、あたしがあたしを許せたなら、そんなときは頼んだぜ、マイシスターー」

ニヤリと笑ったりリビタに、ウトコが微笑みかける。

「ふふふ、了解しましたわ、我が仔よ」

ナティアとクリスタは、その様子を遠目に見て、話し合っていた。
「やっぱりさ」

「うん？」

ナティアが今、気が付いたような顔でクリスタを見る。

「やっぱり、誰にでも、過去があるんだよな」

「当たり前じゃない。私には私の、クリスタにはクリスタの過去があるでしょ？」

「そうか……」

妙に落ち込んでいる。それを慰めるように、ナティアは手をクリスタの頭に置いた。

「どうしたの？」

「あー、なんつーか、俺の知らないナティアやフォンドールたちがいるんだな、って思うと何だか気が滅入ってきてさ」

そんな風に言うクリスタに、ナティアは神の言葉で応えた。

「クリスタ。人は過去を共有できないが、未来を共に生きることができる、だよ」

それを聞いて、彼は笑った。

「はは、久しぶりにナティアのそれ、聞いたな」

「ん？」

「かみさまのことば。ナティアらしいよ」

「それは神様の、ってこと？」

「いや、ナティア的に、ってこと」

そう言ってクリスタが微笑む。その笑顔を見ると、ナティアも救われる気がするのだ。彼は、彼らはナティアをナティアとして見てくれている。それはここに居て良いんだよ、という合図のようにも思えた。

一方、屋外ではロスバツハーとフォンドールが険しい表情で言葉を交わしていた。

「なぜだ？」

「なにがです？」

はぐらかすようにロスバツハーは視線を逸らす。

「俺でも知らない、ウトコでも知らない神の秘密を、なぜお前が知っているのだ？」

フォンドールはすでに剣の柄に手をかけていた。答え次第ではないつても切ることができるように。

しかしロスバツハーはそれに気付かないかのように振る舞っていた。

「人の過去を探るよりも、現在の彼を見よ、ですよ。フォンドール」
神の言葉で返す彼を、フォンドールは怪しく思った。

「はぐらかすな、ロスバツハー」

「ふむ……お気に召さないようですね。では、こう言えば良いのですか？ 私はギネス

・コープのスパイです、とでも？」

フォンドールの手が動き、剣が鞘を滑る。

「はっ！」

剣先は、ロスバツハーの喉元で止まった。首の皮が一枚斬れ、一筋の血が流れる。

それでもロスバツハーは動じなかった。

「冗談ですよ。フォンドール。あなたらしくないですね」

「お前が悪いのだ。なぜ話さない？」

「話す必要がないからです。しかし、それが今後の活動に差し障る

ようでしたら、お教えしましょう」

フォンドールが剣を収めた。ロスバツハーが首に触れる。指についた血を舌で拭った。

「私は、逃げてきたんです」

後ろを向いた。そして、そのまま歩き出す。フォンドールが追いかけてようとすると、彼は次の言葉を発した。

「アルギニンから、ヴァームから、神の民から……落ち零れたヴァームの子孫、それが私ですよ……」

言葉を残したまま、ロスバツハーは歩いていった。

「な、に？」

問いかけは、しかし彼には届かなかったようだ。フォンドールは追いかけることもできずに、立ちすくんだ。

冷たい風だけが、彼を包んでいた。

SS2 《クーの戯れ》（前書き）

ショートショート第二弾です。

お暇つぶしと思いきや、新キャラも登場します。

SS2 《クーの戯れ》

マルクトドラゴン。

世界最強の竜と称され、巨大な翼と長い首、大きな口と強力な顎、さらには鉄をも切り裂く爪に、全てを滅ぼすドラゴンブレスを持つ。それに出会ったものは瞬時に滅ぼされると言われ、その咆吼を聞いただけで経験の低い勇者は裸足で逃げ出す。

だが、それは成体の話し。

幼体のマルクトドラゴンは白くてふわふわ丸い形をしており、切れ長の黒目だけがぼつんと乗っている。口は普段は見えない。見た感じ毛玉だ。尻尾は体から細く肌色の紐が伸びているような感じについており、その先に白い毛玉がついている。毛玉に隠れるようにして、小さな耳が生えている。

つまり、可愛い。

幼体のマルクトドラゴンであるクーは、星の鎖、神様のタマゴであるナティアの守護獣であるが、まだまだ子供なために守護、というよりもペットな感覚だ。

今日も彼は（オスなのだ）ナティアからはぐれてしまった。なぜなら季節外れのトンボがふらふらと宙を漂っていたからだ。

「くうん」

見上げながら歩いていくクーを、誰も見てはいなかった。

いつの間にか森の奥に入り込み、そしてトンボも見失ってしまった。

「くうん……」

トンボを探している内に、石に躓いて転んでしまう。

キャン、と犬のような鳴き声を発しながら、コロコロと転がっていく。

ドンと当たったのは大きな切り株だった。

「くうんくうん」

痛そうに鳴くクーに、誰かが声をかけた。

「あれ〜？ どうしたの？ ぶつかったの？ 怪我してない？ 大丈夫？」

答える暇を与えないマシンガンだった。

そして、答える間もなくクーを抱き上げる。頭を撫で回し「おーよしよし。ここかな？ コブができてるよ」と言いつつコブの場所に息を吹きかける。

「ふーふー、あーほらほら動かないの」

そう言われ、大人しくなるクーだった。

見上げると、そこには可愛らしい女の子がいた。

歳はナティアと同じくらいだろうか。ナティアよりも幼い輪郭をしている。

金色の髪に白い肌、まるで妖精みたいだとクーは思った。もちろん彼は妖精など見たことがない。ナティアの隣で昔語りに聞いたことのある、人を幸せにする美しいものの、にイメージがぴったりなのだ。

撫でられていると、何だかうつとりとしてくる。ゴロゴロと甘い音が喉を鳴らす。

「ふっふっふ、元気になったんなら遊ぼうか？」

彼女は懷から何かを取り出した。

ボールだった。

ピクン！ クーの小さな耳が立った。

「ほっほっほー、さては好きだね？」

コクコクと頷く。

「よーし、とってこーい！」

彼女が思いきり投げる。クーが飛び跳ねる。追いつく追いつく…
：女の子が走る、クーを追い抜く、ボールを取る。

「くうんくうん！」

クーが抗議の叫びを上げる。

「ふっふっふ、この世は弱肉強食なのだよ。クーちゃん。悔しかっ

たら私に勝ってみなさい！」

そう言ってもう一度投げる。

今度はクーも本気だ。走る走る。女の子も走る走る。その差はわずかだ。抜きつ、抜かれつ、もうちょっと……そこでクーは大きく口を開けた。

「うひょっ、喰われる！」

女の子が思わず足を止めた隙に、クーがボールをゲットした。

勝ち誇り、踊るクー。悔しがる女の子。

「くっそー、もう一度だよ、もう一度」

二人は暗くなるまで遊んだ。

「クー！　どこなのー！」

その内に、ナティアの声が聞こえてきて、そこでクーは我に返った。

ナティアを守らなければ。あの子は僕がいないと寂しがるんだ。

そう思ったかどうか。クーは駆け足でナティアの声がする方に向かい、ちよつとだけ足を止めた。

振り返る。

「ん、良いよ、友達なんだろう？　行きなよ」

女の子は小さく手を振った。

クーも尻尾を振って挨拶した。

「じゃあね、クー。またね」

そう言って女の子は森の奥に消えていった。

それと入れ替わりに、ナティアが現れる。

「あー！　こんな所にいた！　心配したんだからね」

そういつてクーを抱きかかえるナティア。彼女の温かさに触れながら、クーはふと思う。

あの女の子はどうして自分の名前を知っていたんだろう？

SS3 《神様がいる!》

ウトコは、今日も朝の祈りを終えたばかりだった。

跪き、ヴァームを象った偶像の前で手を組み合わせる。

神に触れ、願い、反省し、そして明日への希望を頂く。

ウトコにとって祈りは活力であり、自分自身を見つめる時間だった。

「今日も主に届きましたでしょうか？」

ゆっくりと瞼を開けたウトコは、お茶を飲むために席に着いた。

ヴィシーは農村である。

アールグレイなどはない。

渋い緑茶をすすり、あんこの詰まったモナカを口にする。

「あらあら、おいしいですわね」

ウトコは甘党だった。甘いものであればその糖度に制限は無かった。

そのくせ、体重や体型に変化は現れない。

成長しすぎてしまったリビタなどは毎日の体重で一喜一憂していると言っているのに。

ペロリとモナカを二つ平らげ、しぶいお茶でその甘さを再確認していると、ドアが開く。

「おはようございます、ウトコさん」

ナティアだった。彼女はまだちよつと眠い目を擦ると、ウトコを見てギョツとする。

朝六時である。クリスタなんかはまだ夢の中だ。いつもは早いフオンドールやロスバツハーでさえもまだ起きていない。

そんな時間にお茶と甘いお菓子を食べているのだ。

すでにモナカはなくなり、羊羹をフォークで切っている。それも薄切りではなく、真四角に。

「あのー、ウトコさん？」

ナティアから問われて、ウトコは自分の過ちに気付いた。

「あらあら、申し訳ないですわ。ナティアちゃんにもお菓子をお出ししましょうね」

そう言っているそと支度に取り掛かる。

ナティアは慌てて言った。

「あゝ、ウトコさん、良いですよお、私まだ朝ごはんも食べてないし……」

手を止めたウトコがナティアを振り向いて、考え込む。

「うゝん、そんなことを言っても、神様にお供え物をしないというのも……」

「ウトコさん、何か勘違いしてる？」

ナティアはお供え物をしなくてもちゃんと自分でご飯を食べられるのだ。

と、ウトコの動きがそこで止まった。

じっとナティアを見つめ、静かに息をしている。

何かを考えているようにも、迷っているようにも見えた。

ナティアはそれを不思議に思い、声をかけようとするが、なんとなく良いものか分からない。

必然的に、二人は中途半端なアクションの状態で固まることとなってしまう。

数分が経つ。

お茶からは湯気が消え、外で遊ぶ子供たちの声が微かに耳に入る。次の瞬間、ウトコは突然ひざまずいた。

「え？ え？」

彼女は両膝を床に着き、手を組み合わせていた。目を閉じ、頭を垂れ、そして祈った。

「神様……どうぞわたくしのこれまでのご無礼をお許しください」

「え？ なに？ どうしたの？」

「今更ながらに気付いたのですわ。わたくし、目の前に神様がいらっしゃるのに、祈りを捧げることもしないで」

ウトコの目から涙が零れる。

「あ、あの、その、こんなこと……止めてください」

「いいえ、止めませんわ。祈るための相手が目の前にいるというのに……聖職者として祈らずにはいられないのですわ」

困った。とナティアは思った。とにもかくにも祈らせてあげないと具合が悪そうだ。

だけど、と彼女は思う。

祈らせてあげるポーズって？

ウトコは膝を着き、手を合わせている。

私は何もしなくていいの？ そう思ったのだ。

まず、絵画などでよく描かれるポーズを試してみる。

左手を直角に曲げ、宣誓するような形にし、右手は何かを受け取るように胸の前で横にする。

じーっ、と……何かが違う。

次に、洗礼の儀式のように、左手をウトコの頭上に掲げてみた。何か偉そうな感じがして申し訳ない気がする。それにナティアに洗礼するような聖別の力は無いのだ。

（うう……やだよ、この状況。誰か助けてよお）

声には出せず、心の中だけで思う。

すると、ウトコが急に目を見開いた。

「はっ、今、神が悩んでおられますわっ」

「なっ？ 何で分かったの！」

「大司教クラスになれば、神の声を聞き取れますのよ」

（うわー、ってことは私の心の声、駄々漏れ？）

「その通りですわ。でもご安心を。祈りに入っているときにしか分かりませんし、無闇に覗いたりはいしませんから」

そういうと、また祈りに入る。

結局、何かを考えることもできず、ただひたすらに我慢の時が過ぎる。

起きてきたクリスタたちに大笑いされたことは言うまでもない。

以後、ナティアとウトコは不可侵条約を結んだ。

朝の祈り、就寝の祈りは付き合ってあげる。その代わり、ウトコは普段ナティアを神様扱いしない。

こうして、毎朝毎晩、奇妙な光景が繰り広げられ、面白がったクリスタとリビタも参加することになったのだった。

SS3 《神様がいる!》 (後書き)

諸事情で本編更新がなかなかできないでいます。四月初旬には本編をアップしたいと思いますので、お楽しみに。

7《フォンドール1・ここから先に入れば、もう、戻れないぞ》

ヴィシー村を出て数日。

フォンドール一行とナティア、クリスタはエデンを眼下に眺める
ところまで辿り着いていた。

途中、クーが道に迷ったりもしたが、ギネス・コープに襲われる
こともなく、怖いくらいに平和な旅となっていた。

ロスバツハーは話す。

「必ずこの先、ギネス・コープの来襲があるはずです。そのために
夜は交代で寝ずの番をすることにしましょう」

その通り、昨夜はフォンドールとロスバツハーが交代で番をして
いたのだ。

「何で俺はダメなんだよ」

クリスタの不平不満も、ロスバツハーには効き目がない。

「バカですか。寝ずの番とは、皆を守りきれるのがやるのです。
あなたにその役目が務まりますか？」

そう言われては何も言えない。

そうして、皆が寝静まった頃、ロスバツハーの後ろにフォンドー
ルが立った。

「心配ですか？」

振り返らずに、ロスバツハーは言う。フォンドールは答えずに隣
に座った。

そのまま棒で薪をいじる。炎は弾け、宙に舞う。

二人はしばらくの間、風に踊る火の粉を見つめていた。

「……どこまで知っているのだ？」

フォンドールは呟くようにして問いかけた。

「何をです？」

「神について、そして星の鎖について」

重々しい空気が二人を押し潰そうとしている。思えばロスバツハ

ーのことを何も知らないでいた、とフォンドールは思う。

二人が出会ったのは五年ほど前だった。その時のロスバツハーは今とは違った人間だった。ぶつかって、すれ違って。しかし、それでも彼のことを仲間だと思えたのは、いくつもの死線を越えてきたからだだった。

「俺の勘違いだったというのか？」

初めて、声のトーンが落ちた。その弱い声はロスバツハーの胸にコトリと納まった。

「何を言うんです？ あなたは何も間違っていないよ」

ロスバツハーが立ち上がる。

「私が知っていることなど、ほとんどありませんよ。ヴァームの子孫として暮らしていた。ただそれだけです。星の鍵についても何も知りません。どんなものかも……ただ、歴代の星の鎖はそれを見つけてきた、というだけしか。星の鎖については……話した通りです」

フォンドールの場所からはロスバツハーの表情は見えなかった。声の調子はいつもの通りだった。元々多少のことで動揺する人間ではない。

彼はロスバツハーに座るように促した。そして、次の言葉を語りにかける。

「悪かったな。俺が早合点していたようだ」

疑いが完全に晴れたわけではない。しかし、それでも十分だと思った。

後はフォンドールとロスバツハーが過ごした時間が埋めてくれる。そう信じていた。

「人の過去を探るよりも、現在の彼を見よ……か。確かにその通りだ」

「ありがとうございます。感謝しますよ」

ロスバツハーが頭を下げる。それを制して、フォンドールは声を低く話す。

「これから、どうすれば良いのだ？」

フォンドールは迷っていた。このままみだりに旅を続け、ナティアを……ひいては世界を危険に巻き込むのは本当に選ぶべき道なのだろうか。

ロスバツハーも迷っていた。

「正直言って、どうすれば良いのかは私も分かりません。分かっていることはいくつもあります」

そう言って数えていく。

一つは、ナティアが星の鎖であること。

一つは、そのナティアを手に入れ、世界を手中にしようとする組織があること。

一つは、ナティアは星の鍵を手に入れ、神様とならねばいけないこと。

一つは、その鍵がどんなものか分からないこと。

「分からないことが分かるというのも不思議なものだ」
フォンドールが薄く笑った。

「冗談じゃありませんよ。まさか自分の身に降りかかってくるとは思いませんでしたからね。これなら昔語りにも大婆さまから聞いておくべきでした」

大げさに手を広げる。

「星の鍵と鎖に関してはもう一つ分かることがあります」

「なんだ？」

「このままナティアが星の鍵と出会わなければ、覚醒できぬままに現在の星の鎖……大婆さまが死んでしまうであろうことです」

「そうなればどうなるのだ？」

「さあ？ そうなったことはありませんから。想像で良ければ、ですが、おそらくこの星はその姿を保つことができないと思います」

フォンドールが口を閉ざした。あまりに重い現実だった。

ロスバツハーもそれを見て話すことを止めた。

引くも行くも、想像を絶する。

そして、引くことはもうできないのだ。勇者であり、関わってし

まったから。

あまりの重圧に、フォンドールは押し潰されそうな気がした。いくら世界最強の勇者と言えど、精神までが世界最強であるわけはない。自分の抱えきれない荷物があれば、それを重いと思うのは当然なのだ。

フォンドールは手を組み合わせた。

祈る。自分に抱えきれないものは神が少しだけでも持ってくれる。今までもそうしてきたし、これからそうするつもりだ。例えば、神様があのナティアであろうと。

彼にとって宗教とは対象如何ではなかった。

それは精神の研磨であった。

内側と外側から自らを磨く道しるべであった。

それゆえに、彼は星を導くものとしての力に弱かった。

純粹に神を信じているとは言い難いからだ。

本来持つ星の力を、その理性的な信仰が弱めている。ウトコにも指摘されたが、彼は改める必要を感じなかった。

そのことこそが、彼の力であるからだだった。

「俺たちが前に立って行かねばな」

新たな決意だった。

今彼が果たすべき役割は、自信を持って皆の先に道を創ることだった。

夜も更ける。番を代わり、ロスバツハーは眠りに入った。

フォンドールはそれから数時間、星を眺めて過ごした。

そこに神が居ることを信じて。



さらに二日経って。

一行はようやくエデン入口までやって来ていた。

町は賑やかに彼らを迎え入れる。

「お、勇者ご一行！」

誰かが声を上げると、たちまち人集りができ、握手を求められて進めなくなってしまうた。

「うわあ、おっさんたちって本当に有名なんだな」

クリスタの灰汁のない物言いにフォンドールが反応する。

「我らのことを何だと思っていたのだ？」

「んー、怪しい集団、かな？」

そのやりとりをナティアがクスクスと笑って見ていた。

彼女の頭の輪は、今、見えないようになっていく。

消えてしまった訳じゃない。見えなくしたのだ。

「何だよ、ナティア」

「だって、おかしくって」

クリスタがナティアを小突くようにして拳を握る。彼女はそれから逃げる素振りを見せ、被っている麦わら帽子が飛ばないように手で押さえていた。

ウトコの星の力によって、帽子の周囲にだけ視覚を歪めるようにしていた。

何もなければたくさんの人間に力をかけるわけで、疲労が激しいのだが、帽子を触媒にすることで軽い力を持続するだけで良くなっている。

「どうですか？ 問題ございません？」

ウトコがナティアに話しかけてきた。何となく、だがあの朝の祈りの日以来、ウトコのナティアに対する態度は変わっていた。

「え、ええ、大丈夫です。ウトコさんこそ、疲れませんか？ 星の力を持続し続けるなんて」

気を遣って言うのと、ウトコは手を組み合わせ、ナティアに対して祈りを捧げる。

「とんでもございませんわ。試練だと思えば何ということはありませんのよ」

にっこりと微笑む。ナティアは声に出さずに「試練で……やっぱ

りきついんだ」と呟いた。

人々に囲まれ、目的の王城へはなかなかたどり着けなかった。それを見かねたりビタが声を張り上げる。

「おらおらおらおらっ！ てめえらどきやがれ！ あたしたちはカシス王に用があんだよ」

マルチリボルバーでない、普通の銃器を空に向かってぶっ放す。もちろん空砲だ。しかしそれに驚いて群衆は蜘蛛の子を散らすようにワラワラと逃げていった。

「すいませんね、毎度毎度」

ロスバツハーが皆を代表して感謝する。

「良いつてことよ。それより早く行こうぜ。カシス、待ってんだろ？」

先程とは王に対する態度が違っている。

町から少しだけ離れた所に、王城へと続く堀が見えてくる。

ご多分に漏れず、城は深い堀に囲まれ、さらに堀に囲まれ、唯一の入口である門扉には二人の門番が立っていた。

フォンドールが近付くを見ると、門を塞いでいた衛兵が脇に退き、扉を開けるよう合図する。

「へえ、おっさんスゴいなあ。顔パスなんて」

クリスタの言葉に、衛兵が目を見開く。

「貴様！ 若に何てことを！」

殴りかかろうかと言わんばかりにクリスタの襟をつかんだ。

「止めろ。私の仲間だ」

それをフォンドールが静かに制止すると、衛兵は恐縮した顔で再び頭を下げた。

クリスタは咳き込みながら、フォンドールに話しかける。

「おっさ……フォンドール、若ってどういうことなんだ？」

聞き逃さなかった。フォンドールが答える前にロスバツハーがバラしてしまう。

「フォンドールはカシス王の息子ですよ」

相変わらず重要なことをサラリと話す。

「なにっ？」

「え？」

クリスタとナティアだけが驚いている。フォンドールは反応することなく奥へ進んでいった。

二人はそれに付いていくしかなかった。

「待ってくれよ」

駆けよるが、彼はさらに先へと進む。まるで自分の家のように。ウトコ、リビタ、ロスバツハーは王の間へと行く間に、色々と話してくれた。

「ようするに、わがまま息子なんですわ」

「お坊ちゃんが御城下見物してえってからさ。あたしたちがお守りでついてるってわけさ」

「王も王ですよ。息子を危険な目に遭わせて平気なんですからね」
すでにフォンドールは遙か向こうに行っている。それを良いことにか言いたい放題だ。

「本当なのかよ」

「クリスタ、私が嘘を言うとしても？」

「思うよ、うん、思う」

軽く答えたクリスタの腹を、ロスバツハーの鉄拳が襲う。

「うごふっ」

体をくの字にして呻く彼を、苦笑しながらナティアが見ている。

すでに見慣れた光景だった。

「まあ、冗談ですけどね」

「や、やっぱり嘘なんじゃないかよ」

口答えたクリスタの腹を、再び愛の鞭が襲う。

「うぐう」

そうしてクリスタの襟首を引っ張りながら歩いていく。

「それはともかくです。フォンドールは王子でありながら星を導くものとして力に目覚め、さらに剣技にも優れていました。幼い頃か

ら勇者として活動することを望んでいたようです」

言葉を、ウトコが引き継ぐ。

「実は、連れ出したのはわたくしなんですのよ。あの方は、退屈そうでしたから、無理矢理に」

そう言って、ふふふと笑う。

ウトコの性格がつかめない、とクリスタは思う。

「でも、さすが王様、だよな。すぐにフォンドールを認めたしな。まあ色々あったのは確かかなんだけどよ」

リビタが興奮しながら話す。

彼らの話は断片的だったが、分かったことがいくつかあった。

「ようするに、おっさんたちは仲良しで、おっさん……フォンドールはスゴい、ってことか」

「ようするに、そういうことです」

ロスバツハーがクリスタの頭に手を置く。

「あなたにもいづれ分かりますよ」

少し先にフォンドールがいた。

王の間へと続く扉が開く。

「クリスタ……そしてナティアよ。ジャネフ国王にして我が父、カシスに会ってくれるか？」

フォンドールが挑むような目で見つめてくる。

「お、おう」

「もちろんですよ」

「ここから先に入れば、もう、戻れないぞ」

彼の隣に、ロスバツハー、リビタ、ウトコが並ぶ。

「この先に行けば、もはや個人のことは済まなくなります」

「ナティアさんは別にしても、クリスタ君はまだ引き返せるのよ？」

「ここまでやって来ただけでも、立派だったと思うぜ。無理はするな……でないと死ぬぜ？」

クリスタは一人一人の顔を見つめた。

フォンドールは覚悟に満ちていた。

ロスバツハーは期待と杞憂を浮かべていた。

ウトコは慈愛を前面に表していた。

リビタは優しさと決意を秘めていた。

そして、クリスタは最後にナティアの顔を見た。

「クリスタ……」

彼女はそれ以上言うことができなかった。付いてきて、というのは容易かった。だが、それによって一人の人生を狂わせてしまうかもしれない。

迷った末、ナティアはクリスタを真っ直ぐに見つめることにした。目と目が合う。

そこには偽りのない、信頼が溢れていた。

気付いた時、クリスタは頷いていた。

「答えなんて、分かってるだろ。もう、俺の未来は決まってるんだ」
その返事に、全員が笑みを浮かべた。

フォンドールが扉を開ける。

「カシス王、勇者フォンドール、ただいま御前にまかりこしました」
王は、たった一人で皆を迎えた。

8 《フォンドール2・父よ!》

カシス王は玉座から降りていた。

王冠すら脱ぎ、ただ一己の人間としてクリスタたちの前に現れた。立ち止まるクリスタをフォンドールが払う。

「クリスタ、お前は下がっている」

その肩を、ウトコがつかみ、後ろに下げる。

リビタがマルチリボルバーでない銃器を取り出して、構えた。

ロスバツハーも、デススリンガーに爆薬を備えている。

フォンドールは一際高い声で叫んだ。

「ヴィターゴ! 我が敵を退けるために」

猛烈な勢いで雷撃が迸る。

それらは全て、王に向けて発せられていた。

それでも、王は動じず、ただまっすぐにフォンドールを見据えている。

「こいつ」

王が吠えた。

同時にフォンドールが剣を振りかざす。

その脇をデススリンガーの爆薬が通り抜けた。

その爆弾をカシス王は片手で柔らかく包み込み、窓の外に放った。外で派手な爆音が響く。

「ダメですか。ではっ」

ロスバツハーの第二弾が装填される間に、フォンドールの剣が王に向かって振り下ろされた。

「ふんっ」

王はそれを片手持ちの剣で支える。

「ヴィターゴを帯びた剣を支えた!」

ナティアが驚愕に叫んだ。ありえない話だった。

「お返しだ。アクエリアス」

フォンドールを水が包む。

「しまった！」

水は彼と剣を同時に閉じこめ、そのためにヴィターゴの雷撃は全てフォンドールに伝わっていった。

「ぐあっ」

倒れ伏す勇者。体が痺れて立つことができない。

「とどめだっ」

王が剣を振り下ろそうとする。その切っ先をリビタの弾丸が弾いた。

「おらおらおらおらっ」

連射に次ぐ連射。その全てを王は剣一本で叩き落としている。

「化け物め」

銃を二丁に増やしさらに連射するが、いかんせん通常武器では大した効果は上げられなかった。

「くそっ、マルチリボルバーさえあれば」

呟くりビタの背後に、いつの間にか王が姿を現した。

「リビタっ、伏せて！」

ロスバツハーがデススリングーを撃ち放つ。

煙幕だった。あつと言う間に広がる煙に、王が咳き込んだ。

「フォンドール、今です」

合図を受けて、フォンドールは痺れた体を無理矢理に動かす。

「父よ！」

叫んで、横薙ぎに剣を振るう。先程の教訓からヴィターゴは使っていないかった。

それと同時に、風が巻き起こった。

「全てを清めよ、コツカス」

それは竜巻のように渦を巻いて、フォンドールのバランスを崩した。

体が流れてしまい、彼の斬撃は空を切る。

それを見逃さず、王はフォンドールを蹴り上げた。

「ぐわっ」

「まだまだ甘いわっ」

続けて王は伏せていたリビタを組み敷き、関節を決める。

「くそっ、痛えよ！ 放せっ」

王は聞き入れない。

「カシス王さま、手を放していただけませんか？」

こんな状態でも、ウトコはいつも通りだった。のんびりとした口調で王に向かってパーフェクトアローを番える。

「わざわざ知らせてどうする」

王が動こうとした時、ウトコが弓を放った。

全身を覆い隠すその盾の隙間から、彼女は矢の軌跡を見つめる。しかし、すでにそこに王の姿はない。

体を回し、王の姿を求めても、どこにもなかった。

「見失いましたわ」

言葉が漏れるか漏れないかの内に、ウトコの首に手刀が入る。

「あ……」

ウトコが気絶させられ、ロスバツハーが立ち向かっていく。

「王よっ、許しませんよ」

もはや飛び道具ではなく、肉弾戦だった。

王はロスバツハーの打撃を仁王立ちのまま受け流している。

「くっ、ナティア！ 俺は出るぞ」

我慢しきれずにクリスタが飛び出した。

「クリスタ、待って」

それを追ってナティアも駆ける。

しかし、クリスタの速度に追いつけるはずもない。

クリスタは一直線に王の前に出る。

「クリスタっ、どきなさい」

「師匠の命令でも聞けねえよ」

割り込むようにして、この頃ようやく使えるようになってきた細身の剣を突き出す。

「ほお、こいつが話に出てきた少年か」

王は余裕を持って剣を躲しながら、微笑む。

「少し相手をしてやろう」

ロスバツハーを蹴りつける。

「ぐはっ」

そのまま壁に背中を打ったロスバツハーは気を失った。それを横目にして、クリスタは突きを繰り出していく。

「くそっ、この」

しかし、何度やっても掠りすらなかった。

「どうしたどうした。こんなことじゃ自分すら守れんぞ」

カシス王が自らの剣を取り出す。軽くクリスタの剣をいなし、峰打ちで叩きつけてきた。

「ぐあっ」

クリスタが弾かれる。すぐに立ち上がり、構えを取る。だがすぐ側に王は駆け寄ってきていた。

「甘いつ、体勢を立て直すのが遅いぞ」

王の手から雷が発せられる。弱くはあるが、ヴィターゴだ。

「うわっ」

体が痺れ、激痛が走る。

クリスタは堪らずその場を離れた。

それでも王は素早く追ってくる。

「バカな、俺と同じくらい速い」

素早さには自信があったクリスタだが、追いつかれてしまう。

「逃げていて良いのか？ 大事なものが守れなくなるぞ」

王はそう言って急に反転した。

そこにはナティアがいた。

「しまった！」

王はナティアの背後に回り、手を後ろに組み伏せた。

「ああっ」

身じろぎしたがもう遅い。クリスタはどうすることもできずに立

ち止まってしまった。

「どうする、少年。大事なものが壊れてしまっても良いのかな？」

王がつかんだ腕に力を入れる。ナティアが苦しそうに顔を歪めた。

「うう……クリスタ……私は大丈夫だから」

そうは言うが、大丈夫そうにはとても見えない。クリスタは考えた。

（どうする？ フォンドールや師匠をあっさり倒したヤツだ。まともによっても勝ち目はない）

周囲を見回す。

全員が倒れていた。

だが、クリスタはそこから情報を拾っていた。使えるものがある。

そして、これなら戦える。そう確信した。

「どうした、降参か？」

王がクリスタに詰め寄る。クリスタは待った。

「ふん、俺には月も星も太陽もある。俺の輝ける魂を差し出すつもりはない」

クリスタは笑った。

視線はナティアに向けている。その意味を、彼女は微笑み返すことで了承した。

「何を言い出すかと思えば……」

王が嘲笑を浮かべた瞬間、クリスタは叫んだ。

「リビタっ」

王の背後から銃弾が飛ぶ。

唯一気を失っていなかったリビタが、密かにクリスタに合図を送っていたのだ。

「うおっ」

突然のことで油断していた王は大げさに避けた。

その隙にナティアが王の手から逃れる。

クリスタは別の方向に走っていた。

「くっ、どっちを」

王が寸の間迷った時、ナティアが「輝ける魂をあなたに捧げます……ザバスっ」と光を増幅する力を放つ。

「ぐわっ」

王が初めて悲鳴を上げた。

「クリスタっ、今だよ、やっちゃえっ!!」

ナティアの声にクリスタが応える。

「おうっ」

彼はウトコのパーフェクトアローをボード代わりにし、勢いをつけて滑り込んでいた。

加速のついたクリスタは、王が振り返る前にその眼前に到達する。

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

ボードから飛び上がり、蹴りを放つ。

「なああああっ!!」

王が仰け反り、蹴りが胸元に炸裂する。

王が、倒れた。

クリスタが感極まって叫ぶ。

「ったあ!!」

拳を握る。

そして、見事に倒れた王は、そのまま高らかに笑った。

「ふはっ、ふはあははははっ」

そのあまりの声の大きさに、クリスタは王の気が触れたのではないかと思った。

だが、それは違った。

「見事だ、見事だな。ロスバツハー、良い弟子だな。それともお前の鍛え方がよいのか?」

王がロスバツハーの方を向くと、背中をさすりながらロスバツハーが答える。

「もちろん、私の鍛え方がよいのですよ」

「ふんっ、相変わらず口の減らない男だ。リビタ、最後の助けは余

計だったのではないか？」

今度はリビタが起き上がり、埃を払う。

「そうでもなきゃ、あの状況で勝てるかよ」

「まあ、それもそうだな。ウトコ、もう少し本気を出して良いのだぞ」

ウトコは座り込んで王に微笑む。

「あら、わたくしが本気出したら、王様死んじゃいますわよ？」

「何を言うか、私だってまだまだ余裕だったのだぞ。なあフォンドールよ」

フォンドールがムクリと起き上がり、頭を掻く。

「父よ、あなたは少し大人しくしておいた方がよいと思うのだが」

「堅いことを言うな。お前たちとこうやって運動することが楽しみなのだ。それに、今回はゲストもいたことだしな」

カシス王は起き上がり、玉座へと向かう。フォンドールたちも玉座の下に集まり、片膝を付いて王を迎える。

「何をしているんです、クリスタ。王の御前ですよ。伏しなさい」

ロスバツハーが言うが、クリスタは動けずにいた。

「な、なんだよこれ。どういうことだよ」

「何が何なんだか……どういうこと？」

ナティアも目を見開いている。

その問いには、王が自ら答えた。

「良い、ロスバツハー。私が悪いのだ。少年……クリスタよ。そして星の鎖、ナティアよ」

王はそう言ってクリスタとナティアを近くまで呼び寄せる。

「悪かったな。何も知らんままで驚いただろう。いつものことなのだ。私とフォンドールが親子だということは知っておろう？」

「さっき初めて聞きました」

「そうかそうか。私はフォンドールに跡を継いでもらいたかったのだがな。思いのほか、こやつが強くなってしまっただけ。それで約束しているのだ。私に負けたら、勇者を辞めて王位を継ぐ、とな」

フォンドールが頷く。

「正直言って、父は強い。恐らく単身では負けるだろう。星の力を幾種も使いこなし、剣技はなみいる將軍たちよりも高く、齢五十を過ぎてもまだ筋肉に衰えはない。だが、俺には仲間がいる」

リビタ、ロスバツハー、ウトコを見回す。そして、クリスタを見た。

「今回はな、お前を父に見せたかったのだ。もちろん、我らも精一杯戦ったが、それ以上にお前に活躍してもらいたかった」

クリスタは心の中で「下がっているって言った癖に」と毒づいた。しかし、クリスタは満足でもあった。フォンドールたちのように格好良く戦えた訳ではないが、力になることができたのだ。

「ま、そういうことなら、仕方ないかな」

満更でもない顔をする。その頭をロスバツハーが小突いた。

「調子に乗るんじゃないよ」

「いてーな、分かってるよ」

師弟のやり取りをカシス王が笑顔で見ている。

「よいよい。クリスタよ、お前もこうして戦えることを証明したのだ。無事合格というところだろう」

王の言葉に皆が頷く。

二人、クリスタとナティアだけが分からないでいた。

答えを待つように黙っていると、王が懷から何かを取り出す。

「これを持つが良い。城下にはフォンドールのスターエクスカリバーを作成した鍛冶屋もある。勇者たるもの、星具の一つも持たんな」

手渡されたものは一枚の銀板だった。そこにはBraves Associationのロゴと、クリスタの名前が彫ってある。

裏を見返すと、いくつかの注意書きが書いてあった。

そして、表の名前の下には「この者をジャネフ国所属の勇者と認める」とあり、王の印が彫ってあった。

「えと、これってつまり……？」

「分らんか？ 正式に勇者と認められたのだぞ」

フォンドールがクリスタの肩を叩く。

ナティアは即座に理解したらしく、目を輝かせて祝福した。

「おめでとう、クリスタ。良かったじゃない！」

手を取り喜ぶが、当の本人は無反応だった。

「？ クリスタ、嬉しくないのですか？」

師匠たるロスバツハーが訝しげに問う。

それでもクリスタはじっと勇者の認証を見つめるだけだった。

クリスタはその表面をなぞってみた。

自分の名前がしっかりと象ってある。

今度はそれを頭上に掲げる。

もうその頃になると、皆がクリスタの気持ちを分かってくれていた。

嬉しい。

嬉しくて嬉しくて仕方がない。

クリスタはそれを一つ一つ確かめているのだ。

今この瞬間しか味わえない喜びを、あらゆる方法で感じているのだ。

やがて、クリスタの目に涙が浮かんでくる。

この時のために、まずはこの時のためにフォンドールたちに付いてきた。

辛い修行も、恐ろしい敵も、この時のために対峙してきた。

ポン、と肩に手が置かれる。

振り返ってみると、ナティアだった。

彼女は笑みを浮かべている。

思い出す。

故郷のセレスタンで見た、あの笑顔だ。

クリスタが、ナティアを守ろうと決意した、あの時の。

思いを新たにし、クリスタはナティアの手を取った。

「ナティア。お前のことは、俺が絶対に守ってやるからな」

ナティアは頷く。そして、笑顔から涙を一滴、こぼした。

9 《フォンドール3・俺よりも強くならんかったら許さんからな》

場がひとまず落ち着くと、扉から家臣たちが続々と入ってきた。どうやら今まで人払いしていたらしい。

カシス王は改めて衣装を替え、王冠をかぶり、玉座に座り直す。

「皆のもの、待たせたな」

王様というのはどうにも面倒なものだとクリスタは思う。

どんなに実力があろうとも、まずは体裁が必要なのだから。

フォンドールを始め、全員が膝を付き、顔を伏せる。

側近であろう人物が王の脇に侍り、号令をかけた。

「勇者フォンドールとその一行よ。此度のヴィシー村の開放、ご苦労であった。その功績を称え、ここに一万シトロンを進呈する」

ウトコが立ち上がり、おずおずと側近の前に歩み出る。そして、賞状でもいただくかのように恭しく礼をして報奨金をもらう。

ちなみに一シトロンは日本の金額に換算すると百円程度。つまり、一万シトロンは百万円、というわけだ。

「さらに、勇者クリスタよ」

呼ばれて、クリスタはびっくりして顔を上げた。初めて勇者と呼ばれて、何だかむず痒い気がする。

「御前である、頭が高い」

だが、顔を上げてしまい、叱られた。リビタが隣でクスクス笑う。小さな声で「ばーか」と聞こえた。

顔を赤くしたクリスタに、側近は続けた。

「世界の宝を保護したと聞いている。その甚大なる功績を称え、星具一揃えとフォンドール一行との携行権、さらには全世界での活動の保護を約束する」

促され、クリスタは前に出た。側近の手には赤い布の敷かれた盆があり、その上にいくつかの星具が乗っていた。

一つは通信の星具・夢見の鏡だった。

後は一定の大きさまでのものを転送する空間転移の星具・異界の袋もある。

いくつかある中で目を引いたのは一枚の紙だった。そこには「専用星具の製作依頼」と書かれてある。

「これは？」

クリスタが問うと、ロスバツハーが代わりに答えた。

「クリスタ、これから長い旅をする中で強力な敵と戦うことも多いでしょう。確かにあなたには素早さという武器がありますが、それだけでは戦えない。やはり専用の武器を持たなければ」

ロスバツハーが手配してくれたらしい。王権の指示がなければ造ってもらえないほど大事なものの貴重なものなのだ。

他のものは権利だった。フォンドールたちと一緒に旅をすることを許され、そのために全世界で活動が保護……つまり優遇されると言うことだ。

何しろ国内ですら戦闘や住民の協力を得るには苦勞する。いくら勇者だからといって、それに快く手を貸す必要はないのだから。それら阻害条件を国王の名の下に排除、または改善してくれるというのだ。さらには国外にまでその影響を及ぼしてくれる。これほど嬉しい権利はなかった。

それらの贈呈式の中、続いて言葉があったのは、意外にもロスバツハーとウトコだった。

「二人はまだ専用の武器はあれど、星具としての力は備えていなかったであろう。この機会にクリスタと一緒に製作してもらおうが良い」二人とも迷っているようだった。クリスタはそれを不思議に思う。武器が強くなるのなら、喜ばしい事じゃないだろうか。

しかし、そのことについて深く考える前に、王がようやく口を開いた。

「皆のもの、顔を上げてくれ」

言われて、全員が顔を上げる。同時に、側近が脇に下がった。

「これから、勇者フォンドール一行はウェルチに下ってもらう。そ

こで女王モモに会い、今後のことを相談してくれ。夢見の鏡で話しても良いのだがな。モモが会いたがっているのだ。ナティアにな」名前が出て、ナティアは首を傾げた。

「私は……女王様と面識がありませんけど？」

「何を言う。面識などなくても、宗教に携わる人間として神に直接出会える機会を逃すはずがなろう」

つまりはただのワガママということだ。誰も口に出さなかったが、苦笑を漏らしていた。

「あはは……分かりました」

「まあそれだけでない。私もロスバツハーから詳しい話を聞いた。何でも神のタマゴから真の神となるためには星の鍵というものを手に入れねばならないとのことだな」

「はい、その通りです。ですが……それがどんなものか、全く分かっていません」

「ふむ、残念ながら私もそのことに関しては全く知らぬ。だが、世界一のコルディア教国であるウェルチであれば、何かヒントが……いや、場合によってあそこに鍵がある可能性が高いのではないかと私は思っている」

「あ……そうか」

ナティアが頷く。確かに、そんなに大事なのならウェルチ国で保管されていたり、どこかに伝承としてでも伝わっている可能性がある。行って調べる価値はある。

「なるほど、カシス王よ、貴重なご意見痛み入る。では、我らは準備が整い次第、出発するでしょう」

フォンドールが代表して挨拶し、場は解散となった。

最後にカシス王が宴席を開くので出席して欲しいと申し出る。

「了解した。勇者フォンドール、ロスバツハー、ウトコ、リビタ、クリスタ、そして星の鎖ナティアの全員で参加させていただく」

「ふむ、了承してもらい、助かる。だがな、フォンドールよ」

王は玉座の肘掛けに手を付き、それに顎を乗せてフォンドールを

あきれ顔で眺める。

「お前はあの堅い返事をナントカできんのか？　もうセレモニーは終わったのだぞ。親子としてくだけた会話をしようじゃないか」

フォンドールは表情を崩さないままに答える。

「仮にも王と勇者、雇い主と雇われものであるが故」

「まあまったく。ロスバツハー、ウトコ。お前らの教育が悪いのではないのか？　少し厳しくしすぎではないか？」

王の言葉にロスバツハーが苦笑する。

「そんなことはありませんよ。むしろもっと厳しくしたいくらいです」

「王子様は元からしっかりしてるんですよ。王様、ヴァームも言っていますわ。人を変えるよりも自らを変えよ。人に求めるよりも自らを捧げよ、って」

つまり、王がフォンドールに合わせてあげればよいのだとウトコは言っているのだ。

「しかしだなあ、幼少の頃からこいつはこんなだぞ。パパとして抱っこをせがまれたこともなければ、オモチャをねだられたこともないし、ましてやキャッチボールや男同士の話しすらしたことがないのだぞ？」

ふくれ面で文句を言うカシスを、ナティアが笑う。クリスタは何となく笑えないでいた。男って、そういうところがあるからだ。

「ふふふ、王様、人にはそれぞれの幸せがあります。他人と違うからと言って、それが不幸であるとは限りませんよ」

ナティアの言葉に、王がキョトンとした顔をする。

少し考えた後、ウトコを見て何かを目で訴えた。

そして、ウトコは首を振って否定する。

「ふむ、ナティア。その言葉は……ヴァームの言葉か？」

聞かれたナティアも首を横に振った。

「いいえ、私の言葉です、王様」

にっこりと微笑んだナティアを、王はじっと見つめた。それから

何かに思いを巡らす素振りを見せ、納得したように首を何度も揺らす。

「なるほど、神のタマゴというのは嘘ではなさそうだ。ナティア……いや、ナティア殿、忠告痛み入る。私は無いものを求めすぎたようだ」

急に態度を変えた王を不審に思いながらも、ナティアは言葉を引き継いだ。

「え、ええ。そうですよ。無いものを求めるよりも、今あるものを大事にしないと」

気が付けば、ウトコが隣でナティアに祈りを捧げていた。

「え？ あ、あの……ウトコ・サ・ン？」

それを認めて、ナティアの動きが固まる。

「さすがは神様ですわ。素晴らしいお言葉だと思いますの。ねえ王様、わたくし、ナティアさんのお言葉を聖典として記録しておくべきじゃないかと思うんですけれど？」

余計な提案に、王が頷く。

「おお、そうだな。神の生の言葉など滅多に聞けるものではない。幸い、大昔と違い、今は声を記録する星具がある。すぐに手配させよう」

何だか不穏な方向に話が流れている。

ナティアはクリスタの方を見て涙ぐんだ。

クリスタはナティアの気持ちを読み取り、抗議を始めた。

「ちよ、ちよっとちよっと王様、王様！」

「なんだクリスタ、今大事な話をしているのだ。邪魔をするな」
一喝されてしまった。弱小勇者には力がない。権力もない。
イジイジしているクリスタを、ナティアは苦い顔で見ていた。

「もー、クリスタ、頑張ってよお」

ポカポカ頭を叩く。

しかし、クリスタにはこれ以上何も言えなかった。

「よし、まずはパレードを開いて、王城から町まで馬車を引かせよ

う」

その間に、王様とウトコは暴走していた。リビタはニヤニヤ笑いながら二人を見ている。

そんな二人に、近付く姿がある。

「こら、お前らはいいい加減にしろ」

ポカ、ポカ、とウトコとカシスを小突く。

「いたいです」

「むう、何をする、フォンドール」

文句を言う二人に向けて、フォンドールが腕組みして怒る。

「まったく。ナティアが困っているのが分からんか。神のタマゴと言えど、ナティアは一人の人間でまだ若い女の子だ。そのような晒し者のような真似をするな」

言われて初めて王はナティアをマジマジと見た。

ウトコは何度も言われていることで、しまったという顔で首をすくめる。

「うー、すまん」

王様が謝る。

それを見てナティアがホッとした顔をする。

「分かれば良いのだ。父よ、宴席を開くのなら一つ頼みがあるのだが」

「ん、なんだ？」

フォンドールはナティアの方を見てからもう一度王に向き直る。

「宴席にナティアの友達を呼びたいのだが」

「ほお、それは良い考えだ。ぜひ出席してもらおう」

その答えを聞いた瞬間、フォンドールがニヤリと笑う。今まで見せたことのない、いたずらっぽい笑みだった。

そして、数時間後。

王は吠えていた。

「なんだこれはっ！　ワイバーンではないか！」

> i21187—2884<

「ほお、よく分かったな。見た目は犬のようだと思うが」

「見ろ！　私を喰おうとしてるぞ、この禍々しい牙を見る」

クーは騒いでいる王を敵と見なし、攻撃しようとしていた。

巨大な口は無数の牙が並んでいる。

王を守るため、たくさんの兵士たちが主の前に出てくる。

が、クーが吠えると、全ての兵士が固まってしまった。

「あははは、安心しろ。クーはワイバーンだが、ナティアの守護獣だ。決してむやみに襲ったりしない。まあナティアの敵と見なせば別だがな」

「うー、先程の仕返しだな、絶対にそうだな、フォンドール」

「さあな、やましいことがなければ何も心配する必要はないだろう？」

フォンドールがクーを抱き上げる。

クーは騒ぎになるとまずいので、町外れで待機してもらっていたのだ。

ナティアはフォンドールに向かって頭を下げた。

「ありがとう、フォンドールさん」

それから、クリスタを見る。

「ほらー、クリスタもこれくらいできるようにならなきゃ」

背中を叩かれて、むせる。フォンドールと比べられては形無しだった。

「ごほごほ、分かったよ」

ばつの悪そうな顔で、頭を掻く。

王はまだ警戒していたが、クーはその外見の愛らしさからすぐに皆に受け入れられた。

席に着くことはできなかったが、きちんと食事と専用の場所が用意される。

「さあ、今夜は遠慮せず、たっぷり食べて吞んで楽しんでくれ。勇

者たちから珍しい話しも聞けよう」

王の挨拶で宴会が始まる。

大臣も兵士もぎっくばらんに座り、同じ食事を囲んでいた。

その様子を見て、クリスタは驚いていた。

「こんなことってあるんだな」

「どうしました？」

「いや、師匠。だって、普通はこういう所ってちゃんと席順があったり、兵士は別の部屋だったりとかするんじゃないの？」

「ああ、これも王のワガママですよ。きちんとしようとするれば、フォンドールは一兵士と同じ扱いを求めるでしょう？ だから誰もが分け隔て無く座り、同じものを食べる。そうすることで初めて王とフォンドールは同じ席を囲むことができるんですよ」

ロスバツハーの説明通り、カシスはくだけた笑みを見せている。本当に嬉しそうだ。

「王様、フォンドールのことが本当に大事なんだな」

「当たり前でしょう、親なんだから」

少し、クリスタは故郷の良心のことを思い出した。

「ですが、ただのワガママではないんですよ。この宴席はフォンドールが帰ってくる度に関われますが、それだけではありません。祝い事がある度に関われます。家臣たちも楽しみにしています。王と気さくに話すことができるのですからね。王も、この機会に家臣の生の言葉や市民の声を聞くことができる。それはきちんと政策に反映される。だてに賢王と呼ばれていませんよ」

「ふーん」

クリスタは改めて王を見た。言われてみると、王はフォンドールだけでなく、若い兵士とも酒を酌み交わし、談義している。

フォンドールはそれを見て、目を細めていた。

なんだか楽しそうだ。

「ふーん」

クリスタはもう一度呟いた。

なんだ、結局仲良いんじゃない。

「良い親子だね」

隣からナティアが声を掛ける。

「んあ？ そうだな」

気のない返事をするクリスタを咎める。

「何よ、どうしたの？」

「んー、なんかずりーんだよ。仲悪い振りして仲良かったり、知らない振りして知ってたり」

クリスタの不満は、ナティアにはよく分からなかった。

「どういうこと？」

「なんつーか、みんな、大人なんだな、って思ってた」

悔しいのだ。早く大きく、強くなりたい。そうすればまっすぐに見つめていなくても分かっているのに。

「?? わけがわからないよ」

ナティアは首を傾げている。

その横からリビタが口を挟む。

「はっはっはっ、ようするにあれだろ、てめえも早く大人になりた
いんだろ？ 強くなりてえんだろ？」

「……………そうだよっ、悪いだよ」

「悪かねえよ、早く強くなりやがれ！ あたしよりも、フォンドー
ルよりもさ。ナティアを守るようにな」

リビタがクリスタの頭をくしゃくしゃに掻き回す。されるがまま
のクリスタは、でも嬉しそうだ。

「おうっ」

そんな二人を見て、ナティアは何となく理解した。そっとクリス
タに顔を近づけて、頬に指を当てる。

「そっか、分かったよクリスタ。早く強くなってるね」

「お、おう」

「待ってるよ」

軽く頬を弾く。

その行為にクリスタが照れる。

リビタがからかう。

ロスバツハーがクリスタに宣言した。

「良いですか、クリスタ。晴れて勇者と認められ、星具を持つことも許されたのです。明日からの特訓は今までの比じゃありませんよ」
ぐっ、とクリスタが息を呑む。

しかし、彼は手を空に向かって突き上げた。

「おうよ、望むところだ！」

騒いでいる四人を見て、フォンドールが近付いてきた。

「どうした、ずいぶん楽しそうだな」

酒が入っているからか、フォンドールもいつもより相好を崩している。

リビタがクリスタの代わりに答える。

「クリスタがな、お前よりも強くなるんだとよ」

その瞬間、フォンドールが大きく口を開けて笑った。

「なにい、わっはっはっはっはっは」

そして、がっしりとクリスタの首に腕を巻き付ける。

「言ってくれるな！ 良いぞ、いつでも挑んでこい。勝負してやるぞ」

グリグリと頭に拳を押しつけた。

「いて、いてーよ、おっさん」

「うるさい、誰がおっさんだ。俺よりも強くならんかったら許さんからな」

どでかい声で喚く。

「どうしたんだよ、おっさん、いつもと違うぞ」

「えーい、俺だってたまには羽目を外すのだー！」

と、腕を突き上げたままばったりと倒れる。

「おっさん？」

「フォンドールさん？」

「フォンドール！」

ロスバツハーが慌てて抱きかかえる。

フォンドールはイビキをかいて寝ていた。

それを見て、ロスバツハーが溜息を吐く。

「まったく、飲めない癖に」

結局、その日は王城に泊まることになってしまった。

それぞれの部屋をあてがわれて、ロスバツハーはフォンドールをおぶって部屋まで連れて行くことになった。

「よっぽど嬉しかったんでしょね」

ぐーすか寝ている友を見て、苦笑する。

その友が、身じろぎする。

「ん……あれ？」

自分の状態が分からないらしい。

「起きましたか、フォンドール」

「え？ 俺はどうしたのだ？」

「どうしたもこうしたありませんよ。酒に酔って寝てしまったんです」

そう言われて思い出したのか、大きく溜息を吐いた。

「はあ……すまん、ロスバツハー」

「別に良いですよ。それよりも降りてもらえませんか？ 重くってフォンドールが慌てて自分で立つ。」

並んで歩きながら、フォンドールは言った。

「これで最後になるかもしれんと思うと、つい、な」

「バカですか、あなたは」

「面目ない」

「そうじゃありませんよ。たまには甘えてみたらどうですか、と言ってるんです」

ロスバツハーの言葉の意味を理解し、それでも首を横に振る。

「それをしては、離れられんではないか」

「あなたは政治をやっても良いと思うんですが」

「もう少し、世界を見たい。自分の進むべき道が決まるまでは」

頑固な友人に、ロスバツハーは笑いかける。

「しかたありませんね。くれぐれも死なないでくださいよ」

「ああ、分かっている」

フォンドールがロスバツハーと肩を組んだ。

ロスバツハーはそれを嫌がらない。

「たまには、朝まで語らんか？」

「悪くないですが……耐えられますか？」

「俺が、耐えられるまで、だ」

そう言い、笑いあいながら二人は部屋へ戻っていく。

静かな廊下に、二人の声がこだましていた。

10 《ロスバツハー1・守りたいものができたのです》

地獄は、今に始まったことではなかった。

そう、朝、ロスバツハーのあまりにも爽やかな笑顔を見た時に覚悟していたはずだった。

「クリスタ、後五十回ですよ」

クリスタの頭上からロスバツハーの声がする。

スクワットもすでに百回を超えていた。バスケットで鍛えていると言っても、こんな無謀な訓練はしたことがない。

「し、ししょー、この訓練は体を壊すだけだと思うんだけど」

「大丈夫です、これくらいで壊れるくらいの体だったら、一度壊しておいた方が良くと思いますよ」

言っている意味が分からない。

そうやって気を抜くと、途端にロスバツハーの重さが堪えてくる。

「ぐ、ぐぐぐ……うおおおおっ」

力を込めても、それはただの一回切りの馬鹿力だ。

「ぐはっ」

たまらずクリスタは地面に倒れ伏した。

ロスバツハーは上手い具合に着地している。

「まだまだですね。良いですか、いくら素早さがあっても、最低限の筋力がなければ敵には勝てません。例えば……」

そう言って、彼は壁からつるしてある皮でできたサンドバックを殴る。

ボグッ、と鈍い音がして、ロスバツハーの拳がサンドバックにめりこんだ。

「わっ、すげえ」

感心するクリスタを他所に、手を抜き拭った。

「これくらいはできないと」

「うー、でもさ、俺だってスポーツマンの端くれだから分かるけど、

ここまでの筋力は一朝一夕じゃ作れないよ」

「ふむ、まあそれもそうです。ですが、トレーニングは続けなさい。それはそれとして、まずは武器を使いこなすことの方が大事ですね。ちよūd、ウトコと誘い合ってコントレックスのところに行こうと思っていたところです。あなたも来なさい」

言うが早いかさっさと出て行こうとする。

「ちょ、待ってよ」

慌てて追いかける。

トレーニングルームから出ると、ちよūdウトコがロスバツハーと話しているところだった。

「分かりましたわ、すぐに準備するのでお待ちください」

ウトコにはもう話したらしい。

十分後に王城の入口で会おうということになった。

着替え、勇者証と星具製作の許可書を持つ。その他にも授与された星具を一揃え持っていくことにした。

これは、ロスバツハーからどんな時でもすぐに持って行けるようにしておけると言われているものだ。

そのため、全てを異界の袋に入れて保管してある。

それから十分後、ウトコが先に来ており、ロスバツハーはまだだつた。

クリスタはウトコに手を挙げて挨拶する。

「ウトコ、待ったか？」

「いいえ、待ちませんよ」

のんびりと答えるウトコにほっとする。

「師匠は？」

「まだですわ」

「自分が時間厳守って言った癖に」

「ちゃんと来ているぞ」

「うわっ」

いつの間にかロスバツハーが後ろにいた。

クリスタの頭を小突くと「さっさと行くぞ」と率先して歩き出す。
「まあまあ、ロス、待っていただけないかしら」

そう言いながらもウトコが後を付いていく。

クリスタもその後を追いかけた。

何度も来ているらしく、ロスバツハーは迷うこともなく目的地へと進んでいった。

路地をいくつも潜り抜ける。

建物の陰に入り、光が薄くしか射さない。そんな光景を見ていると、故郷を思い出す。

あの町の路地裏も、こんな感じだった。クリスタの思い出はナテ
イアの笑顔まで辿り着く。

『笑ってる方が素敵だよ』

あの言葉を、思い出す。

クリスタが思いにふけていると、ウトコから声をかけられた。

「クリスタさん、着きましたわよ」

そこは、見た目にも古びた工場だった。中からはひっきりなしに
金槌の音がする。

窓が割れており、そこから音が漏れているのだ。

「ここが、王国ご用達の鍛冶屋？」

「そうです。コントレックス爺さんは、金は持つてる癖にこの工場
が気に入っていると言って改装すらないんです。でも、腕は確か
ですよ」

「さあさあ早く入りましょう」

ウトコがドアを開ける。

「誰じゃ！」

途端に怒鳴り声が聞こえ、何かが飛んでくる。

ウトコはそれをパーフェクトアローで弾いた。

カッン、と床に落ちたそれはこぶし大もある大きな金槌だった。

「うわ……アブな」

「相変わらずですわね、おじいさん」

「ふん、なんじゃウトコか。何しに来た」

「爺さん、すいませんが星具を作ってもらいたいのです」

ロスバツハーが訳を話すと、コントレックスは三人を見回した。舐め回すように何度も何度も行き来して、それからロスバツハーの体を触りまくり、次にはクリスタ、最後にウトコを触ろうとして逃げられる。

「きゃあ」

「ふん、別にイヤらしい気持ちで触つとるわけではないわ。ワシが造つとるのは大量生産品じゃない。たった一人の人間にぴったりの作品を造るのじゃ。そのために使う本人を知らずして造れるわけがなからうて」

そう言われては拒否することはできない。

ウトコは背筋が寒くなるのを我慢してコントレックスが触るに任せた。

「うわわわわ」

奇妙な悲鳴が漏れる。だが、さすがに職人だけあってイヤらしい手つきではなく、ウトコも次第に不快に思わなくなっていた。

コントレックスはその後もう一度クリスタに触れた。

特に足の部分を念入りに触る。

「ふむふむ……お前さん、何かスポーツしとるな？　こりゃ剣士の体つきじゃないわい」

「え？　分かるんですか。俺、バスケしてたんですけど」

「してた？　まだまだ現役じゃろ」

「……」

クリスタは黙ってしまった。ロスバツハーには知らせずに、こっそりとバスケット用のトレーニングも継続していたのだ。

ロスバツハーにも、コントレックスの言葉の意味が分かったらしく、クリスタを睨み付ける。

「何も悪いことはない。上半身も比較的バランス良く鍛えてある。バスケットボールか。上腕筋が良い具合になっておるわ」

「すごいな、爺さん。触っただけで分かるのか」

「馬鹿言え。ワシが何人の勇者を見てきたと思っておるのじゃ。おぬしはあのロスバツハーよりはマシな勇者になるわい」

そう言われて、思わず顔がほころぶ。だが、コントレックスはその言葉を少し覆した。

「いや、逆じゃな。あやつが勇者の資格を持つとらんのだ」

ロスバツハーを睨み付ける。

彼も、コントレックスを睨み付けた。

険悪なムードに、ウトコが間に入る。

「はいはいはい。ケンカはそこまでですわよ。おじいさん、それで、わたくしたちの星具、造っていただけますの？」

気を殺がれたコントレックスが頭を掻く。

「ふん、そうじゃの。造ってやらんこともない。その前にその若造、こっちゃ来い」

そうやって連れて行かれたのは工場の裏手にある立派なトレーニングルームだった。

「うおっ、なんだよこれ。工場はあんなに汚えのに」

「余計なお世話じゃ。トレーニングルームがボロボロでは怪我をするじやろうが。それにな、あの工場も見た目はボロに見えるかもしれないが中身はなかなかのもんじゃぞ」

言われてみると、機械の一つ一つがピカピカに磨かれている。床もこれだけたくさんのもものが溢れているのにほとんど散らかっていない。

クリスタは中に通される。

そこにはガランとした空間とは別に、いくつかの道具が置いてあった。

「まずは走ってもらおうか。こっからあそこまでダッシュを十本。

ほら行け！」

「えー！」

「グズグズ言わんで行かんかつ、星具を作ってもらいたいのじゃろ」

「クリスタ、言う通りにしなさい。爺さんがヘソを曲げたらもう戻りませんよ」

「分かったよ。見てろよ！」

クリスタが持ち前の脚力でダッシュを繰り返す。

「ほほお、なかなかのもんじゃないな」

「どうです？ 私の弟子は」

「お前の弟子にしちゃ、なかなかのもんじゃない」

嫌みを言って、それからロスバツハーに向き直る。

「しかし、どうした？ あれほど星具を嫌ったお前とウトコがいつの間にかウトコもロスバツハーの隣にいた。

彼は少し俯いて、それから顔を上げる。前後で表情がわずかに硬くなり、そのぶん決意のほどが見えた。

「守りたいものができたのです」

「わたくしもですわ」

「なにをじゃ？」

コントレックスは間髪入れずに問う。

「……この星の未来を」

ロスバツハーが答える。

「わたくしは、ロスを」

ウトコがロスバツハーを見つめながら話す。

その返答にロスバツハーが飛び退いた。

「な、なんですか？」

「あらあら、わたくしは本気ですわよ」

二人の言い合いに、コントレックスはそっぽを向いた。

「ふん、なんのことは良く分からんが……なかなかいい顔をするようになったではないか。二人とも」

コントレックスの口元に、笑みが浮かんでいた。

「もう一度問おう。ロスバツハー。お前はどんな力が欲しいのじゃ」
ロスバツハーがすぐに口を開いた。すでに考えていたらしい。

「あらゆる場面で周囲をサポートできる星具が欲しいのです。近距

離、遠距離、さらには攻撃も防御も」

「贅沢なやつじゃな」

「それくらいでなければこれからの戦いには勝てません」

「よっぽど手強い奴らを相手にしとるのだな」

「ええ、恐らく」

ロスバツハーが拳を握りしめる。

コントレックスの視線はウトコに向いた。

「おぬしは、何を望むのじゃ？」

「わたくしは、得意の防御と回復に特化したいと思いますわ」

「攻撃は捨てるのじゃな？」

「それについては別の考えがございますわ。わたくしばかり、守られているわけにはいきませんもの」

ウトコがそれを話そうとした時に、クリスタが戻ってきた。

「なんだよ、爺さん。見たのか？」

「ん？ おお、見とったぞ。大した足じゃな。次はこの……」 そう言ってバスケットボールを取り出す。

「ボールをあの前壁の一点に目がけて投げてもらおうか」

向こう側の壁に的が描かれていた。

「いいぜ、これから良いんだよな？」

ゆうに十メートルはあった。

「そうじゃ。これくらい届かんようならワイバーンとは戦えん」

確かに、バスケットで使うような距離では、あつと言う間にクリスタはやられてしまうだろう。

フォンドールのような超近接戦闘向きでなければ。

クリスタが構える。そして、体をバネのように跳ねさせてボールを撃ち放つ。

ボールは緩やかな放物線を描いて、的へ向かっていく。

「いけっ」

クリスタが叫ぶと同時に、ボールは的の端に当たる。

「まあまあじゃな。では次」

言われるままに次々とボールを放つ。

「今度はバスケットではなく投擲するように投げてみる」

爺さんの言う通りに、ボールを投げると、今度は放物線ではなく直線的に飛んでいった。バシン、と大きな音をさせて壁に弾かれる。その代わりに的からは大きく外れた。

「ちえ、やっぱり狙いが付かねえよ」

「ダメじゃな。まあ良い。大体分かった」

「終わりか。で、どんな武器を造ってくれるんだ？」

「せっかちじゃの。考えるのはこれからじゃよ」

コントレックスはなぜかご機嫌だった。

ロスバツハーもそれを見て取る。

「どうしたんですか？ 何だか機嫌が良いようですが」

「見るな、めざといの。面白い材料にあったからじゃよ。普通の勇者には無い逸材じゃな」

「でしよう？ 私の弟子なんですよ」

「そんなことはどうでも良い。出来上がるまで数日かかるぞ。三人分となれば一、二週間待ってもらおうか」

「なんだ、やっぱり結構かかるんだな」

「それでも急ぐ方じゃ。いいか、お前たちはその間、毎日工場に顔をだせ」

コントレックスの命令に、クリスタが不満そうな顔をする。

「変な顔をするな。ワシは星具をお前というたった一人に合わせるために造るのじゃぞ。お前もたった一つのパートナーが出来上がる課程を見ておくのじゃ。良いな？」

仕方なくクリスタが頷く。ウトコもロスバツハーも了承した。

三人は工場を辞し、王城へと戻っていく。

その向こうからフォンドールとリビタがやって来ていた。

「おや、おっさん、どうしたんだ？」

「おお、クリスタか。良い武器は作ってもらえそうか？」

「ん、まだ良く分かんないけどな。買い物か？」

「いや、我らも工場に向かうところだ。リビタのマルチ・リボルバーを修理してもらいな」

リビタを指すと、彼女は困ったように笑った。

「姫さんの星の力で壊れちゃったからさ。ついでに改造してもらおうかな、って思ってたんだ」

「そっか、そうだったな。んじゃ、ナティアは城か？」

「一人で寂しがっておったが、この町でも一番安全なのは王城であろうからな」

バラバラで行動していたからか、連れてくるのは危険だと判断したのだ。

「早く帰ってやれって。喜ぶぞお」

リビタが冷やかす。

「なんだよ」

「なんでもねえよ、ククク」

イヤらしい笑い方をする。

言われたから、ではないがクリスタ、ロスバツハー、ウトコの三人は足早に王城へと帰る。

クリスタがナティアの所へ行こうとすると、ロスバツハーが声をかけた。

「クリスタ。少し用事を頼まれてくれませんか？」

彼の言う用事とは、王城の図書館から本を持ってくることだった。

「良いですか、それを持ってナティアの所に来なさい。私も先に向かっています」

何だか変な感じがしたが、師匠の言うことなので断れない。

「分かったよ。行ってくる」

クリスタの姿が見えなくなってから、ロスバツハーはナティアの下へと向かった。

ノックをする。

「はい」

ナティアの声だ。

「私です。入っても、よろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

中では、ナティアが跪いて祈りを捧げていた。

不思議に思い、ロスバツハーが問う。

「どうしたんです？ 神様であるあなたが祈りを捧げる相手なんて……」

「違うんです。祈るというか、考えていたんです。そうしたら自然にこんな風に」

「なるほど。純粹な祈りとはそんなものかもしれませんね。それよりも話しがあるのですが」

ナティアは立ち上がり、ロスバツハーに向き直った。

「はい。あ、ここではなんだから座りません？」

ナティアに促されるままに椅子に座る。テーブルを挟んで、向かい側に彼女が座った。

「話して？」

ロスバツハーは唐突に言った。

「ナティア、あなたは憶えてないかもしれませんが。私は十年ほど前までアルギニンにいました」

ナティアが意味を理解できずに、目を丸くした。

SS4 《ギネス・コープの日常》

ギネス・コープは悪の組織である。

神様のタマゴ、星の鎖と呼ばれる始祖ヴァームの子孫を人質にし、世界転覆を企むのだ。

「まだか！ まだ星の鎖は見つからんのか！」

首領・ギネスは二人の幹部を前にして怒鳴っていた。

幹部その一、カルヴァドスはセレスタンの町外れで星の鎖を取り逃してからというもの、肩身が狭くなっている。

「はっ、どうやら星の鎖は勇者フォンドール一行に守られ、首都エデンに入った模様でして……」

言葉を濁す。ようするに手が出せないと言いたいのだ。

そんな彼にギネスが杖を投げつける。

「ぐわっ」

「馬鹿もんっ、そんな報告を聞いているのではない！ 学者なら学者らしく先の見通しを話さんか」

カルヴァドスはヴィタモント出身の獣学者だった。

そして、ギネスも学者だった。

彼は考古学者、しかもコルディア教を専門に研究する学者だった。「私が古文書を見つけてからすでに二年、ようやく星の鎖の存在が確認できたのだぞ。この絶好の機会を逃す手は無い。もしあれが覚醒したり、アルギニンに帰ってみろ。もはや手を出すことはできないのだぞ」

ある遺跡で星の鎖に関する古文書を見つけた彼は、星の鎖を人質に取れば全世界を人質に取ったのと同じことになる考えた。

その計画をヴィタモントに持ち込み、この組織を作る手助けとしてもらったのだ。

カルヴァドスはヴィタモント王国付きの獣学者だった。

それが今、こうしてギネスという一介の考古学者に使われている

事に不満を持っている。

だが、逆らう術は無いのだ。ギネスの背後にはヴィタモント国王が居り、さらには古文書の核の部分を解読できているのはギネスだけなのだから。

「重々承知しております。ヴィシー村でも私の部下が失敗しました。この汚名は全力でそがせていただきます」

深く頭を下げる。その裏では「なーに、星の鎖さえ手に入れてしまえばギネスは用無し。後はオルヴァル国王の天下となる」などと考えていた。

その一方、幹部その二であるシャトー・マルゴーは強く主張していた。

「それならば、私に任せてもらえないこと？ わが社の全勢力をもって勇者など蹴散らしてみせるから」

彼女はヴィタモントの大手武器製造会社・シャトーの社長でもあった。

ヴィタモント国王の要請により、このギネス・コープに参加している。

理由はひとえに王の寵愛とこの件による権威、そして戦争が起ることによる莫大な利益だった。

武器は使ってもらえればもらえるだけ王国に購入してもらえる。

それは最近均衡状態にある三国の小競り合いに比べれば、遙かな利益となるのだった。

もう一つの目論見は、星具の製作法にあった。

ヴァームの子孫である星の鎖が手に入れば、星の力の解明が可能になるかもしれない。そうすれば、ジャンペフ国の極秘とされている星具の製作法についても目処が立つかもしれないのだ。それが大量生産できれば、利益は計り知れない。

彼女は全て計算で動いていた。

「ふむ、だが、今大きく動いて戦争になりでもしたら……」

ギネスは弱気になった。

ギネス・コープがいまいち積極的にフォンドールたちを襲ってこないのは彼の弱気に原因があった。何しろ元が考古学者である。戦争や陰謀が得意なわけではない。彼はただ、歴史に残りたかったのだ。

「ギネスさま、そんなことを言っている場合では……オルヴァル国王も急いておられます。それにあなたも言われていたではありませんか。チャンスは少ないのだと」

マルゴーが熱弁する。ギネスは徐々に考えを固めつつあった。

何かあれば、オルヴァルが助けてくれるとも思っていた。

打算的で、かつ杜撰であった。

「よし、ではまずはマルゴーからやれば良い。ただし、エデンの中で戦争は困るぞ」

「ありがとうございます。分かりましたわ。私の部下は、ゲリラ戦も得意ですよ」

ニヤリと笑うマルゴー。

その横で、カルヴァドスも頭を下げたまま笑っていた。

ギネスが用無しになるのも近い。

SS5 《クリスタのおつかい》

ロスバツハーに頼まれたのは、王国図書館にある一冊の本だった。それにはまず、国王の許可を取らなくてはならない。

クリスタは手近な文官を捉まえて、用件を話す。

「あの、師匠……ロスバツハーに王国図書館の本を持ってくるように頼まれたんですけど」

「ふむ……ロスバツハー殿から？　して、そなたは誰かな？」

「あ、えと、こういう者です」

そう言って異界の袋から勇者証とフォンドールたちとの随行許可書を出す。

「ふむふむ……おお、話は聞いておりますぞ、この世界の大事な宝を守ったとか。ワイバーンにも怯まない類まれなる勇者であるとお聞き及びしております」

文官のお世辞に照れつつ、用件を急いでもらう。

「あの、ありがとうございます。それで、許可をいただきたいんですけど」

文官は自分のお喋りを恥じた。

「これは失礼した。王国図書館の貸し出し許可でしたな。それならば大臣殿におつなぎいたしましょう」

文官に付いていくと、彼は執務室の扉を開けた。

「左大臣殿、勇者クリスタ殿が王国図書館の貸し出し許可をいただきたいそうです」

左大臣はいきなり入ってきた文官に一瞬怪訝な視線を向け、それからすぐに相好を崩す。

「おお、シュタイナーではないか。良く勇者殿を連れてきてくれた。まあ座りなさい」

シュタイナーと呼ばれた文官は、言われるままに椅子に座る。クリスタもそれを真似て隣に座った。

「まずはお茶と菓子でもいかがかな？」

左大臣のアコーが尋ねてくる。クリスタはそれを丁寧に通した。

「なるほど、急ぎですか」

「そういうわけでもないんですが……何しろあの人を待たせると怖いので」

「ふふふ、微笑みの死神、と呼ばれているくらいですからね」

「そ、そんなあだ名が……じゃあなおさら急がないと」

クリスタが席を立とうとする。それをアコーが止めた。

「まあ待ちなさい。おいっ」

パンパン、と手を叩いて文官を呼ぶ。

「図書館の鍵と貸し出し用の書類を持ってきてくれ」

「かしこまりました」

深くお辞儀をして、文官が出て行った。

「それで、どんな書物を借りたいのですかな？」

笑みを絶やさずに左大臣が言う。

クリスタは、ロスバツハーから伝えられた書名をそのまま口にしました。

「【ワイバーンの生態】だったかな」

「ほお、それは珍しい。ロスバツハーさんがその書物の名を知っているとは」

シュタイナーが声を上げる。アコーが

「ん？ そうなのか？」

「ええ、私はたまたま興味があつたので読んでいたのですがね。すでに市井では絶版になっているものですよ。何でも国王自ら禁書扱いしたとか」

「禁書？ なぜ？」

左大臣はそのことを知らなかったようだ。

「何しろ、書いたのがヴィタモントの獣学者でして。なぜか、までは分かりませんが、その辺りが関係しているのではありませんか？」
クリスタの額に汗が吹き出た。

思い出したのだ。あのワイバーンを操る獣学者のことを。

「あの……その作者の名前は……」

シュタイナーが答えようとしたとき、文官が書類と鍵を持ってきた。

「まあ行ってみましょう」

シュタイナーが先導し、左大臣、クリスタと続く。

王国図書館の扉は、厳重に閉ざされていた。

「さて、良いですか、中には禁書もあり、王国の重要書類も納められています。そのため、一般の方は例え勇者であっても入ることができません。私が持ってまいりますから、ここに控えられますよう」

左大臣アコーがそう言ってシュタイナーを連れて入る。

その間、クリスタは嫌な予感がして止まらない。

なぜ、ロスバツハーはそんな本を持ってこさせようとしたのだろう？

その答えは、すぐに分かるのだ。

「お待たせしました」

シュタイナーが手にしている本、そこにはこう書いてある。

【ワイバーンの生態 著者・カルヴァードス】

11《ロスバツハー2・あなたが無事に役目を終えるまで、側で守ると誓います

「ナティア、あなたは憶えてないかもしれませんが。私は十年ほど前までアルギニンにいました」

ナティアが意味を理解できずに、目を丸くした。

ロスバツハーは語る。

「私はアルギニンの出身です。つまり、私もヴァームの子孫なんですよ」

ようやく意味を理解したナティアがロスバツハーの顔をまじまじと見る。

「え？　つと、ロスバツハー……さん？」

「顔は覚えてないだろうとは思いましたが。以前の名前はロスロジックと言いました。村はずれのロス兄ちゃん、の方が分かりやすいですか？」

ナティアの目が輝く。

あまりに見た目が変わっていた。

思いは過去に飛ぶ。

あの頃、ナティアは星の鎖として大事に大事に育てられていた。ナティアの死が惑星の死に直結するため、危ない遊びどころか一人でどこかに行くことさえ許されていなかった。

まだクーも一緒にいない。彼女は友と呼べる人間がおらず、遊ぶのは大人と、しかも大人しい遊びばかりだった。

お手玉、おはじき、スポーツらしいスポーツはできなかった。

まだ不安定な時期、怪我すらもさせてもらえなかった。

「ねえ、お母さん」

「なあに、ナティア」

「私も釣りに行きたいよ」

「ダメよ、川に落ちて溺れてしまったらどうするの？」

「大丈夫だよ」

「大丈夫なんて誰にも分からないわ」

「じゃあ、誰かと一緒なら良い？」

「ダメダメ。例えば大人が一緒でも、何があるか分からないんだから」
一事が万事、こんな有様だった。

ナティアの唯一の楽しみは、庭に椅子を持っていき、本を読むことだった。

世界のこと、コルディア教のこと、動物、ワイバーン、自然、文学、音楽？？？それらの本が、ナティアにとっての窓だった。

「ふしぎ……神様って、外の世界じゃこんな風に思われてるんだ」

それはコルディア教の説話集だった。それによると、神は星を造り、世界を造り、人を造った。神は寝ることも休むこともなく、コークの生命のために働いた、と。

「神様だって疲れるんだから」

実際に、現在の星の鎖は度々休息を取る。それも長い期間。

彼女はすでに百歳を超えていた。もちろん、人間だから体も衰える。今では部屋の中で椅子に座るか、ベッドに横たわっているかのどちらかだった。

そんなことを考えながら本を胸の上に置き、空を見上げていると。

「星の鎖……？」

道ばたから垣根を越えて声をかけられた。

「え？」

声の方を見ると、ぽっこりとした頭が垣根の上から覗いている。

「だあれ？」

椅子から下りて垣根に寄る。頬はまんじゅうのように膨らみ、体もそれに見合うようにほぼ真円を描いている。

ようするに、彼は太っていた。

「僕？ ロスロジックっていうんだ」

偶然かわざとなのか、とにかく彼はナティアに接触した。

「遊ぼうよ」

そう言うと、ナティアが頷いた。彼を庭に呼び、椅子を勧める。

「良いんだ、僕は立ってるよ。君の名前は？」

「私、ナティア」

「体が悪いの？」

「どうして？」

「だって、ここ何日か前を通ったけど、毎日そうやって本を見てる」
「違うの。私が怪我をしたり……死んじやったりするといけないから外に出ちゃダメなんだって」

「そんな……」

ロスロジックが絶句する。

「そうか……よし、それじゃあ僕と遊ぼうよ」

毎日、毎日ロスロジックはやって来た。

ナティア六歳、ロスロジック十三歳、倍以上も年の離れた二人だったが、不思議と話題が合った。

「神様ってふしぎね。何でこの世界を造ったのかしら」

ナティアが疑問を出せば、

「きつと、寂しかったんだよ」

と、ロスロジックが応える。

「そうね、だからコルディア教の教えは人と仲良くすることなんだね」

すっぽりと腑に落ちるのだった。

ナティアは回想する。

「いつからだったか、ロス兄ちゃん、って呼ぶようになったよね」

「そうでしたね」

ロスバツハーが目を細める。

「そんな喋り方だし、すっごい痩せてるし、分からなかったよ」
「そうですか。まあしょうがないですね」

楽しそうに話していたナティアが、ふと真顔になる。

「でも、なんでいなくなっちゃったの？」

いつのことだか、もうナティアは忘れてしまった。

突然、ロスロジックは遊びに来なくなった。

そう、一年ほど後のことだった。

ナティアは泣いた。

毎日、泣き暮らした。

だが、涙がそうも続くはずはなく、いつか彼女はロスロジックのことを記憶の片隅に仕舞ってしまった。

「それは、私から話しましょうか」

いつの間にか部屋に入ってきたウトコが、ロスバツハーの隣に立つ。

「ウトコさん」

ナティアが呼ぶと、彼女はうつすらと笑みを浮かべる。

「師匠、借りてきたぞ」

その後ろから、クリスタが顔を出した。

「クリスタ！　どうしたの？」

「ああ、そこでウトコと会ってさ……まあ、なんつーんだ。事情は大体聞いた」

クリスタは少し困ったような顔をした。こういう風に声をかけて良いか分からなかったみたいだ。

「クリスタ、見つかりましたか」

「ああ、これだろ。ワイバーンの生態」

クリスタがロスバツハーに本を渡す。ナティアもそれを覗き込んだ。

「ナティア。今から大事なことを話します。よく聞いてください」
ナティアは身構えた。その緊張した空気を、ウトコが払う。

「まあまあ。立ったまま話していても仕方が無くてよ。お茶でも入れましょうね」

テーブルに皆を誘い、自分はお茶の準備をしようと席を立つ。

「あ、私も手伝います」

ナティアが後を追おうとすると、

「ナティアさんは座っててください」
と断られた。

なんだか落ち着かない、とナティアは視線を彷徨わせる。

しかし、ロスバツハーは手招きをしていた。近付くと、座れ、との合図。

「ウトコが準備するまでに、これについて少し話しましょう」

ロスバツハーは、招待をバラしても話し方が変わらない。

昔みたいに話してくれたら嬉しいのに、とナティアは思う。

だが、それは彼が変化したということだ。

年月と経験の重みがそうさせるのだ。

「この本は読んだことありませんか、ナティア？」

手に取って見てみるが、良く分からない。見覚えがない気がする。

「分からないわ。少なくとも、読んだことはない気がするもの」

「そうでしょうね。あなたの所にあった本を、私が持ち去ったからです」

「え？　なんでそんなことを？」

一気にロスバツハーが不審人物に見えてきた。だが、それは違うと本人が言う。

「盗んだものではありません。あなたの目に触れないところに持っていくたかったのです」

「つまり、この本の中身が、ナティアにとって良い内容じゃないってことだよな」

クリスタが言葉を補足する。

ロスバツハーが頷いた。

「その通りです。ワイバーンの生態、著者はカルヴァドス……ギネス・コープの幹部です」

ナティアが身を乗り出して表紙を見る。確かにそう書いてあった。「学者、って本当だったんだ」

「おいおい、突っ込むところはそこかよ」

クリスタがあきれ顔でナティアを見た。ナティアは照れて頭を掻く。頭の輪が揺れる。

「まあ、当初の反応はそれでも仕方ありません。大事なの中身

です」

パラパラとめくっていく。

表紙から数ページすると、目次に行き当たった。ナティアはそれを一つずつ読んでいく。

「ワイバーンとは何か。ワイバーンの種類とその性質……大半はこの項目で埋められているのね。それから……」

ナティアが言葉を失った。クリスタが間を埋めるように言葉を発する。

「俺も、最初に見た時びっくりしたよ。ウトコが説明してくれたけどさ」

そこにはこう書かれてあった。

『もう一人の神の存在の可能性』

ウトコがお茶を盆に乗せて戻ってきた。一人一人にカップを渡し、真ん中にクッキーを置く。

「ナティアさんは知らなかったでしょうけど、ロスはいつもあなたのことを気にしてたのよ。セレスタンであなたのことを聞いて、真っ先に助けに行こうと言ったのも彼なの」

ウトコが一口、カップに口をつける。

「私は、あの日あなたに本を借りに行きました。確か、三冊ほど借りたはずです。その中の一冊が、この本でした」

ナティアはまだ言葉を失ったままだ。

「あなたはまだこの本に目を通していなかった。おそらく、家族の誰も。もしこれが目に入っていたら、大騒ぎになっていたでしょうね。幸いというか、この本はすぐに絶版になりました。カシス王が異端の考えを広めかねないとして出版を制限したのです」

それが言論の弾圧になるかどうかよりも、一つの宗教とその緩やかな信仰によって長らえてきた世界を維持することの方が大事だったのだ。

「ここに書いてあることを簡単に言いましょうか。ワイバーンは元々、ヴァームの子孫を守るために生まれた。つまり、ヴァームが創

造したのです。ですが……ナティアも知っている通り、ワイバーンの全てがヴァームの子孫に友好的ではない。中には私たちを敵視するワイバーンもいる。それがどういう事か分かりますか？」

ナティアは反論した。

「でもそれは、ヴァームの晩年に生まれたものだから上手く制御できなかったと言われているわ」

「あら？ ナティアさん、神様なのに知らないのね。ヴァームは衰えて死んだわけではないですよ」

「え？」

「神は全ての創造を終えると、自らが人々の友愛の妨げになると考え、一人コルディアの向こうへと去っていった。説話集の最後に書いてありますわ。コルディアとは全ての生命が一つになること。わたくしたちはヴァームが世界と溶け合うことで全ての生命がヴァームの下に意識を共通化したことだと捉えていますわ。つまり、わたくしたちの目指すコルディアは究極の自己犠牲でもあるんですわ」

ウトコの説明に、ナティアは首を傾げた。それはつまり。

「神様は十分に力を残したまま、消えていったってこと？」

「その通りですわ。ヴァームの子孫に伝えられているものとずいぶん違いますわね」

この食い違いが恐ろしい。ナティアは自分が今まで信じてきた土台が崩れる音を聞いた。

「とすると、ワイバーンに二種類いるってのは別の理由だって事だよな」

クリスタが口を出してきた。彼もまだ全てを理解しているわけではないのだ。

「その通りです。ナティア、この世界の全てはヴァームが創造したと言われています。ですが、ワイバーンの中にはヴァームの子孫を襲うものがある。これをどう思いますか？」

ナティアは震える唇を開いて、微かな声を上げる。

「……その……ワイバーンは………別の人が作ったってこと？」

やっこのことで口にした言葉は、しかしナティア自身、信じて発したものではなかった。

クリスタはナティアの言葉に多少なりとも恐怖を感じた。

それがもし、真実ならば……

「その通りです」

ロスバツハーはすぐに肯定した。

その言葉をウトコが継ぐ。

「ロスはそのことに気付いちゃったんですわ。だから、追われた。わたくしが出会った彼は、痩せ衰え、いつ死んでもおかしくない状態でしたわ」

ロスバツハーの脳裏にあの時の恐怖が蘇る。

そのことを話した瞬間、彼は捉えられ、ワイバーンの巢に放り込まれた。

それも、ヴァームの子孫とは相容れない方の。

彼らは知っていたのだらう。だが、隠していた。神が唯一で無いと分かってしまえば、この世は乱れる。

そして、いずれヴァームは廃れてしまうかもしれない。

ロスバツハーは肉を裂かれ、骨を折られ、それでもやっこの思いでアルギニンの入り口までやって来れた。

そこを、ウトコとリビタ、フォンドールに助けられたのだ。

「フォンドールたちは、神が唯一でないことを知っていました。一番最初にそのことに気付いたのは、リビタでした。信じられますか？ あれでも彼女は敬虔なコルディア教信者でした。そして、非常に大人しく、優しい人間だったというのですよ。そんな彼女をあんな風に変えてしまったのは、もう一人の神、もう一つの宗教でした」

「もう一人の神？ もう一つの宗教？」

ナティアが問う。今、彼女の価値観は根底から覆されている。

それはクリスタも同じだった。自分の信じた世界が、信じたようでは無かった。その恐怖は、自らの存在の否定にすらなりかねない。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。俺は……というよりも、人間は全

てヴァームが生んだんだよな？」

クリスタの問いかけに、ロスバツハーは沈黙で答えた。

つまり、分からないと言うことだ。

その代わりに彼はナティアの問いに答えた。

「もう一人の神の名をペリニヨンと言います。そしてもう一つの宗教はフィレッテの教え、と呼ばれているそうです。私もリビタから聞いたからですから、それ以上のことは分かりません」

「残念だけど、わたくしも良く知らないんですわ。だって、リビタさんはそのことを話すと、おかしくなってしまうのですもの」

それは、以前のあの状態のことを指すのだろう。

「なあ、そのフィレッテの教えってどこで信仰されてるんだ？ 今まで一度も聞いたこと無いなんて変だぞ」

クリスタが叫ぶように糾弾する。全てが何かの間違いだということもあり得るのだ。

ロスバツハーは、その期待を打ち砕く。

「ヴィタモントです。ほとんど他国とは交流が無く、独自の機械文明を持っています。実際に、入国にも厳しい審査が必要です。リビタは、そこに潜入し、ヴァームの教えを広めようと思いました」

ウトコが悲しげに目を伏せる。

「でも、そんなに簡単なことじゃなかったんですの。打ちひしがれ、追われ、そして彼女は……」

それ以上の言葉を控える。

間を埋めるようにしてロスバツハーが話した。

「ギネス・コープが何を望んでいるのか分かりませんが、少なくともカルヴァドスが居る以上、ヴィタモントと無関係とは思えません。ナティア、あなたはそれらとも戦わなくてはならないのですよ」

ポン、とナティアの肩に手を置く。

彼女はそれを虚ろに眺めていた。

頷くことができなかった。

彼女には、あまりにも多くの荷物が乗っていた。

「師匠……いや、ロスバツハー、それ以上は止めるよ。いきなりこんなことを言われて、無理だよ」

クリスタがロスバツハーの腕をつかむ。

力を込めて、強く、強く。

ロスバツハーは彼の表情を見て、視線を逸らした。それからナティアの肩に置かれた手を外し、後ろを振り返った。

「ウトコ、後はお願いします」

そう言って出て行こうとする。

ナティアがロスバツハーに向かって叫んだ。

「ロス！」

ピタリ、とロスバツハーの足が止まる。

だが、振り返りはしない。

「ロス！」

もう一度ナティアが呼んだ。もう、クリスタも何も口を挟まなかった。

動かないロスバツハーに向かって、ナティアが駆け出す。

背中に抱きついた。

しっかりと、放さないように。

「ロス……もう行かないで」

そんなナティアの手を、ロスバツハーはそっと取る。

「ナティア……私はどこにも行きませんよ。あなたが無事に役目を終えるまで、側で守ると誓います」

ようやく、ロスバツハーがナティアの方を向いた。

ナティアの涙が、彼の手を濡らした。

クリスタは複雑な気分で見つめる。

ウトコもまた。

「本当に？」

グシャグシャの顔で、問いかけるナティアにロスバツハーは優しく頭を撫でることで応えた。

しばらくの間、泣き続けて。

ナティアが顔を上げた頃には、もうお茶は冷めていた。

「さあさあ、お茶を入れ直しませうね」

ウトコが気分を変えるために殊更大きな声で宣言する。

「そ、そうだな。それが良いよ」

クリスタも続く。

その様子を見て、ナティアがクスリと笑った。

「どうしたの、二人とも……おかしいよ」

和やかな雰囲気に戻ってきたその時だった。

『ロスバツハー……』

フォンドールの声がした。

雑音混じりで、良く聞こえない。

ロスバツハーが懷から夢見の鏡を取り出した。

「フォンドール、どうしたのですか？」

問いかけると、また小さな音が聞こえた。

『すぐに町に下りてくれ。敵だ』

その言葉を聞いた途端、ロスバツハーとウトコが動いた。

SS6 《神様の事情》

ヴァームは、そこにもいる。ここにもいる。どこにでもヴァームはいる。

世界の仕分けを終え、彼はコルディアの向こうへと行こうとしていた。

コルディア。全ての生命と一体化するという一つの境地。

それは、生命全ての中へ溶け込むという、一種の自殺行為であった。

ヴァームは思った。

「私は死ぬ、そして全てとなる。だが、それはやがて私が宗教として一つの概念と化すことを意味している」

それは人としての死とは別に、個人としての死に等しかった。

彼は概念になるよりも、人の心に生きることを選んだ。

「私は一つの仕掛けを作ろう。私という人間が死に、その道程がいまいになっても、私という足跡が残るように仕掛けを残そうと思う」

彼は星の力を分散した。

その力は星一つを作り、そして滅ぼす力を持っていた。

そのため、中心を作った。

それを、星の鎖と呼び、惑星に直結させた。

彼は彼女は星と命を同じくする。それは自らの死が星の死と結びつく。

でも、それでは可愛そうだとヴァームは思った。

なので、彼を彼女を解放する仕組みを作った。

それによれば、彼らが命を顧みず、自らの命を購うものを見つければ、その使命から開放されるはずであった。

同時に、星の力を分散し……それは星の鎖からの譲渡という形で……星を導くものを作り上げた。

彼ら彼女らは星の鎖を導くために、星の力を行使するであろう。そのために、彼は神話を作るつもりだった。

彼が人間ではなく、神として伝説に残るための仕掛けだった。

そして、最後に彼は星の鍵を作った。

鎖と鍵は一对にして他と交わらぬものであった。

故に、彼は安心した。

星は導かれ、やがて自らの鎖を解き放つ鍵を見つかるであろう。

それが、彼の予言であった。

成果を見届けた後、ヴァームはコルディアの向こうへと旅立った。ひとりひとりの願いと祈りを眼にしながら。

ヴァームは固体としては無くなってしまっても、概念としては生きるはずだった。

欠片が、やがて実る種の中に、入ると信じていた。

そして、今でも信じている。

12 《ロスバツハー3・それは優しさではありません。ただのエゴです。》

困った。

ロスバツハーはそう思った。

まだ武器が出来上がっていないのだ。

リビタのマルチ・リボルバーは破損している。

ロスバツハーとウトコも武器を預けてしまっていた。

クリスタの武器はまだ出来上がっていない。

ナティアは戦力として使うわけにはいかない。

フォンドールがわざわざロスバツハーを呼ぶほどの敵だ。それはギネス・コープ以外にはないだろう。

だとしたら、ナティアは王城に居てくれた方が安全だ。

そこまで考えてから、ロスバツハーはフォンドールに返答を開始した。

「フォンドール、状況を」

『うむ、敵はおそらくギネス・コープだ。人数は不明、はっきりと敵の姿も確認できぬ。武器は銃が中心のようだ』

「ようするに、ゲリラ戦、ってことですか」

『そう思ってもらって良いだろう。考えても始まらんがな』

「そんなことはありませんよ。ただ、銃が相手というのは厳しいですね。こちらは私とクリスタだけで出ることにします」

『そうだな、ナティアはそこに居た方が安全だろう。ウトコには来てもらいたいところだが』

「武器がありません」

『それなら今、リビタが代わりに使っている。まだ改造前だったのだな。残念ながらお前のデス・スリンガーは改造中だった。気が早いことだな、あのご老人も』

タイミングが悪かった。しかし、言っても仕方が無いことだ。

「了解です。クリスタ、ウトコ、行けますか？」

「珍しいな、師匠が俺に問いかけるなんて。行きますよ、といって欲しいとこだぜ」

「何の問題もありませんわよ、むしろ、わたくしがいないと困るんじゃないありませんこと？」

クリスタはクリスタ、ウトコはウトコだった。何も変わらない。ロスバツハーが笑った。

「ふふふ、そうですね。私らしくありませんでした。では、行きますよ、二人とも」

「おうっ」

「はい」

そこに、ナティアが声をかける。

「ちよっと待って。私も行かせてよ」

ロスバツハーが即答する。

「駄目です。あなたはここに居てください。その方が安全ですし、私たちも気を使わなくて済みます」

「うう……それは分かるけど……でも、私だけ待ってるなんて、できないよ」

それを聞いて、ロスバツハーがナティアの肩に手を置いた。

「ナティア、気持ちは分かります。あなたは自分を責めてるんですよ。自分が役に立たない、守ってもらうだけの立場であることが悔しいでしょう」

こつくりと頷く。

「でも、それは違います。それは優しさではありません。ただのエゴです。あなたが状況を冷静に判断できなければ、世界が終わってしまうのですよ？ 今だから言っておきます。あなたに必要なのは私たちが目の前で死んでも逃げることでできる冷酷なまでの判断力です。それができなければ私たちのやっていることも無駄になります。いいえ、世界そのものが無駄に終わります。万一の事故さえあってはいけないのですよ。慎重に慎重を重ねても足りないくらいですよ」

一気に捲くし立てる様子に、ナティアが怯える。

クリスタはそんなロスバツハーを見て、ナティアに近づいた。彼女を背にして、ロスバツハーに向き合う。

「師匠、そんな言い方はないよ。ナティアだって、何かしたいって思ってるんだから」

「それがエゴだって言ってるんです。誰かを守るために、全てを無くしてしまうのは馬鹿以外の何者でもありません」

「でもっ」

「でもない。よく聞きなさい。私は何もナティアにただ待つて
るだけ、守ってもらうだけの人間になれとは言っていないよ。冷静な判断力を持ちなさいと言っているんです。ナティアがこの状態で戦闘に参加して、役に立つと思いますか？」

クリスタが、遠慮がちに首を振る。

「ナティアにはナティアのことができます。でもそれは今ここで戦闘に参加することではない。そんなのはあのバーサーカーや最強の勇者に任せておけばいいのですよ」

ロスバツハーはナティアを呼び寄せ、そしてクリスタたちに出て行くように言う。抵抗はしたが、最後にはクリスタも外に出されてしまった。

ウトコと二人、クリスタは町への道を急ぎながらばやく。

「ちえ、師匠も秘密主義なんだからな。なんもかんも自分で抱え込まなくてもいいのにな」

「うふふ、そういう人なんですよ、ロスは」

そう言うウトコは、何だか嬉しそうだった。

「どうした？　なんかあったか？」

気付いて、クリスタが問うと、彼女は照れ隠しをしながら応えてくれた。

「いえ、それでも、あれだけロスが自分の気持ちを話すことができるなんて、珍しいし、嬉しいなって思いました」

「気持ちを？　あれで？」

「ええ、ナティアさんを必死に守りたい、って気持ちが伝わってききましたわ」

そういうものか、とクリスタは納得する。まあ確かにロスバツハ―にしては常ならない様子だった。

「それにしても、ナティアにできることって何なんだろうな」

「あら、分かりませんか？」

「わからねえよ」

乱暴に言うと、ウトコがくすくすと笑う。

「そうですか。では、お教えしましょうか。神様の次のステージに進んでもらうんですのよ」

「神様の？」

「ええ、お楽しみに……まだできるかどうかすら分からないことですしね」

二人は疾走する。城の衛兵も留めることができないほどに素早く。クリスタは少しだけ速度を上げた。が、ウトコを引き離すことはしない。今は彼女も丸腰なのだ。どこから敵が来るか分からない以上、離れるのは危険だと思った。

「コントレックスの爺さんの工場の近くだろ？」

ウトコが少し考え込む。

「そういえば、場所を聞いていませんわ」

クリスタが急に止まった。

後ろから来ていたウトコがぶつかる。

「うわっぶ、ですわよ。どうされましたか？」

「じゃあどこに行けばいいんだよ」

「夢見の鏡で聞けば良いのですわ」

ポン、と手を叩いて、夢見の鏡を袋から取り出す。

「フォンドール、フォンドール。どこにいるんだ？」

声をかけるが、返答がない。鏡を覗いてみても、何も映っていなかった。

「どういうことだ？」

「えーと、考えられるのは、ですね……相手の鏡が壊れている場合、フォンドールさんが死んでいる場合ですわ」

胸が大きく脈打つ。風景が真っ白に見える。

「フォンドールが、死んでいる？」

「例えば、の場合ですわ……他にも……」

ウトコの声にかぶせて、声が聞こえた。

「単純に通信を切っている場合がありますよ。ウトコ、まずはそれを最初に思い浮かべるべきではないですか？」

ロスバツハーだった。

「ロス！ 追いつきましたのね」

「ええ、すでにフォンドールたちとも連絡を取りました。しかし、通信によって居場所が分かるとまずいので、これ以降はそれぞれで行動する、と」

ロスバツハーとフォンドールが話した作戦はこうだった。

敵が誰かは分からないものの、街中では一般人にも被害が出るし、人質にされる可能性もある。

そこで、まずはバラバラになって場所を移動しよう、と。

「バラバラになる理由は？」

「一つは戦力を分断するため、一つは相手に相談させないためです。まあ夢見の鏡を使っている可能性もありますが、それでもこちらよりは機動力が劣るはずですから」

そういうと、ロスバツハーは走り出した。慌てて追いかけると、彼らが居た場所が狙撃される。

「クリスタ、いかなるときも周囲に気を配りなさい。どこに敵がいるか分かりませんから」

「はい、師匠」

「あなたの判断力に期待していますよ」

「ありがとうございます」

今日のクリスタは素直だった。何より、戦闘の緊迫感がそうさせる。初めてのゲリラ戦は、相手が見えない分、死の臭いが濃かった。

「あなたはなるべく無駄な動きをしないで。私とウトコの周りをうろつくように。そうすることで少しは的が拡散できるでしょう」

言われた通りに動き続けるクリスタは、それでもロスバツハーとウトコよりも余裕があった。

「それでは、余裕がありそうなので敵の居場所を探ってください。どこから狙撃してきているか、敵が他にも隠れていないかを見てくださいね」

周囲に目を凝らす、これはなかなか分かり難かった。それでも注意していると、一瞬、何かが光った。

「危ない！」

ロスバツハーとウトコに覆いかぶさる。

バスッ、倒れかかった彼らの頭上を銃弾が飛びぬけていった。

「あ、あぶなっ」

「あらあら……危険ですわね」

「のんびりしてる場合じゃないな。まずはあの建物の陰に」

「了解しましたよ」

ロスバツハーがウトコの手を引く。クリスタは辺りに気を配りながら、彼らの後を追った。確かに、銃弾はどの建物よりも上空から撃たれていた。

その辺りを見ているが、何も見えない。夜ならともかく、ありえないことだった。

建物の陰に入る直前、また銃弾が撃ち込まれた。

「うわっ」

「危ないですわね」

ウトコは相変わらずのんびりだ。余裕があるのか、天然なのか分からない。

「ふむ……遊ばれているようですね」

ロスバツハーが気になることを言う。

「どういことだよ」

クリスタの問いかけに彼は答えず、クリスタの手を引き寄せた。

「本気で私たちを殺そうとはしていないって事ですよ。カルヴァドスとは違いますね」

「何で分かるのかしら？」

その言葉を発したウトコの耳元に、弾丸が突き刺さる。

「こういうことですよ。先程から敵の姿が全く見えない割に銃弾がやけに正確に私たちを避けるものだ、とって思っていました」

つまり、普通は間違っただけ当たる確率もある一定程度あるのだという。

「相手は恐らく私たちから何かを引き出そうとしているのでしょ」
「それは一体？」

ロスバツハーがウトコに耳打ちする。

ウトコが頷いた。

「では、いつてきまーす」

トコトコと歩いて建物の陰から出て行く。

「ばっ、アブねえ」

飛び出そうとするクリスタをロスバツハーがつかむ。

「大丈夫ですよ」

「ヴァームの導きのままに、わたくしをお守りください。アクエリアス」

ウトコの周囲に水の膜ができる。

そのまま歩いて王城に向かった。

「たぶん、ウトコは撃たれます」

「なっ」

クリスタが驚いた瞬間、ウトコに銃弾が突き刺さった。

「ウトコっ」

「あらあら、危ないですわね」

だが、当のウトコは平気な顔だ。

しばらく間が開いて、銃弾が次々と突き刺さっていく。

ドスドスドス？？だが、全てアクエリアスで塞がれて地面に落ちていった。

「なるほど、分かりました。次は私が出て行きましょう」

そう言ってクリスタが止める間もなくロスバツハーが出て行く。

ウトコの隣に並ぶと、銃撃が止んだ。

「ん？　　どういことだ」

「つまり、彼らは私たちを調べてるんですよ。武器、防具、星の力にどれだけのものがあるか。同時に、派手な戦闘は避けるように言われているんでしょうね。だから、先程からサイレンサーを使っています。騒ぎにならないわけですよ、これだけ暴れてて」

ロスバツハーはクリスタにこっちに来るように言った。

彼らはウトコのアクエリアスに守られながら、フォンドールと約束した場所まで歩いていく。

不思議な光景だった。静かな銃弾とそれを一切気にしない被弾者。その内に彼らの耳にも聞こえてきた。

フォンドールが暴れる音が。

「あーあー、仕方ありませんねえ」

ロスバツハーが頭を抱える。

そこは町から外れた広場だった。誰もいない、というよりも近づけない。

フォンドールはヴィターゴを全開にして雷を撃ち放ち、リビタは重火器類を両手両肩に乗せて爆撃を開始していた。

「な……何だよこれ」

クリスタが呆然とする。ウトコは楽しそうに手を叩いていた。花火の代わりとも思っているのだろうか。

「あれほど相手の出方を見なさいと言っておいたのに」

フォンドールの雷は、敵に当たることもなく、空中に霧散していた。それはリビタの爆撃も同じだった。

そんな猛攻の中を、ロスバツハーは平気そうに歩いてく。

フォンドールの側まで来た彼は、拳を思い切り振り上げてフォンドールの頭を打った。

「ぐおっ、痛いぞ、ロスバツハー」

「痛いぞ、じゃありませんよ。フォンドール、あなた何をしてるんです？」

「何を？ 敵を倒そうと……」

「それが短慮だということですよ。見えない敵に向かってただ無闇に牙を向けたところで、自分に返ってくるだけです」

「では、どうすれば良いのだ？」

フォンドールを無視して、ロスバツハーは彼らの前に立った。胸の前で手を組み合わせ、目を閉じた。

「敵が見えないのであれば、見えるようにすればいいですよ」
リビタがロスバツハーの様子を見て、ウトコに合図をする。
ウトコが頷き、彼の後ろに着く。リビタもその隣に立った。

「神は言った。汝の隣に立つものを愛せよと。その素性と思いには拘らず、ただ汝の隣に立つが故に愛せよと。それは神の意志である」
クリスタの隣にフォンドールが立つ。

「おっさん、あれは？」

「ふむ、あれは賛美歌だ」

「前に、ウトコが歌ってたような？」

「ああ、あれは贖罪の賛美歌だった。我が罪を贖うための。今度の神に助けを請うための、賛美歌だな」

「それで、どうにかなるのか？」

「なるな。ロスバツハーは星の力を使えない。良く分かんのだ。ヴァームの子孫であるのに、星を導くことができぬとは。おそらく、ロスバツハーの中で、神は神ではないのだろうな。そして神を一種憎んでもいる」

クリスタの脳裏に、もう一人の神のことが浮かんだ。それを払拭し、フォンドールを見る。

「だがな、そんなヤツでも神に助けを請うことはできるのだ。星の力が自らに備わった素質を信仰によって解放するものであれば、賛美歌は神の力を借りる行為だ」

「良くわからねえな。それと星の力と何が違う？」

「一つは、自らの資質に寄らないという点だ。誰でも使うことができる。もう一つは、一人の力に寄らないという点だ。祈る数が多ければ、信仰の度合いが多ければ、それだけ力は増す」

彼らの言葉はさらに大きくなっていった。フォンドールも参加するためにウトコの後ろに並ぶ。そして、クリスタに手招きをする。

見よう見まねで、クリスタは賛美歌を唱えた。

「え？」

その瞬間、体の中に暖かいものが入り込んでくるのが分かった。

ヘソの辺りを中心として、体全体が熱くなっていく。

体は全体的に外側に向かって引っ張られていく。まるで膨張しているかのようだ。だが、それとは違う。お互いが繋がりがあって、溶け合っていくような感覚がある。

「これ……痛い」

鈍い痛みだが、我慢できないくらいの激しい痛みだった。

「当たり前だ。信仰心という点では異端だが、神の子孫が前に立っているんだぞ、下手すれば我々もコルディアの境地に引っ張られる。その意志に関わらずな」

これが、コルディア……クリスタは思った。神が自らの最終的な目標として掲げ、最後にそこに辿り着いたという。

「コルディアって、こんなに痛いのかよ」

「単純に言えば、肉体の消滅だからな、痛いに決まっている」

「簡単に言うなよっ！　これで何をしようってんだよ」

「敵に教えてあげるのだ。我々に手を出せばどうなるかをな。見ろっ」

フォンドールが指差す向こうに、亀裂が生まれていた。

そこから黒いものがはみ出している。

「あれは……」

痛みで閉じそうになる目をしっかりとこじ開けて、クリスタは見る。

「ワイバーンだ。亀裂は……次元の裂け目、だろうな」

「次元？ 何だよそれ」

いつもならロスバツハーが説明してくれるところだが、彼は今、賛美歌の熱唱で忙しい。

代わりに、リビタが説明してくれた。

「この世界は見えているだけの世界じゃねえってことだ。お前が遠いと思っている場所は、実は空間って概念で切り離されているものだ。これを取り払ってやりゃあ、例えばこことお前の故郷だって繋がっているのと同じことなんだよ」

「つまり、敵はここここではない場所を繋げて、攻撃してきたって事か？」

「おお、飲み込みがはええじゃねえか」

リビタの声が震えていた。彼女も痛みでまともに話せないのだ。

「いま、ロスバツハーはな、敵にもあたしたちと同じ苦しみを味わせてるのさ。あたしたちにはこれだけのことがきんだよ、ってことを思い知らせてるんだ」

それは、諸刃の剣ではないだろうか。

しかし効果は確かにあるようで、亀裂から飛び出てきたワイバーンが十匹ほど、地面に落ち、痛みで痙攣を起こしている。

「ううううううううううう、なんなのよこれはこの痛みは……勇者ってこんなことまできんの……くっそ、くっそ」

ワイバーンから、一人の女性が地面に下り立った。立った、というよりは転がったと言うべきか。彼女はまともに立つこともできず、膝について喚いている。

「ぐうううぐうううううう……いたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい」

両目から涙を流し、鼻からは鼻水を垂らし、見苦しい姿をさらしている。

腰のベルトから銃を取り出して、こちらに向かって撃ってきた。

「ふんっ」

いつの間にかフォンドールがロスバツハーたちの前に立ち、ウト

コのパーフェクトアローを立てかけていた。巨大な盾に阻まれ、銃弾はあらぬ方向に飛んでいった。

「くっ、何してんのっ、あんたたちもやりなさいよ」

部下に命じて、無差別に銃を撃たせる。だが、その全てが弾かれてしまう。

「に、逃げるわよ。このままじゃ死んでしまう」

ワイバーンを置いて、辿々しい足取りで逃げていく。

「追いかけて良いいのか？」

誰にともなく問いかけると、ロスバツハーが賛美歌を止めて振り返った。

「問題はないでしょう。少なくとも、不用意に私たちに近付こうという意志だけはなくなったはずで……す………」

言葉尻を失って、ロスバツハーが崩れ落ちる。

「おい、ロスバツハー……あ？」

クリスタも同じだった。駆けようとしても力が入らない。そのまま膝を地面につく。

見れば、周りは全員がそうになっていた。

「ふふふ……まだまだ最強の勇者も神にはほど遠いようですね」

軽口を叩くロスバツハーを、フォンドールが笑う。

「ふん、いずれ超えてみせる、神さえもな」

「だからあなたの星の力は弱いんですよ。もっと敬うことです、ウトコみたいだね」

ロスバツハーの声にウトコを見ると、すでに彼女は立ち上がっていた。

「はあはあ、さすがにわたくしも疲れしましたわ。神様になら鞭打たれても良いとは思っていましたが、実際に打たれると痛いものですわね」

何だか怖いことを言っている。プラセンタで自らを回復しているのだろう、徐々に息が整っていく。

「ウトコ、俺にも頼む」

「そうしたいところですけど、もうあまり氣力が残っていませんわ」
ウトコも座り込んだ。回復が追いつかないくらい、消耗なのだ。

「あー、このまんま野宿はイヤだな」

リビタが文句を言う。

「今襲われたら今度こそ死ぬな」

フォンドールが不吉なことを言う。

「ちょっとやり過ぎたかもしれませんね」

いつも冷静なロスバツハーが弱音を吐く。

クリスタは空を眺めていた。

先程の亀裂はすでに無くなっていった。

世の中にはまだまだ不思議なことが一杯だ、と思う。

それにしても、これからが思いやられるな、とも思う。

とりとめない思いが、頭の中によぎっていく。

そんなクリスタでもぶれないことがある。

一つは強くなるという誓いだ。知れば知るほど馬鹿馬鹿しい強さの勇者たちだが、それを超えるという誓いは、まだ胸の中にある。

もう一つは、ナティアを守るという願いだ。

自分がどんな風になろうと、彼女だけは守り抜く。それが、この新しい世界に自分を連れ出してくれた彼女への礼だと思う。

「プラセンタ」

ふっ、と体が軽くなった。

クリスタが周囲を見回すと、ナティアがこちらを見ていた。

いつの間に？　と思うと同時に、嬉しいと感じた。

彼女は笑っていて、怒っていてもいた。

その複雑な表情が、彼には愛おしく思えた。

「さんきゅーな、ナティア」

軽く口にするクリスタにナティアが拳を振り上げる。

「もう、一体何をやったらこんなにボロボロになるのよ。無茶はしないで」

「ふふ、助かりましたよ、ナティア」

「ロスも、弱いんだから無理はしないでね」

コツンと頭を小突く。

「ふふふ、まさかナティアにこうして怒られる日が来ようとは思いませんでしたよ」

そういう彼は幸せそうに笑う。

幸せ……そうだな、幸せだ。

クリスタは今更ながらに気付いた。

彼は、今この瞬間を幸せだと思っているのだ。

12 《ロスバッター3・それは優しさではありません。ただのエゴです。》 (後

この回で、第二章が終わりました。

次回より新しい展開を迎える第三章が始まります。

より楽しく、面白くするために頑張りますので、応援よろしく願います。

0 《ご苦労さま、ギネス君》

「どうなつとるのだ！」

ギネスの怒りは果てしなかった。

「す、すいません」

マルゴーはただ、平謝りするしかなかった。

「為す術もなくやられ、その上、相手のことなどほとんど分かつたらんではないか！ 星の鎖にも接触できず、何をおめおめ帰ってき
ておるのだ」

エデンでのマルゴーの失態は、ギネス・コープの士気を失わせるには十分だった。

正面から相対すれば世界最強の勇者と戦わねばならず、マルゴーのように隠れて狙ったとしても賛美歌で返り討ちに遭う。

「大体なぜ勇者の一人も殺さなかったのだ」

ギネスの疑問ももつともだ。彼女には誰かを狙い、殺すチャンスが何度もあったはずだ。

その疑問に、マルゴーは答えにくそうにしている。

「なんじゃ、はよ言わんか」

ギネスが急かす。

それで、仕方なくマルゴーは話した。

「それは……ギネスさまが事を荒立てるなと……」

そう、確かにギネスは言った。エデンでの争いは彼の望みではなかったのだ。

「う、まあ確かにそうは言うたが……だが臨機応変というものがあろう！」

もはや八つ当たりの域に達しつつある彼の言動に、マルゴーが耐えかねていると、後ろから誰かが声をかけた。

「ならばあなた自身が出れば良からう。いったい、今度の戦闘でワイバーンを何匹失ったと思っているのだ」

カルヴァドスだった。すでに額には青筋が走り、敬語すら忘れる有様だった。

「な、何だと！ カルヴァドス！ きさま、立場を忘れたか」

ギネスが怒声を上げる。それを齒牙にもかけず、カルヴァドスは続ける。

「立場か。立場というのなら私はヴィタモント王の配下であり、お前の配下ではない」

ぐ、とギネスが唸る。怒りに手が震えているが、その拳を振り上げ、下ろすことができない。

なぜなら彼はただの考古学者であり、何の力も持たない人間だからだ。彼がこの場で威張ることができたのは、偏にヴィタモント王のお陰に他ならない。

「王はもはやお前に失望されている。碌に動くこともできず、いたずらに兵を失うばかりの貴様をな」

段々とカルヴァドスの物言いがきついものに変わっていく。

「くっ、しかし私には星の鎖に関する秘密を解き明かすことのできる……」

彼が唯一持つ切り札を掲げようとした時、彼の言葉を誰かが受け継いだ。

「それなら必要ないよ。私がぜーんぶ知ってるかんね」

ギネスが声の方を向くと、年の頃十六くらいの女の子が立っていた。

「なんじゃお前は、どこから入った」

「ん？ そのおじちゃんに入れてもらったよ。ねー？ カルヴァドスちゃん」

「ちゃ、ちゃん？ コホン、ま、まあその通りだ。私がお入れした」
照れたカルヴァドスが場を繕うように咳払いをする。

訳が分からなかった。それはマルゴーも同じであつたらしく、カルヴァドスに近寄り、耳元で囁く。

「どうしたのよ、あの子が何だって言うの？」

カルヴァドスは笑った。

「ふははは、聞いて驚け。この方こそが新しいギネス・コープの支配者だ」

ギネスとマルゴの頭の上に「？」マークが踊る。

「んと、カルヴァドス……頭だいじょうぶ？」

マルゴが慰めようと彼の頭を撫でる。それを邪険に払いのけ、カルヴァドスが説明した。

「聞いて驚け、この方こそ我らがヴィタモント王の信仰する神の子である。星の鎖が現れたこの状況を鑑み、神が遣わした使者だ」

女の子はニコニコと笑っている。

ギネスもマルゴも胡散臭そうにしてそれを見ている。

「信用できぬのも無理はない。だが、その力を見れば納得もしよう」
カルヴァドスの言葉で自分の出番が来たと思ったのか、女の子が
一歩、歩みを進める。

「なんじゃ？」

ギネスが一つの疑問を發したその間に、彼女の姿は消えていた。

「え？」

マルゴが慌ててあちこちを見回す。

「ここだよ」

女の子は玉座にいた。そして、ギネスはいつの間にか地面に転がっている。

「な、なんなんなんなあ」

ギネス自身もよく分からないでいる。

「ご苦労さま、ギネス君。カルヴァドスちゃん、後はお願ひね」

「はっ」

任されたカルヴァドスが背負っている巨大なハンマーを手にする。
それを掲げ……「ま、待て」ギネスが命乞いをする間もなく、それを振り下ろした。

ゴス。

鈍い音を立てて、ハンマーが地面にめりこみ、そこから血が溢れ

る。

マルゴーが驚愕に口を手でおさえる。

「んゝ、私ってあんまり血が好きじゃないんだよね。さっさと片付けといてくれる？」

「分かりました。おい、お前ら」

言われて、部下がお互いの顔を見合わせる。が、もう一度叱咤されると慌ててギネスだったものを片付け始めた。

マルゴーはようやく状況を理解した。

突然跪き、口上を述べる。

「神の子におかれましてはご機嫌うるわしゅう……」

「えっとね、今、気持ち悪いの見たから麗しくないよ」

「え？ あ、す、すいません」

終始、彼女のペースだった。

「まあ良いや。これからギネス・コープは変わるよ。面倒だから名前はそのままで良いや。で、さっきのお爺ちゃんがやってたみたいになまどろっこしくて現実的じゃないことは止めようよ。」

星の鎖を捕まえて言うこと聞かせる？ 今のあの子にはそんな力はないさ。将来的には分からないけどね。

それよりも、単純に世界征服に乗り出した方が楽なんじゃない？ 勇者は怖いけど、だったら戦わなきゃ良いだけの話しなんだから。私たちはこれから一般市民を含めて無差別に攻撃を開始します。

一応計画だけは練っておいてね。決してヴィタモントがやってるってバレないように。まあ、あのフォンドールちゃんのことだからもう知っているかもしれないけど……力馬鹿よりもロスロジックの方が怖いかな。

世界にギネス・コープの名前が知れ渡ったところで、私たちの神の名の下に世界を制圧するよ。

星の鎖は……ついであつたら確保したらいいよ。殺さないようにね、征服する世界が無くなったら困るからさ」

ギネスが行っていたよりも具体的で、分かりやすかった。

カルヴァドスは、進言する。

「ならば、神の子よ。都市部は別として、ウェルチの田舎から攻め
てはいかがだろうか。あそこならば勇者もおらず、コルディア教に
もダメージを与えられる。我らが神の名を広めるには十分だと思う
が」

「ふーん、そうかもね。まあ良いよ。勇者フォンドールを相手する
時は気をつけてね」

そのことだけを何度も念押しする。

カルヴァドスが頷く。

「あ、あとさ。そこのおねーちゃん
マルゴーを手招きする。」

「は、はい。なんでしょう？」

戸惑いながらも応える。

「研究費はいくら使っても良いからさ、星の力について調べてよ。
私が知ってる情報は全て教えるから。星具、星の鎖、星の鍵、星を
導くもの……これらについてできる限り解析して。ヴィタモントの
科学力なら、宗教的じゃない部分で解析できるでしょ？」

それはマルゴーにとって願ってもないことだった。

「は、はい！　ありがとうございます」

「んー、期待してるよ」

それだけを言うと、彼女は玉座から下りた。

「ん？　どちらへ？」

「え？　私は別方面から攻めるよ。たまには帰ってくるから、後は
よろしく」

そういつてすたすたと歩いていく。

「あ、しかし……」

「玉座には君が座ってれば良いんじゃない？　それが望みでしょ」
痛いところを突かれ、眉をしかめる。

だが、それもまた、彼にとって願ってもないことだった。

「ありがとうございます」

「ほいほい。私たちの神様はちゃんと見てるからね。よろしくよろしく」

ひらひらと手を振って、彼女は出て行った。

1 《私、ナティア》

馬車の窓から入る風が、とっても気持ちいい。

どこまでも続く草原に轍を刻む。そんな感覚はアルギニンにいた時には味わえなかった気持ちだ。

「ねえねえクリスタ？」

「ん？　なんだよ」

私が話しかけたのは、勇者クリスタ。私がこの世界に飛び出して初めて出会った男の子。

あ、言い忘れてた。私、ナティア。神様のタマゴで、星の鎖。自分と星の命が繋がっているらしいの。自分ではあんまり実感がないんだけど。で、本当の神様になるために星の鍵ってものを探してるんだ。

クリスタ……それと他のメンバー……フォンドール、リビタ、ロスバツハー（私はロスって呼んでるけど）、ウトコは私を守りながら、世界中を旅して星の鍵を見つける手伝いをしてくれているの。

「気持ちいいよね、風が」

窓から顔を出して目を閉じる。まるで自分が風に溶けた気分になる。

「危ねえからちゃんと座っとけよ」

もう、クリスタはがさつだから私のこんな感覚は分かってくれないんだよね。

ウトコだったらきつと分かってくれるのに。

でも、彼女は今ここにはいない。

私とクリスタ、そして私の相棒であるマルクトドラゴンのクーダけが乗っていた。

四人は別任務で寄り道してからやってくるとのこと。

そう言えば、クリスタとクー、私の三人なんて。旅を始めた時のことを思い出すなあ。

もう、一年前のことになる。

私は故郷のアルギニンから出て、星の鍵を探す旅を始めた。それが何なのか、私にも分からない。現在の星の鎖であるお婆様によれば、それが何かを探し当てることも旅の目的の一つらしい。

ということはお婆様は星の鍵が何かを知っているってことなんだけど……それについてはいくら聞いても教えてくれなかった。

曰く、

「いいかい、ナティア。星の鍵とは鎖を解き放つもの。当然鍵穴が違ったら鍵も違うものさね」

ということなので、もしかしたら星の鍵とは一人ひとりに固有のものなのかもしれない。

そうなると本当にノーヒントで困るんだけど。

で、途方に暮れていたところにカルヴァドスっていう悪いおじさんが現れる。

どうやら私が星の鎖だって知っているみたいで、私を捕まえて世の中を意のままにしてやろうとしているみたい。私に、世の中をどうこうする力なんてないと思うんだけど、それをいくら言っても効き目はないし、逃げ回ったりしている内にクーと離れ離れになってしまう。

あ、クーってのは、いま私の隣で眠りこけているまんまるの毛玉みたいな動物……正確にはワイバーンなんだけど……のこと。彼はマルクトドラゴン、っていう世界最強のドラゴンの幼体で、私の守護獣でもある。

はつきり言って、私には攻撃の手段なんてほとんどないからクーとはぐれてしまったらもう逃げるしかないんだよね。

逃げて逃げて、もう駄目だっと思ったときに出会ったのが、クリスタだった。

彼は（当時は）勇者でも何でもなかったのに、私を守ってくれた。部屋に泊めてくれたし、再びカルヴァドスと出会ってしまったときにも、体を張って戦ってくれた。

勇者フォンドールたちとの出会いもその時だったよね。強かったー！ 本当に強くて強くて。

……でも、カッコよさではクリスタも負けてなかったよ。

私はそう思いながらクリスタを見る。

彼は鋭い目つきで、周囲を見回している。先ほどから定期的にそうしているのは、ギネス・コープの襲撃を警戒しているからだろう。

そう、ギネス・コープ！ 私を狙う、悪の組織！

セレスタンの町ではカルヴァドスが、ヴィシー村ではスルジーヴァが私たちを襲ってきた。

彼らはワイバーンや銃器を使い、私を捕らえるために攻撃してくる。

エデンでは離れた空間から私たちを狙ってきた。次元を繋げるだなんて……神様でもなければできないはずのことなのに……。

謎だらけの組織、でも何だか不思議と怖くはなかった。それは、フォンドールたちが守ってくれているから、というのもあるんだけど。だけどそれだけじゃない。あの頃のギネス・コープには何だか割り切れないものがあつたと今なら思える。

それが何なのかと言われるとよく分からないんだけど、例えばエデンではわざわざ狙撃なんて回りくどいことをしてきた。市民を人質に取れば、いくらでも勝ち目があつた戦いだつたように思える。

スルジーヴァは村を占領したけど、彼を助けるためにカルヴァドスは現れなかった。

なんだか見放したような印象がある。

それを突き詰めてみると、ギネス・コープは戦いが好きではないんじゃないかと思うんだ。

そう思っていた。

でも、私たちがエデンを離れてから、しばらくして。

ギネス・コープによる各地での紛争が勃発した。それは重火器とワイバーンをふんだんに使った……まさしく戦争だった。

ロスはそれを人が変わった様だと言った。

私もそう思う。

頻発する戦争は、私一人に最強の勇者集団を割くことができない事態を招いた。

まずはリビタとフォンドールが私たちから離れ、それぞれ別の場所での紛争の解決に乗り出した。

次にはロスとウトコと一緒に戦争難民を救済に行かなければならなかった。

彼らでなければ助からない命があったはずだし、私が着いて行けるはずなのも分かっていた。

なぜならそれは私が捕まるチャンスを与えることになるから。

あの、エデンの王城でロスと約束したから。

私には私にしかできないことがある。

そのときの私は、戦争から離れることしかできなかった。万が一でも私が死んでしまうような事態を避け、星の鍵の秘密を探りに行くしかなかった。

クリスタとクーと三人でウェルチに行き、今後のことを教えてもらう。

それが半年ほど前のことだった。

胸のポケットで何やら振動するものがあった。

私のネックレスを、そう言えばポケットに入れっぱなしにしていたのだった。

「クリスタ、通信だよ」

声をかけて彼の傍に座る。

「モモ女王か？」

問いかけには答えないでポケットから木霊の囀りを出した。

鏡のように映像は見るができないが、音声通信の機能は夢見の鏡よりも優秀だ。クリアだし、複数人同時会話もできる。何より、

伝送機能が便利だった。

まあ、詳しい機能は後にして、私は木霊の囀りに向かって声をかける。

「もしもし？」

「ナティア、モモです。今はどこにいますか？」

ああ、やっぱり女王様だ。私は簡単に今いる場所を話した。

「サンペレグリノ地方の南部です。暖かいですよ」

茶目っ気たっぷりにそう言ってみると、モモさんは少し怒ったような声音で返答をする。

「もう、あなたたちは相変わらずのんびりなのね。困ったものだわ」
「大丈夫ですよ、俺がついてますから」

クリスタが自信満々で口を挟む。んゝ、一年前とずいぶん変わって、堂々としたよね、クリスタ。

「残念だけど、クリスタ君にはあまり期待してないから」

モモさんはずいぶん言い様だ。クリスタも心なしか落ち込んで、口を噤んでしまった。

「今からそっちにロスバツハーを向かわせるわ。ウトコも一緒よ」

モモさんはまったく気にもせずに話を続ける。ロスとウトコがやってくる！ 嬉しい、でもなぜ？

「どうかしたんですか？ こんなに急に」

女王様の声が途切れる。何だか考えているようだ。

「星の鍵のヒントが分かったらしいの。ちょうどあなたたちがいるサンペレグリノ地方に、一つの遺跡があるわ。ロスバツハーとウトコに合流して、そこに行きなさい」

ヒントが？ それは嬉しい。でも、だったら何でモモさんはこんなに緊迫した声を出しているんだろう？

「ギネス・コープもこれを狙ってるんですね？」

その隙間を縫うように、クリスタが質問した。モモさんが沈黙する。クリスタがさらに質問を重ねる。

「それも、たぶん雑魚じゃない。俺の手に負えないくらいの大物が

来てるってことですか？」

しばらく間があって、ようやくモモさんが声を発した。

「……一月ほど前からジャンef軍をことごとく打ち破っているギネス・コープの師団があるの。それが遺跡に向かっているという情報を得ているわ。指揮官は女性……たぶん前にあなたたちを襲った、幹部なのでしょうね」

女王様の声は重たく、そして決意に満ちていた。

「だからこそ、あの遺跡には何かがあると思うの。危険だけど、直接行ってみないと……」

私は言葉を遮った。

「分かりました。私、行きます。いつまでもウロウロしてられないし。それに、クリスタが居ますから」

クリスタの顔がぱあっと明るくなるのが分かる。まるで子犬みたいに目を輝かせている。

「あー、残念だけど、やっぱりクリスタ君だけじゃ不安よ。ロスバツハーとウトコに合流するまで、無茶はしないでね」

モモさんが一気に突き落とす。ずーんと沈んだ顔をしている。かわいそうに、クリスタ。でも、大丈夫だよ、私がついてるからね。と、口には出さずにポンポンと肩を叩いてあげた。

その時だった。

ギューツと体が押されて、私はクリスタに抱きつく格好になってしまう。

「きゃあああああ」

「うわたっ」

馬車が急ブレーキをしたようだ。体制を崩しつつも彼は私をしっかり抱きとめてくれていた。

こういうところ、前と違ってすごくたくましく感じる。

「何だ、どうした？」

すぐに御者に問うと、戸惑ったような返事が返ってきた。

「すいません、女の子が急に……」

窓から見ると、そこには私と同じくらいの子が、膝を押さえながらうずくまっていた。

2 《私、フィレットって言うの。よろしくね》

私とクリスタは慌てて馬車を降りた。クーが後からついてきたけど、戻るように言っておく。だって、怖がられるといけないから。

「大丈夫ですか？」

私が声をかけると、その子は「うん、大丈夫だよ」と苦い笑顔をみせながら応えてくれた。

「ちよつと見せてくれ」

クリスタが女の子の膝から手をどかし、様子を見る。私からも見えるそれは、少し擦りむいたようで、血が出ていた。

私は急いでポシェットから水の入った小瓶を取り出す。同時にハンカチも。

「これ、使って」

水とハンカチを受け取ったクリスタは、ハンカチを濡らして傷口から泥を拭った。

「ナティア、プラセンタ」

言われてすぐに準備をする。手を組み合わせ、祈りを込める。神様……私自身に。

「じつとしてね……プラセンタ」

じわりと手が温かくなる。そのぬくもりが、彼女にも伝わっているようで、ふんわりとした表情になるのが分かる。

傷口はすぐにふさがった。泥も拭いていたし、跡形もないくらいに消えていた。

「これで大丈夫だよ。ゴメンね、驚かせちゃって」

女の子は照れ笑いを浮かべながら首を振った。

「ううん、私こそゴメンね。ちよつとふらついて、転んじやつた」
ようするに、この怪我は馬車のせいではなく、転んだせいで作ったもの、ってことかな？

クリスタもそれに気がついたみたい。笑いをこらえきれないでい

る。

「もー、そんなに笑わなくても良いでしょ！ ナティアちゃんも！言われて気がついた。私もクスクス笑ってる。

「あー、まあ無事でよかったよ。俺はクリスタ。君は？」

彼女を立ち上がらせるためにクリスタが手を差し伸べる。女の子はためらいなくそれをつかんで立ち上がり、服の埃を払った。

「私、フィレッテって言うの。よろしくね」

えくぼがとっても可愛い、子犬のように人懐っこい笑顔を浮かべる。クリスタが……むう、クリスタが照れてる。何だかとても気分が悪くなる。

そんな私の視線に気付いたのか、フィレッテがこちらをジッと見ていた。

「え、な、なに？」

私が問い返すと、彼女はピョンと私の前に跳んで来て、両手を握る。

「ナティアちゃん、よろしくね」

「う、うん……よろしく」

何なんだろう、この子の迫力は。逆らえないような気分になっちゃう。

圧倒されるというか……何だか気になる。

「え、えと……近くだったら送っていいとか？」

その圧力に負けて、私は思わずそう言ってしまった。クリスタが「おい」と制止するが、後の祭り。フィレッテはニンマリと笑って、私たちの手を引いていた。

「うん、ありがとう！」

強引……私が悪いんだけど……でも、何だか憎めない。不思議な子だ。

フィレッテは馬車に乗り込むと、歓声を上げた。

「わあっ、可愛いねっ」

すでにクーを抱っこして頬ずりしている。クーは嫌がって逃げよ

うとしているけど、思いのほかフィレットの力が強いらしく、逃げられないでいる。仮にもマルクトドラゴンなんだけど……。

しかし、段々とクーもフィレットに絆されたみたいで、最後には甘えるようにして頬を舐めていた。珍しい。懐いているのは私かりビタくらしいのものの。クリスタでさえ警戒されて抱っこはさせてもらえていない。

フィレットはクーの頭をガシガシと撫でる（？）とドツカリと座席に座り込んだ。

「じゃあ、悪いけどシトロンヴェール遺跡までお願いね」

まるで使用人を使うかのようにカリリと発言するフィレッテ。

「はいはい……って、シトロンヴェール？ そんなところに何の用事？」

しかもそこで、モモさんが言っていた星の鍵のヒントがあるって遺跡じゃないのかな？

「うん？ あー、仕事だよ、仕事。私ってばこう見えても考古学者だから。最近、その遺跡で新しい聖遺物が見つかったって話し、知らない？」

聖遺物、ようするに神様に關係する物品、つてこと。

内心の動揺を隠して、私は首を横に振った。

「う、ううん、知らない」

「クリスタ君は？」

クリスタもきつと同じように……と思ってたけど思い切り動揺してる！

変な笑顔を浮かべながら「い、いやあ」とか何とか言ってる。これじゃ何か知ってるのがバレバレだよ。

モモさんが期待できないって言ったのも、今なら頷けるなあ。

「ふーん、さすがに勇者だね、何か知ってるんだ」

「うっ、いや別に何も知らないぞ」

ものすごく誤魔化すのが下手だ。

「ふーん、そっかあ……まあ良いよ。無理やり聞こうとは思わない」

からさ。でも、何か成果があったらお互いに交換することにしない？ 悪くない取引だと思うけど」

フィレッテがクリスタににじり寄り、手なんか握って迫ってる。うー、何なんだろう、この子。ちょっと積極的過ぎるんじゃないの？

クリスタも何だかまんざらじゃないような顔しちゃってさ。

ま、まあ私とクリスタは勇者と神様のタマゴで、守り守られる仕事上の関係というか、別に個人的にはなんでもない関係というか……うー、そういうんだけどもさ。

そうやって私がモジモジしているとフィレッテがこちらを見てニヤリと笑っている。

な、何なんだよお。狙ってやってるの？ ひょっとして。

「ふい、ふいれってちゃん……？」

「ん？ なくに？」

「出会ったばかりでちよつと慣れなれしーんじゃないかなあつて」

「え？ クリスタ君ってナティアちゃんの恋人？」

バクン、と心臓が飛び出した！ ような気がした。

「は？ え？ 何言ってるの！ そんなことが！」

「そそそそそうだぞ、別にそんなんじゃない」

私もクリスタも大慌てだ。むー、どうしたっていうんだろう、この動揺は私らしくないよお。

「へえ、じゃあ別に問題ないじゃん？ クリスタ君ってカッコいいしさ」

フィレッテの言葉に私は大急ぎで反応する。

「そそそそそんなことないと思うよ」

って、何言ってるんだ、私は。

「お、おいっ、そりゃねえよ、ナティア」

クリスタがシュンとなっている。

「あはははは」

フィレッテはとっても楽しそうに笑っていた。

と、その時だった。

「グギャアアアア」

頭上からワイバーンの鳴き声が轟いてくる。

一瞬にして私もクリスタも戦闘モードに入る。

「ちっ、発見されたか。匂いか、匂いなのか！」

クリスタが馬車から飛び降りた。

「気をつけて！」

私の声に「おう」と頷く。

「へ？　へ？」フィレッテは何が起きたか分からずにあちこちを見回していた。

「御者さん！　十分後に戻ってきてください。それまでは安全なところに」

「へいっ、手当ては弾んでもらいますよ」

「りょーかいです。女王様に請求してくださいねっと」

そうやって冗談を言いながら私も馬車から飛び降りた。

「ちょ、ナティアちゃん？」

「クー！　フィレッテちゃんを守ってあげて。私たちなら大丈夫だから。フィレッテちゃん、絶対に馬車から降りちゃ駄目だよ」

クーが「ガオ」と吼える。相変わらずのまん丸い、かわいい体だけど、もう大人になりつつあるんだ。

フィレッテは何か言っていたが、私には聞き取れなかった。もうすでに意識は目の前のワイバーンに向いている。

「ナティア、サポートよろしくな」

クリスタの声に大きく「はい」と返事をする。

一年かかって、私も成長した。

もちろん、クリスタも。

ワイバーンの一匹なら、十分に対処できる。

「さーて、まずは動きを止めるところからな」

クリスタが走り出した。私は目の前のワイバーンを見つめる。翼が大きく、体は細い。首が長いところを見ると普段は川なんかで魚

を獲って暮らすタイプだろう。

ということとは……

「クリスタ！ クチバシに気をつけて、後は空を飛ばせないこと」
「あいよ」

持ち前の速さで翼獣に駆け寄っていく。私もそれに続きながら、手のひらに意識を集中する。

ワイバーンが飛びあがろうとした。

「クリスタ！ 飛ばせないで！」

私の叫びが聞こえたのか、クリスタが一段と速度を上げた。そして、腰に下げた鞘から剣を取り出す。

一年前には無かったクリスタの武器・ドラゴンレイピアだ。

細い二本の剣は、その刀身に意匠が施しており、二つを重ね合わせるかと争っている二匹の龍のように見える。

それを両翼のようにして広げると、クリスタは叫んだ。

「ドラゴンスマッシュ！」

すると刀身の龍の口からものすごい勢いで風が吹き出てきて、それはクリスタの足元で空気の層を成す。

一つの流れとなった空気の層はまるでクリスタを乗せたジェット機のようにして彼を勢いよく運んで行った。

私の視界からクリスタの姿が消える。次の瞬間、ワイバーンの痛々しい叫び声が聞こえてきた。

「グギャアアアアアア」

浮かび上がろうとしたワイバーンが、空を滑るようにして跳んで来たクリスタに斬りつけられたのだ。

「ナティア！」

クリスタが私を呼ぶ。できるだけクリスタに近寄って、私は手のひらを組み合わせる。

ワイバーンが翼を羽ばたかせた。急に暴風が吹き荒れ、クリスタの体は簡単に飛ばされてしまった。

「うおっ」

クリスタを乗せていた風のボードは消え去り、彼が真っ直ぐにこちらに飛んできた。

「きゃあああああ！ クリスタッ！」

私は祈りを止めて彼の体を支えるために手を伸ばす。

「くっ、ナティア！ どけえええええ」

彼は体を反転させて私に向かって剣を突きつけた。

「クリスタ？ ちょっと待ってよ」

「うるせえ、黙れ」

私の叫びを一蹴すると、クリスタが「ドラゴンスマッシュ」と吠える。

刀身の龍から渦巻きのような風が飛び出し、クリスタと私の間に壁を創る。

それは柔らかく、ふんわりとクリスタを受け止めた。危なげなく地面に下り立った彼は、私の方へ歩み寄る。

「助けてくれようとして、さんきゅ」

「あ、うん。どういたしまして」

二人で笑い合う。そこに、フィレットの声が聞こえてきた。

「二人ともー！ 乳繰り合ってる場合じゃないよお。ドラゴンドラゴン！」

クリスタが手を挙げてフィレットに応える。

「んじゃ、やりますか。倍返しで」

「ん、そだね」

私は手を組み合わせ、祈りを開始する。

「私は思う」

確固たる信念が、その拳に力を与える。

「まだ信じることができない神がいたとしても、信じることのできる仲間がいる」

パアッと組み合わせた手が光る。ザバスを使った時のような眩しい光。

その間にも、ワイバーンは大きな口を開けて私たちを呑み込もう

としていた。

それでも慌てずに、クリスタの剣を手のひらで包む。

「我が星痕を、信じる仲間の手に」

光がドラゴンレイピアに移る。それは凝縮し、切っ先に集まってい

く。

「ありがとよ。こいつのレシピは？」

クリスタがワイバーンの方を向いた。二つを重ね合わせ、一本の剣のように握る。すると、二本はまるで元から一本であったかのよう

にぴったりと納まった。

「全てを焼き尽くす聖なる炎、ってどこかしら」

クリスタがその星の力の名を呼ぶ。

「プロヴァメル……」

切っ先から炎が吹き上がった。やがて刀身全てを包み、クリスタの体さえも燃やしていく。

フォンドールのスターエクスカリバーに似ていた。一つだけ違うのは、フォンドールが自分の星の力を使ったのに対して、クリスタには私がリミッター解除した星の力を与えたことだ。

まるで星具を創るかのように、その場で星の力を他に分け与える。それが私の求めた力……星痕。

クリスタは再び龍の意匠から風を吹き出す。元々ドラゴンレイピアに備わっていた力と、私が分け与えた力？二つの星の力が混ぜ合わさり、吹き出した炎が龍のようにワイバーンに襲いかかった。

ゴッ、と炎龍が通り過ぎた後には、もはや何も残っていなかった。燦った炎と、黒こげになったワイバーンだった燃えかす以外は。

「ふう、熱いな」

「ちょっと火力が強すぎたかな？」

「火事になるかと思ったよ」

私たちの会話を、いつの間にか駆けよってきていたフィレットが呆然と聞いている。

「い、今の……なに？」

「え？ 星痕って名前をつけてるんだけどね。私の中にある星の力を無機物有機物関係なく分け与えることができる……技？ かな」

「そ、それって……まるで神様の力じゃない！ ようするに、この星の力を自由自在に操る、ってことなんだよ？」

ものすごく驚いているフィレッテは、何となく可愛い。勝った！
って気もするし。

でも、ふーん、そうなんだ。これって神様の力、になるんだね。
クリスタと二人、顔を見合わせる。

そんな、大して驚いてない私たちを見てフィレッテは考古学的に
どうのこうのとウンチクを語ってくれた。だけど、私たちにはそんな
難しいことは良く分からなかった。

「まあ、良く分かんないけど、一生懸命頑張ったから、できるよう
になったんだと思うよ」

とあしらう。

「ふ、ふーん、まあそんなものかもしれないね」

意外にあっさりとフィレッテは引き下がった。もっと食い下がる
かと思ったんだけどな。

と、思いきや今度はクリスタにすり寄っていく。

「それにしても……クリスタ君、格好良かったなあ。ねえねえ、そ
の剣もつと良く見せて」

ぴったりとくつつきながらクリスタの手や体に触れている。

むう、さっきから何なんだろう、この殺気は。神様たる私にも殺
意って芽生えるもんなんだろうか。

まあたった今、ワイバーンをやつつけたばかりだし、そんなこと
言えた義理じゃないけど。

などとゴチャゴチャ言っていると、木霊の囁きから声が聞こえてき
た。

「ナティア、無事か？」

ロスの声だ。

3 《人を信じて、人に傷つけられて……それでも人と繋がっていくために……》

ロスからの通信は、私たちの現在地と落ち合う場所を確認するた
めだった。

遺跡のすぐ近くにある村にB Aがあるので、そこで会おうという
ことになった。

「あ、フィレッテちゃんのこと、言うの忘れてた」

「会ってから話せば良いんじゃないの？」

クリスタはのんびりだ。

でも、私は気が気じゃない。何だか悪い予感がするのだ。

それは誰かの死に関わるものじゃなくて。

「だって、ロスに会ってから話したんじゃ怒られそうじゃない？」

その点についてはクリスタも賛成してくれた。

「んーまー、そんな気がするな」

「ねえねえ、どうしたの？」

私たちの会話にフィレッテが割り込んできた。

「うん……ちょっと待ってね」

ロスにはやっぱり話しておこう。私は異界の袋から夢見の鏡を取
り出す。

クリスタが簡単に勇者フォンドール一行……最近ではフォンドール・
パーティと呼んでいる……のことを話した。

「それじゃ、今からその勇者様と話ができるの？」

「そゆこと。ロス、今、通信できる？」

待つことなく、ロスの顔が鏡に映る。

「どうしたんですか、ナティア」

「あー、ちょっとさっき言うの忘れちゃって」

「……どなたです？ その後ろの方は」

どうやら隙間から見えちゃったみたい。私は照れ笑いを浮かべな
がらロスに事情を話す。

彼はうーん、と何度も唸りながら話を聞いてくれて、そして最後にはこう言ってくれた。

「仕方ないですね。乗りかかった船、です」

「ほんと？　フィレッテちゃん、オツケーだって」

「ホントに？　良かったあ」

でも、ロスはそのから一つだけ注文をつけた。

「ですが、これだけは守ってください。私たちの使命については話さないこと。遺跡の調査は私たちが一度中に入り、戻ってくるまで町で待ってもらうこと。できますか？」

そう言われると、フィレッテが途端に頬を膨らませて抗議した。

「ぶう！　そんなのやだよ。大事な発見を先にされるかもしれないじゃん！」

「でしたら、ここから先はご自分でどうぞ」

ロスはにべもなく通信を切った。

「あ、ちょ、待って……」

フィレッテが慌てて夢見の鏡にすがりつく。クリスタが「あーあ、師匠を怒らせちゃった」と頭を抱える。

「あのね、フィレッテちゃん。ロスがあんなこと言うのには事情があるの」

私たちには敵がいるってこと、その敵が遺跡で私たちを狙ってるって情報があること。

それを聞くと、フィレッテも少し怖じ気づいたみたいだった。考え込んだまま、立ちつくしてしまった。

私はクリスタと顔を見合わせる。私たちにできることは少なかった。誰かを守りながらの戦闘は、やはりリスクが大きい。フォンドールみたいに強くもないし。そう思っていると、フィレッテが急に手を叩いて目を輝かす。

「分かったよ！」

「な、なにが？」

「ナティアちゃんとクリスタ君は遺跡に入るんでしょ？　なにを

探してるのかは知らないけどさ」

「そ、そうだけど」

「だったら、私の探し物も見つけてきてくれないかな？ ついでで良いんだけど」

突然でびっくりした。

「フィレッテ、それはちよつと無理だぞ」

クリスタが私の答えを聞く前に返事をする。

「どうしてよ！」

フィレッテが噛みつく。クリスタはポカポカ殴りかかってくるフィレッテの頭を押さえつけながら言った。

「良いか、俺たちはパーティ全員でかかっても倒せないかもしれない敵を相手しつつ、それが何か分からないようなものを探さなくちゃいけないんだ。それなのに、お前の探し物まで見つけるのは不可能だ」

ブンブンと手を振り回すフィレッテはそれでも言葉を続けた。

「そんなこと言っちゃって、私にとっても大事なものなんだから！」

その敵ってのもどうせあなたたちのせいでやってくるんでしょ！

だったら少しくらい手伝ってくれたらいいじゃない！ 迷惑してるのはこっちだよ」

うーん、困った。フィレッテの言うことは詭弁だよ。でも、私はそれを責めることはできない。確かにギネス・コープが遺跡を狙っているのは私に一因があるんだろうし、フィレッテにはフィレッテの事情があるんだろう。でも、だからといってわざわざ危ない目に遭わせるってのも勇者一行の行動としては納得できない。

クリスタに視線を送ると、彼も困っていた。

分かっているのだ。おそらく、フィレッテが探しているものと私たちが探しているものは同じだ。だったらなおさらフィレッテに渡すわけにはいかない。ワイバーンの襲撃でうやむやになっていたけど、私たちにはあまり選択肢は残されていないのだ。

お互いに沈黙する。

譲るわけにはいかないし、でも放っておくこともできない。

馬車はその間にも道を進んでいき、やがてロスたちと落ち合う村の近くまでやって来た。

「ねえ、フィレッテちゃん。ちょっとだけ良いかな」

「なによっ！」

今や彼女は憤慨の域に達していた。

「正直に話すよ」と私が語り始めるとクリスタが「バカッ」とたしなめる。

でも、私にはできない。神様がウソついたまんまなんておかしいもの。

「クリスタ。私、彼女は悪い人じゃないと思う。全部話した上で、納得してもらいたい。でないと私たちも彼女も不幸だよ」

クリスタは「あーあ」という表情で頭を抱えた。でも、私を止められないのも知っているはず。

「止めても無駄だよ。フィレッテちゃん、私ね、神様のタマゴなんだ」

私が一から十まで話す間、彼女は「へえ」とか「ほお」とか頷いてばかりだった。

それもすぐく目を輝かせながら。

彼女は私の話す事柄を疑うこと無しに聞いてくれた。

その内に馬車は村に着き、私たちは話しながらロスとウトコが来るのを待つことになった。

「つまり、ナティアちゃんは神様になるために鍵を探してるってこと？」

「そういうこと。だから、フィレッテちゃんが見つけようとしている聖遺物は、たぶん私にとっても大事なもので……だから、フィレッテちゃんに渡すわけにはいかないんだよ」

クリスタが隣でぶすつとしてる。怒ってるのは分かってる。

そりゃそうだよね、クリスタは私を守ってくれようとしているのに、私が片っ端から誰かに秘密を話したら、命がいくつあっても

足りないんだもの。

でもね、こうも思うんだよ。私がこうやって旅に出なきゃいけないかったのは、お姫様みたいに守られて目的を達成するためじゃないって。

人を信じて、人に傷つけられて……それでも人と繋がっていくために……旅しているんじゃないかって。

だから、逃げるわけにはいかないんだよ。

「……分かった」

フィレッテは一言だけ言って首を縦に振った。

「本当？」

「うん、ナティアちゃんが言っていることは、私が知っていることとそんなに変わらないもの」

「知ってること？」

「コルディア教が出来上がる前に知られていた神話……何でか知らないけど、ヴィタモントに伝わっているもので、ジャネフにもウェルチにも残っていないものがあるの」

フィレッテがそのことについて話そうとした時、誰かが横から口を出した。

「いわゆる、フィレッテの教え、ですね」

私とクリスタがそちらを振り向くと、ロスとウトコが厳しい表情でこちらを……フィレッテを見ていた。

しかも、ロスはデススリンガーを構えていた。

「フィレッテさん、でしたか。降りてきてもらえますか？」

「し、師匠？」

クリスタが戸惑う。

「言うことを聞いてもらえなければ、痛い目を見るかもしれませんよ」

まるで強盗のような言い方だ。

「ど、どうしたの、ロス……？」

「ナティアさん、ちょっとだけ、黙っててもらえますか？」

ウトコの表情も険しい。

「でも……」

「良いの、なんかの間違いだよ」

そう言って、フィレッテは馬車を降りた。

私とクリスタがそれに続く。

「フィレッテさん……でしたね」

「うん、そうだよ」

「あなたはどちらのご出身ですか？」

「ヴィタモントだよ。入国審査にもちゃんと通ってるから、調べてもらってもいいよ」

「今回の入国の目的は？」

「考古学者がオーパーツを調べちゃいけないっての？ 学者だったら、歴史をひっくり返す発見をしたいって思うでしょう？」

「シトロンヴェールの聖遺物が目的なんですね？」

「そ、知ってる？ 一度発見された聖遺物が消えたって話し。厳重な警戒の中で誰も外に出ていないのに。噂じゃ聖遺物が一人で歩き出したってことだったし……ありえないよね？」

ん？ なんかおかしい。

「ちよ、ちよっと待ってよ。話しが繋がらないんだけど」

口を挟む私に、ロスが黙っていると目で訴える。

「……」

仕方なく、私は押し黙ってしまう。

「コホン、そのことについては私も知っています。あと二つほど質問を」

「良いよ」

「これから私たちと一緒にBAに行っていただきます。素性を調べさせてもらってもよろしいですか？」

「質問っていうか、命令だよな？ 良いよ、全然問題ない」

「では、最後の質問です。ナティアたちに近付いたのはなぜですか？ ナティアのことをどこまで知っていたのですか？」

「質問が増えたね。まあ良いよ。別にナティアちゃんたちが目当てな訳はないよ。偶然会っただけ」

ロスは何を言ってるんだろう。私がまた何かを言おうとすると、ウトコが口に指を当てている。

黙っていて、そう言っている。

「偶然ということはいいのではないですか？ 私にはあなたがあってナティアに近付いたように思えますよ。そうでしょう？ ギネス・フイレッテ」

……ギネス？

4 《フィレッテの教え》

「ふーん、とんだ茶番ね。全部調べはついてたってことでしょ」
フィレッテがロスを睨み付ける。

「あなたの反応を見たかったので。別に他意はありません」
「どーだか」

二人の言い争いを私もクリスタもただ見てるだけだった。
ウトコがいつの間にか隣に来て話しかけてくる。

「分かりましたでしょうか？ 突然で申し訳ないですわ」

「あ、ああウトコさん」

「ウトコ、こういうことなんだよ」

クリスタの問いかけに、ウトコは困ったような笑みを浮かべた。

「どう話したら良いんでしょうか。彼女の名前はギネス・フィレッテ。ギネス・コープの首領の娘なんですの」

フィレッテがウトコの言葉に反応した。

「そーよ、私はギネスよ。世界のテロ組織の首謀者の娘よ。だからなに？ 犯罪者の子供は犯罪者なの？」

捲し立てる。ウトコがそれに反論する。

「そうじゃありませんのよ。ロスはナティアさんが心配なだけ。もし彼女に何かあれば……」

「そんなの今初めて知ったわよ！ 大体、私なんか父さんの仕事なんて全然知らないんだからね！ 世界中を発掘しまくってたかと思っただけの間に、か悪の組織なんか創っちゃって」

「へ？ 世界中を？」

「ちょ、ちょっと待ってよ。どういうこと？」

「え？ なにが？」

私の質問に、フィレッテが戸惑う。

私、何か色々と間違った認識を持っていたような気がするんだけど。

「ねえ、話しを整理させて。ロスもウトコさんも、フィレッテちゃんも私の質問に答えてよ」

訴えに彼女たちは少し冷静さを取り戻したようだ。

落ち着いて話ができるように場所を移す。まだフィレッテのことを信用できないロスは、BAで話しをすることを条件にした。

フィレッテもそれを呑む。私もクリスタも異論はなく、もちろんクーも文句なんかあるわけではない。

「じゃあ、一つ目ね」

BAの一室を貸してもらった私たちは、向こう側にフィレッテとロス、ウトコを座らせ、こちら側に私とクリスタが座った。

クーはまだ動揺しているフィレッテが抱きしめている。

「フィレッテちゃんは私の敵？ 味方？」

ストレートな質問に、クリスタが吹き出す。

「おいおい、それはちよつと安直な……」

「いーの。答えてくれる？」

フィレッテがクーをギュッと抱きしめる。

「……敵じゃない」

それは複雑なニュアンスだった。

「味方、じゃないってこと？」

「そうじゃない。私は敵でも無いし味方でもないよ。だって私はナティアちゃんのことをどうこうなんて思っていないもの」

ジッと彼女の目を見つめる。真剣で、ある意味切迫した雰囲気を持つ瞳だった。

絶対に目を逸らそうとしない、私の一挙手一投足を逃すまいとしている。

その瞳に、私は微笑みで応えた。

「うん、分かった。でも私はフィレッテちゃんのが好きだよ」

自然にそんな言葉が出た。途端にフィレッテの頬が赤く染まった。

「な、なんだよお。そんなに無防備に人を信用するなよお」

「うふふ」

私は微笑みを絶やさない。

その様子に、ロスとウトコが不思議そうな視線を投げかけてきた。

「ナティア？ どうしたんです？」

「え？ だってロスはひどいよ。フィレッテちゃんのことを知ってたんでしょ？ だったら何で彼女の気持ちを考えてあげないの？ 親がギネスで、悪の組織で、たぶんフィレッテちゃんは辛い思いをしたはずなんだよ。なのに、尋問みたいな事までして。彼女が心を開かないのは当たり前だよ。それじゃ、白だって黒になっちゃうよ」

ロスが不満そうな顔をする。

「でもそれは！」

「でもない！ フィレッテちゃんは私をどうにかしようと思えばいつでもできたはずだよ。私は彼女を信じる」

「……」

ロスは黙り込んでしまった。

「次の質問ね。お父さんのこと、聞いても良い？」

これにはすぐに応えてくれた。

「父さん？ 父さんの何が聞きたいの？」

「どんな人なの？」

「んー、考古学バカ、かな。世界中を旅して世界の謎を解き明かすんだって。年に数回しか帰ってこないよ。でも、私には優しい父親だった。仕事のことは良く分からない。でもこの星と神話……コルディア教の関係をすごく調べてた。私も父さんを手伝いたくて、考古学者になったんだ」

「そっかあ。でも、私と同一年くらいなのに学者さんってすごいね」「ん？ ああ、別に大したことないよ。父さんから仕込まれてたからね」

私はいったん会話を止めた。

そして、クリスタに話を振る。

「ねえ、クリスタ」

「なんだよ」

「私、フィレッテちゃんの話すギネスと、あのギネスが繋がらないんだけど」

「ああ、そうだな。俺もそう思う」

「もしかしたら違うギネスってことはないよね？」

「それはありません。すでに調べはついていますから」

「私も保証するよ。本人から聞いたから間違いない。世界を掌握する方法が見つかった、なんてサイコな手紙を寄越してきたからね」
ロスとフィレッテが肯定する。

「あーそーなんだ……」

「もう良いよ。それくらい音信不通だし、もう父親だとは思ってないよ」

あっさりと応えたが、重たい言葉だった。

私はフィレッテの気持ちが悪く着くのを待ったために、ロスに質問を投げかけた。

「ロス、聖遺物について教えて」

次の質問にはロスがいつものように答えてくれる。

「聖遺物……つまりヴァームに関係する遺品ですね。シトロソヴェール遺跡にあるのは……遺体です」

「遺体？」

「そう、つまり亡骸ですよ。誰のものか詳しくは分かっていませんし、先程も聞いたように途中で行方不明になってしまっています。ただ、それが神に関係するものだということは分かっています」

「なんでそんなことが分かるの？」

「それは簡単です。彼の遺体が腐っていないからです。生前のまま、まるで生きているかのように存在している。そんなことができるのは、そしてそんな恩恵にあずかれるのは神に近いものだけでしょう」

ロスの言った言葉をフィレッテも肯定した。

「わたくしは、もしかしたら過去に存在した星の鎖なのではないか

「思ってもいるのですよ」

ウトコが口を挟む。

「根拠はありませんが……なんとなく、そんな気がするのですわ」
誰もそのことを否定しなかった。ということはロスもそう考えていたのだろう。

「だったら探すしかねえよな。こんなところで油売ってる場合じゃないだろう？」

クリスタが提案する。暗にフィレッテに対する疑いを解くべきだと言っているのだ。

だが、それはロスとウトコが許さなかった。

「どうして？」

「それには理由があります」

私には一つだけ思い当たることがある。そして、それが最後の疑問だった。

「フィレッテの教え、が関係しているの？」

二人が頷く。

「ええ、ここからはウトコに話してもらいましょう。その方が適任です」

ウトコが立ち上がり、フィレッテの隣に来る。

「な、なに？」

「あなたは本当にギネスの娘なの？」

「へ？ え？ な、なに？」

フィレッテが慌てる。どういうことだろう？

私にも意味が分からない。それはクリスタも同じみたいで、首を傾げてる。

フィレッテがクーをギュッと抱きしめた。そのせいか、クーが少し苦しそうにしている。

「わたくしの仲間にリビタというのがいますの。その娘は、かつてコルディア教の司祭でしたわ。使命感に燃えた素晴らしい……そう、聖者と言っても良いくらいの素晴らしい娘でした」

リビタが？　ということよりも、過去形であることの方が何だか悲しい。

「突然、なに？」

「彼女は、世界を旅し、コルディア教を広めていましたの。ジャンネフである程度の布教を終えた彼女は、ヴィタモントが機械文明に支配され、心を失っていることを見聞きました」

心を失う、の心とはたぶん『神の心』ってことなんだろうな。フィレッテを見ていて無慈悲だったり心ない人間だとは思えないから。「彼女は布教のために入国しようとしたが、拒否されましたの。そのため、リビタは密入国することにしましたわ」

密入国……リビタって昔から過激だったんだね。

「彼女は密かに布教をしていました。その様子はわたくしにも伝わってきましたわ。危ないので止めなさいと言ったのですが、聞き入れてはもらえませんでした」

しかし、それにしてもなぜ今、リビタの話をするのだろうか？

私がそう思っていると、ウトコは恐ろしいことを口にした。

「彼女はしばらくして、死体となって帰ってきました」

「は？」

「え？」

「なんだって？」

私とクリスタと、フィレッテが疑問を発する。

それはあまりに唐突な言い方だった。

「殺され、そして見せしめのためでしょうね。わざわざコルディア教の本部に届けられました」

そんな……あんまりだよ。

……でも、じゃああの話は……。

「わたくしは、リビタを生き返らせましたわ。禁じられた星の力を使って。お陰で破門されましたけれどね」

フィレッテが俯いている。心なしか震えているようだ。
どうしたのだろう。

「リビタは生き返った時にはすでに狂っていました。司祭であった頃の記憶はありますが、自分のものではなく物語のように感じているようですわ。わたくしはそれでも良いと思っていますのです。辛い……記憶でしようから……」

それで……リビタはあんな風に……あまりにも辛い体験だったから？ それとも、生き返ったことが心に悪い影響を？

実際どうなのかはウトコにもリビタにも分からないのだろう。ただ、リビタは元の人間とは違ったものになってしまった。

「そのリビタが、唯一自分の死に対して口にする言葉が、フィレッテの教えでした」

「フィレッテの教え？」

「ええ、ようやく分かりましたの。ヴィタモントで信仰されている宗教の言葉です」

「え？ でも、ヴィタモントには宗教がないって」

私はそう聞かされていた。

「そうですね。正確には宗教はありません。ですが、深く深く根付いている、彼らの生き方の基本がありますの」

ウトコがその言葉を口にする。

『人は競争の中でこそ魂を昇華できる。積極的に戦い、勝利を勝ち取ることが必要である』

「不思議なのですわ。この言葉だけはヴィタモントの各家庭にしっかりと根付いている。宗教でなくとも、それが心にしっかりと根を下ろしていれば、それは同じことですわ。さらに調べていくと、その言葉はある神話の残骸であることが分かりました」

私は言葉を思い出していた。フィレッテがあの際に私に告げようとしていた言葉を。

『コルディア教が出来上がる前に知られていた神話……何でか知らないけど、ヴィタモントに伝わっているもので、ジャネフにもウェルチにも残っていないものがあるの』

それが、もしかして？

「おそらくナティアさんが今思い浮かべているのはフィレッテさんの言葉ですわね。でも、それは違います。彼女が言っているのはコルディア教の過去にある神話ではありませんわ」

フィレッテが急に顔を上げて疑問符を浮かべた。

「え？ 違うって、じゃあなに？ 私は父さんにそう教えられて育ったし、ずっとそうなんだと……」

「ヴァームは人と争い、勝ち取ることを教えたりはしませんわ。それは……別の神の言葉なのですわ」

フィレッテが唇をわななかせた。

SS7 《幕間のナティアとクリスタ》（前書き）

今回のSSは第二章から第三章の間の一年間の中の一幕です。ちよっと切なくもありますが、ほのぼのを楽しんでいたけると嬉しいです。

SS7 《幕間のナティアとクリスタ》

「ねえ、ねえったらクリスタ」

私がクリスタを揺り起こすと、彼はぼーっとした目を擦りながら「ふにゃ？」と言った。

「ふにゃ、じゃないわよ。もう起きないと。ロスと定期通信の時間だよ」

ロスはクリスタと離れていても師匠の役目を果たしていくれていくようで、毎朝、毎昼、毎夕にその前までの修行の成果を報告しなければならぬようになっていく。

移動の日や、情報待ちの間は私もそれほどやる事が無いので、クリスタの修行の手伝いというか監督というかそういうものをやっているのだ。

「うーん、もうちょっと寝かしてくれねえかな？ トイレに行っているとか何とか誤魔化して」

クリスタは頭をボリボリ掻きながら面倒くさそうに代弁をお願いしてくる。

「できるわけないでしょ？ それ、前にやってひどい目にあつたの忘れたの？」

私は忘れもしない。一回だけ代弁をやったことがあるが、ロスに理詰めで詰め寄られた。

どうして出ることができないんです？ ではこのまましばらく待ちましょう。トイレでも結構、音声だけ配信してください。ではクリスタがいらない証拠に部屋を全て映して回ってくれますか？

どうにも言い逃れができなくなって、結局クリスタが土下座、私はきついお叱りを受けた。

ロスは修行に関しては私にも容赦なかった。いつもは優しいのに。ちなみにその時は私が馬車に乗って、御者の横で走るクリスタを鞭打ちながら三時間走らせ続けるという罰を受けた。

クリスタは途中何度も倒れ、私はそれを容赦なく鞭打たねばならず……ロスは私にもそういった意味で罰を与えたのだった。

「……ぶるぶる、ああそうだったそうだった……うん、今ので目が覚めたよ。さあ師匠に連絡しよう」

そうやって朝の報告をする。ちなみに、このやり取りがほぼ毎日続いているのは決してクリスタが馬鹿だからじゃないと信じたい。クリスタが報告と今日の課題を申し受ける間、私は二人と一匹の朝食を作る。

アルギニンにいたときはほとんど料理なんかしなかったのになあ。今では一般的な家庭料理ならだいぶ作れるようになってしまった。今日の朝は私がハムエッグとガーリックトースト。クーが牛肉（生）とミルクだ。クーもドラゴンなので食べるのは基本が肉となっている。ま、まあ生物なまもので良かった。生物せいぶつだったら私もさすがに耐えかねたよ。

んで、クリスタの朝食は私たちとは少し違う。

目玉焼きが二つにガーリックトーストが三枚、ベーコンの塊に牛乳が一リットル。さらにサラダがボールにテニコ盛りで食べる。

どうやらロスの訓練（しごき？）がハード過ぎて、莫大なカロリーを取らないとやっていけないようだ。

こんなしごきにクリスタが耐えられるのは、元々バスケットボールの選手だったからだろう。普段から激しい運動や練習に慣れているのだ。

「んが、んごガゴ……んぐぐぐぐぐ」

「クリスタ、ミルクミルク」

ほらほら、と言いなながら飲ませてあげる。大きなグラスになみなみと注がれているそれを、勢い良く飲み干していく。

「んっぷはっ！ ああ、助かった。死ぬかと思ったよ、ナティアさんきゅう」

食べてるときのクリスタは本当に楽しそうだ。

私も嬉しくなっちゃう。

クーも毎朝の彼の食いっぷりに敬意を抱いているのか、最近はクリスタに懐くことが多くなった。

「よっしゃ、食べたしランニングに行くか、クー」

そして、この時間も楽しみたい。

クリスタとほぼ全力疾走のランニング。クーにとってはいい散歩だ。

「いってらっしゃーい」

私はさすがについていけないので、彼らを見送った後は自分の時間を使う。

彼らが食べ散らかした食器を片付け、お茶を入れて席に着く。

ぼんやりと虚空を見て、少しだけ祈りの言葉を唱える。

「私のご先祖様。今日も元気に皆と仲良く過ごせますよう見守っていてください。願わくば、誰にも怪我が無いように助けてあげてください」

私はエデンを出てから、コルディア教の説話を唱えなくなっていた。

ヴァームも神だと考えず、私を守護してくれるご先祖様だと思い、特別視しないようにしていた。

それは私と神との間にあった垣根を取り払う作業だった。一つ一つ、神様を……ヴァームを身近なものとして感じるには、私の場合そうするしかなかったのだ。

そのお陰で分かったこともある。

神様は特別じゃないってことだ。

そりゃそうだよね。だって私が神様のタマゴなんだもの。神様が特別なはずない。

神様だって悩んで苦しんで、楽しくて大笑いして、一人の人間なんだ。

私は思う。神様ってたぶん、人よりも一つだけ秀でた力を持っていたんだ。

それは人に分け与える力。

誰かに自分の力、自分の全てを少しずつ分けることができる。
だからこそ、神様になれたんだと思う。

とかそういうことを考えているとクリスタが「腹減ったー」って
帰ってくる。

「もう、今食べたばかりだよ」

本当にまだ朝ご飯食べて一時間しか経ってない。

「んなこと言っちゃって腹減ったもんは腹減ってるんだい！」

「なーに駄々っ子みたいなこと言ってるのよ。私なんかずっと座って
たからまだ全然お腹空いてないよ」

「俺が空いてるんだ俺が俺が俺が！！！」

自分を指差しながらこっちに顔を寄せてくる。

ちよ、顔が近いってば。

ふと下を見ると、クーも同じようにして「ガウッ、ガウッ」って
私に近寄ってくる。

むう、困ったもんだ、この二人にも。

「んじゃあ、リンゴでも剥くから座ってなさい！」

「よっしゃあ！」

「がおっ」

クーとクリスタが抱き合ってる。何なんだこの二人は。

リンゴを食べている間にはクリスタが訓練について色々と話してくる。

「んでさ、俺が全力疾走駆けてたら、ちよっと前だったらクーのやつ、
着いてこれなかったってのにさ」

「がお」

「今日はもうちょっとで抜かれるところだったんだぜ。やっぱりマル
クトドラゴンって最強のドラゴンって言うだけはあるよな」

「ぐふんっ」

クーが誇らしげな顔をする。まあ表情自体は変わってないんだけど……
何となくそんな気がする。

それからすぐに二人はお昼……前のお休み。

ぐーぐーイビキかいて寝てる。ふふ、なんか小さい子供を相手しているみたいで可愛いな、って思っちゃう。

「くーりすた」つん、とほっぺなんか突いてみたり。

こんな無邪気な彼が、私を守るなんて大言壮語を言ってくれるんだからギャップ萌えだよね。

お昼ご飯を食べて（もちろんたくさんっ）からは私も加わって訓練だ。

ほんと、ロスのトレーニングメニューはすごいね。殺人的というか。

午前中は筋力トレーニング、午後からは実践トレーニング、そして夕方は座学だったりする。

「それじゃいくよ」

「おう、来い！」

私が星の力をできるだけ全開でクリスタにぶつける。

それを彼がどう回避、もしくは受け止めるかの修行だ。

私もこのトレーニングのお陰か以前よりも強い星の力を使えるようになっていた。

「ほれほれほれほれ」

「うりゃうりゃうりゃうりゃ」

連続で両手から放つ炎をクリスタはドラゴンレイピアから巻き起こる風でいなしている。

「それじゃこれは？」

氷の力を風で押す。勢いを増した氷塊がクリスタを襲う。

「なんの！」

それをクリスタは二つのレイピアを振り回して削り取った。

「まだまだよ！」

私は次々に氷塊を飛ばす。

クリスタはどんどん回転して……「おろ？ おろろろろ」
とふらふらしだした。

どうやら目が回ったようだ。

「クリスタ！」

私が駆けよると、クリスタは目を回して仰向けに倒れてしまった。
「もう、大丈夫？」

「ん、大丈夫、ちょっと調子に乗っちゃった」

クリスタがむっくりと起き上がって照れ笑いする。

少しだけ休憩して、今度はクーと実戦訓練。

二人とも日に日に強くなっていくのが分かる。そりゃそうだよ、
だって頑張ってるもん。

それで強くななきゃウソだよ。

と、思ったので二人へのご褒美にあまーいココアを入れることに
した。

疲れた時には、甘いものだよね？

夜には、ロスとの通信で座学……ようするにテキスト勉強が待っ
ている。

私はこれ好きだけど……だって知らなかった世の中のことが分
かるんだもの……クリスタは疲れて頭に入らないみたい。

「こら！ クリスタ、寝るんじゃないやありません。ナティア、クリスタ
をヴィターゴで撃ってください」

「い、いや、それはちよつと……」

「そのくらいじゃないと起きませんよ、このバカは」

「もう、良いじゃない、一日くらい。クリスタだって疲れてるんだ
よ」

クリスタが頑張ってるのは良く知っているから、私は思わず彼を
庇ってしまう。

それを見て、ロスが溜息を吐いた。

「はあ……いつからです？」

主語のない質問をされて、私は首を傾げる。

「なにが？」

ロスはチラリとクリスタを見て。

「このバカに好意を持ったのは、ですよ」

ちよつと意味が分からな……って、ええ!?

「な、ななな何言ってるの?」

「違うのなら良いんですよ。私の勘違いであってもらいたいものです」

むう、なんかロスがトゲトゲしい。

「なによお、そんなにまで言わなくてもクリスタだって一生懸命で頑張ってるし、私のこと守ってくれて……」

「だから、そういうところを見て言ってるんですけどね」

ロスが、今度はからかうような口調で言ってくる。もお! ほつぺたが無茶苦茶熱いのが分かる。

でも、言い返せない。言い返す言葉が見つからない。

何でだろう? でも、それで良いような気もする……けど……。

黙り込んだ私を見て、悪いことを言ったと思ったのだろうか。ロスが急に優しい言葉をかけてくれた。

「ナティア……すいませんでした。別に困らせるつもりはなかったんですよ。しかし、あなたの立場も……考えてくださいね」

私の立場? いずれ神様になるから?

疑問は口に出ていたのだろう。ロスが気の毒そうに目を伏せて、頷く。

今度は私がうつむく番だった。

私は……神様じゃない。

万人に同じ愛情を分け与える事なんて……できない。

でも、それは口にするのができなかった。

彼らの期待も、分かっていたから。

私はその日、少しだけ泣いた。

5 《私は……神の子》

別の……神？

ウトコの言葉は、フィレットだけでなく、私にも突き刺さった。以前からいるかもしれないって言っていた「ヴァームとは別の神様」が、今ここでははっきりと言葉にされた。

「断片的にしか残っていませんでしたので、概要しか知ることができませんでしたが……」

そう言いながらウトコが話したのは、次のような内容だった。

昔、この世界を作った者がいた。彼は星を作り、地面を作り、海を作り、そしてその後生命を作った。

小さな虫、海に住む動物、陸に住む動物、空を根城にする動物、動かずとも生きていける植物、小さな小さなバクテリア……それら様々なものが生まれ、最後に人間が生まれた。

創造主は知恵を持ち、言葉を持つ人間を特に愛された。

人間が次第に知恵を発展させていくと、彼らは創造主を神と崇めるようになった。

神も人間を導くことに注力し、その役目に満足していた……はずだった。

創造主といえど、彼は感情のある生命であった。ただ頼られるだけの存在に成り果てた自分に、彼は絶望していた。

そこで、彼は最も自らに近い存在を作ることにした。まるで自分の分身ともいえる存在を。

一つだけ異なるのは……その分身に「創造主を敬う」心無くさせたことだった。

「それが、どういう結果を生むか想像ができませんか？」

ウトコの問いに、ロスが付け加える。

「同族嫌悪というものです」

私だって、自分と同じものが隣にいれば、嫌な気持ちをする。

その上、相手を敬う心が無いだなんて。

「それじゃあ、その分身が？」

ウトコが頷く。

「残念ながら、そのもう一人の神が誰なのか、そして最終的にどうなったのかは分かりませんの。ただ分かることは、ヴァームが生きることとを止めてコルディアの道を選んだことだけですわ」

ヴァームは、疲れていたんだろうか。

ただ頼られるだけの存在として生き、自分の友達として生まれたものにも疎まれたことに。

「もう一つ分かることがあります。もう一人の神はヴィタモントに居たであろうこと。そしてその名前がフィレッテであっただろうことです」

そう、それがさっきの話しとつながるんだ。

ヴィタモントにだけ残る、ヴァームの教えとは違う言葉。そしてそれをフィレッテの教えということからも……ということとは？

「ロス、フィレッテちゃんが神様だって疑ってるの？」

「今ここに神様のタマゴがいることを考えれば不思議なことではありませんよ」

私はフィレッテを見る。

彼女も私を見ていた。

やがて、彼女はゆっくりと立ち上がった。

「フィレッテちゃん？」

「……ペリニヨン」

『え？』

私もクリスタも、ロスとウトコも同じ疑問符を発した。
フィレッテがこちらを向く。

「名前だよ。ヴァームに作られ、敵対し、最後には封印されてしまった憐れな彼の」

ロスとクリスタが私の前に立ち、フィレッテから隠すようにしている。

「私は……神の子・フィレッテ……」

目を閉じ、胸の前で手を合わせている。やがてその姿がぼんやりと光り始め……彼女の姿が眩しくて見えなくなる。

「フィレッテちゃん！」

私の叫び声も届かないようで、誰も、何も言わない。

眩さが消えると、フィレッテちゃんの姿は先ほどまでのラフなものから、白い装束に変わっていた。

頭には光の輪が浮かんでいる。そう、私の頭に浮かぶものと同じようなものが。

「ナティアちゃんに危害を加える気はないよ。今ここで争うつもりも無い。でも、気をつけて。ペリニオンはギネス・コープを率いて、あなたを殺すつもりだよ」

「あなたは……」

「私はフィレッテ。それ以上でもそれ以下でもないよ」

それだけを言うと、再び目の前が眩しくなり……フィレッテは消えていた。

しばらくして、やっと思考能力が戻った私たちは、フィレッテのことについて話し合う。

「あれは……敵なんですか？」

「危害を加える気はないって言ってたよ」

「そんなこと分かるかよ。ペリニオンのことも……ウトコが話した以上のことも知ってたしよ」

「ペリニオン……封印された……神？」

ウトコが疑問符つきでその名前を呼ぶ。

「どうしたの？　ウトコさん」

「いえ……何でも……わたくしは、あの方を信用しても良いような気がします。あの姿に不快感はありませんでしたわ」

「でも、もし敵じゃないとして……ペリニヨンとは別の目的があるってこと？」

「別の？ 別の……」

さっきからウトコがおかしい。

「どうしたの、ウトコさん？」

私はもう一度問いかける。

「……あの方は一度もペリニヨンのことを神様だとは呼びませんでしたわ。それなのに、神の子と……ですが、危害を加える気は無いと」

「ということは？」

「ヴァーム、ペリニヨンとは別に神がいるということですね」

ロス言葉に、ウトコが頷く。

三人目の、神様？

ギネス・コープにて。

「今帰ったよん」

手を上げる少女に、カルヴァアスが席を譲る。

少女は玉座に座った。

「ご苦労様でした。いかがでしたか、敵情視察は」

カルヴァアスは膝を付き、臣下の礼を取る。

「んゝ、上々、かなあ？ 結構楽しかったよ」

少し、カルヴァアスが困った表情をした。

「いえ、そうではなく……」

「冗談だよ。星の鎖とは接触したよ。お供のクリスタ君の戦力もだいたい分かった。ロスバツハーとウトコが合流してたよ。二人だけならともかく、四人を相手にするとマルゴーじゃ大変かもね」

「はっ、ではすぐに応援を出します」

「それには及ばないんじゃない？ あんな遺跡の中じゃ大人数は逆

に不利だよ」

「ふむ……では？」

「逆に遺跡の中に呼び込んだじゃえば良いんじゃない？」

カルヴァドスにはその意図が良く分かった。

ニヤリと笑う。

「さすがフィレッテさま。ペリニヨン神の子と言うだけはありませんな」

「あんな親父と一緒にしないでよ」

「またまたご謙遜を……はっはっはっ」

微妙に食い違う二人の言葉に、カルヴァドスが気付くことはなかった。

6 《星具って不思議》

なんか、この数日で色んな事がありすぎた気がする。

この一年は、本当に平和だったんだけどなあ。

まあその分、私の旅にも進展がなかったんだけどね。

ともかく、私たちは心機一転して、シトロンヴェール遺跡に向かった。もはやフレッテちゃんの事を気にしなくて良くなったので、それはそれで助かったのだ。

誰かを守りながらの戦いが、どれだけきついものかは良く分かる。その上、私たちは聖遺物を探さないといけないんだもの。

「どうした、ナティア？」

クリスタが私の顔を覗き込む。ふにゃ？ 私、何か変な顔でもしてたかな？

「なにになに？ 何でもないけど？」

「ん、んーとな、なんとなく落ち込んでいるみたいに見えたからよ」

「落ち込んでる、かな？」

「そうじゃなけりゃ良いんだ。まああまり無理するな」

「うん、アリガト」

にっこりと笑ってみせる。クリスタが照れて顔を背ける。

うん、いつもの日常だ。

「はいはい、お二人サン。いちゃいちゃするのは勘弁してくださいよ。今から決死の戦闘が待ってるんですからね」

「あらー、わたくしは微笑ましくてとっても良いと思いますわ」

いつから見えていたのか、ロスとウトコが茶々を入れてきた。

「う、あんたたち、いつから見てたの？」

「最初からです」

「最初からですよ」

二人とも笑顔が痛いよ。

ともあれ、そんなこんなでいよいよ遺跡に向かう。

シトロソヴェール遺跡は、猛獣が住み着いていることでなかなか発掘の進まなかった遺跡だ。

全長がどのくらいあるのか分からないけど、少なくとも地下三階までは発掘されている。

噂の生きてる聖遺物が見つかったのは地下三階の奥だという。

「ところが、発掘隊が翌朝に聖遺物を持って帰ろうとビバークしていると、夜中に遺体が発光し……なんとのっそりのっそりと歩いて出て行ったというではありませんか！」

ロスがおどろおどろしく話してくれる。

「……」

「あら？」

「あのね、ロスがむりやり怖い話をしたって、誰も怖がらないよ」

「そうだな、超現実主義者の怪談ほど怖くないものはねえな」

「そうですわね、それに蘇る死体ならついこの間まで一緒に旅してましたものね」

ウトコがヒドいことを言う。それってリビタのことだ。

ロスがコホン、と咳払いをして場の空気を変える。

「ま、まあそれはともかくとして、見えてきましたよ。あれがシトロソヴェール遺跡です」

見た感じは小さな祠みたいだ。入口は小さく、数人が一度に入ればぎゅうぎゅうに詰まってしまいそうだ。

それに、不思議なことに人の気配がしない。

「ねえ、ロス。本当にギネス・コープはここにいるの？」

ロスに問いかけると、彼も首をひねっていた。

「ええ、そのはずです。まさかも聖遺物を見つけられた、なんて事はないと思います」

その時、私の懷で眠っていたクーが起き出して唸った。

「ぐううううう」

「クー？」

どうやら、クーの鼻には分かるらしい。敵の居場所が。

「ふむ……それではクーに一働きしてもらいますか」

ロスがクーを抱き上げ……て咬まれた。

「あいたたた」

「あー、ロスって相変わらず懷かれてないよね」

なぜか、クーはロスに懷かない。人に心を許さない、みたいな態度が気に入らないんだろうか？

仕方なく、クーはクリスタが抱きかかえることになった。

「おい、クー、分かったな」

「おんっ」

「敵の匂いがしたら小さく吠えろ。それと腐った匂いを嗅いだら、二回小さく吠えるんだぞ」

「おんっ」

クーもすっかり犬っぽくなったなあ。

私は少し寂しい思いがして、クーを見つめる。ドラゴンであるクーが犬っぽくなるって、あまり言い事じゃないような気がする。

そんな私の思いには気付かず、三人と一匹は遺跡の中に入っていく。

「おい、ナティアも早く来いよ」

クリスタの声に、私は弾かれるように走り出す。

「待ってよっ」

小さな懸念は吹き飛ばして。

遺跡の中は想像していたよりも明るかった。

壁がぼんやりと光っていて、たいまつなんか焚かなくても十分に周囲を見ることができる。

「これって……」

壁に触れてみると、粉のようなものが手についた。

「ふむ……妖精の粉、ですね」

妖精の粉、それは決して本当の妖精の鱗粉であるわけはなく。ロスの説明によるとこれも星具の一種らしい。

単純なところ、細かい粉にザバスを封じてあるのだ。

「それにしても、星具って不思議」

私の眩きをクリスタが拾った。

「どうしてだ？」

「だって、星の力は信仰心に関係があるんでしょう？　なのに無機物が星の力を宿すなんて……」

「別に不思議なことはありませんわよ」

ウトコがくすくすと笑っている。

「へ？」

「ナティアさんは思い入れの深い品物ってございませんの？」

「えっと、あるけど」

例えば、昔から持っていた手鏡なんかは大事にしている。他にもアルギニンから持ってきた日記帳とか。

「人形なんかには魂が宿るって言いますわ」

「あーそういうことか」

クリスタが得心したように手を打つ。

「どうということ？」

「ようするに、ものを大事にするってことは自分の分身のように扱ってことだよな」

「うん、それが……あつ、そうか」

ウトコが笑う。

「わかります？　つまり星具はわたくしたちの分身なのですわ。もちろん、特殊な技術が使ってはありますけれど」

私はクリスタのドラゴンレイピアを見た。その話を総合すると。

「ということは、星具って馴染めば馴染むほど力を発揮するってこと？」

「ええ、そうですわ。フォンドールのスターエクスカリバーなんか

はもう十年ほど使ってありますから。もうそれは自分の手足のようなものですわ」

ウトコが嬉しそうに話す。

「ってことは、俺のドラゴンレイピアも、大事にすれば強くなっていくって事か」

首を傾げたウトコが少しだけ訂正する。

「うーん、少々違いますわ。大事にすることも大切なのですが、それよりも共に苦楽を乗り越えることが大事なのですわ」

ようするに、戦友として扱え、ってことかな。

私は武器としての星具を持っていないから実感が湧かないけど、物に命が宿るのは分かる気がする。

星痕も、つまりは同じ原理でやっているのだから。

「さあ、皆さん、お喋りはその辺で終わりのようですよ」

「おんっおんっ」

クーが吠えていた。

敵が近いのだ。

「クリスタ、陣形を」

「りょーかい、師匠。ウトコ、ナティアを守って後衛に」

「はい、ですわ」

「師匠は俺の後ろから支援を、ついでに後方から敵が来ないか注意をしてください」

「分かりました。では、クリスタは？」

「クーと一緒に特効かけます」

「バカですか、敵の正体も分からないのに」

「大丈夫、俺を信じてくださいよ」

クリスタがドラゴンレイピアを構え、私に指示する。

「ナティア、アクエリアスをドラゴンレイピアに」

なるほど。私は納得してアクエリアスを使う。水の入った瓶を取り出してそれを手に包んだ。

「全てを包むあなたの力を、少しだけ貸して」

星痕をレイピアに刻む。刀身が水に包まれるのを見て取ると、私はウトコの後ろに下がった。

「さんきゅ」

「なにをするのです？」

ロスが疑問を投げかける。珍しく勘が働かないようだ。

「こうするんだよ」

二本の剣を前面に突きだし、叫ぶ。

剣先から物凄い勢いの水が噴き出してきて、視界を遮った。

「いくぞ、クー」

「がうっ」

二人が飛び出した。

「なるほど、煙幕代わりですか。言ってくればそんな煩わしいことをしなくても良かったのですが」

ロスの手には小さなボールが握られていた。

「ナティアさん、一応防御しておきましょうね」

ウトコが左手の盾を体の前に構えた。以前使っていたパーフェクトアローを改造した新しい防具だ。

「アクアシールド」

防具の名前を呼ぶと、丸いその盾の縁から水がほとぼしる。

「これで流れ弾には当たりませんわ」

水は私とウトコの全身を包む。指先で突いてみると、弾力はあるものの決して破れはしなかった。

アクエリアスの強力版、のような感じだ。

「ふむ、準備はできたようですね。では私はクリスタの援護に回りましょうか」

そうだ、クリスタはどうなったんだろう。

耳を澄ますと、向こう側でつばぜり合いの音が聞こえる。

「ウトコ、私たちも」

「危ないですわよ、と言って聞くような方ではありませんわね。少なくとも、シールドの外に出なければ大丈夫ですわ」

ウトコが太鼓判を押してくれたので、私は積極的に前に出ることができる。

少し先に進むと、剣戟の音はより激しくなっていた。

「ちっ、しっこいぞ」

クリスタの声だ。

姿が見える。相手は二人だった。

軽装で長い剣を持った兵士二人。

違う、あれは剣じゃない。銃剣だ。

「クリスタ、銃撃に気をつけてください」

「分かってるよっ」

クリスタをサポートするようにクーが敵兵の前を行き交う。それを避けるために敵兵の一人が銃を撃った。

「クー！」

私の叫び声が聞こえたのか、クーがこちらを向いた。

「危ないっ」

ロスが叫んだかと思うとクーが銃弾に弾かれる。

「ぐわうっ」

一步、二歩と下がるクー。その足に大きな裂傷ができ、血が噴き出していた。

「クー！」

私が近寄ろうとするのをクリスタが止める。

「大丈夫だ、心配するな。師匠！」

「了解ですよ」

クリスタの指令にロスが従い、手に持ったボールをクーに向かって投げつけた。

それはクーの足に当たるとポン、と弾けて……次の瞬間にはクーの傷は治っていた。

「あれは……デスボール？」

「ええ。プラセンタを込めてあります」

デスボールはロスの新しい星具だ。小さなボールに星の力を込め

ることができる。他の星具と異なるのは、現象でないものも封じ込めることができる点だ。

普通の星具は炎や氷、光などの現象しか封じることができない。それに対して、デスボールはプラセンタやダウンエフみたいな精神操作系の星の力を込めることに成功している。

これらの星の力は通常、対象者に触れないと使えないため、非常に便利だ。

「なんだこいつら……」

敵兵はクリスタたちの行動を見て不思議がっている。

確かに、こんなこと、奇跡でもない限りできそうにない。

そんなことをあっさりとやっちゃうのだから、さすがに最強の勇者は違うね。

「一気に片付けさせてもらうぜ」

クリスタのドラゴンレイピアから風が吹き出す。クーがクリスタの背中に乗る。

「行くぞ、クー！ ドラゴンスマッシュ！」

狭い中でこんな技を……と思ったのだが、意外に効果的だったようだ。

薄暗く狭いところを急激に突撃してきたクリスタに、敵兵は全く反応できていなかった。

クリスタが斬りつけ、その背中からクーが飛び降りた。

「がうううっ」

もう一人の敵兵に噛みつく。

「殺してはダメですよ」

ロスが制止する。

「ん？ そうか」

クリスタもクーも動きを止める。

敵兵は腕を切りつけられ、足を噛まれていた。

同時に、戦意も喪失していたようだ。

クリスタが余所見をしているというのに立ち上がる様子すらない。

「まったく、油断は禁物ですよ」

ロスにはデススリングァーで捕縛網を打ち出した。
敵兵二人は大人しく網に絡まっている。

「さて、では少しお話しをしましょうか」

ロスの尋問が始まった。

7《「いしゅーしょーさます」「がっしょう」》

ロス は 敵兵 二人 を 縛り 上げ、 一人 を クリスタ に 任せ た。

「では、まずはここに在る勢力から聞きましようか。クリスタは敵の幹部が誰かを聞いてください」

「りょかい、師匠」

クリスタはそう返事をする、敵兵の顎を指で押し上げる。

「というわけだ。お前たちのボスは誰だ？」

「くっ、誰が吐くものか」

「ふーん、そんなこと言ってもいいのかな？　おい、クー」

クリスタがクーを呼び寄せる。

「おんっ」

喜んでクーが駆けより、クリスタの言葉を待つ。

「あのな、こいつの全身を舐め回せ。何なら何ヶ所か噛んでも良いぞ」

ニヤリと笑うクリスタと対象に、敵兵は表情を青くする。

あー、何というか、さすが「微笑みの死神」と呼ばれるロスの弟子だわ。とてもじゃないけど、見るに堪えない。

で、目を逸らしてロスの方を見ると、

「いいですか、人数と所持する武器を全て言ってもらいます」

「くっ、誰が吐くものか」

こちらと同じようなやり取りをしている。

「ほお、ではこれを見てください」

ロスが取り出したのはデスボールだ。

先程も言ったように、普通の星具とは違って現象でない星の力を込めることができるのが特徴だ。

さらに、投げたり罾として置いたりを使い勝手は非常に良い。

「この中にはあなたに妄想を見せる星の力が込められています。私が調整して永遠にムカデが体を這い回る妄想を見せるようにしてあ

ります」

敵兵の体が震えた。想像しちゃったんだろうなあ。あー、私もちよっと想像しちゃった。気持ち悪いよお。

「わたくし、ちよっと席を外させてもらいますわ」

「あー、ウトコさん、私も」

私たちは退避した。

曲がり角の向こうからは壮絶な悲鳴や悲痛な笑い声が聞こえてくる。

「ごしゅーしょーさまです」

「がっしょう」

私とウトコが冗談のように手を合わせる。半分は冗談じゃなくて本当に可哀相だと思っているんだけど。

まあ私の命を狙っているらしいし、同情する余地はないかな？

で、結局分かったのは以下のことでした。

軍を率いてるのはマルゴー。相変わらずゲリラ戦を想定しているみたい。

さらに言うと、全勢力は三十名。内一名がマルゴー、二人はすでに捕虜。残りは二十八名。

ついでにまだ聖遺物は見つけていない。手がかりすらも見つかっていないみたい。

「さて、以上のことが分かったわけですが……クリスタ、どういった作戦を立てます？」

ロスがクリスタの顔をジッと見つめる。

クリスタは笑っていた。

それを見て、ロスも笑う。

「決まってるんだろ？ 最強の勇者を背負ってるんだ。チマチマやらねえで、片っ端からやっていこうぜ」

「その通りですね」

ロスがこちらを振り返る。

まったく、とんでもない人たちだ。

「ウトコ、アクアシールドで徹底的にナティアを守りなさい。私たちのことは一切気にかけなくて結構です」

「了解ですわ」

ウトコもそんな行動に慣れているのか文句一つ言わない。

「ナティア、少々ご苦勞ですが、星痕をデスボールと私たちの武器に込めていただきたい。疲れはありませんか？」

「そんなの無いよ。あなたたちが無事でいてくれたら、それで……良い」

言われるままに、星痕を込める。中にはプラセンタなども込めたので、いざというときには役に立つだろう。

「では、行きますよ」

ロストクリスタが先頭、私とウトコが後方に構える。

「走り回りますから、離れないように」

『はいっ』

全員が元気の良い返事をする。

クリスタが一番に駆けた。

今までの掛け声が聞こえていたのだろう、敵はすぐに大挙して現れる。

「邪魔だ邪魔だっ」

クリスタが両刀を振り回して敵をなぎ払う。

ただ闇雲に振り回したのではない。的確に敵を戦闘不能にしていた。

その後始末をロスが行う。謂わばクリスタが戦い、ロスはその支援をしていた。

「クリスタ、横っ！」

私が叫ぶと、ロスがデスボールを投げる。

「むっ」

敵に当たって割れたボールは、炎を生み出し一気に敵を包む。

「ぐわああああ」

驚き、転がって火を消そうとする彼にウトコが通り抜けがけにア

クエリアスを掛けていく。

「無駄な殺生は神の道に反しますわ」

なるほど、そう言えば先程からロスもクリスタも戦闘できない状態にすることを優先して、殺そうとはしていない。

相手も怪我と言えど体を欠損することもなく、立ち上がれない、武器が持てない状態にされているだけだ。

「へえ、そんな余裕があるんだね」

「ばっか言えよ、これでも一応勇者の端くれだからな」

私の声が聞こえたのか、クリスタが笑いかけてくる。

「何いってんのよ、油断しないでよ」

「しねえよ、お前を守ってる内はな」

くっ、クリスタの癖にカッコいいこと言ってくれるじゃないの。そう言っている間にもクリスタは前方に立ちふさがる敵に対してドラゴンレイピアを後方に向けて構える。

「ロス、後はよろしくな」

「了解ですよ」

「ドラゴンスマッシュ!!」

レイピアから風が送り、クリスタが低空飛行する。滑るように洞の床を壁を縦横に飛び回る彼は十分に敵を威嚇した。

「ウトコ、ナティア、伏せてください」

ロスの叫び声で私もウトコも伏せた。

次の瞬間、爆音が響く。

ロスはどうやらデスボールに込めた爆破の力を炸裂させたらしい。ものすごい音と爆風で、周りの情報が伝わらない。

「ロス！ クリスタ！」

彼らの気配が消える。

私はウトコの腕をしっかりとつかんでいた。

SS8 《ナティアからクリスタへの質問状》

ナティアです。

今回は、作者多忙（↓検定試験）のため、特別番組をお送りします。

題して、ナティアからクリスタへの質問状！！！！

どんどんぱふぽふ！

（しーん……）

さ、さあてさっそくクリスタを呼んでみましょう。

クリスタ〜！

クリスタ「へいへい」

ナティア「こんにちは」

クリスタ「なんだよ急に呼び出したりして」

ナティア「なんだよは無いと思うんだけど」

クリスタ「そういえば俺たちって遺跡で戦闘中じゃなかったか？」

ナティア「細かいことは気にしないの。まあ夢とでも思っちゃおうだい」

クリスタ「……また何か考えてるな？」

ナティア「ううん、全然っ！」

クリスタ「むちゃくちゃ怪しい（じと目）」

ナティア「さ、さあて今日は私からクリスタへ質問があります！」

クリスタ「急に話題を変えたな」

ナティア「良いから答えてよっ」

クリスタ「へいへい。分かったよ。神様が何をしたって今さら驚かねえし」

ナティア「ではでは。まずはクリスタのプロフィールを教えてくださいいな」

クリスタ「そのくらいなら……って、ナティア知らなかったっけ？」
ナティア「あー、私じゃなくて読者に向けて」

クリスタ「読者？ 何のことだか。まあいいや。セレスタン出身の十六歳、男。元々はアマチュアバスケットボールの選手で、プロにも誘われてた。今は勇者やってるけどな。家族は父親と母親の三人家族。そういや、父さんたち、どうしてるんだろうな」

ナティア「そういえば、もう一年くらい帰ってないもんね」

クリスタ「手紙は出してるから近況は報告してるけどな。俺たちみたいに見の鏡を持てれば良いんだけど……」

ナティア「あれって貸与されてるけど、実は超高級品なんですよ？」
クリスタ「一個五千シトロンのというからな」（作者注…一シトロンは百円くらい）

ナティア「クリスタの三か月分の給料だね」

クリスタ「っておまつ、なんで俺の給料知ってるんだよ」

ナティア「えゝ、だってロスが教えてくれたもん」

クリスタ「し、師匠……どうりで教えてないのに給料日にお前がたかって来ると思った」

ナティア「えへへへへ」

クリスタ「そういえばお前はどんなだよ」

ナティア「え？」

クリスタ「アルギニンの家族に手紙とか出してるのか？」

ナティア「出してるよ。お母さんとおばあちゃん。あとは大婆さんにも」

クリスタ「大婆さま？」

ナティア「今現在の星の鎖だよ。もう確か百歳を軽く超えてたと思うよ」

クリスタ「……ちなみに星の鎖がない状態ってどうなるんだ？」

ナティア「えゝ？ 良く知らないけど、鎖が無いから星が自由になるんじゃない？」

クリスタ「星が自由って……なんかあんまり想像したくないな」

ナティア「あはは……そうだね。では、次の質問だよ。クリスタは勇者としてどのくらいのランクなの？」

クリスタ「えっと今のところレベル十五だな」

ナティア「レベル？」

クリスタ「えっと、勇者にはその経験と実績によってレベルが決められているんだ。レベル十五は単独でワイバーン退治ができるレベルだな」

ナティア「ちなみにフォンドールたちは？」

クリスタ「あいつらは軒並みレベル三十以上はあるよ。チームであれば国の大使としての権限を発動することができるレベルだ」

ナティア「あははは……何気にあの人たちってスゴイのね」

クリスタ「俺のレベルが一年で十五まで上がったのも、あいつらと一緒に旅してた実績を買われてだからな。普通だったら一年生の勇者なんてレベル三が良いところだろ」

ナティア「なるほど。ではでは、次の質問です。クリスタは私のことをどう思っていますか？」

クリスタ「な、なななな何をいきなり」

ナティア「ちゃんと答えてくださーい（ニヤニヤ）」

クリスタ「……大切な仲間だと思ってるよ」

ナティア「それだけ？」

クリスタ「……んー、お前は何を言わせたいんだ？」

ナティア「クリスタの本音が聞きたいな、って。どうせ夢なんだからいいじゃん」

クリスタ「そういう問題じゃないだろ。夢だろうがなんだろうが言えねえものは言えねえ」

ナティア「ん？ 何が言えないのかな？」

クリスタ「んがっ（口を押さえて）、何でもねえ」

ナティア「にひひ」

クリスタ「ニヤニヤすんな。気持ち悪い」

ナティア「ほれほれ、正直に吐いちゃいな。私のこと、どう思っ

んの？」

クリスタ「……まあ、大事だと思ってるよ（／／／／）」

ナティア「ん？ なぁに？」

クリスタ「だからっ！ 大事な人だと思ってるよっ！」

ナティア「へえ、ふーん」

クリスタ「な、なんだよ（／／／／）」

ナティア「にへへへ（ニヤニヤ）」

クリスタ「ニヤニヤすんなくて。お前これだけのためにやってるだろ」

ナティア「当たり前じゃない。私だって気になるよ。クリスタが……好意を持ってる人が自分のことをどう思ってるか」

クリスタ「な……お前………」

ナティア「まあ、好意が愛情にまで育ってないのが難点だけだねえ（ニヤニヤ）」

クリスタ「な、なんだよ」

ナティア「クリスタはどうなの？ 私に対しての感情は好意なの？

愛情なの？」

クリスタ「……」

ナティア「クリスタ？」

クリスタ「ん、良くわかんねえけど……少なくとも、バスケットを犠牲にしても良いくらいには大事に思ってるよ」

ナティア「それってつまり？」

クリスタ「……」

ナティア「ねえ、クリスタってば」

クリスタ「……」

ナティア「もう、はっきりしないんだから」

クリスタ「いいだろ、別に」

ナティア「良いわよ、別に」

クリスタ「……はは」

ナティア「ふふふ」

クリスタ「はははは」

ナティア「もう、何がおかしいのよ」

クリスタ「んにゃ、何だかおかしくてな」

ナティア「というわけで、今回はこれでおしまい」

クリスタ「意外に時間を取られてびっくりだったぞ」

ナティア「作者もびっくりだったみたいね」

クリスタ「作者？ 何のことだか知らんが、ロスたちも大変なんだからそろそろ戻るぞ」

ナティア「おつかれさま」

番外編はこれで終わりです。

本編での私たちはまだお互いの気持ちに気付いていないけれど、今回の遺跡探検で新しい動きがあると思うよ。

楽しみに待っててね。

8 《わたくしたちも、ナティアさんを信仰すれば》

しばらくして……。

煙がようやく納まり、私は周りを見回してみた。

兵士たちがもんどりうっている、気絶しているのもいるし、どうやら殲滅には成功したようだ。

ふと気がつくと、手にはびしりと汗を掻いていた。

そのつながった先には、ウトコの顔がある。

「ウトコさん、大丈夫？」

「ええ、大丈夫ですわ……でも……」

彼女の心配事を、私もすぐに共有することができた。

「クリスタは？　ロスは？」

ウトコが首を振る。

「そんな……」

まさかあの二人がやられるとは思えないので、たぶんはぐれたんだ。

でもどうしてだろう？　私たちは一步も動いていないはずなのに。

「とにかくここを離れましょう。いつ新手が現れるか分かりませんし、わたくしだけではナティアさんを守りきれませんもの」

ウトコの提案を飲んだ。確かに、戦力がない以上、ここにいては危険だと思う。

私とウトコはなるべく暗がり静かに歩いた。

ギネス・コープがそうしたのだろうか。壁には所々松明が灯されている。

私たちにとって問題なのは、声を上げてクリスタたちを探すことができないことだ。

「ん……やっぱり駄目ですわ。夢見の鏡にも、木霊の囁きにも応答がありませんの」

ウトコが何度目かの通話を試してみる。

おかしい。夢見の鏡も木霊の囁きも相手に意識がありさえすれば話すことができるはず。

「それ以外の場合って、何が考えられる？」

私が聞くと、ウトコはしばらく考え込んでから、指を立てた。

「プロヴァメル」

ウトコがあまり得意でない炎の星の力を使う。

が、そこには何も生まれなかった。

「ん？ 媒体を使うの忘れた？」

「いいえ、媒体なら壁にいくらでもありますもの」

そうだよ、松明が壁にあるんだもの。

「ということは？」

「今度はナティアさん、お願いします」

「う、うん」

言われるままに私はプロヴァメルを使ってみた。何も起きない。

「相性が悪いのかな……ザバスッ」

得意な方の星の力を使ってみる。が、やはり何も起きない。光源もあるから使えないはずはないのだ。

「これは……やはり制限されていますね」

「制限？ どういうこと？」

「前にも説明したことがありますけど、星の力は神への祈りを媒介としてこの世界の力を借りてるんですの」

「うん、だから、神様への信仰度が星の力の強さに関係してるんだったよね」

「ええ、ですから、神への祈りがこの世界に届かなければ、星の力を使うことはできないのですわ」

私には良く理解できなかった。

祈りつてのは自分と世界をつなぐもので、それを邪魔することなんてできないはずじゃない？

その疑問を素直に投げかけると、ウトコはこう言った。

「別の祈りが強ければ、それを阻害することができます。わたくし

はたった一つだけ、この制限について実例を知っていますわ」

私の胸にも、一つの可能性が思い浮かんでいた。

それは、ウトコとは異なる考え方だったのかもしれない。

でも、より真実に近いような気がする。

「リビタがヴィタモントで殺されたときのことですわ。あれだけ強い信仰を持つ彼女が、あっさりと殺されてしまった。彼女の言葉を借りれば、それは『神様から見放された』ってことですのよ」

思い浮かぶ。

最大のピンチに阻まれて……星の力を使おうとして……でも、何の反応も起きないその瞬間の絶望が。

「あの……フィレッテの言ってた……」

私とその言葉を口にしたその後ろから、吐息が聞こえる。

「ペリニヨンのこと？」

驚いて振り返る。

「わあっ」

「よっ、元気してた？」

後じさった私を背に隠して、ウトコがアクアシールドを構える。

フィレッテがそこにはいた。いつの間に来たんだらう。

「たんまたんま。別に悪さしに来たわけじゃないからさ」

手を盛大に振って自分の悪意を否定する。

「この前も言っただっしょ。ナティアに手を出す気は無いんだって」

ニコリと毒のない笑みを浮かべるフィレッテにウトコが警戒を解いた。

「では……何をしにきたのですか？」

でも、あくまで距離は変わらない。

私もウトコの背中から前に出ることができないでいる。

「手伝いに来たんだよ。探しに来たんでしょ？ 聖遺物を」

コクリとうなづく。

フィレッテはそれを見て黙って歩き出した。

着いて来い、と言わんばかりだ。

始めは動こうとしなかったウトコだけど、彼女の姿が見えなくなる前に、歩み始めた。

誰も声を発さない。

静か過ぎて不安だ。

こんなときに、クリスタはどうしたんだろう？

私を守ってくれるんじゃないかなかったんだろうか。

何かしていないと、余計なことばかり考えてしまう。

そういえば、さっきから敵兵に会わない。

まさかとは思うが、フィレットは敵に会わない道を通っているのだろうか。

様々な思いが私を取り巻き、不安にさせる。

不安だ。もつのすごく不安だ。

だって、敵かもしれない人間が目の前で道案内してるんだもの。

私は、我慢ができなくなって、フィレットに声をかけた。

「ねえ、あなたはペリニヨンの……なんなの？」

フィレットは答えない。

「……言えないってこと？ そんなんじゃ、信用できないよ」

私になじるように言くと、フィレットは一言だけ、ぽつりと言葉を発した。

「ペリニヨンはガイチュウよ」

「え？」

害虫？ そう聞こえた。驚いてフィレットの顔を覗くと、それこそ害虫を噛み潰したような顔をしている。

私はそれ以上聞けなくなって、ウトコの後ろに下がってしまう。

「ナティアさん……」

ウトコが心配そうに私を見る。

また、だんまりの行進が続いた。

ずいぶんと奥に入った気がする。

私が足に重みを感じる頃、フィレッテがようやく明るい声を出した。

「さあて、この辺で大丈夫だよ」

そう言ってどっかりと座り込む。

「フィレッテ？」

「ナティアちゃん、不安にさせてゴメンね。でも、もう撒いちゃったから大丈夫だよ」

「撒いたって……もしかして、ギネス・コープをですの？」

フィレッテはニコリと笑ってうなずいた。

彼女が言うには、あの辺りにはギネス・コープが陣を張っていたそうなのだ。

「その証拠に、星の力を使ってみてよ」

言われるままに、プロヴァメルを使ってみる。

ボッ、と音を立てて火が点った。

「あ、使える」

「あいつらが良く使う手だよ。気をつけてね……まあナティアちゃんには関係ないんじゃないの？」

「え？　なんで？」

フィレッテが不思議なことを言う。

「だって、あなたは神様なんでしょ？　タマゴと言ってもさ。だから、わざわざ神様への信仰を媒介にしなくても、ナティアちゃん自身が媒介になれば良いんだよ。そうすれば誰にも邪魔されない」

それを聞いて納得した。確かに、ロスのデスボールなんかは使えている。それはすでに力が込められているからだ。

同様に、私自身を媒介にしてしまえば、ペリニヨンの力も及ぶことがない。そういうわけなのだろう。

「ん？　ということはですね」

ウトコが何やらフィレッテに確認し始めた。

「わたくしたちも、ナティアさんを信仰すれば、星の力が邪魔されずに使えるってことなのでしょうか？」

そ、それは……嫌だ。以前、ウトコが私に対して祈りを捧げたことを思い出した。

まあ、ぶっちゃけそれは続いているのだけれど……これじゃあますます神様扱いされてしまうよ。

「あー、それは無理なんじゃない？ ナティアちゃんに星を創るほどの力があれば別だけど。今のナティアちゃんには自分の面倒を見るので精一杯だと思うよ」

そうだよ、良かった。私は別に神様になんてならなくて良いんだもの。別に立派なことができるわけじゃないし、何の力もない。誰も助けられない。それなのに神様だなんて片腹痛いよ。

そんなことを考えていると、ウトコがさらに突っ込んだことを聞いた。

「では、フィレッテさんを信仰すれば……どうなります？」

こ、これが本命か。

ウトコはたぶん「フィレッテの教え」の真意を知りたがっているんだ。

それは、私も知りたい。

フィレッテは少し迷ったような表情を見せたけど、すぐにいつもの笑顔で言い放った。

「星の力とは、別のものが使えるかもね」

どうということだろう？

「どうということですか？」

「うん、じゃあヴァームを媒介にして使える星の力ってのの本質は何だろう、ってことだよ」

本質？

「それはようするに、星と一体となり、星の持つ力を分けてもらうことだよ。つまり、コルディアの思想がそのまま取り込まれているんだよ」

なるほど。

「だがしかし……私を信仰したとしてもその母体は別の宗旨なわけ

だから、何も得ることができない。そもそも他人に分け与える、他人と共有するってのは宗教上は非常に稀だと思うんだよ」

「そうでしょうか？」

ウトコが少し不満げに声を荒げた。

あら？ 彼女って案外とこういう議論に熱くなるタイプなのかしら。

「あー、別にコルディア教が変わってるって言いたいわけじゃないんだよ。宗教ってのは本来、生命個々の幸福を追求するものだからさ。全体的に皆が幸せに、ってのは個々人の幸せの果てにあるもののことを言うんだと思うよ、私は」

なるほどなるほど。つまり、一人ひとりが幸せになれば、最終的には全体が幸せになれるってことだね。

「でもさ、コルディア教は違う。ヴァームは最初から生命全体としての幸福を考えている。だから逆説的に個人の幸せがつかめなくても宗旨としては問題ないんだね」

自分が犠牲になっても、全体が幸福であれば良しとする、か。

リビタの行動がその例にあてはまるのかもね。

でもそれって……少し悲しい。

「ただし、そのコルディア教の宗旨によってこそ、星の力ってのは成り立つんだ。だって最初から分け与えることが前提だからね。その前提でいくと、私なんかを信仰したって星の力は手に入らない。その代わりに何かの力が手に入るかもしれないけどね。でもさ、それはたぶん平和的な力じゃなくて、利己的な力なんだと思うよ」

なんだか、フィレッテの話しが抽象的になってきた。まるで詳しく話したくない、とでも言うように。

私がもう一つ不思議に思ったのは、フィレッテの話しぶりが「神の子」ぽくないことだ。

まるで……自分自身が神様であるかのような……。

と、私がそのことを突っ込もうとしていると、奥から声が聞こえてきた。

「眩しい……この眩さは………」
声に振り向くと、そこには一人のお爺ちゃんが目を細めていた。

9 《クリスタサイド・ヴィタモントの民はどうしてそうも自分の体を大事にし

爆風が洞内の埃を払い、俺たちの視覚を奪った。

師匠にもどうやら予想外の出来事だったようだ。

「クリスタツ、ナティア、ウトコ」

師匠の叫び声が聞こえる。

俺はとっさに手を伸ばした。誰かの肌に触れることができれば、
と思っただけで、確信があったわけじゃない。

ほぼ真っ暗闇の中で伸ばした手に、誰かの指が触れた。

「こっちよ、急いで」

くぐもっていて誰の声か分からない。だが、師匠じゃないことは
確かだ。

「みんなは？」

「大丈夫、無事だから」

その声を信じ、俺は引かれるままに歩みを進めた。

ようやく煙が晴れて。

俺は目の前に師匠の背中を見る。クーは師匠に抱かれているみた
いで、小さな尻尾が見え隠れしていた。

さらにその先には……見慣れない後姿があった。

「誰だ？」

少なくとも、ナティア、ウトコのどちらでもない。かといってこ
のタイミングでリビタが合流したとは考えにくい。

クーが吼えないということは、悪い相手ではないということだろ
う。

それだけを信じて、声をかける。

「師匠！」

「クリスタ……無事でしたか」

「前にいるそいつは？」

「……ご自分で確かめてご覧なさい」

言われて、急ぎ足で師匠を追い越す。

「やあ、クリスタ君。無事でよかったね」

そこにいたのは、フィレッテだった。

「フィレッテ……お前、逃げたんじゃ」

「私は逃げるなんて言ったことはないよ」

俺は思わず腰に差している物を抜こうとした。それを気配で感じたのか、フィレッテが手を出して制する。

「いま私を切っても良いことなんか無いんじゃないかな。それよりも、協力してナティアちゃんたちを捜す方が先決だと思うよ？」

「お前がナティアたちの居場所を知ってるって言うのかよ」

「知ってるって言うんだよ……うふふ」

ニヤニヤと笑う表情が小憎らしい。だが、害が無い以上、従っていた方が無難というものか。師匠が大人しく歩いているのもそのためだろう。

俺はフィレッテを注意深く観察した。

本当に見た目は普通の女の子に見える。だが、そんなこと言ったらナティアだってそうだ。

問題はそこに何を隠しているか、ということだ。

ナティアのように、フィレッテはあっけらかんと秘密をバラしそうにはない。

「そんなにジロジロ見ないでよん」

フィレッテが照れ臭そうに体をよじる。

「あ、いや別にそんな訳じゃ」

なーにやってんだ、俺は。相手のペースにはまってる場合じゃない。

「……フィレッテ……」

「なーに？」

「目的は何だ？」

「別に何も？」

「そんなわけ無いだろ」

「んー、そうだねえ。クリスタ君に会いたかったから、って言うたらどうする？」

「な、なななななんだって？」

だ、ダメだ俺。しっかりしろ！

動揺していると、師匠が声を掛けてくれる。

「フィレッテさん、クリスタをからかうのはそれくらいにしておいてくださいな」

一瞬、フィレッテが師匠を睨み付けたように見えた。が、俺が彼女の表情を窺った時にはもうすでに笑みを浮かべていて……。

「あららん、ごめんなさいね。でも、全くの冗談ではないのだよ、ロスロジック君」

「……………」

師匠が黙った。師匠の昔の名前を知っていた。どうして？ こいつは一体何なんだ？

「ダメだね、私は。つついからかってみたくなっちゃう。でも安心してよ。今日はちよっとしたお願いがあつて来たの」

「……なんです？」

と、彼女の言葉に合わせるように視界が開けた。

ふ、と彼女の姿が消えていく。

え？ と思う暇もなく、その姿は霧のように見えなくなっていた。

「マルゴーをやっつけちゃって欲しいの」

そんな言葉を残して。

「ふい、ふいれって？」

俺が間拔けな声を出すと、開けた視界の向こう側から声が聞こえてくる。

「そこにいるのは誰？」

しまった、敵だ。

「クリスタ、どうやら担がれたようですよ。戦闘態勢を。クー、あなたにも加勢してもらいますよ」

師匠の腕からクーが離れ、姿勢を低くした。

俺はというと、まだショックから覚めきれずにいた。

ようするに、敵陣に誘導されたってことか？

じゃあやはり、あいつは敵なのか？

「クリスタ、考えてる場合じゃありません。多勢に無勢です、先手必勝ですよ」

師匠がデススリンガーを構える。俺は後方支援を期待して突っ込んでいった。

「お前はっ！ 敵だ、銃を構えよ」

以前に一回だけ見たことがある、マルゴーだ。彼女はいきなりの襲撃に面食らっているようで、あれこれとぎゃーぎゃー喚いている。

「それじゃ俺たちには勝てねえよ」

大体、こんな狭いところで銃を使うなんて無茶なんだよ。跳弾に当たったらどうするってんだ。

持ち前の素早さを利用して敵の隙間を縫っていく。すれ違いざまに斬り抜くと、その後から師匠がスリンガーで止め……気絶させるだけだが……を刺す。

「くそっ、ここじゃ不利だ。引くぞ」

なんだ？ あっさりと引くじゃないか。これは追うべきか、追わざるべきか。

「師匠！」

「深追いしないでください。新手がいるかもしれません」

その声に自分を制止し、じつくりと辺りを窺いながら進んでいくと、さらに開けたところにやってきた。

「さすがに、突っ込んできてはくれないわね。お見事よ、褒めてあげるわ」

マルゴーは広場の中央で毅然と立っていた。供の兵の一人も連れていない。

「……観念しましたか？」

「冗談っ、観念するのはお前たちよ、ロスバツハーにクリスタ」
お、俺たちの名前を知ってるんだ。まあそりゃそうだよな。こいつらの計画をことごとく破ってきたんだからな。

それにしても、負け惜しみはみつともないね。この状況で勝ち目があるわけ無いのに。

「ふふん、この期に及んで氣勢を上げるじゃねえか。行くぜっ」

勢いに乗って飛び出した俺に、師匠が声を掛ける。

「バカッ、あれほど慎重にと言ったのに」

俺がその言葉を気にする前に、自分の体で思い知ることになる。

「ほんと、バカね」

マルゴーが手を伸ばす。それがミシミシと音を立てて巨大に成長する。

「うわわわっ」

思わずブレーキを掛けるがもう遅かった。

「ヴィタモントの機械文明を味わいなさい」

マルゴーの右手はハンマーのように膨れあがり、彼女が手元のボタンを押すと同時に飛び出してきた。

ガゴンッ！！

俺の腹にまともに鉄の塊がぶち当たる。

「ぐごっ」

体をくの字に折り、俺は吹き飛ばされた。壁にぶち当たり、一瞬意識が飛びかける。

が、思ったより衝撃が少ない。

「くうん」

どうやら、クーが俺と壁の間に入ってクッション代わりとなってくれたようだ。

「クー！ 大丈夫か？」

「ガウッ」

その丸々とした体が幸いしたようで、クーもそれほどの怪我は負

っちゃいない。

「くそっ」

気を吐いた俺に、師匠がげんこつを当てる。

「いてえっ」

「本当にバカですね、あなたは。人の忠告を聞かないからこうなるのですよ」

頭をさすりつつ、謝る。

「うう、面目ない」

「分かれば良いんです。気持ちを切り替えなさい、次に影響します」
師匠の言葉に気を引き締める。

「マルゴー、まさか肉体改造するとは驚きましたよ」

「必ず、あなたたちを仕留めないとね、私の命が危ないのよ」

マルゴーの頭にはペしゃんこに潰されたギネスの姿が過ぎっていた。

ああはなりたくない。そしてそうはならない自信が、彼女にはあった。

「ヴィタモントの民はどうしてそうも自分の体を大事にしませんかね」

「うるさいわね、その口を潰してあげる」

右手のハンマーが飛んでくる。

「二番煎じはインパクトが弱いですよ」

師匠はあっさりと避けてしまう。

「まだまだよ」

ハンマーは行きつ戻りつして師匠を狙っている。しかし、行きと戻りの時間が無駄だ。素早い攻撃ができていない。

「ほら、隙だらけです」

デススリンガーでデスボールを撃ち出す。ハンマーに動きを制限されているマルゴーは簡単にその攻撃を喰らってくれた。

「熱ッ」

プロヴァメル……炎が巻き起こる。しかし、威嚇のつもりだった

んだろう、火はすぐに消えた。

「……はあはあ、どういうつもり？」

マルゴーが髪を振り乱す。

「別に、警告のつもりですが」

「情けをかけてもらったってわけね……許さないわ」

ハンマーを引き上げ、右手が元に戻る。

「今度はどんな手品が待ってるんです？」

「これよっ！」

「グオオオオオ」

マルゴーが呼び寄せたのは、ワイバーンだった。

「なにを？ 二体がかりなら勝てる？」

疑問を発する師匠を無視して、マルゴーが唸った。

「うううう、これだけはやりたくなかったのに……」

なにをするつもりだろう。実力差は明らかだったのに。

「ゴミ芥のように消えなさいっ」

マルゴーが叫ぶと、ワイバーンがマルゴーを頭から呑み込んだ。

10 《クリスタサイド・まだまだあなたに負けるとは思っていないませんけど?》

マ、マルゴーがワイバーンに喰われた。

俺が呆然と見ていると、師匠が俺の手を引いて後ろに下がった。

「何をぼーっとしてるんです。予想のつかないことが起こったらすぐに下がるのが常識ですよ」

そんなことを言われても……ワイバーンは、マルゴーを咀嚼しているように見える。こりゃあ、完全に……。

「グウウウウウウウ………ゆ、ユルさナイ」

ワイバーンが喋った!?

師匠が俺の前に立ちはだかる。

「まさかとは思いますが……これも神の御業とでも言うんじゃないでしょうね」

片手にデスボールをいくつもつかみ、デススリンガーに番える。

師匠……本気だ。

「死ネ」

ワイバーンが口を開く。

そこからマグマのような泡立ちが見え、それが一気に放出されてくる。

「マグマブレスだっ」

避けるのは間に合わない。

だが、師匠は諦めていない。

デスボールをマグマに向けて撃ち放つ。

それは溶岩に当たると割れ、その部分からみるみる凍っていく。

「師匠、それは?」

「アクアハートダブルです。一つの弾に二回分のアクアハートを込めました」

とんでもないことをやる。

感心していると、師匠はまた俺の手を引いて逃げようとする。

「し、師匠？」

「バカですか、こんな狭いところでワイバーンと戦ったら不利に決まってるでしょう？ デスボールは無限ではないんですからね」

幸い、ワイバーンは足が遅いようだ。

俺と師匠、そしてクーはその足音が聞こえなくなるところまで逃げた。

少し暗がりにも身を隠し、息を吐く。

「は、はあ……いったい、どうしたって言うんだよ。あれはなんなんだ？」

俺の、誰に言ったわけでもない言葉に師匠が反応する。

「私に分かるはずがありません。常識を越えています」

ということは、対策もないということか。

「勝ち目は、あるのか？」

「さあて、フォンドールがいればはつきりと答えられるんですがね」
師匠が地面に大の字になって寝そべる。息が荒い。体力が尽き欠けているんだろう。

無理もない。このパーティの中では普段後方支援の師匠も前線で戦わないといけない。体力の使い方は段違いだ。

それは同時に、俺が頼りないって事の証拠でもある。

ちくしょう！ 俺にもっと力があれば……。

そう考えていると、クーが近寄ってきた。

「くうん」

ペロペロと頬を舐めている。慰めてくれてるのか。

「よしよし」

緊張を解いてクーの頭を撫でる。

せめて、ナティアがいてくれればなあ。星痕で星の力を利用できるのに。

「あ、そうか。呼べばいいんだ」

懐から夢見の鏡を取り出す。

「ナティア、ナティア」

呼び出すが……応答がない。どうしたんだろう？

試しに木霊の囀りも使ってみるが、同じだ。

「呼べませんか、これは……制限がかかっているみたいですね」

師匠は俺に、信仰を妨げられた状態であることを説明してくれた。

「通信の力ではない、デスボールなどは大丈夫みたいです。私たちの祈りとは別の信仰が、空中を満たしている光景をイメージしてもらえばいいのではないでしょうか」

確かに、ドラゴンレイピアの風の力は使える。

ということは……。

「星の力はあてにできないってことですね」

やっぱりそうか。

こりゃ、本当にフォンドールでもないかと太刀打ちできそうにないな。

「それでも……やらなければなりません。ボヤボヤしているとナティアとウトコに危害が及ぶかもしれないかもしれませんからね」

師匠が立ち上がる。

はあ、確かにその通りだ。

俺も立ち上がる。

「うおんっ」

クーが吠えた。

三人いれば、何とかなるか。

「うよしっ！ いっくぜっ」

出て行こうとする俺の襟を、師匠がつかむ。

「バカですか、あなたは。誰が無策で突っ込みなさいと言いました」

「ほえ？ じゃあどうするんだよ」

耳を澄ませば、足音が聞こえてくる。足音、違うな、地響きだ。

「早くしないと見つかったまうよ」

「慌てると死にますよ。良いから聞きなさい。良いですか、あれは見たところワイバーンが主体のようです。コントロールできるワイバーンですね。それだけにむやみやたらな凶暴性は薄れていると思

って良いと思います」

「それで？」

「攪乱しましょう。星の力が使えない以上、複雑な作戦は取れません」

「……ってことは俺が囃か……」

落ち込む俺に、師匠が声を掛ける。

「大丈夫です。クーにもやってもらいます。二人でワイバーンを混乱させてください。決して無理はしないように」

まあそれはありがたい。だけど、ということは……どうなるんだ？

「じゃあ誰がワイバーンと戦うんだ？」

「決まってるでしょう？ 私ですよ」

「えー！ 師匠が？ それは無理だろ！！」

途端に拳が飛んでくる。

「ごふっ」

ひ、久しぶりに鉄拳を腹に受けた。

「まだまだあなたに負けるとは思っていませんけど？」

「は、はひ……すみませんでひた」

腹に力が入らない。

だけど……確かにこの中じゃ師匠が一番強いかな。

立ち直った俺は師匠に頭を下げた。

「よろしくお願いします」

「言われなくても頑張りますよ。では、行きますよ」

地響きはすぐそこまで来ていた。

師匠がタイミングを計っている。

近い、そしてでかい。

本当に星の力なし、三人だけでこのワイバーンに勝てるだろうか。迷っていると、号令がかかる。

「いまです、行きなさい！！」

「おうっ」

「ガオッ」

俺とクーは目配せでお互いの跳ぶ方向を決めた。

俺が右、クーが左だ。

「こっちだ」

「マ、まテ」

まずは俺に照準を合わせてくる。しかしなんだかおかしい。さっきよりも言葉が辿々しいような気がする。

「グボオオオオオ」

だが、考える暇などない。

マグマが来る。

その時、クーが後ろからノイズブレスを飛ばし、ワイバーンⅡマルゴーを威嚇する。

「ウ、ぐぐ」

それにつられて、マグマブレスが引っ込んだ。

その代わりにクーが狙われる。

今度は俺がワイバーンⅡマルゴーに近付き、斬り込む。

「グウウウウウ。メンドウダ……死ね」

最後の「死ね」だけ妙にはっきりと聞こえたんですけど……ワイバーンはマグマブレスを口の中に溜め、大きな体を回転させ始める。「うおっ！ やばい」

俺は思わずクーを抱きかかえて元の洞穴に逃げた。

そのすぐ後ろをマグマが通り過ぎていく。焦げ臭い匂いが充満する。

「何をやってるんですか、あなたたちは」

師匠があきれ顔で俺たちを見てた。

「そんなこと言ったって……ありややっぱり無理だよ、なあ？」

クーに同意を求めると、情けない顔でクーが俯いた。

「はあ、そんなことでフォンドールを超える、なんて言ってたんですか？」

「面目ない」

落ち込んでいる俺の隣を師匠が通り抜ける。

「クリスタ、あなたのドラゴンレイピアを貸しなさい」

「え？ でもこれは俺専用だから……」

「ドラゴンスマッシュも風の力も使えないのは分かっています。力が足りないことも分かります。ですが、やらなければならないんですよ」

師匠は真っ直ぐに前を見て、駆けていった。

たった二本の剣を持って、たった一人で。

「行きますよ、人外！」

両手に剣を持ち、師匠が真正面から突っ込む。

スピードは俺の方が上だと思う。

「グウウウウ」

だが、師匠は敵をよく見ている。次々にマグマブレスを躲している。

一太刀を浴びせた。

「ユルサナイ」

鋭い爪が襲いかかる。

師匠の服が引っかかる。振り回され、壁に向かって投げつけられた。

「ぐっ！」

「師匠！」

叫ぶが、俺は動けなかった。

「くそっ」

「グルルルル」

クーが唸っている。同じ、気持ちなんだな。

師匠はすぐに立ち上がった。そして素早く地面を転がる。いなくなったその場所にマグマが浴びせられる。

「フ、フフフフ……ヤハリ、さいきょうのゆうーしゃ」

段々とワイバーンⅡマルゴの口調が流暢になっていく。もしかして、馴染んだってヤツか。

「化け物に褒められても嬉しくはありませんね」

「化け物じゃない！」

とうとう、元々のマルゴーの口調そっくりになった。だが、その猛攻は衰えることを知らない。

師匠はなんとか避けているが、段々とその動きに陰りが見えてきている。

「クー、俺たちももう一度」

「グワウッ」

クーも同じ事を考えていたようだ。

同時に飛び出す。

クーがマルゴーに、俺が師匠に近付く。

「クリスタ、何をしてるんです」

「何言ってるんだよ、師匠。もう走れないだろ」

「大丈夫です。今からが反撃の時間なんですよ」

「分かったから、剣を返してくれ」

半ばむりやりにドラゴンレイピアを奪う。

「おい、マルゴー！」

俺の声にマルゴーが振り向く。

そこにクーが飛びかかった。

「ふんっ」

クーはワイバーンの太い腕であっさりと弾かれた。

次は俺の番だ。

「ドラゴン……」

レイピアを後ろに構え、風の力を吹き出す。

「バカ！ あれほど突っ込むなと……」

師匠が怒ってるが気にしない。

「スマッシュ！」

一気に風に乗る。

「馬鹿ね、殺してくれって言ってるみたいなものよ」

マグマブレスが正面から俺を狙う。

お互いの勢いでその距離は一気に縮まる。

「クー！」

マグマに当たろうかというその時、俺はクーの体当たりで弾き飛ばされ、マグマの一撃から逃れることができた。

「何ですって！」

しかしその先には壁がある。

俺は後ろに向けていたレイピアを両方とも前に出して逆噴射する。勢いが殺され、壁に激突する前に止まることができた。

「行くぞっ、クー」

すかさず俺はクーに向かって風を吹き出した。

その勢いによってクーはマルゴーに向かう。

俺もその後ろから再びドラゴンスマッシュを打ち出す。

「なるほど……」

師匠の声がかすかに聞こえた。

「馬鹿の一つ覚えみたいに、いい加減にしろなさい」

マルゴーは怒りを顕わにし、マグマを乱れ打つ。

その一つ一つが、氷によって打ち消されていく。

「なにっ」

マルゴーが振り向く。そこにはデスボールを撃ち尽くした師匠が疲れのために倒れ伏していた。

「さんきゅー、師匠！」

「まだまだよっ」

マルゴーが再びマグマを撃とうとした時、クーがファイアブレスを吐いた。

「ぎゃあっ」

突然の炎に、マルゴーは避けることもできず、まともに顔を焼いた。

「これでトドメだ！」

その隙に、俺の剣がマルゴーの胸に突き刺さる。

「ぐ、ぐうううううう」

マルゴーが吠えた。

膝を突き、倒れる……かと思ったが。

「死になさい」

ワイバーンが翼を全力で羽ばたかせた。

強烈な風。それに俺もクーも吹き飛ばされる。

「ぐわっ」

「がうっ」

壁にぶち当たり、意識を失いかける。

「くそっ、やっぱり……フォンドールがいないと……ダメか」

「ふふふ、罰を与えてあげるわ」

マルゴーが脚を大きく上げ、俺に向かって踏み下ろす。

さすがに、もう逃げる力もない。

目を瞑った。

その時を待つ。

が、いつまで経ってもその時は来なかった。

そっと目を開けると……フォンドールがいた。

巨大な剣でマルゴーの脚を支えている。

「フォ、フォンドール」

彼は、俺の方を振り向くとニヤリと笑った。

「久しぶりだな、クリスタ。ずいぶんと立派になった。勇者の顔立ちをしているぞ」

それだけを言うと、前を向き、手に力を込める。

「ふんっ」

それだけで、マルゴーを押し返してしまった。

「な、なななな」

たたらを踏んだマルゴーが驚いている。

「ふむ、最近のワイバーンは喋るのだな、進化したか」

様々な疑問も、フォンドールにかかるると単純化される。

フォンドールは余計なことなど考えないんだろう。

敵がいて、それがバランスを崩している。たぶん、フォンドールにとってはそれが全てなんだ。

彼は巨大な剣を振り上げ、振り下ろした。

星の力も何も使わない。ただ、臂力のための攻撃。

「ぎゅぷ」

だが、それだけで敵はつぶれた。断末魔さえまともに上げず。ただの一撃で。

それ以降、ピクリとも動かない。

「終わったか」

フォンドールに近付く。向こうを見ると、リビタが師匠にプラセнтаをかけていた。

「リビタッ」

「よお、相変わらずよわっちいな、おめえはよ」

リビタの方こそ、相変わらぬ口の悪さだ。

つもる話しはあったが、とりあえず俺は安堵した。

これで、全員が揃った。

11 《神様、神様！》

私は慌ててプロヴァメルを消した。

だって、敵がやってきたのだと思ったから。

ウトコも同じ事を考えたみたいで、私を背中に隠す。

「ナティアさん、いざというときは逃げてくださいね」

それってつまり、ウトコを置いて、ってことなんだろう。そんなこと、できない。そう思いつつもそうしなければとの責任感も胸に宿る。

皆が必死になって守るもの。

傷つき、倒れ、そうしてまで守る私。

果たして彼らはその表面にいる私に目が向いているだろうか。

そんなことをふと思ってしまう。

……ううん、疑っちゃダメだ。ウトコも、ロスも、クリスタも私自身を守るために戦ってくれている。

それを信じなくて、何を信じるというのだ。

だけど、守られるだけの私じゃイヤだ。私も戦わなくちゃ。

「分かった。でも、危なくなるまでは私も戦う」

その決意に、ウトコも首を縦に振ってくれた。

この一年、私はそうやって守られながら戦ってきた。

そしていつか……。

「眩しい……眩しいぞ……」

声はまだ眩しがっている。

フィレットが私の方を見た。

「プロヴァメルは消してあるよ？」

私の返事に首を傾げる。私も、首を傾げる。

じゃあ一体なにが眩しいっていうのだろう。

「眩しい。神の光が……一つ……二つ…………」

暗がりから出てきたのは目を瞑ったままのおじいさんだった。

ぼろぼろの布をまとって、ふらふらと歩いている。顔は青白くて生気がない。

これってもしかして……。

「フィレッテちゃん、もしかしてこれが……」
彼女はうなずいた。

「うん、聖遺物だよ」

「とは言われましたも、生きてますけど」
ウトコがもつともな意見を出す。

「神の残したものが聖遺物ってんなら、こいつはまさしく聖遺物だよ」

フィレッテが懷から銃を取出した。

って、何でこんなものを持ってるんだろう？
と思っっている間に、それで聖遺物を撃ってしまった。

「ちょ、ちよっと!」

私とウトコが同じ言葉を発する。当のフィレッテはキョトンとしていた。

「え？ なに、悪かった？」

聖遺物は倒れ、ピクピクと動いている……けれど、不思議なことに血が出ていなかった。

「これ……血が出ていない」

「だから言ったでしょう？ これは聖遺物……物質だよ。オルゴールのようなものだと思うてもらえばいいよ」

フィレッテの言葉を、今は信用するしかない。

それにしても……なんて悪趣味な遺品だろう。ヴァームの知らない一面が見えて、ちよっと怖い気がする。

「神よ、神よ。私を壊すことは次代への損失ですぞ」
むくりと起き上がった聖遺物が言った。

「私はマイヨール。神の言葉を次代へ残すための箱。窃盗と破壊を回避するために移動が可能な形態として製作されている」

まるで決められた言葉を話すかのように棒読みだ。まるで感情が

込められていない。

それが反対にこのマイヨールと名乗った人物（？）の真実を示している。

「教えて、星の鍵……」「しっ」

私の質問をフィレッテが遮る。

「……神は最後の決断を下された。

世界を創造し、生命の連なる樹を作り上げたヴァームは、次第に自らの扱われ方に不満を抱き始めた。

ヴァームは特別ではない。ただ、他よりも力を持っていたに過ぎない。

だが、その力ゆえに、彼は神と崇められた。

特に人は、彼を一己の人物としてではなく、精神的な拠り所として見るようになった」

これは……神の告白？

ウトコを見ると、彼女も目を見張っていた。

ここで話されていることは、説話集にも載っていない、真実の言葉だ。

「神はそれを嘆いていた。そして、自らを生命の種として世界に溶け込ませることを企画した」

生命として溶け込む……コルディアに到る、ということだろう。

「世界の土台となるこの惑星と混じり合い、惑星の意志として生きることを選択しようとした」

……あれ？ 何か違う。

「ウトコさん……これって」

「コルディアではありませんわ。ヴァームは全ての生命と溶け合い、一つになった。それがコルディア教に伝えられるヴァームの最後の姿ですの」

「少し黙ってて。肝心なところを聞き逃すよ」

フィレッテに注意される。

私もウトコも、声を潜め、マイヨールの言葉に集中した。

「最後に向けて、神は憂いの無いよう土地土地を見て回った。そこで、ある娘と出会ったのだ」

ふ、と私の脳裏にその映像が浮かぶ。

ヴァームの姿なんて、見たことがないのに、その容姿がありありと浮かぶ。

「神様、神様！」

宙を舞い、下界を睥睨する神を呼び止めるものがあった。

まだ成人前の無垢な少女だった。

ヴァームはそれを見留め、祈りのためだと思い少女の前へと降りた。

「何用だ？」

「あの、神様……ちょっとお話ししませんか？」

「なぬ？」

神は仮面も忘れて驚いた。

畏れもせず、敬いもせず、ただ話しをしたいと願ったものは初めてだったのだ。

何とせよ、彼を呼ぶものは必ず願った。祈った。

だが、彼女はまずこういったのだ。

「神様、堅苦しいので名前で呼んでも良いですか？」

確かに、それも願いであろう。

だが、あまりにも利己的な願いであった。

そして、無死な願いであった。

「う、うむ。構わんが」

「わあ、良かった！　じゃあ、ヴァーム、そこに座りましょう」
なおかつ、彼女は神を呼び捨てた。全くの敬意無しに、対等に彼

を扱った。

その場に誰も居らず良かったとヴァームは思っていた。

もしそれを聞かれれば、神がどう感じたかに関わらず、少女の命は無かったであろうからだ。

「……そなたの名は？」

だが、神はそれらの懸念を捨ててまず彼女の名を問うた。

「私？ ヴィツテル」

眩しく微笑む彼女は、懸念を捨てるに十分な美しさであった。

ヴァームとヴィツテルは話した。

ただ、話した。

「今日、朝起きたらとっても天気が良くて。それで思ったんです。神様にお礼が言いたいな、って」

「礼、か？」

「はいっ、だってこんなに天気が良くて、そして気持ちが良いのはヴァームがこの世界を創ってくれたからでしょう？」

「う、うむ……まあそうなのだが、天気がよいのは私とは無関係な自然の動きであって……」

「あーもう、そんな難しいことは良いのっ」

「ぬっ、は、はい」

「私はヴァームにお礼が言いたかったし、それで満足するんだもん」
支離滅裂で、まったく理解のできない話であった。

だが、神は満足された。

なぜなら、彼女の前では理を説かずとも、ただ思うままに感情のままに言葉を交わすだけで良かったからだ。

とても心地の良い時間であった。

「……なあヴィツテルよ」

「なあに、ヴァーム」

「明日も、ここに来て良いか？」

「あら、そんなこと聞かなくても世界はあなたのものよ？ ふふふ」
屈託のない笑顔に、ヴァームは自らの心がこの場から飛び立つ音

を聞いた。

それからの毎日、ヴァームの記憶からヴィッテルの姿が消えたことは無かった。そして彼女の笑顔、膨れ面、泣き顔……一定でない彼女の表情と感情の起伏がヴァームの心にも刻まれていったのだ。いつしか、神は自らその生命を終わらせることに憂いを感じていた。

自らの命がいつまでのものかは分からない。だが、その全てをヴィッテルに捧げてみたいと思ったのだ。

ある日、ヴァームはヴィッテルを夜の散歩に誘った。

「どうしたの、ヴァーム？　こんな時間にお出かけなんて珍しいね」「私だってたまには夜更かししてみたくなるのだよ」

「あんまり遅くまで起きてちゃ、明日のミサに遅れるわよ」

「なあに、私が居らずとも偶像が代わりを果たしてくれよう」

「まあ、悪い人ね」

「そう、私は悪い人だ……人でありたい」

辿り着いたのは人の営みが一望できる丘だった。

「わあ、きれい」

ヴィッテルは両手を叩いてそれを喜んだ。

その両肩に、ヴァームは手を置いた。

「確かに、人の営みは素晴らしい」

神は初めて、自分の鼓動を過ぎたるものとして感じていた。

「ヴィッテルよ。私もその素晴らしき営みを紡いでみたい」

「ん？　良いと思うよ。ヴァームならきつと素晴らしい人生を歩めると思うよ？」

だが、ヴァームはかぶりを振った。

「私は、その営みをお前と紡ぎたいのだ」

そつとヴァームの顔が、ヴィッテルのそれに近付いていく。

彼女は、戸惑うこともなく、神の口吻を受け入れた。

「私とで、良いの？　後悔するかもよ」

ヴィッテルは少し俯いた。

その表情を起こし、ヴァームは微笑んだ。

「お前となら、絶望すら楽しめるさ」

そう言って、もう一度一つに重なる。

「もちろん、人の寿命と神の寿命では差がある。神はヴィッテルのその後まで、付き添い、敬い、愛したという」

ドキドキしていた。

これってこれってあれだよ。

神様の初恋？

横を見ると、ウトコも顔を真っ赤にしている。

でも、よく考えると当たり前のことだよ。

だって、私がいるんだもの。

神様の子孫である私たちがいるってことは、神様は人と交わり、子を成したんだ。

ってことは、ヴァームとヴィッテルの子供の子供の子供の……が私？

それってすごいこと何じゃないかしら？

「神とヴィッテルとの間にはたくさんの子が生まれ、それらは他者の血を交えながらも生きながらえていったということだ」

マイヨールが口を閉じる。そのまま動かなくなってしまった。

「故障？」

「違うよ、これで話しはお終いつてこと。何か、感じなかった？」

「うん、すごいドキドキした」

私の言葉に、フィレッテが溜息を吐く。

「はあ、なんで神様の子孫がこんなに頭の回転悪いかな」

「何よ、悪い？」

12 《何のために、最強の勇者がお前を守ってると思ってんだよ》

「ちょ、ちょっとちょっと！　どういうことなの？」

私は取り乱しました。えー、取り乱しましたとも。

これが錯乱せずにいられますかってんだ。

なに？　私ってば十六歳でもう婿探ししなくちゃいけないわけ？

大体、結婚相手探すのが世界存続の条件って何よそれは！！

「あー、ナティアちゃん？　言いたいことはじゅーぶんに分かるんだけどさ」

「あんたに分かるの？　のほんと好きな時に登場して引っかき回すだけ引っかき回して！」

「いやー、それを言われると弱いんだけどさ」

「じゃあ、説明しなさいよ、これって一体どういう事なのさ！」

フィレットも困ってる。まあそうなんだろうな。別にこのことは彼女が仕組んだことじゃない。

それは私だって分かってるよ。

ウトコもそれを察してくれたのか、心配そうに私を見ている。

そうしてついに、フィレットが言葉を発した。

「んじゃあさ、聞いてみれば？」

「へ？」

「だから、ヴァーム本人に聞いてみればいいじゃない」

「え、だってヴァームは死んでるって……」

「クローンだったら生きてるでしょうが」

「クローン？　……それって……」

「神のクローン、ペリニヨンだよ」

びっくりだ。確かにそうなんだけど、でも……。

「納得できないんでしょ？　だったら確かめに行くしかないじゃない。まあ一筋縄で行くヤツじゃないけどね。今はナティアちゃんのこと、殺そうとしてるわけだし」

「そ、そうよ。わざわざ敵の本拠地に行くこともないじゃない」

「でもさ、行って欲しいんだよね」

「どうして？」

「ペリニョンを止めて欲しいから」

ふ、と気が付くと、私は遺跡の外に出ていた。

私だけじゃない。ウトコも……すぐ側にはクリスタもロスもいる。

「あれ？ ナティア……ってここはどこ？」

「ふむ、どうやら飛ばされたようだな」

「え？ フォンドール？ リビタ？」

「くうん」

クーがここぞのばかりに私に甘えてくる。

「どうしてみんなが揃ってるの？」

「まあ色々と事情があるのだから……今は話している時間はなさそうだぞ」

フォンドールが遙か向こうを眺める。そこには土煙が上がっていた。

「な、なにになに？」

戸惑う私の前に、フィレットが顔を出す。

「ギネス・コープだよ。マルゴーが倒れて、いよいよ総力を挙げてナティアちゃんを殺しに来たんだね」

「そんな……」

あまりのことに私がへたりこんでいると、クリスタが手を差し伸べてきた。

「なーにやってんだ。何にも怖いこたないだろ」

「そうだな」

「あったりめえよ」

「ナティアさん、下がって」

「クー、ナティアを任せましたよ」

クリスタ、フォンドール、リビタ、ウトコ、ロスが土煙に向かって歩んでいく。

「待って！ 行かないで！」

私は叫んでいた。

だって、絶対に勝てるはず無い。こんなにたくさんのワイバーン、銃器、そして兵士たちがいるんだもの。

だけど、クリスタは私の頭に手を置いて言うの。

「何のために、最強の勇者がお前を守ってると思ってるんだよ」

私の返事なんか聞かないで、皆、行ってしまった。

「ああ……」

俯く私の顔を、フィレッテが支える。

「ナティアちゃん、よく見て」

指差した向こうには戦いの火花が飛んでいた。

悲鳴、これはワイバーンの？ それとも……クリスタ……。

ダメだよ、私のためなんかに、傷ついて欲しくないよ。

「ナティアちゃん……苦しいでしょう？」

フィレッテがニヤリと笑う。

今までのあっけらかんとした笑みじゃない。

意地の悪い、怖い微笑みだ。

「フィレッテ……ちゃん？」

「私の、望む通りになったんだよ。ギネス・コープを操り、あなたたちを誘導して」

「なにを、言ってるの？」

「これが、ペリニヨンの望んだ結末」

「そんな……フィレッテちゃん……あなたは？」

「私？ 私はフィレッテよ。ヴァームともペリニヨンとも関係のな

い、第三の神……そして神になりきれなかった神様の子」

言っている意味が分からないよ。

どうしてこんなことに……。

「聞きなさいよ、ナティアちゃん。私はいつだってここにいたわ。

あなたが立つ、この大地が私。

あなたが暮らすこの世界が私。

あなたが命運を握る、この惑星が私」

「フィレッテちゃん……なにを言ってるの？」

「私は、ヴァームが創造したこの世界そのものよ。神から生まれ、神になるうとして、でも神になりきれなかった。私はその運命をヴァームとペリニヨンに握られていたから」

ようやく、私は立ち直りつつあった。

フィレッテの声が頭に入ってくる。

理解することができる。

「ヴァームは苦しんでいた。愛する人を亡くし、この世界を終わらせてしまおうと考えていた。その結果がペリニヨンなの。でも、同時にヴァームはこの世界を愛してもいた」

だから、星の鎖と鍵を作った。

この世界が生きるか死ぬかを、星自身に委ねた。

ペリニヨンは星を壊そうとし、ヴァームの子孫は星を存続させようとした。

「私は、生きたい。あの人と生きた世界だから、いつまでも残っていて欲しい……だからこそ……」

私は彼女の言葉を継いだ。

「だからこそ、私を誘導したんだね、フィレッテちゃん……ううん、ヴィッテルさん」

彼女はコクリとうなずいた。

これは、私の想像。

だけど確信が持てる。

ヴァームは一足先に逝ってしまったヴィッテルの魂をこの惑星に

封じたんだ。

しかし、彼女は神として生まれることはできなかった。
寂しさのあまり、ヴァームはペリニオンを創造する。

でも、それでも星が生き残ることを考え、星の鎖と鍵を作った。
その仕組みを。

「私、ペリニオンに会ってくる」

私の決心に、フィレッテは目を見張った。

「本当に……行くの？」

「うん、だって終わらせなくちゃ。こんな悲しいこと、終わらせなくちゃ」

どのようにしてヴィッテルがフィレッテとして目覚めたかは分からない。

でも、彼女は生きることが望んでいて、でもヴァームはそれを知らないままで。

分身であるペリニオンは全てを恨んだままで。

そんなの悲しすぎる！！

「だったら、一つだけ、はっきりさせないと」

不意に、フィレッテがそんなことを言い出した。

「あなたの気持ちをはっきりさせないとね」

「それは……なに？」

「星の鎖のままじゃ駄目よ。対等でなくちゃ、ペリニオンは話すら聞いてくれないわ」

それは……つまり。

「もう、気付いているんじゃないの？ あなたの星の鍵がどこにいるか」

私は砂塵の向こうを見る。

そこには、クリスタがいる。

私を、ずっと守ってくれている。

私が守りたいと思っている……大切な人。

最終話《星の鎖、星の鍵》

私がそこに辿り着いたときには、もう半分くらいのワイバーンが倒れていた。

「ドラゴンスマッシュ！」

「デスボールプラスデススリンガー」

ロスとクリスタのコンビが活躍している。

クリスタのドラゴンスマッシュを、デスボールから解き放たれた風（爆風？）が押していた。

クリスタはまるで流星のようにしてワイバーンを穿っている。ボツボツボツと鈍い音を立てて腹に穴を開けていくワイバーンたち。彼の体は血に染まり、それは凄惨な光景だった。

フォンドールも、リビタも、もはや一切の遠慮なしに敵を討っていた。

最強の勇者、という看板に偽りはなく、彼らは次々と敵を倒していく。

「クリスタ……」

私はクリスタの傍に寄った。

肩で息をする彼は、最初私の存在に気付くことができなかった。

「はあ、はあ……あ？　なんでここに？」

私はそっとクリスタの手を取る。

伝えたかった何かが、胸にあふれている。

「クリスタ……みんな、もう止めて」

私の声が届くかどうか分らなかった。だけど、私は声を張り上げた。

そして、声は空間に波打ち、波動となって皆に伝わったようだった。

「もう、止めて。こんなのおかしいよ」

敵も味方も、動きを止める。

私の方を、見ている。

「ナティア？」

クリスタが訝しげに私の肩をつかむ。どうにかしちゃったんじゃないか？ そんな表情で私を見る。

「違うの」

「だから、何がだよ」

「ヴァームは、こんなことを望んじゃいなかったんだよ。神様を守るために殺し合い、神様がいることで殺し合いが起ることなんか望んじゃいなかったはずだよ」

「ナティア……あなたの言うことは分かります。しかし、現にこうしてあなたが狙われているのですから……」

「だったら、星の鎖なんて無い方がいい！」

「ナティア……我俣を言うでない」

フォンドールが私をなだめようと頭に手を置く。

私はその手を優しく振り払って、クリスタに向き直った。

「クリスタ……お願い、私に力をちょうだい。私が、強くいられるように支えてくれないかな」

彼は私の言葉の意味を図りかねていたようだった。

ここでは、話しなんてできない。そう思った。

私は地面に手をつき、少しでも祈った。

「ヴァーム、ヴィッテルさん……力を貸してね」

ぼんやりと私の手が光る。

その光は手から体を伝い、全身に及んでいた。

遠くからカルヴァドスの怒鳴り声が聞こえてきたけど、もう何も気にならなかった。

「星痕……星の鎖をたどらせて」

イメージが形になる。

私の頭に浮かんでいる輪が、解けていく。

それは一本の紐状になり、手の中に納まった。

紐は手首に巻きつき、もう一端はクリスタの手に巻きついた。

それが、私の鎖のイメージ。

「これは……」

クリスタは自分の手に絡んだ紐を見て、少し戸惑ったようだ。けれど、それはすぐに違うものへの驚きが変わる。

砂塵舞う荒野だった風景が、徐々にぼやけてきて暗くなっていく。上も下も分からない、そんな空間に投げ出される。

そこには私とクリスタしかおらず、彼も自分が上手く認識できないようだった。

「大丈夫？ クリスタ」

「あ、ああ……大丈夫といえば大丈夫だけど……これはなんなんだ？」

「この星ができる前の空間だよ。ヴァームがここに来る前の。クリスタと話しをするのにちょうどいいかな、と思ったから」

「なんか……落ち着かないな」

クリスタがそう言うのと、ふ、と地面が現れた。それは大地ではなく、木の板でできた床面だった。

それが床だと認識できると、次に屋根ができ、壁ができ、そして机と椅子が生まれた。

「夢……か？」

「ううん、夢じゃないの。クリスタが一番イメージしやすかったんだね、ここはクリスタの部屋だよ。そして、いまクリスタがしたように、ヴァームも世界を作っていた」

クリスタは信じられないとでも言うように、壁や床を叩いて回っている。本当に存在するかどうかを確かめているみたいだ。

だけどそれは長く続かなかった。やがて考えるのに疲れたのか、クリスタはどっかりと椅子に座った。

対面の椅子に、私も座る。

「で、どうしたんだ、いきなり」

ようやく、クリスタは話を聞いてくれる気になったようだ。

私は遺跡であったことを話した。一つ一つ、説明を交えながら。

クリスタは最初、信じてくれなかった。フィレッテちゃんがヴィッテルさんだつてところは特に。

「だって、いきなり神様の奥さんだつて言われてもな」

「考え方を変えればいいんだよ。ヴァームは神様なんかじゃない、つて」

「神様は神様だろ？」

「違うよ。ヴァームは寂しかっただけ。仲間が欲しかっただけ。皆を愛し、皆を助けただけ。そこに君臨しようなんて思っていなかった。だからこそ、神様でいることに疲れたの。だからこそ、ヴィッテルさんに出会えて嬉しかったんだよ」

クリスタがうなずく。少しは納得してくれたようだった。

「でも、ヴァームには力があつた。この星を壊してしまえるだけの。悩んだヴァームは二つの結末を用意したんだ。ペリニヨンに委ねた破壊の未来、それと星の鎖に託した存続の未来。ねえ、クリスタはどっちがいい？」

「そんなの、存続する方が良いに決まってるだろ」

「それは……どうして？」

「どうしてつて、この世界には両親がいて、友達がいて、仲間がいるんだからな。それに……」

「それに？」

クリスタはそこで言葉を止めた。

少し、顔が赤くなっている。

そうだよ。クリスタはいつもそうだった。ストレートに物事を言ったかと思うと、ぼかしてしまったり。そういう意味じゃ、私も同じか。いつだって正直に物事を表現したりはできなかった。恥ずかしかったのかな？ それともわかっていなかったただけなのかな？

ううん、違う。

そこまで私の考えがまとまったとき、テーブルにカップが二つ、現れた。

「覚えてる？ クリスタが私を助けてくれた、最初するとき」

うなずく。

「あの時からクリスタはずっと私を守ってくれた」
もう一度、うなずく。

「一度、聞きたかったの。クリスタ、それは義務感だったの？」
私がそう言った瞬間に、彼は激昂した。

「馬鹿言え！ そんなわけないだろ！」

「じゃあどういふこと？ 大好きなバスケットを辞めてまで。私を守ろうとしてくれたのは」

「それは……勇者に憧れたからだよ。強くなって、世界を守るってことに、憧れたんだ」

あー、もうっ！ そうじゃない。私が聴きたい言葉は、それじゃないよ。

「……じゃあ相手が私じゃなくなたって、同じことしたんだ」

少しだけ私が拗ねて言うのと、とたんに彼が慌てだす。

「いやっ！ そうじゃなくて。何というか、その……」

えーい、肝心なときになって奥手なんだから。

仕方ない。

「私はね、嬉しかったんだよ。クリスタが私のこと、守ってくれるって言ってくれたから。クリスタは、私だけの特別なんだって、思ってた」

ちよつとだけ上目遣いで、彼のことを見る。

私が聴きたい言葉は一つだけ。

クリスタは、そんな私をチラチラと見て、最後にそっぽ向いたままと言った。

「俺だって、お前のこと、特別だって思ってるよ」

ああ、聴けた。

やつとこの言葉が聴けた。

これで、もう思い残すことはない。

「クリスタ……初めて会ったときに、ホットミルク飲ませてくれたよね。私、その温かさをずっと覚えてる。たぶん、この温かさが、

私の一番大好きなぬくもり。クリスタの、心のぬくもりだったんだよ」

とたんに、クリスタの顔が赤くなる。

私は、それを逃さない。

正面に駆け寄り、クリスタの頬を両手でつかみながら告げる。

「クリスタ、大好きだよ。たぶん、ずっと前から、初めて会った時から」

クリスタってば逃げたくて、でも逃げられなくて、表情をクルクルと変えていた。可愛い。

そうしていると、彼は私の手を振りほどき、大きく一息深呼吸をする。

立ち上がる。私の目を見る。

ジッと、ジッと。

そして言葉を口にした。

「俺も、ずっと前からお前のことが大好きだ」

その言葉が私の耳に届いた瞬間、パンツ、と何かが弾けた。光の粒が視界に広がる。

私の頭に浮かんでいた輪だったもの、星の鎖、惑星の鎖。今までになかった力が流れ込んでくる。

暖かい、私自身が火山になったような、鳴動する心臓の音。とても幸せな気分だ。

誰かと魂が一つになれる幸せ。

それを私は実感していた。

「クリスタ、ありがとう。もうこれで思い残すことはないよ」

「え？　なんだって？」

覚悟していたことだった。

「私、ペリニヨンのところに行くよ」

「俺も……!!」

「だーめ、クリスタはまだやる必要があるでしょう？　勇者として皆を守ってあげなくちゃ」

クリスタの体が消えていく。

ううん、違う。私がクリスタの視界から消えているんだ。

神様となった私の、これが宿命だ。

完全に受け継がれた星の鎖としての力は、私に全てを教えてくれる。

大婆さまはもう、星に導かれてしまった。

私だけが唯一、この惑星を保つことができる。

だから、決して負けない。ううん、勝ち負けの問題じゃないんだ。絶対にペリニョンを説得してみせる。

私は一人で、ペリニョンと話しに……

『それじゃダメだよ』

誰？

『言葉は自分の中にある限りは、産まれることはない。そんな状態で神と話して、果たして融和できると思っているのか？』

この声は……

『人は人の心を理解することはできない。だが、人の心を受け入れることはできる。そうはいうけどな、神様の心を受け入れるには、ちと辛いもんがあるよな』

もしかして？ でも、どうして？

『神はいつでも隣にいます。あなたが隣人と手を結ぶならば、その隣人の隣に神はいます。だから、あなたの隣にも神はいるんですよ、ナティア。例えばあなたが神であろうと』

ロス？ リビタ……フォンドール、それにフィレッテも。

『神は誰かのために働くのではなく、働くものと共にいるのですわ。何も、神様自らが犠牲になる必要はないのでは？』

ウトコだ。みんな……どうしてここに？

『お前のことが心配だからに決まってるだろ？』

ふわ、と視界が包まれる。

私の存在が現実に取り戻される。

私は私になった。

神様である部分が、見あたらない。

そう……

『ナティア、お前も笑ってる方が素敵だよ』

私が、クリスタに言った言葉だ。
そう言われて、初めて気が付いた。
私……泣いてる。

「だーから、お前はいつつもそうだ」
私の頭をくしゃくしゃと撫でながら、クリスタが怒鳴った。
「だ、だって……そんなに言うこと無いじゃない！」
ダメだ。嗚咽が止まらない。

言葉が続かない。
でも、悲しくなんかない。
嬉しいっ。

「みんな……ありがとうっ」
ペコリと頭を下げる。
皆が笑っていた。

不思議だ。あれだけ気負っていたのに、今は素直になれる。

「何も、一人で頑張ることはないのだ。我々はチームなのだからな」
「やっと全員揃ったんだ。ちつとは大暴れしてやろうぜ」

「リビタさん、それでは主旨が違いますわ」
皆の軽口が嬉しい。

「まさかあなたがそんなに思い詰めていたとは思いませんでした。
私たちの失策です。ですが、フォンドールの言う通りですよ。私たち
は今まで、皆でやってきたではありませんか。それは、これから
もずっと変わりません」

ロスが抱き寄せてくれる。温かい。

ひとしきり話した後、フィレッテが私の前に出てきた。

「余計なお世話だったかもしれないけど、呼んじやった、みんなを」
「ううん、ありがとう。フィレッテちゃん」

「私も、連れてってくれる？ ペリニヨンの……ヴァームの所に」
ああ、そうなんだ。

フィレッテちゃんも一つの決心をしたんだね。
その表情から決意が見える。

「もちろんだよ」

私は、残った最後の力を使った。

星の鎖で無くなり、神様であることから降りた私には、もう星の力は使えない。

神様の任を解かれた私が見える最後の導き。
封印されたペリニヨンを、解放すること。

ズン、と地響きが起こる。

地面からのっそりと出てくる音がする。

空間が剥がれ落ちていく感覚がする。

ペリニヨンは私たちの中央に、いつの間にかいた。
本当に、いつの間にか存在していた。

「ナティア……か」

ペリニヨンはまず私に声を掛けた。

重い言葉。とても痛い言葉。

言葉そのものに力が宿っている。

「はい」

私は、それを言うのが精一杯だった。

「星の鍵を、見つけたのだな」
頷いた。声を出すのが辛い。

「ならばなぜ、私を呼び出した。今回はお前の勝ちなのだぞ」
押し潰されそうで、声が出せない。

黙り込んでいると、誰かが私の手を握った。

クリスタだった。額に汗をかきながら、私の手をギュッと握って、

ペリニヨンを睨み付けている。

もう片方の手には、ロスの手が……右肩にはウトコが……左肩にはリビタが……足下にはクーが……そして、私の背中をフィレッテが押す。

うん、大丈夫。

気が付けば、フォンドールが後ろで構えてくれている。

いつでも、どこでも、私を守ってくれる素敵な仲間。

彼らがいるから、私は戦える。

彼らがいるから、私は幸せだと思える。

「ペリニヨン……ヴァーム……私は、この星が大好き………そして、この星を愛したあなたが大事」

掛けられた重圧が少しだけ軽くなる。

「あなたがそうであったように、私もこの世界の全てが好き。例えば、暴力が生まれ、悲しみが生まれようと、その向こう側には必ず愛が待っているはずだから」

ペリニヨンが動いた。

私に手を伸ばす。

フォンドールが剣先をペリニヨンに向ける。

「大丈夫。その中には、あなたも入ってるんだよ」

私は、ペリニヨンに向かっていった。

その体に触れる。

冷たい体。とても寂しそう。

「大丈夫。あなたの隣には、必ずあなたを愛する人がいる」

私はフィレッテの手を引いて、彼の前に歩ませた。

「さあ、ヴィッテルさん」

私が声を掛けると、フィレッテがその姿を変える。

あの時の映像で見た、ヴィッテルさんの姿に。

ペリニヨンが動揺する。

「おお……う、い、て……」

言葉が途切れる。

ペリニヨンの瞳が潤んでいる。

ヴィッテルさんが声を掛けた。

「ヴァーム、行きましょう。コルディアの彼方へ」

優しく、優しくペリニヨンⅡヴァームの体を包む。

彼は、泣いていた。

「ヴィッテル……ヴィッテル……」

まるで溶けるように、二人の映像が混じり合っていく。

やっと、やっと終わるんだ。

長い長い葛藤が。

神様のジレンマが、やっと解ける。

同時に、私たちもその場にいらなくなる。

景色が飛んでいく。

暗転、そして目を開くと、私は草原に横たわっていた。

隣には、クリスタの顔が見えた。

起き上がる。

「クリスタ……？」

そっと触れると、手を捕まれた。

「なんだよ、死んでるかと思ったか？」

「……安心した」

微笑む。

彼も微笑む。

向こうから、仲間の姿が見えてくる。

「みんなも無事なんだね」

「ああ、そうみたいだな」

「終わったんだね」

「いいや」

クリスタが私の手を取る。

「今から始まるんだろ」

思わず、彼の顔を覗き込んでしまった。

そして、私はとびきりの笑顔で、

「うん」

彼に抱きついた。

最終話《星の鎖、星の鍵》（後書き）

これで、ホットミルク完結です。

半年に渡って読んでいただいた皆様、どうもありがとうございました。

また、次の作品でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4145q/>

ホットミルク

2011年6月27日22時13分発行